

【本編完結】 BETA転生

鈴木颯手

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本編完結しました。現在は外伝連載中です

あ号標的になったオリ主が人類を滅ぼす話。ゲーム版のほかアニメ版も参考にしたい。

なお、作者は最近マブラヴを知ったばかりなので設定が間違っている場合もあると思いますがご了承ください。

2022/11/6 アンケートを追加しました。気軽にお答えください

2022/11/13 1回目のアンケートを終了しました。投票してくれた方はありがとうございます

2022/11/23 2回目のアンケートを追加しました。気軽にお答えください

2022/12/1 2回目のアンケートを終了しました。投票してくれた方はありがとうございます

2022/12/24 3回目のアンケートを追加しました。気軽にお答えください

2022/12/29 3回目のアンケートを終了しました。投票してくれた方はありがとうございます

現在までの外伝での登場作品

- ・ゲート 自衛隊 かの地にて、斯く戦えり
- ・日本国召喚

・86―エイティシックス―

目次

ネタバレ注意！ 人物紹介その1	1
ネタバレ注意！ 人物紹介その2	7
第1章【マブラヴへと続く道】	
第一話「転生」	12
第二話「喀什（カシユガル）ハイヴ」	17
第三話「紅旗作戦」	22
第四話「拡大するBETA」	26
第五話「暗躍する者たち」	31
第六話「油断」	36
第七話「メインシャフトでの激闘」	41
第八話「初めてのBETA？とのコミュニケーション」	46
第九話「陥落」	50
第十話「絶望の始まり」	54
第十一話「予想外の拾い物」	59
第十二話「騎馬民族の最後」	64
第2章【欧州戦線く黒の宣告（シユヴァルツエスマーケン）く】	
第十三話「黒の宣告（シユヴァルツエスマーケン）」	68
第十四話「カティア・ヴァルトハイム」	73
第十五話「国家保安省（シユタージ）」	77
第十六話「黒の剣（シユヴァルツェ・シユヴェールト）」	82
第十七話「補充要員」	87
第十八話「リーズ・ホーエンシユタイン」	94
第十九話「海王星作戦1・結集する4軍」	99

第二十話 「海王星作戦2・西と東」	104
第二十一話 「海王星作戦3・確執」	109
第二十二話 「海王星作戦4・包囲殲滅戦」	114
第二十三話 「海王星作戦5・終幕」	120
第二十四話 「動き出したBETA」	124
第二十五話 「決戦前夜」	130
第二十六話 「決戦の時」	135
第二十七話 「暗転」	141
第二十八話 「裏切り」	148
第二十九話 「ミンスクハイヴ」	154
第三十話 「終焉の時」	160
第三十一話 「亀裂」	165
第三十二話 「見えた未来」	170
第3章 【ひび割れた人類】	
第三十三話 「オルタネイティブ3」	175
第三十四話 「処理落ち」	180
第三十五話 「掌の上で踊る人類」	186
第三十六話 「中国人」	191
第三十七話 「終焉の時」	196
第三十八話 「最悪の戦況」	201
第三十九話 「南米とインド」	207
第四十話 「二つのドイツ」	212
第四十一話 「恐ろしきBETA」	217
第四十二話 「水面下」	222
第四十三話 「思考」	227

第四十四話	「帝都燃ゆ・前編」	231
第四十五話	「帝都燃ゆ・後編」	236
第四十六話	「佐渡島」	241
第四十七話	「明星作戦1・始動」	247
第四十八話	「明星作戦2・G弾」	251
第四十九話	「明星作戦3・事後処理」	256
第4章	「マブラヴオルタネイティブ」	
第五十話	「マブラヴ」	261
第五十一話	「世界情勢」	265
第五十二話	「日常」	271
第五十三話	「12月5日」	275
第五十四話	「アルゴス」	279
第五十五話	「後の話」	284
第五十六話	「甲21号作戦1・ブリーフィング」	289
第五十七話	「甲21号作戦2・開始」	294
第五十八話	「甲21号作戦3・大崩壊」	299
第五十九話	「甲21号作戦4・死」	304
第六十話	「回る世界」	309
第六十一話	「露見」	315
第六十二話	「横浜基地防衛線1・強襲」	320
第六十三話	「横浜基地防衛線2・悪夢」	326
第六十四話	「横浜基地防衛線3・破綻」	330
第六十五話	「横浜基地防衛線4・絶望の光」	335
第六十六話	「香月夕呼」	340
最終話	「大崩壊・終焉の日」	344

外伝1【GATE BETA かの地にて斯く蹂躪せり】

第一話「GATE」 350

第二話「異世界へ」 355

第三話「動き出す理不尽」 359

第四話「ハーディの誤算」 363

第五話「炎龍」 367

第六話「圧倒的なヒエラルキー」 372

第七話「発覚」 377

第八話「用済み」 382

第九話「会談」 387

第十話「超大国」 393

第十一話「終幕」 398

第十二話「ダウンフォール・1」 402

第十三話「ダウンフォール・2」 407

第十四話「ダウンフォール・3」 412

外伝2【BETA召喚】

第一話「ロデニウス大陸」 416

第二話「パールディア王国」 421

第三話「フィルアデス大陸」 426

第四話「グラメウス大陸」 430

外伝3【86―エイティシックス―編】

第一話「遭遇」 436

第二話「全滅」 441

第三話「激怒」 445

第四話「改造」 449

第五話「初陣」

455

第六話「彼等彼女等」

460

ネタバレ注意！ 人物紹介その1

あ号標的

今作の主人公。もとは人間だったが神様によってほぼ強制的に転生させられる。マブラヴは名前すら知っていないためにどういう作品かを把握していない。にも拘わらず最低限の知識とBETAとしての動き方だけの説明を受けた状態で放り出された。

元々の性格もあつたがあ号標的として過ごしていくうちに人間性を消失していき人間を完全に資源としてみるようになった。そのため彼にとって地球への侵略は開拓として認識している。人間を資源に変えるために捕縛する時には漁や狩りと思っているために戦争しているという意識は薄い。

人間であつたために人間の心理をついた行動をとれるために「攻撃をしてきた国家だけ相手する事でそれ以外の国の参戦をさせづらくする」、「人間に化けたBETAを送り込んで暴動を起こして国家機能をマヒさせる」、「同じくそれらを使って情報収集や偽情報の流布」など人類を結束できないように動いた。結果として人類は地域ごとの結束は可能としても世界規模での結束が行われる事はなかった。

しかし、その一方で人間だつたためか油断や慢心が目立つ。実際に中国に集中したがために戦術機を運用し始めたソ連にハイヴ内への侵入を許してしまっている。更には暇つぶしという事でアイリス・デイナー達に指揮をとらせて香月夕呼達一部の人間に推測される結果となっている。

BETA産の戦術機を大量に研究・開発しており、すでに総数では全世界の戦術機に並ぶほど量産している。しかし、戦術機は衛士の問題で数はあつても操縦できる人数が限られている。その一方で戦術機級は衛士が必要ないために大量生産が行われている。

余談だがあ号君はいまだに固有の名前を持っていない。作者が忘れていた事とあ号君が名前を呼ばれる事がほとんどなかったために原作が始まった今でも名前を付ける可能性はほとんどない。外伝では名前を付ける必要があるかもしれない。

さらに余談だがあ号君は人間でいる際にはずっと中国人の皮で過ごしている。これは見た目に対してこだわりがないため。今の皮が壊れれば別のに交換するかもしれない。

BETA産戦術機

別名BTシリーズ。当初はオリジナルハイヴに突入したソ連の戦術機を弄っていたが東ドイツ接触後に戦術機の技術を手したことでBTシリーズとして完成した。

基本的に性能はBT-01シユトゥルムヴィントですら最新鋭の戦術機並みにスペックが高いがそれに加えてBETAの技術が多分に使用されている。それがスペックの高さが高い理由となっている。しかし、同時に動かすのは人類と同じように適性を持った衛士だけであり機体の量産が出来てもパイロットの量産が出来ていない。そのため少数精鋭になれるように機体のスペックを高くしている。

各部の装甲は突^{デストロイヤー}撃級の正面装甲を搭載し、頭部にはレーザー照射粘膜、腰には要塞級の触手を搭載しているのが基本。マブラヴオルタネイティブ開始時点でBT-03まで開発が完了しており、あ号君専用の戦術機BT-04も稼働できる状態まで組みあがっている。

余談だがBTとはBETAの戦術機を意味している。BETAのBと戦術機のT（英語表記だとタクティカルで始まるから）でBT。BETAでもいいけど。

戦術機級

あ号君が開発した戦術機BETA。BTシリーズとは違い衛士の問題がない量産できる戦術機。開発当初は頭脳級を搭載する事で動かしていたが頭脳級事態コストが高いために代用として人間の意識を憑依させる形で動かしている。憑依させているために機体が破壊されても別の機体に憑依する事で動かす事が出来るために憑依している人間を殺すしか止める術はない。

基本スペックはBETA産戦術機と変わらないが動かすのは基本的に衛士適正がない、もしくは四肢を失ったり脳髄だけになったやつが動かすために動きは鈍いのがデメリット。

余談だが途中で作者が存在そのものを忘れていたために最新話ま

で登場する事がなかった。

東ドイツ

BETAに国を乗っ取られた哀れな被害者その1。詳細を知らない人類から見れば最大の裏切り者。

アイリスデイナー・ベルンハルト

元東ドイツ国家人民軍第666戦術機中隊中隊長。巨乳の金髪美人でいろいろとスペックが高い人物。兄の遺志を継いで行動していたがそれが実る前にBETAにとらえられて祖国は壊滅した。その後あ号君に戦術機と指揮能力の高さを見込まれて脳を改造。BETAへの信愛度を東ドイツや人類を思うたびに急増させ、人類への愛着を急速に無くしていくというえげつない方法でBETAの一員にされた。脳の改造の際に色々と弄られているためにマブラヴオルタネイティブ開始時点で40近いおばちゃんにも関わらず見た目は改造されたときから変わらない。

改造後は事実上あ号君の副官としてサポートやアドバイスをしている。一時的にBETAの指揮をしており、オーストラリアはこれで壊滅した。元々軍人で部隊を指揮していたためにBETA内では最も指揮が上手い。

余談だが作者としては海王星作戦で小休憩を命令した際に行った腕のストレッツシーンが一番のお気に入り。

リーズ・ホーエンシュタイン

シユヴァルツェスマーケン開始の3年前にシュタージから逃げたところをあ号君に拾われたある意味幸運な少女。原作並みのヤンデレは健在。原作ではアクスマンの犬になっていたが今作ではそんなことはなくあ号君の犬になっていた。部隊編入からシュタージによるクーデターまで動きは原作と一緒に。兄と一つになったところまで一緒！ その後は兄テオドル含め第666戦術機中隊の面々をミンスクハイヴに招待した。

原作通り体は汚れ切っていたためにあ号君から褒美としてクローインの新たな肉体を受け取り、テオドルと子作りに励んでいる。子供に興味はなく、産んだらあ号君にあげている。というより妊娠から出

産までの経過でテオドルとの愛を感じられるためにその後の事は
どうでもいいと考えている。原作開始時点で10人も生んでいる。
でも体系は崩れない。容姿もシュヴァルツエスマーケンの時のまま
だから老いてもいい。最高かな？

余談だが衛士としての腕前はそれなりに高い。そして原作で本性
を現した後のレイプ目は最高だった。

カティア・ヴァルトハイム

西ドイツから東ドイツに亡命するというおそろく現実世界でも衝
撃的な行動をした少女。東西ドイツの統合を願っていたが結果は御
覧の通りとなった。あれだけ願っていたために改造後の人間への反
応は聞きたびにあ号君に愉悦を与えている。

西ドイツの衛士だったこともあり戦術眼はそれなりに高い。腕も
悪くはない。そして見た目も良い。

アルフレート・ヴァルテ

東ドイツシュタージ武装警察軍少佐↓第666戦術機中隊監査官
↓第666戦術機中隊長

あ号君が作り上げた人間級と呼ばれるBETAの中で最も高性能
な一体。アクスマンの手引きで人間としての戸籍と経歴を手に入れ
て東ドイツで暗躍した。第666戦術機中隊に配属されてからは人
類のために動いていると思わせる行動や言動をとって信頼を得てい
た。しかし、シュタージのクーデターに合わせて補給中の第666戦
術機中隊を襲撃。正体を現した。

衛士としての能力はぶつちぎりで高い。BETAにおける月詠中
尉。機体は専用機である黒シュヴァルツエー・シュヴェルトの剣。機体名の通り近接格闘戦に
特化している。

余談だが海王星作戦での活躍で一部の経歴に穴があるにもかかわ
らず人類での評判は高く、尊敬を集めている。そのせいで重要な情報
などはほぼ入手出来ている。ソ連が飲み込まれた原因の一つ。

アネット・ホーゼンフェルト

アルフレートに好意を寄せていた。でも裏切られた。そして改造
されて同志となった。アルフレートと同じように近接戦を得意とし

ているために相性もいい。というか一時期アルフレートの機体の武器を使って重レーザー級相手に無双していた。

余談だが作者がシュヴァルツエスマーケン内で最も好きなキャラクターのために色々と優遇されている。

イングヒルト・ブロンコフスキー

原作だと唯一のBETAとの戦闘で死亡するキャラだったがアルフレートのおかげで最後まで生き残った。アルフレートに好意を寄せるくせに奥手なアネットにイライラしており、毎夜行っている慰めのせいで部隊にばらしたこともある。

テオドル・エーベルバッハ

よかったね！ 義妹と毎日ハッピーだよ！

しかし、裏切られた事の衝撃が大きすぎていまだに立ち直れていない。決して毎日搾り取られているせいではない。多分ない！

その他の第666戦術機中隊の皆さん

改造されても出番がほぼない。改造される前も出番はほぼなかった。そしてこれからも多分ないだろうなあ……。

ハインツ・アクスマン

脱走したリイズ・ホーエンシュタインを尋問中にあ号君に脅されてBETAに組したシュタージの中佐。シュトウルムヴィント開発の原因になった人で人類を裏切っていることと周囲の人間がすさまじい勢いでBETAにされているストレスで心労でやせ細っている。東ドイツ陥落後に療養に入るが療養先がオリジナルハイヴというBETAの巣窟である為に心が休まっているかは微妙なところ。

ベアトリクス・ブレーメ

アイリスディーナの元親友。小説外伝の冒頭の絵にあった百合は素晴らしかった。今作では特に出番もなくシュトウルムヴィントに機体事破壊された。

余談だが帝都燃えゆで唯依たちに接触したのは友人の名を騙ったアイリスディーナであって本人ではない。さすがのあ号君もコックピットをレーザー照射で吹き飛ばされたベアトリクスを復活させる

のは無理だったんじゃないか……。

ネタバレ注意！ 人物紹介その2

横浜基地の皆さん

白銀武

マブラヴにおける主人公。あ号君が最も警戒した人物だが実際の人物は兵士と化け物である程度のループ者。アンリミテッド編後にこの世界に来たがご存じの通りループ時にはすでに人類は詰んでおりどうあがこうともそれが覆る事はなかった。更に言えばまりもの死がないために精神的に成長を遂げる事がなかったために戦術機の腕前もオルタネイティブより劣っている。

2回目の世界で佐渡島ハイヴ攻略中に戦死。続く3回目の世界では佐渡島ハイヴ攻略に参加しなかったことで日本帝国の滅亡時まで生き残るがそれでも死亡。4回目を迎えたが度重なる人類の終焉で心が折れかけてしまい、まりもという信頼出来ていた人物に全て話してしまい、運命が決まる。横浜基地防衛戦時にまりもの体を操ったあ号君に拉致されて横浜基地が陥落するさまをリアルタイムで見せられることとなった。更にはまりもの体を使って武を追い込んだことが止めとなり心が完全に折れた。その後はループ回避のためにアンリミテッド編のように永遠に生かされる事となった。ただしそこではエクストラ編の夢を見れているために本人的にはハッピー？エンドを迎えている。

香月夕呼

オルタネイティブ4の最高責任者兼横浜基地副司令。作中屈指の天才。原作だとこの人のおかげで人類は救われたも同然だがこの世界では如何せん生まれてくるのが遅すぎた。せめて後10年は早く生まれてないといけなかった。彼女が世に出た時にはすでに人類は詰んでいた。それでもあがいており、人間級の存在の発見や明星作戦の成功などBETAに一矢報いている。横浜基地も人員を厳選したおかげでBETAが入り込む余地のない機密の高い基地にした。ただし、まりもの状態に気付かなかったのが運の尽き。まりもちゃんを通じて基地やオルタネイティブ4の情報が洩れてしまったためにそ

の後行動すれば猛反撃に遭う結果となった。横浜基地内に裏切り者がいると気づく。人類の終焉である為に気付いてもどうしようもなかった。そして一番の敗因はループする武に裏切り者の情報を与えられなかったこと。

横浜基地防衛戦でG弾投下による最後の抵抗を實行するもBET AがG弾を用いて迎撃したために失敗。一部の生存者と共にとらえられてアンケート結果に従い脳くちゅされた。

脳くちゅ後はその頭脳を遺憾なく発揮するために研究に没頭する。予算も潤沢。素材もたくさん調達できる。煩わしい人間関係に悩まされることもない。ある意味一番得した人。人類への気持ちも急速に冷めていつているために問題ないね！

神宮寺まりも

夕呼先生の幼馴染でエクストラ編と同じように教師を目指していたが世界情勢がそれをさせてくれなかった。実は初陣の際にBETAに捕らえられて脳くちゅされている。が、本人に自覚はない。これは人間級のようにスパイとして動くのではなくそうは見えない動きをすることで得られる情報があるかもしれないというあ号君が思いついた人間級亜種のようなもの。まりも以外にも複数人が同じようになっている。その結果夕呼先生に怪しまれずに横浜基地に入り込み人類終焉のきっかけを作った。横浜基地防衛戦の直後からあ号君に体を操られる事が増えて基地陥落後は改めて脳くちゅされて他の者たちと同じになった。

実はこの設定を踏まえてマミって死んだ後に敵として登場させて武や夕呼先生を曇らせる予定だったがが作品自体を巻いたために没になった。

207B小隊の面々

原作ではヒロインだったがこの世界では大した出番もなかった。2回目と3回目はまだ兵士になれたが4回目に至っては訓練兵の状態だったために後方に下げられていた。それゆえに予想外の奇襲を与える事に成功してG弾投下の時間をわずかに稼いでいた。

横浜基地陥落時に全員捕らえられて脳くちゅされた。

伊隅みちる

オルタネイティブ4直属部隊A―01部隊の隊長。伊隅4姉妹の次女でマブラヴとは別作品のヒロインだった人。本来なら佐渡島ごと自爆して見せる人だったが2回目と3回目はそれすら出来ずに戦死している。4回目では生存して脳くちゅされた。

本来はA―01部隊は半数が死ぬ予定であり、伊隅みちるも戦死する予定だったがアニメ23話を見た作者によって生存される事が決まり、結果的にA―01部隊全員が生き残る結果となった。その後は同じく脳くちゅされた4姉妹と共に穏やかに過ごしている。前島？野郎に興味ないからさっさと殺しましたが？

A―01部隊の面々

半数が死ぬはずだったのに生き残れたんだから伊隅みちるに感謝しろ。

パウル・ラダビノツト

横浜基地の基地司令。ほぼ出番はなかった。そして登場する予定もないが一応生存。その後の行方は不明というより出す気がないのでこれでフェードアウト。

イリーナ・ピアティフ

夕呼先生の副官。出番はそんなになかった。そして生き残れなかった。

社霞

いたかどうかさえわからない作中未登場のキャラ。どうだったかは読者の想像におまかせします。ただしいたとしても生き残れなかったのは確実です。

鑑純夏

BETA絶対殺すウーマン。佐渡島ハイヴ攻略では凄乃皇で参加するが到着したときには大体終わっていて2回目、3回目ともに活躍はなかった。4回目に至っては00ユニット完成前に横浜基地が陥落している。確か純夏がいないと武ちゃんいれなかった話だった気がするしきつと脳髓の状態で今も生きてるんじゃないかなあ……。

日本帝国

煌武院 悠陽

最後にちらりとだけ出てきたお人。エクストラ編では故人でこっちだと將軍になっていいる。オルタネイティブでは見せ場があったがここではない。今後もない。

沙霧大尉

日本の行く末をより良い者にするためにクーデターを起こした人。勝手に内ゲバしてあ号君は困惑してました。4回目の世界ではクーデターの日にはBETAの大規模侵攻があつてそれどころではなくなり戦死した。

月詠中尉

斯衛軍所属の衛士で作中でも断トツの腕前。カットされているが2回目の佐渡島ハイヴ攻略時には篁唯依たちを機体性能すら覆して無傷で勝利している。ぶっちゃけ強すぎてどう書けばいいのかわからずに書かなかつたけど。

4回目の横浜基地防衛戦でも沿岸部でBETAの侵攻を食い止めていた。それでいて横浜基地が攻撃を受けた際にはすぐに向かうが戦術機級の前に撤退を余儀なくされている。日本帝国が滅びるまで戦い続けており衛士として最後まで生き残っている。

その他の日本の皆様

ほぼ全員が素材か？ 殖場送りとなった。

その他の面々

イブラヒム・ドール

トルコ軍人でロードスの英雄として尊敬される人物。TEではアルゴス小隊の指揮官だったがこの世界ではそもそもTEが始まらないし中東の聖戦連合軍と合流したために違う道を歩んだ。BETAの動きのせいで登場人物の中で最も最後に戦死する人物。最後はロードスの英雄らしく難民の盾として死んだのかな？

ステラ・ブレイメル

こちらにもイブラヒムと同じようにアルゴス小隊の一員にならずに絶望的な防衛戦を続けるスウェーデン王国軍として戦っていた。2

回目の世界（ぶつちやけ3回目も）で原作だと同じ小隊だったタリサと戦闘になる。勝利をつかみ取るがその直後にレーザー照射を受けて戦死した。4回目の世界では多少死ぬまでの時間が伸びたが結局戦死した。

タリサ・マナンダル

TEだとネパールの軍人だったがこの世界ではその前にBETAの侵攻で捕縛されている。本来はそのまま素材となるか？殖場に行く予定だったが戦術機級の素材に使われて機械の体に生まれ変わって生存した。その後は寝る間も惜しんで訓練に励んでいた（というよりの体の関係でそれ以外に出来る事がなくて暇だけ）ために実力は原作より高い。それでも長年実戦を経験しているステラには勝てなかった。だが残基が残っているために普通に機体を壊しただけで生存している。

作者のお気に入りキャラの一人である事、ネパールのグルカ人という立地も合わさって戦術機級になるのはTE出来ないと確信してから確定していた。

白杵咲良

名前判明するまで佐渡島子なんて呼ばれていた少女。佐渡島侵攻時に容姿を気に入ったあ号君にとらえられて脳くちゅされた。本編ではほぼ出番がなかったが外伝では活躍させたい。

声優が卍世界情緒という1期OP、2機edを歌っている一人であるうえに作者の推しの一人であるために脳くちゅは確定していた。

第1章【マブラヴへと続く道】

第一話「転生」

「転生させてやる」

「本当ですか？」

「ああ、BETAとしてな」

「へ？」

俺の第二の人生、いや人ではないけどとにかくあたらしい生はこうして始まった。

最初はテンプレ通りとっていい動きだった。事故にあい、気付いたら神様がいて、転生させてくれて特典をくれる。テンプレと違う点と言えば特典を無理やり決めさせられ、よく知りもしないものになった事だろう。

なんだよBETAって。アルファ、ガンマ、ベータのやつか？ そう思っていたからだろうか。基本的な知識を特典の一部としてくれたように知識に困る事はなくなったのだが……。結果として人間をやめる事になった。地球外生命体で？炭素系でできた生物を生命体として認めていないやつの手先で？人類を28年に渡り駆逐しているやつら？

ふ！ ぎ！ け！ る！ な！

しかも俺がなったのってその中でもオリジナルとされる重頭脳級と呼ばれる「あ号標的」。BETAはこいつの指示で動いているようなものなので実質的に地球のBETAを統括する化け物になってしまったということだ。

「別に人類と講和してもよい。我が干渉する事はもうない。好きにするといい」

それが神様から聞いた最後の言葉だが、正直に言って講和というのは難しい。別にBETAだから無理ってわけではない。まあ、それに近いけど人間がBETAを受け入れられるとは思えない。きつと自分たちの都合のいい兵器として利用する可能性があるし、何なら信用

できないと一方的に攻撃してくるかもしれない。人間というのは自分達とは違う存在に恐怖を抱くものだ。それが自分達よりも強大な存在であれば余計に。

である以上俺にできるのは二つ。一つはこのまま関わらないこと。もう一つが人類を滅ぼして地球の覇者となること。別に物語にそう必要がない以上最初の案を適用するべきかもしれない。しかし、それは出来ない。できなかったらというべきか。俺の意識が覚醒した時には俺は重頭脳級としてハイヴを作り上げ、中国軍らしき軍隊を退けた後だった。

「ば、化け物……」

そんな恐怖に支配された兵士の言葉が聞こえてきそうなほど中国軍は近くまで接近していたが俺の意識が覚醒前のあ号標的は徹底的に反撃したらしく周囲には瓦礫と化した戦車や航空機の残骸が落ちている。こんな様子を見る限り関わらないというのは不可能だろう。

【目の前の物体を吸収し、G元素を生成せよ】

ふと、俺の脳内にそのようなアナウンスが流れてきた。ゲームで言うところのチュートリアルのようなものだろうか？ 反抗する理由もないために俺はその指示に素直に従う。

神様からもらった知識によると俺という重頭脳級はハイヴという物体、建造物と言っているものの中にある。そして重頭脳級という名前から分かる通り俺本体は動かすことが出来ないようだ。しかし、動けない代わりに言っているのかわからないが俺は全BETAを好きに操れるようだ。とはいってもすべてを同時に操るなんてできないために基本はオートモード、一定の動きをとれるようにしているらしい。このオートモードにも種類は幾つかあり、陸地を移動する……、事実上の侵攻を行う移動モード、ハイヴの建設を行う建造モード、その場でハイヴの防衛を行う防衛モード。防衛しないがその場から動かない停止モード。そして資源回収を目的とする採取モードがある。俺はこの中から採取モードを選択し、それが可能なBETAのユニットに指示を出していく。BETAは小型種、大型種、光線属種の3つに分けられる。それらはもじどおりの役割を意味しており、その中で

採取モードが可能なのは小型種だ。小型種には闘士級、戦車級の2体が存在する。小型ゆえか採取は基本的にこいつらが行うようだ。

モード変更を受けて一番俊敏な闘士級を先頭に戦車級が続いている。その様子をハイヴから確認するが視覚がBETAに頼らないといけないようでとても見つめなく見づらい。仕方がないので戦車級一体をマニュアルモードという俺が直接操るモードに切り替えてハイヴを登らせていく。比較的上の方まで来たために戦場だったと思われる箇所がともきれいに見える。だが、これは……。

「ひ、ひい!? 助け……!」

「いやだあああつ!!! 死にたくない!」

「神様……!!!」

BETAのいう採取とは、人間を含めた物体を集める事だったようだ。戦車や航空機の残骸は当然として負傷して逃げられなかった兵士を小型種が群がり食い殺していく。なるほど、BETAが登場する作品はグロゲームだったようだ。それは理解できた。しかし、これは思った以上にきついな……。あ号標的となったためか吐き気はなすが忘れられそうにないショックキングなものとして記憶に残り受けそうだ。

【回収した資源をG元素に変換し、BETAを作成せよ】

採取がある程度完了したためか、次のステップの指示が入る。採取を一定数切り上げさせて資源をG元素に変換するとそれらが具体的な数値として表示された。総数は元の蓄えも含めて100万。これが多いのか少ないのかは分からないが指示に沿ってBETAを作成する。

最初に作るのは小型種だ。戦車級、闘士級をそれぞれ100体ずつ作り上げた。G元素の減少とともに僅か数分で作られたそれらはモードを指示していないために待機モードとなっている。いくつかモードを指示すればそれに沿った動きをするために作成は成功したようだ。

さて、気になる減少量だが……。残量は99万8500。戦車級10、闘士級が5という計算だ。意外に消費が少ないが神様の知識にあ

ればBETAは数によるごり押しで人類相手に優勢に進めていた。この消費の少なさがその原因なんだろう。これならあつというまに戦車級だけでも万をそろえる事が出来る。とはいえ大型種の欄を見ればそれに見合った数値が必要となっている。最近、というか中国軍の侵攻時に作成された光線属種など5000というところでもない数値になっている。それでも200体は出せるあたり消費の少なさはあるのかもしれないが。

「以後、これらを繰り返し、この地の資源を回収せよ。生命体を発見した場合に通信し、指示を仰ぐように。それ以外は任意とする。以上」……BETAには人類と戦争をしているという意識がない。生命体として認識していないからだ。それゆえか、チュートリアルもおおざっぱすぎた。資源の回収方法とそれを実行、補助するユニットの作成方法のみ。知識にあるハイヴの枝分かれなどについては一切説明されないまま放り出されることとなった。なるほど、BETAが戦術を使用しないのはこういうところにもあるのかもしれない。

さて、これで俺は本格的にこの世界で生きていく事になったわけだが不安はある。原作知識がない以上主人公側の動きを先読みしていつづぶすことが出来ない。

俺はBETAになり、中国軍という人類と戦闘している時点で講和や関わらないという手立ては難しい。ならば人類に命を差し出すか？ 答えはノーだ。そこまでして人類を助ける理由がない。俺の命を差し出してまで人類は救う価値があるのか？ たとえあつたとしても俺だけはないと答える。俺の命がかかっているのだから。

そんなわけでしばらくは戦力やハイヴの増強を行い、人類相手に優勢になれる状況を作り上げていく。そしてから侵攻だ。目指すは日本だ。理由は単純だ。こういう作品は日本人が作り上げたものが多い。となると大抵は舞台を日本にする。日本が登場するのに日本を舞台にしない作品は希少と言っていい。ゆえに、日本を蹂躪する。主人公がいるかもしれない以上俺たちを滅ぼせる可能性を持つ唯一の国と言える。そして、日本をつぶした後はアメリカだ。主人公補正と

いうものがなくても生産力と物量で押し切れるのがアメリカだ。アメリカを滅ぼす乃至国家機能を喪失させるほどの損害を与えれば他の国は有象無象だ。時期次第ではソ連もいるし現代なら中国も危険だが戦闘跡の様子からそれはないだろう。日本とアメリカ。この二つさえなければ侵攻は容易だろう。

人類よ。濟まないな。俺が生き残るために死んでくれ。

第二話 「喀什（カシユガル）ハイヴ」

後に第一次月面戦争と呼ばれることになるBETAとの戦闘を以て人類は30年以上にわたるBETAとの戦争を始めた。しかし、BETAの勢いを止める事は出来ず、人類は大きな損害を受けて月面からの撤退を余儀なくされた。途方もない金と物資、人員をつぎ込んだにも関わらず人類は兵站の距離的問題や有効的な兵器がなかったこともあつて大敗したのである。

とはいえそれだけであつたのなら人類は幸せだつただろう。確かに受けた損害は大きいが時間をかければ取り戻せる数値だつたのだから。

1973年。第一次月面戦争が継続している中でのちにあ号標的と認識されるようになる喀什^{カシユガル}ハイヴが建設された。当初、領内に誕生したこのハイヴを中華人民共和国は自国のみで調査を行った。月面での憂さ晴らしをするようにあふれ出るBETA群に対して航空戦力や戦車を用いて突破。ハイヴまであと少しというところまで接近する事に成功した。

しかし、それに対応したかのように表れた光線属種と呼ばれるレーザーを発射するBETAの出現により航空戦力は無力化された。空からの支援を受けられなくなった地上戦力は光線属種の攻撃もあつてあつという間に壊滅した。その後、BETAに主だつた動きはなく、精々が戦場にあつた死体や航空機などの残骸が消えたことだろう。この間に中国軍は失つた戦力を取り戻すべく軍の増強に同じイデオロギーであり、協力関係にあるソビエト連邦に助力を請うた。

国連の介入を嫌つた中華人民共和国と仮想敵国であるアメリカを追い抜くために力と権力を求めていたソビエト連邦は両者の思いが合致し、ハイヴの共同攻略を目指した紅旗作戦の実行へと至つた。戦術機という対BETA戦の切り札が世界に浸透していないこの時代において中ソは歩兵を主力とする物量で以て四方からのハイヴ攻略に乗りだした。

そして、そんな中ソ両国の動きはBETAとなり、事実上人類と戦

争をすることとなったあ号標的にも伝わっていた。ゲームにおけるBETAであれば数によるごり押しで戦っただろう。しかし、このあ号標的は違う。それを中ソ両軍は身をもって知る事となるだろう。

俺があ号標的となって早数か月。この間に俺は集めたG元素を使って占領増強とハイヴの増築に勤しんでいた。ハイヴはその大きさ・規模などからフェイズと呼ばれるくくりがされるらしい。俺がこの地にやってきたときのハイヴはフェイズ1だったが増築を繰り返したおかげでフェイズ2と呼べる状態へと至った。

そもそもハイヴとは反応炉というBETAの生成・維持・命令伝達に必要な不可欠ないわば心臓と頭脳を兼任する物を守る建造物だ。まあ、でかくなれば資源を打ち出す役割も出てくるが現状の役目はそれだけだな。ハイヴは地表構造物とその下に広がる穴に分かれている。地表構造物は手裏剣のようなものがいくつも重なった特徴をしており、これがフェイズ5あたりになると資源を射出する砲台のようになる、らしい……。

そしてメインともいえるのが穴だ。これはアリの巣のように入り組んだものとなっており、地中を横に移動する「横坑」^{ドリフト}にそれらをつなぐ「広場」^{ホール}が形成される。中央、地表構造物の下には「大広間」^{メインホール}という反応炉、つまり俺の本体が存在するエリアとなっている。これらはフェイズを重ねるごとに巨大且つ複雑になっていくようで、BETAの記録にあるマーズゼロ、つまり火星における重頭脳級のハイヴはフェイズ9という規模で、これだけで国が包み込めそうな巨大なハイヴとなっている。そこまで大きくなればどんな兵器を用いようとも陥落させることは出来ないだろう。

ああ、それと。ここからは俺のオリジナルの行動になるが地表にある草木類を一部だがハイヴ内で育てている。神様知識によるとBETAが侵攻した場所は草木一つ残らないそうだがそれは流石にどうかと思っただけ人工的に栽培を行っている。BETAとしてみれば明らか

かに不必要な行為なのかもしれないがこれのおかげで幾つかの発見を得ることが出来た。

まず、この草木を栽培するにあたって雑草の処理とかをどうするか悩んだ。というのも俺は動けないし手のような細かいことを出来るものはない。だからこそ闘士級の一部に任せる事にした。戦車級じゃ体がでかいしだったら腕みたいなのが一本しかないけど小型の闘士級の方が向いていると考えたからだ。

そして、結果を先に言えば大失敗に終わった。まず、育てる草木を踏みつぶし、なぎ倒して進む闘士級しかおらず、これらを避けるという行動がなかったのだ。そのため、栽培係の闘士級に草木を避ける、つぶさないように力加減をするなどの情報をインプットする羽目になった。とはいえこれは成功し、BETAも具体的に指示を出せたそれを実行できる能力がある事が証明された。

だが、肝心なのはここからだ。闘士級の指は3本しかなく、細かい作業をするには不向きな形をしている。だからこそどうにかこの腕の形を変えれないかと弄ってみたのだが……、成功したのだ。闘士級亜種もしくは栽培級とでも呼ぶべき人の手のように細かい作業が出来る腕へと姿を変える事が出来たのだ。これに成功したときは驚いたし改造なんて出来るのかと新たな境地に達した気分だった。だが、そこで気づいたんだ。新種のBETAが作れるし、何なら完全な人型や人間も作れるんじゃないかって。もし、人間が作れるというのであれば今の人類にこだわる必要はなくなる。そいつらを人類としてBETAの一部に組み込む形で地球の支配者にすればいい。どこまでできるかは分からないが脳を弄って見た目も中身も人間だがBETAには反抗しない従順なものにすることが出来れば歪だが共存が出来る事になる。それを行うには今の人類を駆逐する必要があるがそれは今更な話だ。

それに、人型が作れるのなら人間社会に潜らせることも出来る。人類を内側から瓦解させることが出来れば最高だし、この世界の主人公たちの情報を得られるかもしれない。これまでの様子から人類もBETAに人に似たものがあるとは思っていないだろうし、たとえそれ

が判明しても疑心暗鬼になって他者を信じられなくなるだけの話だ。人間を作り上げるのはメリツトも多い。そして、人を作ればそれを操り、疑似的に人間の体でもう一度人のような生活を送る事が出来るかもしれない。味覚や嗅覚をきちんと作り上げ、それを共有できるようにすれば食事を楽しむことも出来る。BETAになったがために失われた人としての生活を再び送る事も出来るかもしれないのだ。俄然やる気が出てくるというものだ。

……とはいえそう簡単に人間を作る事など出来るわけがない。そもそも、俺は別に生物学者でもなんでもないただの一般人だった。人間の構造を熟知しているわけではない。そういうわけでいきなり作り上げようとした人間（仮）試作一号機は肉の塊として誕生した。冷凍エビを解凍したような気持ち悪い柔らかさでとても人間には似つかない。あまりにも気持ち悪いために戦車級に食べてもらって処理をした。

次の2号機では1号機の失敗から人間の死体から情報を得てから作り上げたが……。細部まではまねる事が出来ずに見た目はそれほどいい人形が完成した。簡潔に言うのなら関節がなくてぐにやんぐにやん動く四肢を持ち、それ以外の部分は硬くて少しも動かないという何とも言えないものだ。これも戦車級の餌となってもらったがその際にも発見はあった。肉人形には血がなく、中身も臓器のようなものではなくて硬いだけの骨と柔らかすぎるにくだけの状態だったのだ。これを見るにいきなり人間を作ろうとするのはいけない事だと理解できた。脳内では血も内臓もきちんと作成できていると思っていたからな。

そんなわけで3号機以降は四肢や頭部、内臓などに分けながら人間の生成を目指す事になったがここで問題が起きた。素材となりうる人間の死体が枯渇したのだ。そもそも俺が目覚めた時に手に入れた死体はほとんどがG元素に変換しており一部だけしか死体が残っていないかったのだ。

どうしようかと頭を悩ませたがそろそろ動きを見せてもいいと考えなおした。そもそも俺はBETAの個体数を増やすこととハイヴ

の増築しか行っておらず、周囲に侵攻するような事は一切していない。だからこそ今の状況となつて素材が足りないことに陥っているだけだ。戦力的にもハイヴから溢れそうな勢いまで増えたとそろそろ行動を起こしてもいいかもしれない。

そう思っていた為だろうか？ 俺を囲むように中国軍と、おそらくソ連軍らしき大軍勢がやってきたのだ。それを知った時は思わず笑いそうになつたよ。……笑う口はないけどな。

なんせ素材が向こうからやってきてくれたのだから。俺は嬉々として中ソ両軍の迎撃準備を始めた。

そして、たぶんこのころ……。いや、転生したときからかもしれない。俺は人間としての常識や理性がなくなり、BETAという人類を滅ぼす存在の一人であると無意識に思うようになり、人間を同族とは思わなくなっていた。だからこそ、この後に起こる虐殺を目に俺は平然としていられたのかもしれない。

第三話 「紅旗作戦」

「進め！・ 我らが中華の大地を不当に占領する異星人どもに鉄槌を降すのだ！」

中華人民共和国軍を率いる將軍は怒鳴り声のような叫び声をあげてハイヴに向けて前進する自軍の兵を鼓舞していく。前回とは比べ物にならない戦車や航空機が空と大地を覆い、ハイヴを攻略せんと飛んでいく。

前回の戦闘で自国だけでは対応するのは無理だと悟った中華人民共和国だが国連に介入はされたくない。そういう思いから同盟国にして同じイデオロギーを持ったソビエト連邦に協力を要請。中ソ両軍による人海戦術と大量の兵器による物量作戦を展開した。

「まもなくわが軍の先頭がBETAの勢力圏に入ります！」

「BETAめ……。前回はいいようにやられたが今度はそうはいかんど。ソ連の協力もあり、前回の数倍の物量をそろえた以上これらを以て貴様らを蹂躪してくれる！」

前回とは違い、ソビエト連邦の協力がある為か將軍をはじめとする将校は勝利することを疑っていなかった。これだけの物量があればBETA相手に勝利できると思っていた。

それを分からせるようにBETAは中ソ両軍に対して牙を向けた。

「うわああああああっ?!?!」

中国軍の兵士がその悲鳴を最後に突^{デストロイヤー}撃級に踏みつぶされる。歩兵の持つ銃火器どころか戦車による砲撃も無効化するほどの正面装甲を持つ突撃級はサイのごとく直進して中国軍を踏みつぶしていく。たった1体なら問題なかったかもしれない。巨体とはいえ戦場を包み込むほどではない。だが、中国軍を襲う突撃級は100を超えろ。それらが二重三重という波となって押し寄せてくるのだ。歩兵どころか戦車でさえそれに耐える事は出来なかった。

—第一段階はこれで完了だな。

そんな中国軍をハイヴに張り付けた戦車級から確認したあ号標的は脳内でそう呟いた。四方八方より押し寄せる中ソ両軍に対してあ号標的が行ったのは突撃級による地ならしだ。紅旗作戦に備えてあ号標的は突撃級と要撃級をそれぞれ2万体制意している。戦車級の1・5倍程度のコストの安さが実現させた人海戦術であり、同じく物量で圧倒しようとした中ソ両軍を相手に猛威を振るい始めたのである。

—一部の人間は殺さずにつれてくるように。実験の材料として使うがそれ以外は資材に変換する。

まず、突出していた中国軍が突撃級の洗礼を受けた。野砲や戦車の砲撃をはじく正面装甲の突撃級に成すべく踏みつぶされていく。そして、そんな突撃級の突進を辛うじて回避できた兵士に対して要撃級と戦車級の大群が止めを刺しに来る。1割にも満たない生き残りは要撃級につぶされ、戦車級に食い殺されていく。

ソビエト連邦の方も同様であり、辛うじて防御の薄い箇所へ攻撃が当たった突撃級を何体か倒した程度だ。それでも何の戦果も挙げられなかった中国軍よりはマシと言えるかもしれないが。

「くそっ！ 敵は一体いつの間にかこんな大軍を……！」

「だめだ！ このままじゃ全滅だ！」

BETAは中国軍に圧をかけるように数の比重を中国軍側に傾けている。既に前衛は文字通り全滅し、中衛にすら損害を出していた。このままいけばすぐにでも後衛にまで迫るだろう。

「馬鹿な……！ これだけの数を物ともしないだと!？」

「將軍！ ソビエト連邦が撤退を開始しました！」

「何!? 我らを見捨てるというのか!？」

ソビエト連邦はこれ以上の作戦継続は不可能と判断して撤退を開始した。中国軍に比重が傾いているために事実上囿として使った形になる。そして、BETAも離れていくソビエト連邦よりもその場にとどまり戦い続ける中国軍に全戦力を向けた。その結果として三方から囲まれるように迫り、將軍のいる位置からも突撃級が迫る地響きが

聞こえてくるほどだった。

「……撤退する」

そこまできて、ようやく将軍も撤退を決めた。中衛は壊滅状態であり、後衛も戦闘を開始しているために命令が通り、逃げる事が出来たのは本陣付近の軍勢のみだった。あとは突撃級に囲まれた戦場で次々とその命を減らしていき、やがて静寂が訪れた。

これより数日にわたり中ソ両軍、特に中国軍は軍を派遣し続けたがそのことごとくが返り討ちに会い、それどころか中国領内への侵攻を開始した。これを受けて紅旗作戦は完全なる失敗で幕を閉じ、以後中国領内はBETAによって蹂躪されていく事になる。そして、これを以て人類の滅亡へのカウントダウンが始まった瞬間でもあった。

中ソ両軍を意外とあっけなく蹴散らせた。本来はもつと手間がかかるかと踏んでいただけに少し予想外だ。せっかく用意した突撃級、要撃級は半分しか出さずに終わってしまった。これらは突撃級を先頭に中国横断マラソンでもしてもらおうか。要撃級は新たに生み出した1万の戦車級とともにその後ろから資源回収だな。

今回の中ソ両軍の侵攻でG元素を大量に確保できた。今後はG元素の残量を気にしないでBETAを生み出していく事が出来るだろう。

ああ、それと。どうやらハイヴの大きさ次第で生み出せる個体数が決まっているみたいだ。今、このハイヴには5万近いBETAがいるがこれ以上増やすにはフェイズを上げる必要があるようだ。火星のフェイズ9くらいあれば許容限界なんて気にする必要はなくなってくるが今の俺はフェイズ2。出来立てはややの赤ちゃんのようなものだ。地道に拡張していくしかないという事だろう。

そんなわけで突撃級と要撃級に中国の焦土化は任せて戦車級で急

ピッチに拡張を行っていく。フェイズ3まで拡張したら頭脳級という俺の補助脳的なものを作り出して新たなハイヴの建設を行ってもいいかもしれない。チュートリアルではその辺の事さえ説明してくれない不親切設計だったが神様からの知識のおかげで何とか理解できている現状だ。

「ひ、ひい！ 助けて……！」

「いやだ！ 死にたくない！」

そして、俺の本体である重頭脳級の前には今回の侵攻で生き残った中ソ両軍の兵士が並べられている。戦車級に驚掴みにされる形で拘束された彼らは顔を恐怖で引きつらせながら命乞いやら悲鳴やらを上げている。別に野郎の悲鳴を聞きたいわけではないので一番騒がしかったやつをほかの者たちに見えるような状態で握りつぶした。悲鳴すらまともに上げられずに血を果実ジュースのように絞り出す姿にその場の誰もが騒げばどうなるかを理解したようで静かになる。

ふむ、こうしてみると女性の素材も必要だな。人間というくくりで見れば女性でも男性でも構わないが性別があつてこそその人間だ。となると男性だけでは材料押して不十分だ。コイツらは男性を作る素材や見本として活用し、女性に関してはそのうち捕獲するでしょう。

さて、まずは何から作り上げるか……。素材はたくさんあるとはいえ無駄に使用するのは避けたい。となると腕や足などを作る事から始めよう。ショック死するかもしれないし失血死かもしれないが腕や足なら即死には至らない。むしり取っても問題はないだろう。

「っ!? な、なにを……あゝあゝ ああああっ!!」

「ひいッ!」

早速一人目を実験材料として使う。悲鳴がうるさいが手を調べるために多少乱暴に扱うんだ。このくらいは許してやろう。

安心しろ。お前が死んでもまだまだ捕獲した人間はたくさんいるんだ。使い物にならないと判断したら楽に死なせてやるから勘弁してくれよ。

第四話 「拡大するBETA」

1973年。この年は人類にとって絶望の始まりの年となった。まず、4月19日に中国のカシユガルに地球上初のハイヴが誕生した。BETAと呼ばれる異星人との戦いは数年前より続いていたとはいえそれは遠く離れた月面での話である。人類の本土ともいえる地球はいまだBETAの脅威を受けていない安全な土地だったので。それを覆すようにハイヴというBETAの拠点が生じたのである。

当初、自国領内にハイヴが建設されたことを知った中華人民共和国はこれを単独で攻略しようとした。これはBETAの技術を独占しようと考えた中国が国連の介入を嫌った末の行動であったがこの日に備えて準備を行ってきた中国軍は序盤こそ優勢に物事を進めていた。しかし、のちに光線級レーザーと呼ばれるようになる遠距離攻撃を可能としたBETAの登場により戦況は覆り、中国軍は壊滅した。

しかし、それでも国連の介入を嫌った中国は同じイデオロギーの国家であるソビエト連邦に対して救援要請を行い、中ソ両軍によるハイヴ攻略が決定された。紅旗作戦と名付けられたこの作戦において四方八方より両軍は攻撃することで攻略を行おうとしたが両軍が用意した大量の物量を超える物量をBETAが展開したことであつけなく返り討ちにあい、中国軍は8割以上の損害を出して撤退を余儀なくされた。

そして、その仕返しと言わんばかりに中国領内に大量のBETAが侵攻。新疆・チベット両自治区を壊滅させると一気に東進。中国の政治・経済・人口が集中する沿岸部に足を進め始めていた。

ここまでされてようやく中国軍は国連の介入を受け入れ、防衛体制を整え始めるがそのころには中国の西半分はBETAの侵攻を受けて壊滅した状態だった。年が明けた1974年には本格的な戦闘が勃発し、BETAの侵攻を阻止しようと国連軍にアメリカをはじめとする西側諸国が応戦したが敵の進行速度を鈍化させる以上の効果を与える事が出来ずにはならずと後退していった。

「地球に降り立ったBETAは明らかに月面のやつらとは違う」

中国戦線に派遣された国連軍の総司令は東進を続けるBETAの動きを見てそう結論をづけた。月面での戦闘は人類の敗北で終わっており、最近完全撤退が完了したばかりであったがその時にもたらされたデータを見る限り月面のBETAと地球のBETAでは動きが違っていると結論を出した。

「BETAは人類を見つけると容赦なく襲い掛かってくる。それはどの方向にいようと。しかし、こいつらは違う。東にしか侵攻を行っていない。西にも人間はいるというのにだ。しかもソビエト連邦の話ではある程度まで近づいても攻撃を受ける事はなかったという」

ソビエト連邦からもたらされた情報はある程度判明しつつあったBETAの行動原理のデータを吹き飛ばすには十分すぎた。ソビエト連邦は何を考えたのか偵察隊を出してハイヴの情報収集を行っていた。結果として彼らは紅旗作戦時の戦場付近にまで到達に成功したがハイヴを守っていると思われる要撃級や戦車級が襲い掛かってくる事はなかった。それ以上の接近は危険と判断した偵察隊はそこで帰還したためこれがBETAが発見できていなかったからなのか別の理由があるからなのかは分からないが月面での動きとは違っていると判断させるには充分と言えた。

「つまり、このBETAに月面でのデータは通用しないということだ。それこそ物量しか使用してこなかったBETAが戦術や戦略的な動きを見せる可能性もあるということだ。これがその前触れだとすればこれ以上野放しにしておくわけにはいかない」

BETAが成長しているのであればこれ以上の成長を許さずに叩き潰す。国連軍総司令はそう判断すると根拠となる情報とともに国連に提出。この意見をもとに国連軍は余力があるうちにハイヴ攻略作戦の準備を開始するのだった。

「アー亜ーアー……。あゝあゝー！ー！」

戦車級の口から出てくる発声……。というには微妙な声を聴きながらまだまだ改良の余地があると感じてくる。というか改善の余地し

かない。せめて金切り声でもいいから人間が喋ってるように見せないと……。

さて、中ソ両軍による侵攻を退けた我らBETAは中国横断マラソンを開始した。群れをおおよそ3つに分け、北部は北京、中央部は南京、南部は上海を目指して進ませている。これらは中国軍、というにはおかしい多国籍軍が迎撃を行っている。この多国籍軍は一体何なのか？ それが分からない。義勇軍と呼ぶには数が多いし、複数の国の連合軍というには装備が均一すぎる。なのに兵士は白人から黄色人種まで様々だ。

ありえそうなのが国連軍だが俺の知る限り国連が軍隊を持ったことなどないはずだ。いや、この世界が俺の知る世界とは違っているために編成されている可能性もあるがどちらにしるこれを多国籍軍と呼ぶしかない状態だな。早く人類の情報を得たいが肝心の人間の生成がうまくいっていない。

腕や足はそれらしいものが完成している。おおよそ一くらいか？ それだけあれば四肢の模倣は容易だった。だが、人間のかなめと言える胴体と頭部は無理だ。臓器を作るにはまだまだ試行錯誤がいるし脳や心臓に至っては手出しさえできていない。頭脳級というBETAがいる以上脳を作る事は出来るがそれを人間サイズにすることが難しい。巨大化していいのならいくらでも高スペックなものが作れるが小型化するならば技術と知識が必要だ。今の俺にはそれらが圧倒的に足りていない。こちら辺は時間をかけて作っていくしかないだろう。

そんなわけで俺は別のアプローチをすることにした。とはいってもやる事は簡単だ。人間の形をさせたBETAに人間の皮をかぶせるだけだ。人間を作る事は出来なくても人間の形に抑え込んだBETAなら比較的簡単だ。

だが、そうなると必要となってくるのが“声”だ。これはBETAも持っていない器官であり、一から作る必要が出てきた。だが、原理は簡単な以上後は人間の声に近づけるだけ……なのだがこれがうまくいかない。今のままでは人間の形をした奇声を発する何かにしか

ならない。一応、声がなくても行けるっちゃいけるが情報収集を主任務とする以上コミュニケーションをとるうえで一番重要な声は必要不可欠だ。

「がー…ぎー…ぎゅー…ぎえー…ぎよぎよお〃お〃お〃」

うん、か行を言ったはずなのに濁音交じりで続けて話そうとするとバグったように変な声になる。これさえ改善出来ればいいんだけどまだまだ先は長そうだな。

となるとそろそろ第二のハイヴの建設の方も動いた方がいいな。人間から転生したためかBETAの創造主からの命令が全く来ない。というか同じ重頭脳級から通信もない。カナダらへんに落下したらしい重頭脳級からは一回だけ通信が入ったがそれ以降はないと考えたと撃墜されたと考えた方がいいかもしれない。

そうなるよこのハイヴが攻略されたときに備えてバックアップ機能を搭載した次のハイヴを作り上げるべきだろう。幸い、頭脳級作成に必要なポイントはある。気軽に生み出せないほど高価だが大量に作るわけではない以上これらは横断マラソンで回収した資源で賄える。

となるとハイヴをどこに置くかだが山だろうと何だろうと平地にして資源として回収してしまう以上どこに建設しても問題はないだよなあ。よし、横断マラソン組の最前列とこの中間地点あたりしよう。ここら辺の人間は回収済みだし攻撃を受ける事はないだろう。

そうと決まれば早速頭脳級を作って戦車級や突撃級とともにハイヴ建設を行わせるか。なんでも突撃級は穴掘り名人らしいし機能的なハイヴにしてくれるだろう。うちの横穴も彼らが作ってくれたんだから。

1974年10月。米国がBETA着陸ユニットの宇宙迎撃構想を打ち出したところに中華人民共和国青海省の都蘭近郊トウランにてカシユガルと同じ構造物を発見した。これにより、ハイヴと名付けられたこれ

らは地上で分化していくという事実をもたらし、宇宙での迎撃によってこれ以上ハイヴを増やさないとした戦略を事実上封じ込める事となった。

新たなハイヴの建設に伴い最初に出現した方をH・01カシュガル喀什ハイヴ、二つ目をH・02都蘭トゥーランハイヴと命名し、これ以上増える前にハイヴ攻略を急ぐ必要が出てきたが、そんな人類をあざ笑うようにBETAの侵攻は止まらず、翌年には中華人民共和国は沿岸部を除くすべての地域をBETAに分け渡すこととなり、戦局は人類の劣勢で進んでいく事になる。

第五話 「暗躍する者たち」

中華人民共和国はBETAとの戦争において最も損害を被った国家となった。第二次世界大戦、国共内戦を経て自分たちの国を持った中国共産党だがいまや風前の灯火となっている。二度の敗北と国内への侵攻を受け、すでに中華人民共和国は沿岸部を除くほぼすべての領土を喪失した。20億を超える国民は発展した沿岸部に人口が偏っていたこともあり、いまだ健在だがそれでも一連の侵攻によって5億人以上が犠牲となっている。BETAは突撃級を先頭に侵攻しており、逃げられなかった者たちは一様に踏みつぶされていただろう。そして、BETAは人間を食べる。命からがら突撃級に踏みつぶされなかった者たちはその後にかくる戦車級によって残らず食い殺されていた。中にはあ号標的の命令でハイヴに生きたまま連れいかれる者もいるが全体で見ればごく少数であり、大半はG元素生成の為の資源となっていた。

そんな中国だが、世界からの視線はあまりよくはない。そもそも、単独で攻略しようとしてしつぺ返しを食らったのが今の中国の現状であり、最初から国連の介入を受け入れて全国家が協力して対応していればここまで大事にならずに済んだのではないか？　それが世界中の人々が考えている事であった。とはいえレーザー級の出現までは中国軍は順調に進行出来ており、空からの支援もあってレーザー級さえ出なければ単独でハイヴ攻略を可能としていたかもしれない。その危機感がレーザー級誕生のきっかけになったといえればそれまでではあるがそれならば国連がいたところで同じ末路をたどっていただろう。

しかし、そんな中国の劣勢を違う観点から悲しむものも存在した。「中国という発展の見込みがあった土地が使えなくなっただのが痛手だな」

「ああ、せっかく援助を行ってきたというのに……」

とあるビルの一室では複数人の男女がテーブルを囲み、会議を行っていた。議題は当然と言わんばかりに中国に関するものである。

「とはいえ中国は現在国家としての機能を辛うじて維持している状態。足りない物を販売してやればすぐに飛びつきましたな」

「武器・弾薬・船に衣類。食料に医療品……。こちらが倍の値段を提示しても買っていくあたり国内は本当にひどいのでしよう」

「現在中国共産党は購入した物資を軍事関連に注ぎ込んでいるようです。そのためいくらかあっても充実するという事がないのでしよう」

中国としてはすぐにでも国土を取り戻したいという思いが強く、これ以上のBETAの拡大を防ぎ、力を温存する方向に舵を切った国連軍との足並みがそろわなくなってきた。中国軍自体が大きな損害を受けているために今のところはおとなしいがある程度復興すれば単独で反抗作戦をしかねない状況だった。

「我々としては中国軍が無謀な反抗作戦をして中国全土を喪失するような事にならないのを祈るがそのための準備としていろいろと買いあさっている現状は望ましい。このまま購買だけ続ける状態を維持できないものか……」

「そのためには中国軍に戦線維持を出来る戦力を残して損害を受け続けてもらう必要がありますな。前線の中国軍の比率を上げますか？」
「いや、それでは我らの思惑に感づかれる。今はおとなしく販売だけをすうべきだ。それに、今はそんなことよりも重要な事がある」

そう言つて一人の男がグラフを見せる。そこにはこの一年で発生した中国人の難民の数が表されていた。

「いまだ中国は15億を超える人口を持った国だ。だが、そのうち3割ほどが国外脱出を図り、ソ連や日本、東南アジアに難民としてなだれ込んできている。我が国にも1000人単位で難民が押し寄せてきている」

「面倒ですな。コストの安い労働力と考えればいいのですがそれでも億を超える数はいりませんな」

「中国共産党は何をしているのだ？ 彼らとて対応は打っているのだらうっ？」

「どうやら奴らは一定数を切り捨てるつもりのようなだ。国家機能を辛うじて維持できている彼らにしてみれば15億の国民は邪魔でしか

ないのだろう。むしろ彼らが国外脱出を支援している様子まである」
「なんと面倒くさいことをしてくれるのだ。これだから極東の猿どもはごきかしくて好きになれん」

「我ら白色人種と違い色を持った劣等人種です。過度な期待がそもそもまちがっているのでしょうか」

「ではいつも通りに？」

「ああ、すでに準備は出来ている。彼らの大好きな革命だ。喜んで受け入れてくれるだろう」

「その後はどうするのだ？ ちょうどいい人物でもいるのか？」

「そんなものは探せばいくらでもいる。それに、物資の販売で経済を握ったに等しい我らに彼らが強く出られるとは思わん。革命後なら特にな」

「では、中国という良き友人のためにひと肌脱ぐということでもよろしいな？」

「」「異議なし」「」

「よろしい。では早速実行に移すでしょう。全ては偉大なる我らが祖国と我らの富のために……」

ついに、ついに完成した。人間が……ではなくその皮をかぶったBETAが！

「あーいーうーえーおー。あーいーいーいー。んーいーいーいー。マイク
チェックマイクチェック……」

声の方もだみ声や金切り声ではなく成人男性の声だ。ここまで長かった……。声を作り上げるのがこんなに大変だったなんて思いもしなかったな。まあ、肝心の人間を作る方は遅々として進んでいないけどな。やはり臓器が複雑すぎる。マジでこれは数を作って試行錯誤していくしかないな。

さて、今回作ったのは20代後半の男性に擬態したBETAだ。皮

は特殊な加工をしてあるために腐敗することはないが人間らしい汗をかいたり血を流す事は出来ない。だが、人間の皮を使っているだけあって見た目は人間そっくりだ。そこに人間のように受け答えが出来れば余程踏み込んだ関係にでもならない限り問題はないだろう。

で、こいつの名前は何にするか……。正直中国人っぽい名前なんて分からない。知っているのはせいぜい三国志の英雄たちに元の世界の国家主席の名前くらいだ。前者は名前としては有名すぎて疑惑を持たれやすいし、後者はなんか使ったらまずい気がするから使わない。となると兵士たちから名前を聞き出すしかないな。

幸いな事に捕まえた兵士や民は中国人だ。日本人の俺としては中国語なんて分からなかったが叫んだりする彼らの声を聴いているうちにある程度は理解できるようになった。……こいつを人間社会に出したらあらゆる言語を覚えないと意味がないな。そこは重頭脳級のハイスペックな頭脳に期待しよう。あ号標的になってから頭の回転や処理能力がすさまじいからな。まるで高性能なコンピューターになった気分だ。

「にーはお」

「っ!?! ひいー!」

早速こいつを使って捕まえた人間とのコミュニケーションをとってみる。目の前でBETAが皮を被っていくのを見ていた人間たちは化け物を見る目でがくがくと震えている。ふむ、さすがに最初から会話は無理か。だが……。

「にーはお」

「っ!?!」

俺のあいさつに答えなかった人間を戦車級が食い殺す。そして次の人間の前に立って同じように挨拶をして答えなければ食い殺す。ここまでして彼らも何が起こっているのか理解できたようだ。次に声をかけた女性は涙を流して震える声であいさつをしてくれた。俺はにっこりと笑みを浮かべると覚えた単語を使って会話をしていく。女性は戦車級3体に囲まれ、目の前には人間に近づこうとしているBETAと生きた心地がしない中で必死に会話をしてくれた。

おかげで数時間もしないうちに中国語をマスターすることが出来た。難しい言い回しや方言はまだ無理だがこれからこの人形がいくのは中国ではない。それ以外の国だ。余程中国人に詳しくない限りバレル心配はない。

ああ、それと会話をしてくれた女性には褒美として二つの道を選ばせてやることにした。一つは苦しまずに即死するかみんなと同じ運命をたどるがその順番を最後にするか。女性は死ぬことを選んだよ。ある意味では賢明な判断だ。どうせ死ぬのなら苦しまずに死にたい。俺は女性の願いをかなえて彼女が自覚するまもなく戦車級に殺させる。おそらく一瞬だけ痛みを感じてすぐにそれも感じなくなっただろう。女性の死体はG元素の変換資材としてありがたく使わせてもらう事にした。心なしか女性の変換効率是他の者よりも多かった気がする。まあ、親和を抱いた相手だからってだけだろうけど。

さて、すべての準備は整った。BETA初の人間型、いや小型種人間級の活動開始だ！人間よ。これに気が付いて絶望するまでの短い希望をかみしめるんだな。

第六話 「油断」

「へえ、お前も中国から逃げてきたのか」

「ええ、両親は既に亡くなっていきますし親戚もBETAの侵攻で死んでしまい天涯孤独となったので逃げるなら今だと思ひまして」

「それは災難だったな。なあに！ 心配すんな！ お前ほどの能力があればすぐにここでも受け入れられるさー」

そう言つて親切に対応してくれる相手に俺は内心で笑みを浮かべる。人間級と名付けた新種のBETAが現在いるのはあ号標的になる前の俺の故郷である日本だ。理由としてはこの世界の舞台となるだろう日本で情報収集を行う為という事と日本人ということもあつて日本語が中国語以上に達者だからコミュニケーションを取りやすいのがある。

この人形の設定としては盛シヤン 宇沢ズーツァという青海省出身の26歳で13歳の時に北京に引越してそこで日本人と交流を以て日本語を学んだこと。3年前に両親を事故で失い、BETA侵攻で青海省の親戚もすべて失つて天涯孤独の身となり難民として日本にやってきたという感じだ。親がそこまで裕福ではなかったために学校にはきちんとな通えなかつたが学習意欲は高く、言語を覚えるのが好き……という都合のいい設定だ。少し無理やりすぎるかもしれないがこのくらいの方がかえつてちょうどいいかもしれない。没個性よりも優秀な方が何かと味方を作りやすいからな。

「本来は難民は肉体労働とか簡単な仕事に就いてもらうんだけど日本語が得意なら通訳として働いてもらおうかな」

「任せてください！ 俺いろんな言語を学ぶのが好きなんで！」

「それは頼もしいな！ なら他の言語を覚えた時には言ってくれよ！俺が推薦してやるからさ」

人形と会話をしているのは難民対応に当たっている公務員の杉原という男性だ。年は人形の設定よりも高い32歳。お人好しという言葉がぴつたりな懐に入りやすいカモだ。俺は日本語が話せるというところで杉原に通訳の仕事をもらい、生活する事になった。そして、

他言語を覚えていけば本格的に通訳士として雇われることになるだろう。そうなれば情報収集がしやすくなる。

……それにしてもやはりここは地球だが俺の住んでいた地球とは違うんだな。西暦1975年だが大日本帝国が存続しているし月面を事実上領土としていた程宇宙進出が行われている。それに伴ってかいろんな面で技術が同時代の前世の地球より進んでいるように感じる。

だけど大日本帝国の影響が残っているからなのかゲーム機のような娯楽は存在しないようだ。更に今はBETAが地球に進出しているということもあって娯楽自体が自粛され気味となっている。文化は明らかに前世の方が進んでいると聞いていいな。

さて、これ以上の情報を得るためにも最初はまじめに働くのでしょうか。通訳という仕事上中国人とも接する機会が増える。ぼろを出さないように気を付けないとな。

そして、俺はこの時はつきり言つて油断していた。日本とアメリカをつぶすことを優先していたという事、人間の生成に夢中になっていた事、いろいろと言いつつ諷刺があったが正直に言えばソ連を大したことなと放置していた事が原因だった。

1975年10月。俺が人形が受けた通訳の仕事をこなしている間にソビエト連邦単独のハイヴ攻略が行われた。血旗作戦と名付けられたこれはいつも通りであれば防衛線力だけで十分だったのだ。計算外だったのはソビエト連邦初の戦術機が作戦に参加したことだ。

戦術機

後に知る事だがそれは人類がBETAに対抗するために作り上げた対BETA戦闘用の兵器で、正式名称は『戦術歩兵戦闘機』。月面での戦争の際に投入されたアメリカ製のハーデマンという機体の後継機として作成された戦術機はレーザー級の誕生により航空戦力が無力化されたことに対する穴埋めとして作られたが結果的に高度な戦闘を可能としたこれらはアメリカで実戦配備されるに至っていた。

「よろしい。油断せずに進むぞ」

戦術機は戦車すら凌駕する機動性能を持つためにイワンをはじめとする10機の戦術機は仲間を置いて先に進むこととなっていた。それがイワンの警戒心を高める要因にもなっており、部下もそれを理解して決して油断や慢心することなく自分の使命を果たしていく。

ソビエト連邦による単独でのハイヴ攻略。それだけを聞けば中華人民共和国のように国連の介入を嫌ったととらえられるが実際には違う。そもそも国連軍をはじめとする各国の軍勢や主力は中国の防衛線に参加している。もし、ハイヴ攻略に参加するならばそこから軍勢を引き抜く必要が出てくるがそうなればBETAに動きを察知される可能性もあった。

そのため、攻略で得た情報の共有。ハイヴ攻略成功時の共同での情報収集に調査をすることを条件に国連軍らが囷もかねてBETAを引き付けている間にソ連がハイヴ攻略を行う事になったのだ。そして、この作戦はハイヴ侵入までうまくいくこととなっていた。

「(党は紅旗作戦での失敗を覆す戦果を求めている。とはいえ今回のこれでハイヴ攻略が出来るとは思えない。BETAがこのハイヴ内にいないとは限らないし何よりここの情報がない。どのようになっているのか、どうすればハイヴを攻略したという事になるのかを知るための調査として行動しなければ……)」

『隊長！ 前方からBETA！ 突撃級です！』

「くっ！ やはりいるか！ 総員先ほどの広場まで撤退する！」

『『『了解！』』』』』

広場^{ホール}を抜け、ハイヴに通じると思われる横坑^{ドリフト}を進んでいくとついにBETAと接敵した。しかも相手は突撃級という正面装甲が厄介な相手だった。それは平野や山岳部でも脅威と言えるがこのように弱点の背後に回り込めない狭い場所では一番の脅威と言えた。

イワンは迎撃をあきらめるとある程度の広さがあつた広場への後退を決断する。そこでなら穴から飛び出してきた突撃級をしとめる事が出来る。そう判断しての行動だった。

実際、そのように行動すれば10体ほどの突撃級を狩る事に成功し

た。迎撃に成功したことで部隊内で安堵する空気が起こるがまだ攻略が始まったばかりであり、イワンを中心にさらに奥へと進んでいく。

現状を把握したあ号標的が確実に全滅させるために奥で待ち構えているとも知らずに。

第七話 「メインシャフトでの激闘」

「……妙だ」

ハイヴ内のドリフトを進むイワンはそう言っただけで眉を潜める。先ほどから散発的にBETAが襲い掛かってくるがそれはごく少数の要撃のみであった。最初のような突撃級は姿を一切見せず、まるで誘っているかのように奥へと誘導してきているかのようだった。そんな不気味さにイワンはこれ以上の前進を戸惑ってしまう。

「弾薬は想定よりも戦闘が少ないために余裕がある。しばらくは戦闘できるがこのまま進むより、情報を持ち帰る方が賢明なのでは……」

『隊長！ 奥に巨大な空洞があります！』

畏の可能性を考えて撤退するべきだ。そう考えるイワンの思考を阻害するように隊員の一人がメインシャフトと呼ばれるハイヴの中心部を発見した。これまでとは明らかに違う構造にイワンの脳内から撤退という二文字を消し去っていく。

「……よし、警戒しつつ調査を行う。もしかしたらここがハイヴの中心部かもしれないからな」

『『『了解！』』』』

イワンは悩んだ末に前進を選んだ。ハイヴ内の情報は逐一報告を入れている。ここで畏にはまり全滅しても戦術機10機とそのパイロットを失うだけで済む。ハイヴ攻略は失敗になるだろうがそれは撤退した場合も同じである。

「党と祖国、そして人類の未来のために情報を少しでも得るぞ！」

『『『Ypaaaaaa aaaaaa!!』』』』

10機の戦術機はついに地球のBETAを統括するあ号標的の本体が存在する最下層に通じる巨大な縦穴、メインシャフトへと到達した。太陽の光が一切入ってこず、ドリフトやホール以上に暗いそこは今まで以上の不気味さを見せつけてくる。

「ライト点灯！ この暗さだ。奇襲には気を付けるように」

これまでは辛うじて見えていたがために明かりをつけて敵に察知

されるのを恐れてライトをつけていなかったがここまでくればそれよりも暗い状況が危険となる。そう判断したイワンによって10のライトが点灯。メインシャフトを淡く照らしていく。

『BETAのやつら、こんな穴を掘っていたのか……』

『トウランハイヴもこれと同じ状態になっているのか?』

『だとすると早くなんとかしないと地球が改造されつくしてしまうな……』

隊員たちは口々にハイヴ内の状況に危機感を持つ。そもそも、BETAの侵攻を受けた場所は草木一つ残らないむき出しの大地が残るのみとなつている。今はまだ目立ってはいないがカシユガルハイヴ周辺の大地は平らにならされ始めており、ハイヴがこの地上全てを支配するときには山などは一切残らない平坦な大地が続く星となる事が理解できる。だが、それだけではなくこの状況を見る限り地球内部も空洞だらけの死んだ星となってしまう可能性がある。そんな未来が見えてしまった彼らはより一層闘志を高めてハイヴ攻略に当たる。

ゆつくりと降下する彼らはいまだ見えない地底部だけではなく周囲の壁や上空にも気を配る。奇襲を仕掛けてくるのであれば今がちょうどいいタイミングだ。そして、そんな彼らの予測は命中した。

「っ！ 総員回避運動！」

『うわああ……!』

『4番機ロスト!』

「くそっ！」

地底部に見えた小さな光。それが何を意味しているのか一瞬で判断したイワンは即座に回避運動をとるように指示を出したが突然言われた部下たちにそんな行動は出来ない。結果、地底部に待機していたレーザー級の光線を受けて4番機が撃墜される。それを皮切りに10を超えるレーザーが飛んできてイワン達を襲ってくる。

『っ！ 7番機墜落！ 残り8機!』

『隊長！ 地底が見えます！ レーザー級を複数確認!』

「レーザー級を撃破する！ 進むも逃げるもあいつらは邪魔だ！ 殲

滅しろ！」

レーザー級の射程は長い。それこそメインシャフトの底から天井まで一切の威力減少を起こさずに飛ばす程度には。付近にドリフトがない以上上に戻るか下に降りきるしか道はない。である以上レーザー級の撃破に動くのは自然な流れである。

普通の歩兵が持つことさえできない大口径の銃火器が一斉に火を噴き、イワン達を狙うレーザー級に弾丸の雨を降らせていく。一撃一撃は必殺の威力を持つレーザー級だがその発射にはどうしてもインターバルが必要だ。奇襲とその後の攻撃で2機しか削れなかった彼らは次弾発射を待たせてもらえずに次々と撃破されている。数の上で圧倒していた彼らは戦術機からの一斉射撃により2発目を撃つこともできずに全滅した。

しかし、レーザー級という明らかな脅威の排除が出来たという事実はいワンを含めた全員の心に安堵という明らかな隙を作った。ゆえに、BETA側の雨に気付くのが遅れてしまった。

『……な!? 隊長! 突撃級が上空から落下してきます! 数は不明! 穴をふさぐほどです!』

「なんだと!」

下に気を取られていた隙をつき、ドリフトから大量の突撃級が落下してくる。一番硬い正面装甲を下に頭から飛び降りる彼らはまさに肉塊の雨と呼ぶにふさわしいだろう。そして、いまだに地底部に降りきっていないイワン達には危険な相手だ。

「総員一気に地底部まで降りろ! 落下時の衝撃は気にするな! 突撃級に押しつぶされるよりはマシだ!」

『だ、だめだ! 近すぎ……!』

『セルゲイ!!!』

まず、一番上にいたセルゲイという男が乗っていた3番機が突撃級と衝突して爆発四散する。あまりにも早い落下速度に続いて9番機が激突。壁に叩きつけられて爆発した。そこまできてようやく戦術機は一斉に落下を始めたが逃げ切る前に突撃級の餌食となっていく。

『くそ! くそおおおおああああああ!!!』

『2番機墜落……。残存2機』

「……………」

結局、メインシャフトを降りきり、突撃級から逃げられたのはイワンと5番機のみだった。そして、そんな彼らを待ち構えていたのは巨大な重頭脳級「あ号標的」とそれを守るようにイワン達を取り囲む大量のBETAだった。レーザー級も多数存在し、逃げ切る事は不可能に近い。イワンはここでようやく撤退を選べばと後悔しかけるが少しでも抵抗して数を減らそうと武器を構えた。

……その瞬間だった。

「いやはや。人間というものは本当に何をするのか分からないな」

『なっ!?!』

ここで聞こえるはずのない人間の声、それにイワン達は驚愕した。そして、その声の発信源を見てさらに驚愕する。その声の主は一体の要撃級の上に立っていた。アジア人の特徴を持ったその男はいやらしい笑みを浮かべて2機の戦術機を見ている。

人間であれば絶対に落ち着いて立っていられない場所。そこにいるだけで男が人間ではないと理解させられる。そして、同時に襲うのはい言いかれぬ恐怖。彼が人間ではないのであればあれは何なのか。簡単だがそれを回答する勇気が出てこない。それゆえに、男が代弁と言わんばかりに答えた。

「わかるよな？ 俺はBETAだ。死んでいくソビエト連邦の英雄的存在に敬意を払って出てきてやったぞ」

「……………」

「こうしてBETAに囲まれているのに平気な状態を見ればわかるだろう？ ああ、人間の姿をしていた表情も人間らしい。そしてロシア語を話しているということから信じられないか？ なら証拠を見せてやるよ」

そういうと男は腕を変化させる。正確には腕の皮が破けて中から戦車級のような赤黒い腕が複数出てきた。明らかな人外の行動に驚くと同時に安心感も出てくる。

「腕の皮を破って出てきた。それはつまり人間の皮を被って擬態し

ているだけという事か。それでも脅威だが対処法が簡単な以上まだ希望はある)それで? 何を目的として姿を現した。まさかこのまま見逃してくれるのか?」

人間に擬態できるという情報は人間に漏れてはいけない。それだけ重要な戦略的情報であり、人間を内側から崩す材料となりうる。そんな危険を冒してまで自分の前に出てきた理由は何なのか? その疑問がイワンには解消する事が出来なかった。

「なに、俺も最初はそうだったさ。だが、お前たちの奮戦を見て気が変わったのさ」

そういうと男は握手を求めるように手をイワンへと差し出すと、言った。

「人類のために人類を裏切らないか?」

そう言って笑う男の瞳は怪しく光っていた。

第八話 「初めてのBETA?とのコミュニケーション」

……正直に言って、今回侵攻してきた連中は全て殲滅すると決めていた。いくら油断していたとはいえ家に土足で上がられたのだ。俺が仕掛けていることだとしても許せることではなかった。

だが、俺はそれを見たときに一瞬で虜になった。20世紀にいれば、それこそ21世紀でもありえないと思っていた二足歩行のロボットに俺は一目ぼれしていた。しかも明らかな試作ではなくいろいろと問題はあるそうだがロボットとして完成されたその機体性能は目を見張るものがある。別に前世の俺はロボットにはまるようなやつではなかった。むしろ戦艦や空母の方が好きな方だ。今でもそれは変わらないがあれを見た時から俺の中にはある欲望が渦巻いた。

―あれを無傷で手に入れ技術を模倣して自分だけのロボットを作りたい

そう思った俺は罨の内容を変えた。本来の予定ではメインシヤフト中央部まで降りたロボットを上下からの100を超えるレーザー級の一斉攻撃で殲滅する予定だったが、それを変更して逃げられないようにしつつ下へと誘導した。結果的に10機のうち8機は墜落したがうち2機は上半身と下半身がそれぞれ無傷に近い状態で残っている。解析する事は出来るだろうがやはり無傷の機体が欲しい。

「人類のために人類を裏切らないか?」

ゆえに予備の人間級を持ち出して彼らと交渉を試みた。十中八九失敗すると理解してなおだ。当然、彼らからの反応は警戒だった。

「人類のために人類を裏切る? 矛盾しているように感じられるが?」

「そうではないさ。お前らがこちら側につくというのなら一定数の人間を生かさそう。生きていくに必要な土地は残し、決して君たちの存在を脅かさないと誓おうではないか。もちろん、生き残らせる人類は君たちで決めていいさ」

「都合がよすぎるな」

隊長らしき男の声は明らかにこちらを敵として認識し、交渉は応じような相手ではないと分かる。こいつはどれほど絶望的、今のような状況なら少しでも多くのBETAを道連れにして戦死するのだろうか。正直に言っただけは真つ先に始末するべき相手だったな。

「お前たちにとっても悪くはない内容だとは思うのだがな。このままいけば人類は滅亡するというのにそれを回避できるのだから」

「ふ、本気で人類を滅亡させられると思っっているのか？」

「逆に問うが俺たちは人類を滅亡させられないと本気で思っっているのか？」

「それは……」

隊長が言葉に詰まった。当然だ。発展途上国とはいえ明らかに前世の中国より力を持っていた中華人民共和国を滅亡寸前までに追いやっているのだ。ロボットの登場でどうなるかは分からないが人類では対抗するのは難しい存在なのだ、我らBETAは。

「どうだ？ 別に今決める必要はない。持ち帰って党とやりに報告しても構わんぞ？」

「ほう？ この場から逃がすと？」

「そうだな。だが、そのおもちやからは降りてもらわうがな。さすがにそんなものを無傷で帰らせたいとは思わない」

あくまで戦力を削ぐという名目でロボットを無傷で回収できるようにする。あれから降りてしまえば後はどうでもいい。奴らを殺しても別に構わないからな。だが、俺の予想通りなら……。

「確かに良い条件かもしれないが貴様らBETAを信用などできない！ 我らはたとえ手足をものがれようとも最後まで戦うことをやめたりはしない！」

「うん、だろうな」

交渉は決裂。ゆえに俺はレーザー級に攻撃を行わせた。だが、それは破壊を目的とした攻撃ではない。狙撃を目的とした一撃だ。レーザーの出力を極限まで抑えつつ貫通力に特化させた一撃。出力調整と貫通向上のためには時間が足りなかったからな。交渉しつつ時間

稼ぎもさせてもらったよ。

「がつ!？」

「隊長!? 一体何g……!？」

視認すらぎりぎりの細いレーザーがロボットの膨らんでいる胸のあたりの中心部を貫いた。こういうロボットというのはコックピットが胸か頭部にある事がほとんどだ。複数人乗る場合にはそれ以外にもあつたりするが大半はそこだ。そして俺の読み通りに隊長らしき人物と生き残った隊員らしきものは即死した。

あとはこれらを徹底的に解析して自分だけのロボット開発のデータにすればいい。それを細かい作業が出来るという事から栽培級をメインに補助として比較的小型の戦車級を用いて破壊しないように気を付けつつ解体してデータ解析を始める。

それを行わせている間に俺は地上のソ連軍の掃討を……って、言いたいところだが既にそれは始めている。突撃級を先頭に踏みつぶし、生き残った者たちは要撃級と戦車級で掃討する。基本的ないつもの動きだ。これだけで非力な人類はあつけなく死んでいく。このロボットはソ連にとって虎の子だったようで突入した機体以外に確認できていない。ならばこそ敵の地上戦力を今のうちに叩き潰しておくか。そして、慢心していた俺にそれがどれだけいけないことをか教えてくれた彼らには感謝しよう。だから、中国と同じように殲滅してやるよ。中央アジアを突破してモスクワを落としてソ連という国を東西に叩き割ってやる!

ソビエト連邦単独で行われた血旗作戦。これは人類史上初となるハイヴへの突入に成功し、内部の情報を把握する事に成功したが投入された戦術機は1機も帰還できず、さらには地上にて警戒してたソ連軍をハイヴから出てきたBETAが強襲。ほぼ全滅に追いやると中国の時のように報復と言わんばかりにBETAの大群がソ連領の中央アジアに侵攻を開始した。

BETAは東に向かっても西には来ない。そう油断して疎開をし

ていなかった中央アジアの人々はBETAの侵攻に伴いそのことごとくが犠牲となった。

この侵攻を受け、ソ連は非常事態宣言を発令し、全国民を軍属へと編入してBETAを迎えうった。しかし、これにより非ロシア系の住民はほぼすべてが兵役に就くこととなり、その子供たちは軍人としての教育を受けるなど明らかな非人道的行為であつたがBETAという明確な脅威の前にそのことで反発する者はほぼ現れず、声を上げたものは存在その者を抹消されていく事になる。

ソ連領内に侵攻したBETAだが不思議とソ連と他国を理解しているかのようにソ連領内のみを侵攻していた。それを見た他国はこう考えるようになった。

「BETAを刺激しなければ侵攻を受ける事はないのではないか？」
その説はあつというまに世界に駆け回つた。その結果として発生したのが国連軍などの共闘の拒否や救援要請を拒むようになった。それはそうだろう。もし、この説が本当であればBETAに手を出さなければ自国が脅かされる心配はないのだ。結果的にソビエト連邦と盟主とするワルシャワ条約機構加盟国と国連の母体ともいえるアメリカ、位置関係から大陸の陥落を恐れる日本帝国や東南アジア諸国以外の国々はBETAとの戦いから遠ざかるようになった。

結果として派兵を続ける国々はBETAを止められるだけの戦力を集める事に苦勞していく事になり、次第に派兵ではなく武器供与などで済ませるようになっていき、共産党勢力ということもあつて中ソは世界から半ば見捨てられた形となつていき、絶望的な防衛線を強いられることになる。

そして、その結果起こる最悪の結末を予測できる人物はまだほとんど存在しなかつた。

第九話「陥落」

1977年、ついに中国は限界を迎えた。沿岸部は国連軍や日本帝国軍、アメリカ軍をはじめとする多国籍軍が防衛を行っていたが今やその主力を担っているのは日本帝国とアメリカのみとなっている。

アメリカが開発したF-4ファントムをはじめ、2年前から配備されるようになった中国の戦術機殲撃8型ジャーンツが押し寄せるBETA相手に果敢に応戦しているがそれでも数の不足からすべての戦線に配備できていくわけではなかった。ちなみに、日本帝国はアメリカから戦術機供与が遅れに遅れたためにいまだに実戦投入できる段階には至っておらず、戦術機を持たない大陸派遣軍は他の軍勢より大きな損害を出しており米国への不信感を植え付ける原因となっていた。

まず、日本帝国が担当していた南部、上海付近の軍勢の全滅によって上海が陥落。次に中国軍が担当した北部戦線が瓦解。北京を含む満州の西半分を奪われる事態となった。そして、11月には最後まで粘った中央戦線、南京がアメリカ軍の無断撤退により国連軍全滅という形で陥落した。

いまだ朝鮮半島や満州の北東部が残っているとはいえ中国という国は滅亡したに等しく、中国共産党は台湾に亡命。中華統一戦線の結成を宣言するに至った。中国という大陸が陥落したことにより、日本帝国には危機感を持つ者が増え始めていた。元々、手を出さなければBETAは攻撃してこないという説が広まったところには大陸への派兵を行っており、見逃してくれるとは思えない。そもそも手を出さなければ攻撃してこないなどという根拠がないなどの理由から中国という国が倒れないように支援を惜しむことはなかった。だが、防衛に参加する国の激減に伴い日本帝国の負担が上がったことで大陸派兵に懐疑的な意見を持つ者が増え始めていた。

そして、唯一全滅や壊滅せずに軍隊として撤退を行ったアメリカへの不信感が高くなっていった。元々F-4シヨックと呼ばれる戦術機供与の遅れなどであった不信感が今回の一軒でさらに高まったのだ。国と軍からしてみれば軍勢が逃げられたことはいいことだ。そもそもそ

も撤退すら満足にできなかったのがアメリカ以外の国なのだ。文句を言うのはお門違いと言える。しかし、国民からすればそんな事は関係ない。

—アメリカ軍は同じ戦線にいた国連軍を囮にして自分だけきつさと逃げた

—アメリカはBETAと通じていて自国の軍隊だけ襲われないように手が回されていた

—アメリカは日本帝国や中国を売り渡したのだ！

最初、中国人の難民たちの間で話されていたこの噂話は気付けば日本帝国の国民にも信じる者が出てくるほど大きな声となっていた。過激な者の中には「アメリカは既にBETAに乗っ取られている！

あいつらこそ人類の真の敵だ！」と叫び、打倒米国を掲げて人々を扇動する者まで出始めていた。

ただでさえ大陸派遣軍の全滅という損害を受けた日本帝国はこれらの対応に追われることとなり、軍の復興が遅々として進まなくなっていた。ただでさえ戦術機配備の遅れで国防に不安がある中でそれ以外の厄介ごとの対応をしないといけないのは大きな負担となっていた。

「なあ、ズーはどう思う？ アメリカがBETAとつながっているって噂」

「んー、ばかばかしいと思うよ」

このころには様々な言語を覚え、通訳としての仕事の幅を増やしていたズー事人間級識別名盛シヤンズーツァ 宇沢はお世話になった杉原と今日日本を騒がせる説について話をしていった。ズーのもとには難民となった中国人が雇用を求めて詰めかけてきており、何人かを事務員として雇ったズーは通訳で培った人脈などを活かして彼らに色々な職を与えていた。とは言ってその大半が肉体労働である事には変わりはない。それと並行して日本語教室も開いており、簡単な会話が出来る程度に難民に日本語を教えていた。また、それとは別に日本人向けの中国語教室も開いて両者の仲を少しでも取り持てるようにと奮闘していた。その結果として日本帝国内でも難民でありながら努力を続ける彼を

評価する者が多く出始めており、本来の通訳の仕事も彼に頼む企業が増え始めていた。

「そもそもアメリカがBETAと手を組んでいたのならもつといい方法があったはずだ。アメリカ軍だって最終的に撤退に成功したとはいえ損害を受けていないわけじゃないんだ。普通に運よく撤退できただけでしょ」

「だよな。それをみんなにも理解してほしいんだけど……」

「祖国を失ったわけだからね。他人に当たりたいんだよ」

「結果として俺たちが損をしているのは納得できないけどな」

アメリカに行った難民はそもそもここまで大きな騒ぎとなっていないし他の国々はそもそもそういった騒ぎにさえなっていない。完全に日本国内の難民たちが大騒ぎをしているだけだったのだ。日本帝国は完全なるとばつちりを受けたといえた。

「そういえば今度中小企業にくつついて欧州に行くんだってな」

「うん。なんでもEUが対BETA戦を行う方向で決定したらしくてね。一部の製品のライセンスをお願いしに行くらしいよ」

そもそも、欧州は複雑な状況にある。理由としては東西に分断されたドイツだ。第二次世界大戦後ドイツはアメリカ率いる連合国軍が西ドイツを、ソ連が東ドイツを建国したことで冷戦の象徴ともいえる国家となっていた。そして、ソビエト連邦領にBETAが侵攻したことでワルシャワ条約機構加盟国は強制的に派兵を余儀なくされた。そして、それは当然東ドイツも含まれるが東ドイツまでBETAが押し寄せてきた場合、BETAは西ドイツに攻め入る事はないのか？ そんな疑問が浮上したのだ。

BETAがどのようにして国境線を理解しているのかは不明だが東西に分断されたドイツをそれぞれ国家として認識できるのか？ もしかしたら民族というくくりで見ているのではないか？ そんな疑問が飛び出していた。更にはBETAが西に向けて進んでいることから欧州の国々はBETAがここまでくることに恐怖を感じたのだ。

結果、EU加盟国はソ連に協力する形で派兵を決定した。たとえ自

分たちの国土にBETAが押し寄せてこようとも。そして、そうならないようにするためにソ連に盾になつてもらうために。

「まあ、BETAからは遠いとはいえ気をつけろよ」

「もちろんさ。生き残るために中国から逃げてきたんだからね。うまく仕事を終えてすぐに帰ってくるさ」

杉原の激励を笑顔で受け取ったズーは一週間後に欧州へと向かった。そんな彼を見送ろうと杉原は直前まで見送り、彼にエールを送り続けた。

そんな日常の風景が起きている中で、世界は1978年を迎えた。年が明けるとともにBETAは満州と朝鮮半島に侵攻を開始。半島の制圧とソ連をシベリアから侵攻し始めた。第二次世界大戦で南北に分断された朝鮮半島にまともな国力があるわけもなく、国民はほぼ蹂躪されてBETAに食い殺されていった。

日本帝国は連合艦隊を派遣して朝鮮半島に進出したBETAの殲滅を行う光州作戦を実施。脱出を拒み、BETAに蹂躪される現地住民ごとBETAを吹き飛ばす非道な作戦となったがそのおかげでBETAの殲滅が出来、朝鮮半島の防衛には成功したことで抗議をする者はほとんど現れなかった。

しかし、1979年に再びBETAが朝鮮半島に進出。ほぼ無人の大地となったこの半島を制圧した。台風の影響で進出時に艦隊を出すことが出来ず、派遣したときには朝鮮半島から九州に向けてBETAが入水し始めた後だった。そして、1979年8月。本来より19年早くBETAは日本への上陸を果たした。

第十話 「絶望の始まり」

「くそー！ くそー！ くそおおおおおおおつ!!!」

1979年日本帝国北九州に上陸したBETAは突撃級のみだった。これらは避難が間に合っていない九州地方全土を蹂躪し、次いで中国四国地方を襲った。帝国軍はこれを頑強にはねのけようと奮戦したが圧倒的な正面装甲を持つ突撃級の前に踏みつぶされていった。幸いなのは第一波が到来した後にBETAが上陸してくるような事がなかった点だがそれでも上陸した突撃級だけで数万にも及んでいた。これらは沿岸部は連合艦隊が、内陸部は戦術機が攻撃することで確実に数を減らしていったが、突撃級は最後の一体になるまで攻撃をやめないといわんばかりに前進し続けた。

「だめです！ 突撃級の数速度変わらず！ このままでは一週間以内に西日本は蹂躪されます！」

「なんとしても食い止めるのだ！ 上陸したBETAにレーザー級は確認されていない！ 航空戦力を用いて撃破するのだ！」

中部地方までのすべての住民に対して避難命令が発令されているがそれも遅々として進んでいない。とはいえ避難に遅れが出ているわけではない。敵の動きが速すぎるのだ。

「敵の動きから京都が蹂躪されるのは時間の問題か……。これでは日本は壊滅してもおかしくはないぞ」

「あなた……」

篁祐唯は避難の準備を終えて京都から脱出するところだったが軍からもたらされた情報から日本の終わりを予期した。去年実戦配備された戦術機が防衛を行っているがはつきり言えば敵の数に対してあまりにも少なすぎた。突撃級という正面での相対はしてはいけない相手であるからこそここまでの被害と言えた。まだ要撃級であればここまで早期の侵攻を許しはしなかっただろう。

「幸いな事に戦術機の被害がそこまで出ていないことだな。こうしてみると戦術機はBETAとの戦闘において重要な兵器となりうる。やはり開発は継続していくべきだ」

「あなた。そろそろ……」

「あ、ああ。そうだな」

ついつい考えすぎてしまう祐唯に妻の梅納が声をかける。既に屋敷の荷物は避難先に運び終えている。二度と見る事が出来ないであろう京都の姿を目に焼き付けた彼らは車に乗り込むと生まれ育った帝都を後にした。

……そんな帝都は数日後に突撃級によって踏みつぶされた。数千にも及ぶ突撃級の侵攻で更地となっていく京都はまさに日本帝国の今後を教えているかのようであった。

そして、これら突撃級は日本アルプス最終防衛線と名付けられた日本帝国の防衛線によって殲滅され、辛うじて日本帝国の完全なる蹂躪を防ぐ事が出来たものの、この侵攻によって九州・四国・中国・関西・中部地方は壊滅。犠牲者は日本帝国の人口の50%に至っていた。

しかしそれでも突撃級以外でBETAが上陸していなかったことで日本帝国は国土を失わずに済んだ事は不幸中の幸いと言え、日本帝国は以後沿岸部の防衛線の構築を行いつつ中部地方から順に復興作業を行っていく事になる。

最近知ったが俺が手に入れたロボットは戦術機というらしい。ロボットのようだが名前を見る限りどでかいパワードスーツにも感じられる。

さて、俺はこの二年の間に侵攻を行いつつ戦術機の開発を行いつつ人間の生成とかなかなか脳を酷使していたが今のままでは効率が悪いと並列思考を可能とした。これでソ連に攻撃されたような一つに集中して他をおろそかにしてそこを突かれるという状況を防ぐ事に成功した。更には人間の生成や戦術機開発でも活かすことが出来るし、覚えて損はない能力だ。

それで順番に説明していけばまずは中国を陥落させた。戦術機の登場でうまく制圧が出来なくなっていたが戦術機がない箇所から

落としていき中国は台湾を除いてすべて落とし、そのまま朝鮮半島とソ連のシベリアに進出した。西部においてはモスクワを落として東西を分断することを主目標としつつ中央アジアで抵抗する軍勢を包囲するようにカスピ海以外の大地を封鎖した。見る限りそれなりの数があるしこれらを殲滅出来ればG元素をさらに回収できるだろう。

次に人間の生成だがこれはようやくうまくいくようになってきた。ついに脳と心臓の生成が出来たのだ。脳は俺が操作しなくても複雑な動きを可能とするくらいにはスペックが高く、人間として生活させる分には何も問題ないレベルに仕上がった。心臓も一定のリズムで血液を循環させることに成功している。これで強すぎて破裂したり、弱すぎて循環できなかつたりなどとはおさらばだな。あとはこれらを人間を模した人形に移植すれば稼働実験が行える。BETAをどう認識するのか？ 喋れるのか？ 欲望はどうなっているか？ 生理現象についてなど調べる事は多いがそれらをクリアできれば完全なる人間の生成は成功したと言える。そうなればBETAにひざまずき、忠誠を誓う新人類が誕生するだろう。

そして、戦術機に関しては上記二つよりも成果が出ている。何なら既に第一世代と言える試作品が2種類完成している。なぜ2種類なのかと問われればコンセプトが二つあったからだ。まず、一つ目の方は純粋な戦術機となっている。こちらはソ連の戦術機を基に自分なりの工夫を加えた作品となっている。

一部は次に紹介するタイプと同じようなものが使われているがBETAの肉体を一部戦術機に組み込んでいる。不可動部の装甲には突撃級の正面装甲や要撃級の鎌のような腕を流用することで防御力を高めている。この装甲はかなり強く、レーザー級の一撃を喰らっても貫通はしないと中々の性能を誇っている。更に電気信号にBETAの遺伝子を使うことでロボットののような機械的な動きではなく生物的な流れるような動きを可能としている。

武装としては銃火器を……と、思っていたが残念ながらハイヴには武器を作る工場は存在しない。そのためにBETAの力を武器として転用する事にした。頭部にはレーザー級の光線発射装置を、腕に

は收容できる3爪のかぎ爪を装着。10m程まで伸ばせる要塞級の触手を装備した。オリジナルよりだいぶ短いが戦術機に装着するとなるとこれが限界だった。

総評としては遠距離における継戦能力はダダ下がりしたものの中近距離における戦闘能力は他の戦術機を圧倒している。弱点としては上述の通り火力の低さがあるがそれは敵の武装を奪って攻撃してもいいし、それを補って余りある近接戦闘能力と一撃必殺のレーザー級の光線を持っている。あとはこれを扱うためには生身では不可能な点だな。BETAの力を用いているためにこれを扱うには手足のように感覚を共有する必要がある。分かりやすく言えばエヴァンゲリオンと同じようにシンクロする事だ。そのため最低でもパイロットはBETAである必要がある。つまり現状では俺しか満足に動かせない機体ということだ。いろいろと詰め込んだ結果乗る人を選ぶ必要があるのはよくある事ではあるけどな。

だが、そんな問題を解決するべく作ったのが次のやつだ。簡潔に言えば戦術機をBETAにした。戦術機級とでも言うべき機体だ。これの特徴はパイロットを必要とせずに他のBETAのように攻撃を行う事が出来る点だ。基本的な武装に違いはないが一番の利点は頭部につけた口にある。ここから人間などを食うことで体内に設置したG元素への変換装置を介してG元素を生成するというものだ。これは俺が作った戦術機の動力をG元素にした事が理由としてある。つまり、この戦術機級は敵を喰らい続ける限り永久に行動できるのだ。

そして、最大の利点だがコストや作成時間が大量に必要なはいえ量産できることにある。BETAとして以上生成は可能であり、BETAとして行動を委任することも出来る。動きが単調になりやすいというデメリットもあるがそれは数を用意すれば問題ないだろう。更には体内のG元素を使用することで負傷箇所の修復も可能としている。こちらはまだ試作段階で戦場での即時回復には至っていない。腕一本の修復が最大2時間かかっているからな。いずれは一秒以内に回復できるようにすればこいつらはゾンビのごとき存在として世

界中を絶望させることが出来るだろう。

こんな風に戦術機の開発は順調に進んだ。俺は最初に紹介した方をプロトタイプと仮称しているがそのうち名前を付けてみるか。今はこいつ一機だから問題はないがこれ以降も作っていくならば必ず必要になるからな。ああ、ちなみに戦術機級の方は戦術機種量産機 α 級と名前を付けている。新しいタイプの量産機を作っていくごとに β 、 γ と名前を付けていくつもりだ。いずれはBETAすべてがこいつらに更新されていくかもしれないな。こちらにはそれだけのポテンシャルがあるのだから。

第十一話 「予想外の拾い物」

「逃がすな！ 追え！」

「見つけ出して殺せ！」

「いや、いやあ……！」

走る。寒さで凍り付きそうになる体に鞭を打って、皮膚が切れて血がにじむ足を無理やり動かして、凍ってしまいそうな肺に無理やり空気を送り込んで走る。必死に、どこまでも！

「くそ……！ 一体どこに逃げたんだ！」

「絶対に許さねえ！ 殺す前にもう一度輪姦してやる！」

多分、いえ絶対にこんなチャンスは二度と訪れない。一瞬の間を歩いてここまで逃げてきたんだもの。絶対に逃げ切らないと……！

お兄ちゃん……。会いたい、会いたいよお。なんでこんな事になっちゃったの？ もう一回お兄ちゃんに会いたいよお……。

「っ！ いたぞ！ あそこだ！」

「足を狙え！ 動きを止めるんだ！」

「おい！ 一番手柄を上げたやつが最初だからな？」

「当然だろう！ さっさと捕まえて楽しむぞ！」

ああ……。みつかつちやった。後ろからいつぱいじゆうせいが聞こえてくる。足元にもいつぱい飛んでくる。逃げないと……。でもなんでかな。あしにちからが入らないや……。

……あ。

「よし！ 倒れたぞ！ 俺の撃った弾が当たったんだ！」

「まじかよ……！ くそ！ 次は俺だからな！」

「ああ!? ずるいぞ！ 次は俺だろうが！」

いたい。あしがいたい。だけどいたくない。いたみがおくにかんじる。ひとがくる。たくさんくる。でもとおくからきこえてくる。こんなにちかいののに。

「たく、手間取らせやがって。二度と逃げないようにその体に刻み込

「んでやるよ」

「おいおい、こんな寒い外でやんのか？ 近くに小屋があつたしそこでやろうぜ」

「おし、んじやいくか。おい！ 立てー！」

あたまがひつぱられる。いたみはかんじない。なにかんがえられない。なにかんがえたくない。

おにいちゃん。たすけて。もういやだよ。しにたいけどおにいちゃんにあいたい。でもこんなにくるしいのはいやだよ……。もう、だれでもいいからたすけてよ。

「ん？ なんだお前？ 俺たちは国家保安省だぞー！」

「俺たちは今任務中だ！ さっさとどこかにいけ！ お前も逮捕されたいのか！」

「なかなか末期だな。さすがは東ドイツといったところか？ おだれ？」

「助かりたいか？ こんな地獄から逃れたいか？」

「お、おい！ 何をして……！」

……ほんとうにたすけてくれるの？

「もちろんさ。ただし、その代償は大きく、二度と普通の幸せは手に入らない。それでもかまわないか？」

「ひ!? こ、こいつ一体……！」

「ば、化けm……！」

わたしは、いきたい。たとえわたしのすべてがだいしようでも、お兄ちゃんと生きていたい！

「……そうか。では君は運がいい。本来であれば助けるつもりはなかったが気が変わったからな。尤も、俺の手を取ったからと言ってそれが天国とは限らない。むしろ地獄と言えるだろう。そのことを、後悔するなよ？」

後悔なんてするわけがない。私は、生きてもう一度お兄ちゃんに会いたい！ また幸せな日々を送りたい！ そのためなら！ そのためなら！ どんな代償でも払う！ どんな相手にもすべてを差し出す！

私は伸ばされた手を取る。瞬間、私は、私は全てが変わった。二度と戻れない何かが変わったんだ。

1980年、人類の必死な抵抗によりBETAの侵攻を抑えつつあった。しかし、ソビエト連邦では中央アジアに残された兵たちが全滅し、シベリアでは沿海州が陥落した。更にはモスクワにBETA群が迫るなど終始劣勢であったがそんな彼らを絶望させる事件が起こる。

H:03ウラリスクハイヴとH:04エキバストウズハイヴが建設されたのである。結果、カシユガルハイヴから送られてきたBETAは距離が長くなり前線に来るまでにそれなりの時間を必要としたのに比較的近い場所にハイヴが出来たことで今までよりも素早くBETAが送られてくる事になった。

これを契機にソ連は瓦解を始めた。カスピ海を超えてカフカス地方が陥落、ウラル山脈に沿うように北上する等BETAは動きを活発にした。そして二つのハイヴ建設から一月後、ソ連の首都モスクワは陥落した。その一月後にはモスクワは人類が足を踏み入れる事が出来ない前線から遠く離れたBETAの勢力圏内に収まってしまった。1982年になればソ連の瓦解は顕著となったが共産党はアメリカとの交渉を経てアラスカ北西部を租借するとそこに拠点を移して徹底抗戦を続ける姿勢を見せた。

さらに、東ドイツでは国家保安省による監視国家体制を築き上げて来るBETAからの国土防衛のための戦力強化を図った。西側諸国に位置する欧州諸国も軍の派遣を行いソ連領内でBETAを食い止めるべく攻撃を行っているがBETAの数は増すばかりであった。そして、1982年3月にH:05モスクワハイヴ、H:06ブラゴエスチエンスクハイヴが建設されたことで、更なるBETAの増加が起きた。ウラリスクハイヴ建設前までは1万ほどのBETAしかいなかったが今では10万を超えるBETAが押し寄せてきている。

これにあらがうためには人類は力不足であった。結果、たった一年でソ連は西部領土をほぼ喪失し、ワルシャワ条約機構加盟国はBETAの侵攻を直接受ける事態となり、欧州陥落が進んでいく事になる。

いい拾い物をした。本当は今の人類を生き残らせる気はなかったがあれはあれで違うアプローチの実験と考えれば惜しくはない。いざとなれば処分すればいいだけの話だが今のところは順調だ。

「リーズ・ホーエンシユタイン」

「……、……、……はい」

「ん？ 任務中だったか？ なら後にするが」

「……問題ありません。何か御用でしょうか？」

「いや別に？ 今の任務が嫌になっっていないかなと思ってな」

「……きちんと約束を果たしてくれるのなら私は相応の成果を出すまでです」

「それはよかった。君の頑張りを期待しているよ」

今のところは順調みたいだしこっちはしばらく様子見だけでいいだろう。やるべきことは多くあるからな。

まず、たった二年でハイヴを4つも建てたがこれらを俺は地下通路で結ぼうと考えている。地中を通れば人類もこちらの動きを察知しづらくなり奇襲が行いやすくなるからな。ついでに鉄道も通せれば完璧だな。鉄道はロマンの塊だもんな。それに地下鉄の利点は一定の勾配ゆえに地形に影響されずに進める点だ。場所と鉄道の出力次第ではただの移動よりも素早く動けるからな。いや、いつそのこと戦車級や突撃級に荷台を引かせるのもありか。要撃級の鎌を使用して形をレール状に整えてその上を走らせる。ありかもしれない。列車を作るよりもそちらの方がコストが安いし確かな能力を期待できる。そうと決まれば穴掘りだな。いつものように突撃級が穴を掘り、戦車級が穴を整えて崩落しないように補強する。戦車級がペタペタと土を整えていく光景は何度見てもシユールだがこうしてみると愛着がわいてくる。そしてそんな戦車級を屠る人類が憎たらしく感じ

てくる。どちらにしろ人類は滅ぼすが絶望を与えてなぶり殺しにしてもいいかもしれないな。

あ、それとカシユガルハイヴと呼ばれている俺の本体も気づけばフェイズ5にまで成長したしトウランもフェイズ4だし順調に拡張が進んでいる。既にカシユガル周辺は更地となっているがその地下には広大な迷宮のごときドリフトとホールが形成されている。上階は草木などの植物の保護区画が存在しており下に行けば行くほど機密の塊のような場所になっている。いずれは一部のホールを拡張して俺が作った人間たちの町を作りたいたいものだ。そのためにも食料などの開発も進めていくべきだな。

……待てよ？ これらを使えば人類を引つ掻き回せるんじゃないか？ それに薬物なんかも……。これはいろいろと実験したくなってくるな。早速試してみるか。

第十二話 「騎馬民族の最後」

モンゴルという国がある。歴史上ではユーラシア大陸の半分を支配する大帝國を築いたり、最強の騎馬部隊を率いた彼らだが清の支配を経て独立したときにはすでに騎馬部隊の活躍する場所は残されていなかった。地上は鋼鉄の馬が疾走し、空では何倍もでかい航空機が爆弾を落とし、弓など比べ物にならないほどはるか遠くから攻撃できる銃を用いた遠距離戦が主流となっていた。

とはいえモンゴルという国だけで見れば別にそこまで不幸とはいづらい。モンゴルはソ連と中華人民共和国の間に位置しているが両国ともに社会主義国家でありソ連と中華人民共和国が対立した際にはその戦略的要地として莫大な経済支援を受けて裕福な暮らしが出来ていた。

しかし、それはBETAが地球に降り立つまでの話であった。モンゴルは中国が侵攻を受けた際に歴史的対立や中ソの対立などを理由に最初から参戦を拒否していた。とはいえいつ攻め込まれてもいように軍の動員を行い国境部に展開していたが一切の侵攻を受ける事はなかった。それゆえに、モンゴルは中国を見捨てるように対岸の火事として動向を見守ってたがソ連がハイヴ攻略に失敗するとそれもいつていられなくなった。

ソ連はワルシャワ条約機構加盟国に対して参戦するように言ったがモンゴルの参戦はさせなかった。ただでさえ劣勢な状況でモンゴルまで戦闘に参加することで戦線が延びる事を恐れたのだ。結果、モンゴルはソ連ら社会主義国が戦っている中で指をくわえてみている事しかできなかった。しかし、そんな彼らを社会主義の同志たちが快く思うはずがない。たとえソ連の命令だったとしてもだ。

気づけばモンゴルは社会主義の国から孤立していた。シベリアまでBETAが侵攻した際に国民の国外脱出をする際にはソ連は国内の通行許可を出さなかった。ソ連内部においても彼らに眉をひそめる者が一定数存在したという事であった。結果、モンゴルは物理的にも孤立した。四方八方がBETAの制圧下となり、どこにも逃げる事

が出来なくなってしまったのだ。

ならば一点突破を図って逃げれば良いと考えるかもしれないがモンゴルは戦術機を持っていない。そんな状態でBETA相手に突破して逃げる事が出来るとは思えなかった。国連としても孤立する彼らを支援しようにも難しい状況であり、結局見放す形となってしまうた。

「我々は、どうすればいいのだ……」

モンゴル人民共和国^{大フッラル}人民大会議幹部会議長ユムジャーギイン・ツエデンバルは現状のまずさに頭を抱える。今、彼の方にはモンゴル人300万の命がのっている。彼の行動一つで絶望も希望も迎える事が出来るだろう。しかし、希望を迎えられる可能性が限りなく0に近いと言わざるを得ないが。

「武器弾薬ともに問題はない。食料も人口の少なさが幸いしてすぐに飢え死にする事はない。……だが、それも長くは続かない」

今、モンゴルに出来るのは2つだ。

1つは救援や事態の好転があると信じて耐え忍ぶ道。人口300万人を永遠に食べさせる余裕はないが開墾は既に始めており、最悪の場合、BETAに食わせる事で口減らしをすることも視野に入ればこの状態を維持していく事が出来るが、来るかもわからない希望を信じて耐え続けるのはとてもつらい決断となるだろう。

2つ目は全ての国民を連れてこの地から脱出する方法だ。モンゴルから攻撃を仕掛ける以上BETAが押し寄せてくるが比較的人類の生存圏まで近い北部に国民を集めて軍を先頭に逃げるという方法だがこの場合、確実に無傷では済まない。最悪の場合はたどり着けずに全滅という可能性すらあった。というよりもそれが高かった。去年の時の方がまだ到達の可能性が高かった今では無理であった。

つまり、今のモンゴルに出来る事はない。人類が死に行く様を眺めていずれ来る破滅を受け入れる事しかできないのだ。ツエデンバルとしてはこの状況を何とかしたいのだが既に何をすることも手遅れ。出来る事は何も残されていなかった。

「最近では国民の不満や不安が高まってきている。このままでは遠か

らぬうちにつぶれてしまう……」

四方八方をBETAに囲まれた状態で「手出ししなければ安全ですので安心してください」と言われてはいそうですか、と納得できる者など多くはない。こんな状況となってしまった事に不安を持ち、政府を批判する流れになるのに時間はかからなかった。首都のウランバートルでは市民と警察との間でちょっとした衝突が発生するなど日に日に過激さを増している。近いうちに反乱が発生するのではないか？ と予測できてしまう程治安が悪化していた。

「何とかしてこの袋小路を抜け出す手を考えないと……」

ツエデンバルは閣僚を集めて対策を講じるが実現可能な物は何一つ出てこなかった。

そして、ツエデンバルの予想は最悪の形で実現する事となる。

きつかけは些細な事だった。最近では頻繁に衝突が起こるようになった警察と市民。しかし、何度も起こる衝突にいら立ちを覚えていたとある警官がいに我慢の限界を向けて市民に発砲。射殺してしまったのだ。それに怒り狂った市民がその警察官をなぶり殺すとその者たちを逮捕しようと警察が動くが理不尽だと抵抗する市民。お互いの数は増していきついに市民の武装蜂起という形となった。BETAへの不満から市民はウランバートルの人民会議場に乗り込むとツエデンバル以下全閣僚を皆殺しにしまったのである。

結果、モンゴルという国は統制を失い、いくつもの指導者が乱立する戦国時代の様相を見せた。軍でも次のモンゴルの指導者を目指す者が複数現れ血で血を洗う内戦へと突入していったのだが、更なる不運が彼らを襲った。国境部で対立する者同士が銃撃戦を行っていたのだが、運悪く国境を越えた先で移動中だった戦車級に被弾してしまったのだ。気づいた時にはすでに手遅れでBETAは四方八方からモンゴル領内になだれ込んだ。統制を失っていた彼らはBETAに成すすべなく蹂躪され、包囲殲滅のごとく300万のモンゴル人は

皆殺しにされ、また一つ、大陸の国家が滅んだ瞬間だった。

こうして大国の思惑で成長し、大国の思惑で孤立化したモンゴルはあっけなくその半世紀ほどの歴史に終止符を打つこととなった。そして、モンゴルという国家の滅亡を世界の人々が知るのはまだまだ先の事となる。

第2章「欧州戦線」黒の宣告（シユヴァルツエスマーケン）

第十三話「黒の宣告（シユヴァルツエスマーケン）」

『見つけた……！』

東ドイツ国家人民軍第666戦術機中隊を率いるアイリスディナ・ベルンハルト大尉は目当ての存在を確認し、そうつぶやいた。彼女の視線のはるか先では天空に向けて伸びるいくつもの光の線が見える。人類の航空戦力を無力化してしまった光線級が放ったレーザー攻撃の光だ。

『総員傾注！ お待ちかねの狩りの時間だ。これより国家人民軍第666戦術機中隊は光線級呐喊を開始する。前衛は突撃路を開く。後衛は背後を守りつつ支援攻撃。BETAの屑どもに容赦なくシユヴァルツエスマーケンの宣告を喰らわしてやれ！』

『「」了解！「」』

東ドイツが誇る最強の戦術機中隊と言われる第666戦術機中隊シユヴァルツエスマーケン“黒の宣告”。彼らの任務は航空戦力を無力化される原因となっているレーザー級の排除であり、そのために大きな戦果とそれと同じくらいに損耗を受ける部隊であった。それゆえに中隊を名乗っているが所属するのは12機のうち8機しか存在していない。それでも隊長のアイリスディナをはじめとして所属する全員がエリート級の実力者ばかりだ。

BETAの大群の上を飛んでいき、レーザー級がいる群れに接近していく。レーザー級は前面を突撃級に、左右を要撃級が、後方に要塞級が陣取り、それぞれの間を無数の戦車級が埋め尽くしている。最近よくみられるようになったBETAのレーザー陣形だ。欧州、というよりもどこでもそうではあるがレーザー級の撃破を主目標としている。彼らさえいなければ航空戦力を投入する事が出来るからだ。更には砲弾すら空中で迎撃するためにレーザー級がいる限り航空戦力どころか砲撃すら無力化してくるのだ。なんとしても破壊したいと

思い、行動するのは当然だった。

そして、その結果が陣形という形でBETAは対応してきた。レーザー級がいる場合はこの陣形を作るために特定は容易になったが代わりに撃破は極めて困難になったといわざるを得ない。盾のごとく正面からの攻撃を防ぎ、左右の奇襲すら難しく、それらを後方から支援できる要塞級。更には無数の戦車級が近づいた戦術機を返り討ちにしていた。

「射撃、開始！」

しかしそんなことは彼女たちには百も承知だ。彼女たちはあえて正面からの呐喊を行う。理由は単純だ。近づくギリギリまでレーザー級は正面の突撃級のせいでレーザーを撃てない。射線が通らない以上撃ちようがないのだ。そして突撃級の前には進めても横には移動できない。盾の役割を施した結果近づかれるまで対応できない陣形となってしまうのだ。

それを補おうと要塞級と戦車級が突撃級の前に出てくるがそれらをシユヴァルツエスマーケンは銃火器で掃討していく。突撃級ほどの装甲を持たない彼らは銃弾一発でも大ダメージは必須であり、少しずつ削られていく。

そして、突撃級の前までくると跳躍ユニットを吹かして飛び越える。しかし、その先では待つていたといわんばかりにレーザー級が発射準備を終えており、一斉に放つ。一撃一撃が戦術機を一撃で葬る必殺の一撃が盾に阻まれる。数秒間耐え忍んだ盾を放棄して一斉に射撃を開始する。

レーザー級という凶悪な敵を前に人類とて何も手を講じていなかったわけではない。人類は重金属雲というものを展開する事でレーザー級の攻撃を弱らせることを可能とした。通信障害にジャミングのような効果を伴う為に連携が取れなくなるがそれを補って余りある効果を持っていた。

ゆえに、自慢のレーザーですら撃墜に至れない彼らはあっけなく銃撃で無力化されていった。そして、そのタイミングで重金属雲の濃度は低下。なくなるころにはレーザー級が死骸以外に残されていな

かった。

「ベルンハルト大尉に告げる。レーザー級の殲滅を確認した。180秒後に砲撃が開始される。さっさと戦線を離脱せよ」

『……了解。総員傾注！ 味方の砲撃が来る！ ただちに離脱を図るぞ！』

『同志大尉！ 新手です！ 突撃級を先頭に要撃級と戦車級多数！』
『戦う必要はない。連中は砲撃に任せて離脱するぞ！』

レーザー級の殲滅を終えればここにいる理由はない。アイリス・デイナーはすぐさま撤退を決め、離脱を図り隊員たちもそれに続いた。……2機を除いて。

『死ね！ 死ね！ BETAの屑が！』

『アネット！ 落ち着いて！』

隊員の一人、アネット・ホーゼンフェルト少尉は度重なる戦闘で戦争神経症に掛かってしまっており、理性のタガが外れ暴走する事が多々あり、今回もそれが発症したのだ。弾薬の切れた銃を放り投げ、隊員の中で唯一装備した長刀を取り出す。そんな彼女に待ったをかけるのは友人であり、何かとストッパーの役割をこなす事が多いイングリルト・ブロンニコフスキー少尉だ。

『もう時間切れです！ もう離脱しましょう！』

『でも！ あたしは！』

『何をしている。さっさと離脱しろ』

『っ！』

アイリス・デイナーに指示を出していた者が離脱しようとしないうアネットに通信を入れる。冷徹とも言える寒気すら感じる男の声にアネットは冷や水をかけられたように冷静さをと戻した。

『あ、あたしは……』

「死にたいのなら一人で死ね、と言いたいところだが今の我々にそんな無駄なことをする余裕はない。速やかに離脱せよ。これは命令である」

『シュヴァルツ06、了解……』

『ッ！ アネット！』

アネットが渋々離脱しようとした時だった。雪の中を潜っていた突撃級が姿を現してアネットに襲い掛かった。とつさにイングヒルトがアネットが乗る戦術機を押して身代わりとなるが、彼女の機体に突撃級が攻撃するまえに上空から放たれた銃弾によって突撃級は活動を停止した。

「アネット・ホーゼンフェルト少尉。今貴様は戦友を失うところであつたぞ。自ら身を挺して守ろうとしてくれたブロニコフスキー少尉と「監査官」の私に感謝する事だ」

そう言つて上空から降り立つたのは黒い戦術機。シュヴァルツエスマーケンが乗るMIG-21バラライカとは違う東ドイツが作り上げた最新鋭機であつた。アネットは悔しそうにしつつ、呟くような声で「感謝します。……同志少佐、イングヒルト」といった。イングヒルトは悲し気な表情をしつつもそれを受け入れ離脱の準備に入つた。

そして、僅か数十秒後には砲撃が開始され迫りくるBETA群を吹き飛ばしていく。そんな砲弾の下をシュヴァルツエスマーケンは無傷で帰還するのだった。

日々戦況が悪化する欧州戦線において東ドイツ軍は社会主義国の中で最大の兵数を誇つていた。理由としては本来最大数となるソ連がシベリア方面に兵を割いている為という事と前々から国家保安省^{シュタージュ}によって戦力増強が行われていた結果であつた。

しかし、いくら数をそろえようとも質の方面ではカバ―は難しかった。それゆえに、劣勢であることに変わりはなく、毎日のように後退が続いていた。

そんな中にあつてシュヴァルツエスマーケンは目覚ましい戦果を挙げ続けていたがそれを快く思わない者たちも一定数存在する。特にシュタージュでは隊長であるアイリスデイーナの経歴から常に不信感を持つていた。そして、それを対処するためにシュタージュは「監査官」という事実上の見張りを付ける事にした。その結果が第666

戦術機中隊監査官アルフレート・ヴァルデの派遣であった。20代後半と思われる彼は一切自分の事に関して喋らずに無表情でいるために不気味さを持っていたが監査官という立場をわきまえているようでコミュニケーション以外においては非の打ち所がない男であり、アイリスデイナーをはじめとしたシユヴァルツエスマーケンの隊員から彼の経歴と第一印象の悪さ以外ではある程度の信頼を得る事に成功していた。

「……………救難信号？ ……了解した。ベルンハルト大尉、国連軍の戦術機の救難信号が近くで発見された。二人程救援に向かわせてやれ。国連に貸しを作る」

『了解した。救援には私とエーベルバツハ少尉が良く。部隊はイエツケルン中尉が臨時に指揮を執り帰還せよ』

『了解した』

『つち。了解』

そして、この救援に向かったことで、東ドイツを巻き込んだ革命の幕開けとなっていくのだった。

第十四話 「カティア・ヴァルトハイム」

「西からの亡命者か……。中々面白い人材を拾ってきたようだな」

基地へと帰還した第666戦術機中隊だが自ら救難信号の発信源に向かったアイリスディーナが連れてきたのは西ドイツからの亡命を希望するカティア・ヴァルトハイム少尉だった。

「それでいてこの中隊に編入させると？ ベルンハルト大尉。君は誰にこの話をしているのか理解しているのか？」

「もちろんです同志少佐。少佐ほどの方であればお認めになると考えています」

「……確かに、シュヴァルツェスマーケンを補充すると考えれば利点はある。報告書を読ませてもらったが部隊が壊滅する中で最後まで生き残っていた実力。確かにこの部隊の欠員を埋める穴にはなる。私が認可すれば誰も反対できないのも事実だ」

「……」

まるで詰問するときアルフレートの言葉にアイリスディーナは内心で感じる緊張感を一切出さずに必ず認可するという姿勢を崩さない。ふと、両者の視線がまじりあう。数秒か数分か。それが続き、先に目を離れたのはアルフレートであった。

「……国家保安省には私から説明しておこう。党や人民軍は君たちで何とかしたまえ」

「はっ！ 認可していただき感謝します！」

「構わんさ。今は戦力が少しでもほしい。ヴァルトハイム少尉が東ドイツに仇名すのであれば我らで対処すればいい」

「……了解しました」

「話は以上か？ ならば退室したまえ」

「はっ！ 失礼します！」

アイリスディーナを退出させたアルフレートは改めて報告書を見る。そこにはカティア・ヴァルトハイムの詳細なプロフィールと顔写真が記載されており、アルフレートはカティアの顔を見ながら目を細めて呟いた。

「……似ているな」

BETAの数は日を追うごとに増えている。昨日、最大侵攻数を更新したと思えば今日、それが更新され、明日にはさらに更新される。そんな形で減らすより増えているのが欧州戦線の現状だった。欧州戦線は3つの戦線に区切られており、ポーランド領に侵攻する軍勢を中央戦線、フィンランドを北部戦線、ルーマニアを南部戦線としているが中でも苛烈なのが中央戦線だった。ここには数万単位のBETAが常に侵攻を行っており、一番圧力をかけていた。

そのためにそこを準備する東ドイツの損耗率はかなり高い。それでも第666戦術機中隊という切り札とも言える戦術機部隊を運用して何とか防衛線を維持していた。それでも戦線は日々西に向かっており、数日前にはポーランド人民共和国の首都ワルシャワが陥落したばかりであった。

「このような状態だ。貴殿のように戦闘経験がある衛士の亡命は歓迎するところだ。たとえ、その者がどんな思想をしようともな」
「あ、ありがとうございます……」

カティア・ヴァルトハイムは目の前に座るアルフレート・ヴァルデの言葉に緊張気味にお礼を言う。第666戦術機中隊「監査官」を名乗る人物に呼び出された彼女は押しつぶされそうな威圧感でもって歓迎を受けた。話が進んだ今でこそ威圧感は消えたが鋭い視線は変わっておらず、カティアを信用していない・疑っているという事は明白であった。

「イエツケルン中尉が既に確認済みのようだが本当に我らが祖国に忠誠を誓うつもりでいるのだな？」

「は、はい！ 私は亡命をしてきた以上そのつもりです！」

「……なるほどな」

アルフレートはカティアの言葉を聞いて息を吐くと手元に置かれた書類、亡命に関する手続きの書類にサインを書いていく。

「聞いているかもしれないが一応伝えておこう。第666戦術機中隊

はレーザーヤークトを基本任務としている。つまりレーザー級の殲滅を主要目標としているわけだ。その際にどのような事態、味方からの救援要請等があったとしてもこれを無視する事がある」

「……」

「さらにはレーザー級のいる敵の後方まで呐喊するわけだ。部隊の損耗率は高い。その証拠として中隊と言っておきながら4機足りていない。これらを聞いたうえで通達しよう。貴様の亡命が認証されればこの隊に配属する事となる。亡命を希望したことを後悔するほどの過酷な任務が待っているがその覚悟はできているのか？」

「もちろんです！」

怯えこそあれど説明を聞いても尚カティアの目は決意で溢れていた。これ以上の説明は必要ないなど、アルフレートはサインを書き終えると認可の判を押した。

「ではただ今の時刻を以てカティア・ヴァルトハイム少尉は東ドイツ国家人民軍第666戦術機中隊配属となった。貴官の活躍を期待する」

「はい！ よろしく願います！」

「うむ。下がっていい。詳細は隊の者に聞くように。それと明日にでも貴官を含めた状態での実機訓練を行う」

「はっ！ 了解しました！」

カティアを下がらせるとアルフレートはシュタージと党に提出する報告書の作成を行う。シュタージから派遣された彼だがその立場上党への報告も義務付けられている。そのために重要な報告をするときには両組織を行き来する必要がある、それは両方の組織から不信感を得る最悪の結果となっていた。彼を送り込んだはずのシュタージでさえ今では彼を心から信頼していない。

それでも、彼は自分の役職を恥じた事はない。監査官という場合によつては督戦のごとき行動をしないとイケないこともあるが第666戦術機中隊では一切その事態に陥ったことがない。加えて、彼が言ったことはないが中隊の面々を信頼しているために本来すべき監視も必要な時を除いてほとんど行われていない。

「今、欧州戦線は劣勢だというのにこの国は派閥争いか。全く、人類と
いうのは何故一致団結できないのか……」

東ドイツを事実上支配しているシュタージだがその内部においても派閥争いが起こっている。それはソ連の影響下にあることを良しとする、つまり現状維持を望む「モスクワ派」と、東欧諸国との連携を強めるべきとする「ベルリン派」に分かれている。アルフレートはモスクワ派の者によって派遣されているとはいえ彼自身がその思想に傾倒しているわけではない。むしろそういった派閥争いを嫌っている彼は非常事態にもかかわらずまとまる事が出来ない事に呆れや不満を感じていた。

「最近ではベルリン派が新たな戦術機中隊を結成。モスクワ派もシュタージ最強のヴェアヴォルフ大隊の大幅な強化を行っている。そして党や軍部もシュタージに対抗して水面下で争いを続けている。こんなくならないことをしているのなら第666戦術機中隊の戦術機を更新すればいいものを……」

前線に出てくる事がほとんどない後方の治安維持部隊の増強を行うならレーザーヤークトを主任務とする第666戦術機中隊を強化するべきだとアルフレートは毒づく。いまだソ連が最初に作成した第一世代機を改造して使っているのだ。もつといい機体を渡して戦果を挙げられる環境を作ればと常々考え、それを提案してもいるが彼の言葉に耳を傾ける者はいなかった。

「カティア・ヴァルトハイムについてもいろいろと言われるだろうが仕方ない。監査官という者の宿命として受け入れるしかないな」

アルフレートは報告書を手早く作り上げるとそれをシュタージと党に提出するために部屋を出ていった。

そしてその数日後、シュタージの戦術機中隊が彼らのいる基地に姿を現した。

第十五話 「国家保安省（シュタージ）」

めんどくさい事この上ない。

それが国家保安省^{シュタージ}武装警察軍を前にしてアルフレートが考えていた事だった。

事の始まりは数日前。アルフレートが党とシュタージにカティア・ヴァルトハイムの亡命に関する報告書を提出したことがきっかけであった。党や軍部は初の亡命者ということで不信心はあれど優秀な衛士が手に入り、戦力が増える事でカティアの亡命を受け入れたがシュタージは別だった。国内の治安維持を担っている彼らからすれば亡命者である彼女を信用するなどできないという事は当然ではあったがシュタージの動きはあまりにも早すぎた。アルフレートが帰還した当日、シュタージは戦術機中隊を率いて乗り込んできたのだ。しかも戦術機は東ドイツが開発した最新鋭機だ。

B T - 0 1 シュトゥルムヴィントと名付けられたこの機体はシュタージが独自に開発した戦術機であるためにくわしい詳細は公表されていない。ただし、跳躍ユニットが小型化されて数を4つに増やしている、全体的にスマートとなっている等の外観的特徴から速度を重視した機体であるというのが見て取れた。

「これはこれは。お出迎えご苦労ベルンハルト大尉、そしてヴァルデ少佐」

「わざわざ最前線の基地までいらっしやるとはそちらは大分暇のようですね、アクスマン中佐」

戦術機に守られるように飛んでいたヘリより出てきた人物を第666戦術機中隊全員で出迎える。出てきたのはシュタージ武装警察軍作戦参謀を務めるハインツ・アクスマン中佐だった。武装警察軍編入前には亡命者狩りで悪名を轟かせていた人物であり、アルフレートがシュタージ内で最も嫌っている人物だった。

「なに、我が国に亡命したというカティア・ヴァルトハイム少尉に任意同行を願うためさ」

「……同志中佐？ 彼女は既に亡命が認められ、第666戦術機中隊

の所属となっています。これは党とシユタージ両方が認可したことであり、それをいきなり任意同行とは穏やかではありませんよ」「ふむ、私としてはこれほど早く亡命が受け入れられたことがとても気がかりだね。それに、英雄的活躍をしつつも信用ならない面々で構成された君たちだ。疑うにあまりあるとおもふのだがね?」「確かにシユタージから見ればそうでしょう。それは認めます」
「そもそも、この第666戦術機中隊には異色の経歴を持つ者が多い。」

まず、隊長であるアイリスディーナはかつて反乱を企てたとする実の兄をシユタージに密告。その功績で今の地位を得たと噂が出ている。グレーテルはシユタージと対立する政治将校であり、テオドル・エーベルバツハはかつて一家そろって西側への亡命を企ててシユタージに捕縛されたことがある。

そして、監査官という立場であり、シユタージではあるものアクスマンが属する「ベルリン派」とは対立する「モスクワ派」が派遣した人物でありそもそも信頼などしていない。

「何、何も企てがないというのであれば数日で開放するさ。それで開放されない場合は何かやましいことがあると態度に示したという事であり……」

「ハインツ・アクスマン中佐。あんたが尋問すれば無実の者さえ死刑囚となる。本音で言えよ。西からの亡命者は信用できないので肅清したいですと」

「……ふ。ヴァルデ少佐。ここにきてからというものの随分と態度がでかくなつたな」

階級において立場が上のアクスマンに無礼ともとれる挑発を行うが当の本人は気にしていないようで失笑すると踵を返した。

「そこまで言うのだ。カティア・ヴァルトハイムが何か祖国に仇名す行為をした時には君たち全員が処罰の対象となる。精々その小娘を監視する事だな」

それだけ言うとアクスマンは連れてきた戦術機中隊の護衛の下べルリンへと帰還していった。その様子を見送るアルフレートは唾を

吐くと基地に戻っていく。

「あ、あの……」

「ヴァルトハイム少尉。見ての通りわが国にはBETAという敵のほかに気を付けるべき化け物がある。そいつらはどこに潜んでいるのか分からないのだ。精々喰われないように気を付ける事だ」

「……」

何か言いたげな様子のカティアの言葉を遮り、忠告したアルフレートはこれ以上は話すことはないと言わんばかりに背を向ける。その背には明確な怒気ともとれる感情があふれ出ており、カティアは声をかける事が出来ずにアルフレートを見送るのだった。

中央戦線は当初ヴィスワの西岸に要塞を築き、防衛ラインを形成していた。しかし、その西岸に位置していたワルシャワの陥落によりこの防衛線は崩壊したといつてよかつた。

とはいえワルシャワが陥落したからと言って欧州が終わるわけではない。東ドイツではオーデル川とナイセ川を絶対防衛線とする強固な要塞を築いているし南北のヴィスワ川防衛線はいまだに健在であつた。

「4万のBETAだど!?!」

それゆえに、この日行われた対策会議において報告が上がったBETAの動きに誰もが驚愕した。日々数を増しているBETAだがこれほどの数が一斉に襲い掛かってくるのは初めてであり、損耗した今のドイツ軍が抑えられる数ではなかつた。

「これらBETAは現在もモスクワハイヴから西進しています。4万というのはすぐにも襲来する最低数であり、最悪の場合その倍のBETAが押し寄せる可能性があります」

「なんと……」

「()にきてこの数とは……」

中央戦線に展開する将校たちはあまりにも絶望的な戦力差に何を

言えればいいのか分からずに戸惑っているが考えている事はみな同じであった。

—このままでは守り切れない

「ですが確認されるレーザー級は少ないです。これらを殲滅出来れば砲撃でたたくことが出来ます。ですがそのためには光線級レーザーヤークト呐喊を實行する部隊と敵の攻撃を防ぎきる部隊が必要不可欠です」

「無理だ」

兵の作戦に対して異議を唱えたのは第666戦術機中隊も所属する戦術機大隊を率いるホルツァー・ハンニバル少佐だった。

「先の戦闘までに稼働できる戦術機は定数の3割にも満たない。それだけの数で足止めどころかレーザーヤークトなど……」

「それについては私の方から提案が」

ハンニバルの言葉にアクスマン中佐が意見を始める。

「我ら武装警察軍より1個戦術機中隊と1個戦術機大隊を増援として送る用意がある。君たち国家人民軍はなんも心配せずに存分に戦ってもらいたい」

「……その増援とはヴェアヴォルフとBT-01で構成された戦術機中隊と断定してよいのかね？」

「もちろんだともハンニバル少佐。わが武装警察軍が誇る最強の部隊と最新鋭機の部隊だ。増援としては心強いだろう？」

「……確かな。アクスマン中佐の好意に感謝しよう」

アクスマンがなぜこれほどの精鋭を送り出すと決めたのか。その真意が読み取れないハンニバルだが今の状況において増援が来るのは純粹に安心する事であり、無難に礼を言った。

それに対してアクスマン中佐はにこにここと笑みを浮かべて返答する。

「何、我らが同志たるポーランドの危機だ。東ドイツを守るという意味合いでもこれ以上のBETAの侵攻を阻止するために行動するのは当然のことだよ」

他の者が言えば、純粹に受け取る事が出来るがシュタージ、それもアクスマンが言ったことでどうしても胡散臭さが感じられ、ハンニバ

ル以下会議に参加した面々はアクスマンに対して懐疑の視線を向けるのだった。

第十六話「黒の剣（シュヴァルツェ・シュヴェールト）」

数日後。4万以上のBETAが防衛線に迫った。一部BETAはヴィスワ川を渡河し、ワルシャワを通っており、予断を許さない状況となっていた。

しかし、これは既にワルシャワ条約機構は察知しており、少ない時間の中で対応の準備を行っていた。

『レーザーヤークトは別の部隊が既に実行中だ。我々はヴィスワ川を渡河したBETAを駆除するぞ！』

『了解！』

大雪が降る中で真っ赤な大群として押し寄せる戦車級。そんな奴らに対して一番槍を付けたのはアネット・ホーゼンフェルトだった。長刀を振り回して付近の戦車級をなぎ倒していくが一機だけ降り立った彼女に戦車級が四方八方から群がってくる。しかし、アネットの死角を守るように上空からイングヒルト・ブロニコフスキーの援護射撃が行われる。上空を飛び回るイングヒルトに手を伸ばすも届くはずがなく、その隙をつくようにアネットによって切り倒されていく。

また、別の場所においてはバディを組んだカティアとテオドルが背中合わせに射撃を行い死角をなくして敵の殲滅を行っていた。アリスディーナたちは機動戦を展開して一か所に留まらないことでBETAに攻撃されないように動いている。

「ふむ、やはり第666戦術機中隊は防衛のかなめだな」

その様子を同じく前線で戦いながら観察するアルフレート。漆黒の機体を用いて敵を切り殺していくその姿は死神とさえ形容できた。

「大尉。うれしい知らせだ。敵の増援がさらに来るぞ。要撃級だ」

『ちょうどいいところです。敵が小さすぎて飽き飽きしていたところだ。シュヴァルツ02と03は私についてこい！ 要撃級を狩るぞ！』

『了解！』

「私も前に出よう」

『っ！ よろしいので？』

「私の戦術機は短期決戦型だ。要撃級相手ならともかく戦車級ではもったいないからな」

『それは頼もしい。ではお力をお借りしましょう！』

「大船に乗ったつもりでいるといい」

アイリス・ディーナとアルフレートを先頭にヴァルター・クリューガーとファム・ティ・ランが続く。しばらく飛んでいくと要撃級の群れが確認できた。数はおおよそ100。本来であればたった4機では厳しい相手だがアルフレート達に焦りはない。

「大尉。君たちに半分をプレゼントしよう。残りは私の獲物だ」

『少佐、無理はしない方が……と言いたいところですが杞憂ですね』

「その通りだ。さっさと蹴散らすぞ！」

そういうが早い。アルフレートは機体を加速させると一気に要撃級の群れへと突っ込んでいく。

「っ！」

そして地面に落下する直前にブースターを切ると自由落下に切り替え、武装を展開する。腕や足から刃が出現し、全身を覆うように展開されると同時に要撃級の上へ乗り、押しつぶす。上空からの侵入者に要撃級が一斉にアルフレートの方を見ると一気に群がってくる。

四方八方からやってくる彼らに対してアルフレートは焦りなく対処する。一番接近してきた前方の要撃級の大ぶりの一撃を躲すと要撃級の上をすべるように回転して回避する。が、今のアルフレートの戦術機は全身が刃でおおわれている。機体に触れた要撃級は上半分を切り裂かれて動きを停止した。次にその回転の勢いを殺すことなくすぐ後ろに控えていた要撃級に回し蹴りを放ち一撃で沈めると両腕に装備した双剣を左右に投擲する。それらを迫ってきていた要撃級を切り裂き動きを止めさせると肘につけられたワイヤーが巻き取り剣が戻ってくる。

シユアルツェ・シユヴェールト

黒の剣と名付けられたアルフレート専用の戦術機は短期決

戦・超近接戦闘を前提としたピーキーな機体であったがアルフレートはそれを乗りこなし、功績をあげるだけの実力を有していた。でなけ

ればレーザーヤークトを主任務とする第666戦術機中隊と常に行動を共にすること等出来るはずがなかった。

その後もアルフレートは要撃級に攻撃の動作さえほとんどさせずに50体以上を狩りつくした。返り血で赤く染まる漆黒の戦術機にアイリスデイーナ達はため息をつく。

『ヴァルデ少佐殿の実力は知っているつもりだが改めて見せられると何も言えんな』

『さすがにレーザーヤークトとかではここまではしないけど本当に強いわよね』

『少佐。半分はこちらでという事でしたが6割近くご自身で狩りつくしていますよ』

「む？　そうか。ならば負担が減ったと考えればいい。BETAはまだまだ来るんだ。少しでも長期戦が出来るように備えておけ。……ん？」

アルフレートが刃を仕舞うと同時に彼のもとに通信が入る。それは第666戦術機中隊の中では彼にしか入らないシュタージの極秘通信であった。内容を確認したアルフレートの視線はどんどんと陰しくなっていく。

「……大尉。最悪の知らせだ。レーザーヤークトは失敗。呐喊した戦術機は全滅。砲撃支援は出来なくなった」

『では撤退を？』

「違う。もう一度レーザーヤークトを行うそうだ。行うのはヴェアヴォルフ大隊のベアトリクス少佐率いる中隊に例のシウトウルムヴィント戦術機中隊だ」

『!? シュタージは一体何を考えて……!?』

「残念ながら俺にも分からん。ただし、確実にシュタージの派閥争いが関係しているのは確かだろう。それよりもこちらはこちらで出来る事をするぞ。次の敵だ！　来るぞ」

アルフレートはこのレーザーヤークトでベルリン派とモスクワ派。どちらかの戦術機がレーザー級にやられて全滅するだろうなと思いつつ新手としてやってきた要撃級に切りかかるのだった。

国家保安省^{シユ}武装警察軍^{ター}戦術機大隊^ジヴェアヴォルフ大隊長ベアトリクス・ブレーメは不満だった。そもそも、彼女は本来この戦闘に参加するはずがなかった。正確には出撃する約束をしていながら前線の兵を見捨てる予定だったのだ。これには反体制派と呼ばれるテロ組織と繋がっているとされるハンニバルをつぶす目的があったがアクスマンが自らの手ごまを送り出したことで状況は変わった。

シウトウルムヴィント戦術機中隊。戦術機の詳細は一切不明。戦闘データも作られて間もないことと一度も前線に出たことがないために皆無。更には衛士さえ判明していない為にアクスマン達ベルリン派と対立するモスクワ派は慎重にならざるを得なかった。しかし、いつまでもそうしているわけにはいかないためにベルリン派の力を削ぐことも考えてベアトリクスに全機の破壊が命じられたのだ。そして、レーザーヤークトというのはその舞台にぴったりだった。敵しかおらず、味方の眼がないうえに重金属雲で通信でもできないここなら始末してもBETAのせいにしてしまえる。

それゆえに、先に飛んでいくシウトウルムヴィント戦術機中隊にヴェアヴォルフの面々は銃口を向ける。下では戦車級や要撃級が防衛線に向かって進んでおり、もう少し行けばレーザー級のもとにたどり着くだろうが射線が通らない今がその時と言えた。

「射撃、開始！」

『『『了解！』』』』

仲間内での通信でタイミングをそろえると一斉に射撃を開始した。しかしこれらはあっけなく回避されることとなるがベアトリクスに焦りはない。相手とて警戒はしているはずと理解している可能性は高かったために次の攻撃は既に行っている。予測されていた回避行動の先に銃撃を行う。高速で移動する戦術機は急には針路を変えられない。そう思つての射撃だがシウトウルムヴィント戦術機中隊は直角に避けると素早い動きでベアトリクスの懐に飛び込んだ。

「なっ!?!」

慌てて回避を取ろうとするベアトリクスだがすでに手遅れだ。戦術機は頭部の装甲を開くとレーザー級の如き目を光らせて発射した。瞬間、ベアトリクスの視界は光でおおわれた後、全身を爆発の痛みが襲い、意識を手放した。

第十七話 「補充要員」

ヴェアヴォルフ大隊の全滅によってシュトゥルムヴィント戦術機中隊が撤退したことでレーザーヤークトは失敗に終わった。更にはハンニバル戦術機大隊を率いていたハンニバルも彼個人を狙ったかのような要塞級の包囲によって命を落とした上に遺体すら回収する事は出来なかった。それゆえにヴィスワ川西部で敵を食い止めていた第666戦術機中隊の奮戦むなしく国家人民軍はヴィスワ川防衛線の放棄を決定。最終防衛線より東の地点に防衛ラインを形成した。

唯一の救いと言えるのは今回侵攻してきたBETAは中央戦線にのみ現れたことだろう。北方や南部戦線はいまだに現状維持が出来る。総崩れの心配はなかった。

「ベアトリクス・ブレームの戦死……。勝ったのは『ベルリン派』か」「少佐は、ベアトリクスが殺されたと思いますか？」

「十中八九な。でなければBETAに食い殺されているかのどちらかだ。生き残っている可能性はない」

「……」

友人という間柄ではないとはいえ士官学校時代に交友があったのだ。思うところはあるのかアイリスディーナの表情は険しかった。とはいえこれ以上の詮索はシユタージに逮捕されるきっかけを作ってしまうとアルフレートは話題を変える事にした。

「そういえば戦闘の途中で撃墜されたヴァルトハイム少尉は無事か？」

「はい。幸いな事に怪我はなく、すぐにでも復帰が可能です」

戦闘の終盤においてカティア・ヴァルトハイムは一瞬の隙をつかれてBETAに戦術機を破壊された。そのまま食われるかと思っただがバディを組んでいたテオドールによって救出され、近くを撤退中だったクルト・グリーベル曹長率いる野戦中隊に預けていた。しかし、撤退中の彼らを戦車級の群れが襲撃。テオドールが救援要請を受けて駆け付けた時には瀕死で戦車級の下敷きとなったグリーベル曹長以外は全滅した後だった。レーザーヤークトの失敗で撤退命令が出て

おりカティアはテオドールの機体に乗って命をつなぎ留め、グリーベルは囮となって敵を引き寄せると大量の爆薬とともに爆死するという最期を遂げた。

「あまりよろしくはありませんがヴァルトハイム少尉は今回の一件で戦う覚悟が出来たようです」

「ほう？ やはり戦場に出る事で一皮むけたか」

カティアという少女は理想が先行するどこか危うい存在だったが今ではきちんと足をつき、物事を冷静に見つつ戦場での覚悟が出来ている。アイリスディーナはそう感じていた。そんな彼女の言葉に？ 偽り、ましてや勘違いはないだろうとアルフレートは信用することを決めた。

「ヴィスワ川防衛線の放棄がされた以上今後は今まで以上に厳しい戦いとなる。優秀な衛士は多いに越したことはないからな。……それと、これは急遽決まったことだが第666戦術機中隊に新たな人員が派遣されることとなった」

「この時期に？ それも急とは穏やかではありませんね」

「それも推薦者は『ベルリン派』だ」

「……スパイ、というわけですか」

「ただのスパイであるなら問題はない。だが、彼女の交友関係が問題だ」

そういうとアルフレートはアイリスディーナに詳細な情報が書かれた紙の束を見せる。左上にはこの情報主である一人の女性の顔写真がつけられていた。そして、交友関係の情報を確認したアイリスディーナも目を見開き驚愕した。

「リーズ・ホーエンシュタイン。テオドール・エーベルバッハ少尉の義妹だ」

「……少佐はこれが仕組まれたものだと思いますか？」

「確実にそうだろうな。アクスマンか、それとも別のやつかは知らないが随分と嫌らしい手を使う」

親族を使って情報を得る。最も効果的な情報収集の方法だ。それも離れ離れになった相手ならば。

「確かエーベルバッツハ少尉は3年間に国外脱出を図り失敗。その後は一人となつて軍に入隊した……。妹に関しては一切情報が回つてこなかったが確実に妹の方がシュタージに媚を売つたのだろう」

「あまりいい話ではありませんね」

自らも似た境遇ゆえにアイリス・デイーナはリーズに少し同情心を持つがだからと言って警戒しないでいい相手ではない。

「ホーエンシュタイン少尉は今日にでも到着する。顔合わせの機会を作る。準備をしてくれ」

「はっ！」

ヴィスワ川防衛線から帰還したカティア・ヴァルトハイムはバディを組んだテオドルからの頼みを受けて資料整理を行つていた。グリーベル曹長との出会いと別れを経た彼女はおっとりとした性格は残しつつ戦場で戦う心構えが出来たことで大きく成長していた。彼女を知らない者が亡命時と今の彼女を比べれば変わったと分かるほどの成長だ。

「第666戦術機中隊監査官。アルフレート・ヴァルデ少佐……」

そんな彼女は一つの資料を目にした。それはアルフレートのプロフィールが簡潔に書かれた者であり、カティアでも見る事が出来る、むしろ同じ中隊の者として知っておくべき最低限の事が書かれた資料でもあった。

正直に言つて、カティアはアルフレートに対して苦手意識を持つていた。別につらく当たられたわけではない。編入時に厳しい言葉をかけられたがそれはグレーテルにも同じことを言われていたために再確認のようなものと認識していた。

「1951年生まれ。18歳で入隊。22歳の時にシュタージに転

属。BETAとの戦争がはじまると衛士としての訓練を受けて戦術機パイロットに……。半年前に第666戦術機中隊の監査官として着任……」

彼の経歴はそれ以外に書かれていない。カティアでも見る事が出来る資料、シユタージにいたという事を踏まえればむしろ書きすぎなところもあるくらいだ。しかし、これを見たカティアはテオドルの話の思い出した。

『ヴァルデ少佐は本人の性格はともかくシユタージからこっちに来た以上絶対に信用するな。あの人は俺たちに不利になる報告はしていないとはいえ真実は報告しているはずだ。カティア、自分の願いを叶えたいなら必ず本音を話すな』

「そんなに悪い人には、見えないんだけどなあ……」

そんなことを呟きながら資料を運んでいると偶然にもアネットと遭遇した。彼女の隣にはイングヒルトもおり、親し気に会話をしているようだった。

「あれ？ カティアじゃん。どうしたの？」

「アネットさん。実はテオドルさんから資料整理を頼まれちゃいまして……」

「あー。あれね。地味だし私は好きじゃないなあ」

アネットはうへえと嫌な顔をして苦手なことをアピールしている。イングヒルトもそんな彼女を知っている為か微笑ましそうに笑っている。

カティアは苦笑いを浮かべながらもちようどいとアルフレートの話振ってみる事にした。

「そういえばヴァルデ少佐について話を聞きたいんですけど……」

「ヴァルデ少佐？ 何が聞きたいの？」

「あの人がシユタージにいたって本当なんですか？」

「……そうだね。本当の事だよ」

アネットはカティアの質問に少し寂し気な様子で答え始めた。

「テオドルなんかはシユタージに恨みあるみたいだしそもそも東ドイツ^こじゃシユタージを嫌っていないやつはほとんどいないん

じゃないかな」

「だから彼に対して今も警戒して嫌う人はいるわ。衛士だけじゃなくて整備班の人たちにも……」

後半はイングヒルトが変わりアルフレートに関する話を続ける。アルフレートに対する態度がよそよそしかったり、露骨に顔をしかめる人物がいるのはカティアも理解していた。その最たる例が彼女のバディでもあるテオドルなのだ。

「でも！ あいつは別に悪い奴じゃないんだ！ 少なくとも、なんでシユタージに入ったのか分からないくらいに！」

「え、えつと……」

突如として早口でまくしたて始めたアネットにカティアは圧倒されてしまい、なんと言葉をかけていいのか分からずにしどろもどろになっているとイングヒルトがフォローを入れた。

「ふふ、アネットはヴァルデ少佐に気があるのよ」

「えっ!?!」

「い、イングヒルト!? 何言つて……!?!」

アネットが唐突の暴露に驚いているがそれはカティアとて同じだ。正直に言つて彼女がそういう思いを抱いているとは思えなかった。それは普段の彼女がアルフレートに関する話題を出さない、近づかないなどが理由であったがイングヒルトは丁寧に説明していく。

「もともとシユタージってことで一番かみついてしたのはアネットなのよ。でもそうやって噛みついていううちにヴァルデ少佐がシユタージとは思えない程良い人だつて知つて、たぶん一番のきつかけはカティアちゃんが救出されたあの日の戦闘で助けられたことじゃないかな?」

「そ、そうだったんですか……」

「うううううつ!!」

次々と説明していくイングヒルトは楽しげだが隣で説明を聞いているアネットの顔は真っ赤であり、今にもつかみかかりそうな雰囲気を出しておりカティアは余計に答えに窮してしまった。

「それに、この前なんてベッドのうえでヴァルデ少佐の名前を何度も

つぶやきながら……」

「ぎゃああああああああつ!!!!」

そして、G弾の如き破壊力の爆弾を投下しようとしたイングヒルトについてアネットは限界を迎えて絶叫しながら逃げ出していった。カティアは呆然とその後姿を見送ったが隣のイングヒルトは笑みを浮かべながら困ったように続ける。

「アネットって凄いいみたいでね？ 毎日毎日聞こえてくるのよ。壁が薄いけど隣は私だけだから他の人は気付いていないかもしれないけどここ1月は毎日毎日毎日聞かされて少しノイローゼ気味なのよ」

「そ、そうですか……。で、では！ 私はこれで失礼します！」

カティアは脱兎のごとくその場を離れた。愚痴のように言うイングヒルトの眼に光はなかった。笑みを浮かべながら怒っているのだと気づいたカティアは自分に飛び火しないうちにこの場を離れるという選択肢をしたのだ。今のイングヒルトに立ち向かうのは突撃級の攻撃を正面から受け止めようとしている状況に近い。無謀すぎた。

「はあ、結局ヴァルデ少佐の話は全然聞けなかったなあ……」

「あ、あのー！」

とぼとぼと何とも言えない人の恋バナを聞かされたカティアは本来の書類整理をするべく移動していたが、ふと声をかけられた。この方に向けば一人の少女がおり、カティアの方を見ていた。

「はい。どうかしましたか？」

「第666戦術機中隊の隊長さんはいらっしやいますか？ 補充要員として今日からこちらに配属になったのですが……」

「え？ あ、はい！ どうぞどうぞ！」

初めて見る少女ゆえに一瞬戸惑ったが補充要員という言葉に納得した。第666戦術機中隊は消耗が激しい部隊だ。こういった人物が来てもおかしくはないとカティアは少女を案内する。

「補充要員が来るなんて全然知りませんでした。……あ！ 私カティア・ヴァルトハイムと言います。私も配属されて間もないので仲良くしてくださいね！」

そう言って笑うカティアに、少女は笑みを浮かべた。

「リーズ・ホーエンシュタインです。よろしくね、カティアちゃん！」

第十八話 「ライズ・ホーエンシュタイン」

「中隊に編入される、新たな衛士を紹介する。東欧派遣兵団より補充として本日より着任となる。彼女が一日も早く、中隊に馴染むように気を配ってほしい」

アイリスディーナがそういうと、後方の扉が開き、一人の少女が入ってくる。そして、その少女に最も反応を見せたのは予想外にもテオドルだった。彼はシュタージの一件以来他人を信用する事はなくなり、中隊の面々に関してもどこか距離を置いているように見られた。そんな彼がつまらなそうな顔を一変させて目を見開いて驚きをあらわにしたのだ。

「ライズ・ホーエンシュタイン少尉です！ よろしくお願いします！
……え？」

少女、ライズ・ホーエンシュタインはテオドルに気付くと凜々しい顔を驚かせ、笑みを浮かべた。

「お兄ちゃん！ 会いたかった……！ ずっと……！」

「ライズ、なのか……？」

笑みを浮かべて抱き着くライズにテオドルは困惑しつつも問いかける。テオドルは二度と会えないと思っていたがゆえに。

「……んん！ ホーエンシュタイン少尉。悪いが予定が詰まっている。続けても構わないか？」

「あ！ 失礼しました大尉！ もちろんです！」

「よろしい。では、本日の午後よりホーエンシュタイン少尉を加えた飛行訓練を行う。その心づもりでいるように。それとテオドル、今後の事について話がしたい。少し時間を貸せ」

「り、了解です」

「うむ。では解散！」

アイリスディーナは朝の朝礼を終わらせるとテオドルを連れて外に出る。それに続くようにグレーテル、ヴァルターも続く。外ではすでに待っていたらしいアルフレートもあり、彼の顔を見たテオドルは露骨に嫌な顔をしつつも合流した。

「エーベルバッツハ少尉。君の義妹、ホーエンシュタイン少尉についてだ。ぶしつけだがあれは本人か？」

「……間違いありません。少佐殿」

アルフレートの問いかけに少し間をおいて答える。その間が記憶をたどって本人かどうかの確証を得るためか、それともシュタージの人間である彼と話すことを嫌ってなのかは分からなかった。

「別人の可能性はないのか？」

「あれは別人じゃない。……俺の、妹だ」

「となるとますます怪しいな」

3年前に国外脱出を図った際に離れ離れになった妹との再会。それも推薦者がシュタージの“ベルリン派”という事でほぼクロと言ってよかった。

「残念だがホーエンシュタイン少尉はシュタージの犬だ」

「っ！ それはあなただだってそうでしょう！」

妹に対して辛い事実を言うアルフレートに対してついに我慢が出来なくなつたテオドルが食って掛かる。シュタージから正式に派遣されたアルフレートはテオドルのいう通り犬でこそあるがだからと言って上官に対する物言いではないと注意をしようとしたアイリスデイナーをアルフレートは手で制した。

「確かに私はシュタージから派遣された。だが、それは第666戦術機中隊が反逆行為をしていないかを確認する為である。いうなれば私の役目は督戦隊に近い。尤も、この中隊を督戦した事は一度もないがな。対して、ホーエンシュタイン少尉はどうだ？ “モスクワ派”に対して一歩有利に事を進めている “ベルリン派” の推薦だ。何を目的としているのか見当つかないのだぞ」

そもそも、“モスクワ派” は第666戦術機中隊を排除しようとは考えていない。東ドイツ最強の部隊であり、消すには惜しいという事と、モスクワ派にはヴェアヴォルフ大隊という最強の駒がいたのだ。今でこそ大隊長のベアトリクスが戦死しているが大隊の大半は無傷のまま残っている。

対する “ベルリン派” は近年でこそシュトウルムヴィント戦術機

中隊を保有しているが数の上では劣る。更には「ベルリン派」の中核と言えるアクスマンはアイリスディーナと確執があった。信用できない相手である以上消す方向で動いている。

「『モスクワ派』であれば第666戦術機中隊を自分達の陣営に組み込みたいとして行動するだろう。だが『ベルリン派』ならばそうではない。アクスマンは昔は読みやすかったが今は何を思っ**て**行動しているのか理解できない」

「だから、リーズが犬だと？」

「犬でないなら問題はない。犬ならば犬としての役目を出来なくすればいいだけの話だ。エーベルバツハ少尉。お前に任務を与える。ホーエンシュタイン少尉を監視し、犬かどうかを見極めろ」

「っ！……それが命令であるならば」

テオドールはこれ以上話すことはないと言わんばかりにその場を後にする。アルフレートは大股で歩くテオドールを見送りながらつぶやいた。

「エーベルバツハ少尉にはああいっただがホーエンシュタイン少尉は確実にシュタージの犬だ。くれぐれも隙は見せるな。そして、エーベルバツハ少尉に渡す情報を制限しろ」

「エーベルバツハ少尉がホーエンシュタイン少尉に情報を流すと？」

「肉親の情を相手が全面に押し出してくればな。最悪、肉体関係を結ぶことさえ考えられる。そこまでされてもこの中隊に忠義を示せる男か？」

「……」

アルフレートの問いかけにその場の誰もが答えられない。3年ぶりに会う妹だ。余計なことを喋ってしまったり彼女をかばうことだ**っ**て考えられる。それが**ない**とは言い切れない以上アルフレートの指示は妥当とも言えた。

「別に彼らをのけ者にするわけではない。犬でないなら何も問題は**な**い。犬だったときが致命的なだけだからな。全く、BETAという脅威がいるにも関わらず、国家一つでさえまとまる事が出来ないんだ。人類は」

アルフレートはどこかあきらめたような感情を込めながらそうつぶやいた。

人類一丸となって。

言葉としての響きはいいがこれを実際に達成できているわけではない。アフリカや東南アジア、南米各国はBETAが攻撃をしない限り襲ってこないと知ってから物資提供すら断るようになってきている。派兵は一度として行われずに常に前線は兵力不足で苦しんでいる。そんな人類をBETAは数に任せて対応してくる。戦術的・戦略的行動はほとんどしないのは人類にそれだけの価値がないから。そう提唱する学者もいる程だ。だが、実際に人類はそうなってきた。いずれ人類は各個撃破され、地球はBETAのものとなる。アルフレートはそんな暗い未来をどこか予想出来てしまったがために人類の愚かさを嘆くのだった。

「全く。まさかあの場から逃げるとは思わなかったよ」

ああ、これは夢だ。見た瞬間に分かる。

何しろ私はその光景を知っているからだ。場所は暗い部屋、尋問の部屋だ。部屋には小さな少女、護衛、そして座って意気揚々と笑っている私とそれを後ろから見ると私しかいない。いや、これを見ている私はこの場所にはいなかったのだから私は除外するべきだろう。

「……」

「何か言ったらどうかね？ まあ、それで何かが変わるわけではないがね」

私はこれから起こる悲劇など分からずに余裕な表情で言っている。この時、すでに目の前の少女は私たちがいいように使い、壊しかけていた。そして、その結果として少女は手を取れない相手の手を取った。

「……な」

「ん？ なんd……」

【人間とは愚かだな】

その瞬間、私の護衛は首を切られて絶命し、私は目の前の少女、リーズ・ホーエンシユタインの右腕から伸びる赤い触手に拘束された。

「な、なんだこれは!？」

【全く。たかが少女相手にイキるなんて恥ずかしくてできないぞ】

ホーエンシユタインは確かに少女の皮をしているが中身は別人だ。それが一瞬で分かったとはいえこの時点で出来る事はなかった。腰の銃には手が届かず、助けを呼ぼうものなら首をへし折られるだろう。

【だが、そんな愚かさが人類の成長の要因であり、滅びの原因となる】

「……………まさか!？」

ホーエンシユタインの中身の正体に行き着いた私に対してこの化け物、BETAはにやりとゆがんだ笑みを浮かべて言った。

【人類のために人類を裏切らないか?】

これが私、ハインツ・アクスマンが人類にとって許されざる者となつた瞬間でもあつた。

第十九話 「海王星作戦1・結集する4軍」

リーズ・ホーエンシュタインが編入してきたとはいえ表面上は特に問題は起きなかった。強いていうのであれば食事中にリーズが兄であるテオドールの好みのタイプやベッドの下に隠していたヌード写真を暴露したり、それが飛び火した形で引火したイングヒルトによってアネットがアルフレートに好意を持つていることを夜の行為とともに暴露するなどして約2名ほどの精神が重傷を負ったものの、それ以外で問題は起きなかった。

そして、午後に入り予定通りに実機訓練が始まった。カティアの時もそうだったが第666戦術機中隊はレーザーヤークトを主任務とする以上その操縦技術は高いものを要求される。ゆえに、それについてこれるように行う訓練も厳しいものとなっていた。

「09、まだ高い。高度を下げる。そして若干遅れている。出力を上げろ」

『り、了解！』

後方から隊の様子を確認するアルフレートに注意を受けすぐに高度を下げるリーズ。派遣された衛士というだけあって腕は優秀であった。高度の高さも普通の部隊であれば低空の部類に入る高度だ。

『やるじゃないか』

『お上手です！』

『もう、前の部隊じゃこんな低空飛んだことないよお』

「第666戦術機中隊の主任務は光線級レーザーヤークト呐喊だ。普通の部隊の高度では目標にたどり着けないからな」

『同志少佐のいう通りだ。そして今は訓練中だ！ 余計な私語は慎め！』

『す、すみません……』

どこか和やかな雰囲気を見せる彼らを一括するアイリスディーナ。そんな訓練は普段はいかないような距離まで差し掛かった時だった。

『中隊長！ 後方よりアンノウン接近！ かなりの高速ですよ！』

『っ！ ミサイルのロックオン！ まさかシュタージ！』

突如として現れたアンノウンに立て続けに起こったロックオン警報。いきなりの事に慌てる隊員たちに反してアルフレート以下一部のものたちは冷静だった。

『落ち着け。あれは友軍機だ。敵ではない』

『友軍機!?!』

「その通りだ。……後ろから接近する阿呆ども。今なら冗談で済ましてやる。それとも、BETAではなく人間との戦いで死にたいか?」

アルフレートの殺気すら感じる言葉を受けてかすぐにロックオンは解除された。しかし、いきなりの行動に対して隊員たちは不満をあらわにしており、特にアネットなどは今にも発砲しそうなほどだった。

『あいつら一体どこの部隊だ!』

『あれは……! 西ドイツの第51戦術機甲大隊 “フツケバイン”!』

それに、アメリカ海軍第103戦術歩行戦闘隊 “ジョリー・ロジャース” です!』

『西側の連中が何故ここに……!』

「……そろそろいいだろう。大尉」

『了解です。総員傾注! 飛行訓練はここまでだ! 我々はこれより、東ドイツを代表して国連軍の対BETA反抗作戦に参加する!』
「そういう事だ。全機シュヴァルツ01に続け」

吹雪を抜けた先にはバルト海が広がっていた。しかし、そこには青い海を埋め尽くさんばかりの漆黒の黒。国連軍の大艦隊が存在していた。第666戦術機中隊はそのなかの輸送船に降りていくのだった。

国連軍・アメリカ軍・欧州連合軍・ワルシャワ条約機構軍による一大反抗作戦 “海王星作戦”。これは先日の大撤退で陥落したポーランド人民共和国グダンスクに強襲上陸を仕掛け、基地を設立。前線に押し寄せるBETAを軽減、可能ならば前線との包囲殲滅を行うというものだった。とはいえ前線との包囲殲滅は不可能と思えるほどに

遠いためにこれは可能ならば程度となっている。

「つまり、これを成功させることが出来れば最終防衛線に殺到するBETAの数を減らし、戦局を好転させられるかもしれないという事だ」

「北部戦域は欧州連合軍、中央はアメリカ軍、南部は我々が担当する。各戦域40キロの縦深を行う。これが出来れば我が東ドイツは稼ぎ出された時間を利用して防衛ラインを大幅に強化できる。場合によっては前進も出来るだろう」

アルフレートの言葉を変わり、具体的な説明をするのはこの作戦の参加を決定した党、そこから派遣されている政治将校のグレーテルが言った。

「西側主導の作戦ではあるが東ドイツの命運を左右する戦いである事を忘れるな！」

「……とはいえこの作戦において大なり小なりBETAを駆逐できるはずだ。成功すればいう事はないが失敗したとしても……、損害は大きいだろうが防衛線の負担を減らすことが出来るはずだ。イエツケルン中尉も言った通りまさに東ドイツの命運そのものともいえるこの作戦、成功させるぞ」

「「「「「了解！」「」「」「」」」」」

「ヴァルデ少佐殿」

「……何か用かね？　ホーエンシュタイン少尉」

自前の戦術機の調整を行っていたアルフレートに後ろから声をかけてきたのはリーズだった。彼は彼女の方を一切見ず、調整を続ける。リーズの方も彼に背を向けて話し始めた。

「あなたにとってお兄ちゃんはどういう存在ですか？」

「部下だ。正確には監査官として監視する部隊の隊員と言った方がいいがな」

「そう、ですか……」

「言う事は終わりか？　ならばこちらでも聞かせてくれ。お前は犬か？」

「……もし、それで本当に犬だったとしてわざわざ伝えたいと思いますか？」

「思わないさ。別に答える必要はない。本当のことを言うとは思えないからな」

「……」

リーズはアルフレートの言葉に何も答えずにその場を離れる。そんな彼女にアルフレートは一言だけ答えた。

「この作戦は我らを左右する重要な戦いとなるだろう」。覚えておくといい」

「……了解しました。ヴァルデ少佐殿」

リーズの足音が聞こえなくなったころ、アルフレートはもう一人の人物に声をかけた。

「先ほどから見ているのは知っているぞ、ホーゼンフェルト少尉」

「うっ、バレちゃったかあ」

物陰から姿を見せたのはアネットだった。彼女はいたずらっ子のように舌を出すと彼に近づいていく。

「ホーエンシュタイン少尉が犬かもしれないと聞いて驚いたか？」

「別にそうでもないですよ。いきなりの編入で怪しかったし、少佐や大尉も警戒しているように感じられたので」

「ふ、まるで動物のような直感だな」

アネットはアルフレートの背に背中を預けて座る。先ほどのリーズとは違い接触した状態であるが大胆な行動にアネットの顔は真っ赤となっていた。

「……ホーゼンフェルト少尉。今回は私も前線に出て戦う事になる」

「なら少佐の背中が守ります！」

「……ふ、それは心強いな。では頼むとしよう。それと、帰還できたのならベルリンで最もうまい酒をこちそうしてやるさ」

そういうとアルフレートは調整を終えて立ち上がり、アネットが向く方向とは逆に歩き出した。

第二十話 「海王星作戦2・西と東」

艦砲射撃とともに始まった海王星作戦。この奇襲攻撃で人類は沿岸部の敵を排除、橋頭堡を確保する……はずだった。

「ば、馬鹿な!？」

その言葉を叫んだのは誰だったのか。もしかしたら全員だったかもしれない。確かに沿岸部にはレーザー級がいた。しかし、事前の調査でそれは少数であり、被害は受けても艦砲射撃で殲滅出来ると思われていた。

しかし、艦砲射撃が始まると、まるで知っていたかのようにレーザー級は海の方を向き雪に隠れていたレーザー級も姿を現して、当初に確認していた10倍の数で以てすべての砲撃を迎撃した。

「レーザー級の数事前情報の10倍、いやこれはそれ以上です!」

「BETAはこの作戦を読んでいたというのか!? だがレーザー級は一発を打つのに時間がかかる! 今のうちに……!」

その言葉が最後まで言われる事はなかった。声の主が乗艦した船がレーザー級の一撃を受けて爆発したためである。そしてそれは一隻ではなかった。数にして10隻を超える船が攻撃を受けていた。

「敵は砲弾の迎撃と艦艇を沈める奴に分かれたのか!? BETAがそんな手を使うとは……! だが今度こそチャンスだ! 全艦砲撃を継続せよ!」

最初の一手こそ予想外の手を受けて慌てたがすぐに各艦艇は攻撃を再開する。今度は迎撃されることもなく沿岸部に命中していく。充填が完了したらしいレーザー級が迎撃と攻撃を行っていくがそれも数が減っていく。それを8回ほど繰り返すとレーザー級の攻撃は完全にやんだ。

「よし! 各戦術機は内陸部の敵の掃討に入れ!」

予定よりも手痛い打撃を受けた連合軍も戦術機を輸送する船に被害はなく、何の問題もなく次の攻撃に移る事が出来た。

「大尉。どうやらBETAの動きは大分こちらに対応してきているようだ」

『問題ありません。我々はどのような敵であろうとも東ドイツのために戦うだけです』

「……そうだな。全ては我らの祖国のために」

出撃の準備が整い、格納庫に仕舞ってあった戦術機が上昇していく。全機出撃準備が整い大尉の号令待ちとなった。

『諸君。敵の動きはこれまでのように単調なものではない可能性がある。だがそれがどうした？ 我らは東ドイツ最強の戦術機部隊である！ その実力を今こそ示すぞ！ 全機出撃！』

その言葉に合わせて一斉に跳躍ユニットを点火。一斉に船を出て前線へと飛びだっていく。そして南部戦域にたどり着いた第666戦術機中隊は2つの小隊に分かれて襲い掛かるBETAへの攻撃を開始した。

「ちっ！ 予想外に多いか……！」

長期戦になる事を踏まえて銃火器による遠距離攻撃を行っているアルフレートはレーダーに映る敵の数を見てそう毒づいた。BETAは当初の予定は5000もいればいい方だと考えられていたが蓋を開けてみれば1万は確実に超えていそうな数が存在していた。明らかにこちらの動きに合わせているとアルフレートは感じていた。それはアイリスデイナーも同じようで、周辺のBETAを駆逐し終えると通信を行った。

『総員傾注。ここで小休止を取る。各員、マガジンの残弾を確認しておけ。長期戦になる。休めるうちに休むぞ』

『何を考えている同志大尉！ 却下だ！ 却下！』

そんなアイリスデイナーの命令に不服を漏らしたのはグレーテルだった。今回の作戦で彼女は党から失敗は許されないとプレッシャーをかけられており、焦りを見せていた。

『我々は日没までに40キロの縦深を命じられている！ アメリカ軍や欧州連合軍に遅れをとるなど東ドイツの威信にかかわる！ それは我々の……！』

そこまでグレーテルが話した時だった。レーダーが新たなBETA群をとらえた。その数は2万以上。ワルシャワ条約機構軍とアメ

り力軍や国連軍が展開する戦区の境目を縫うように向かってきていた。

「ちっ！ 敵が来るぞ！」

『総員傾注！ これより我々は敵の前衛に飛びこみ足止めを行う』

『あの数の群れに突っ込むんですか!?!』

『足止めをするだけだ。せつかくの橋頭堡がやられてはたまらないからな』

11機の戦術機が低空で突撃する。6機が前衛、5機が後衛で攻撃を行う。

「突撃級だ。数は3000。5層以上の波で進軍中！」

『総員非装甲部を狙え！ 間違っても正面から挑むなよ!』

アイリスデイーナの指示に合わせて突撃級の後方に銃弾を叩きつけていく。場合によっては砲弾すら防ぐ装甲を持つ突撃級だがそれは正面のみの話である。後方や脇は他のBETAと同じ硬さしかない。

そして先頭の突撃級が倒れたことにより後方の突撃級がぶつかり、身動きが取れなくなっていく。そこを一匹ずつしとめていくがそれでも数が多すぎて対処が難しくなっていく。

『上申します！ 砲撃が来ます！ 直ぐに撤退を!』

『砲撃だ?!? 何を言ってる……!』

『俺たちがいるんだぞ?!? そんなこと……!』

『西側は私たちのように戦術機による近接戦闘を想定していません！

……支援砲撃で徹底して叩いてからになります』

「……そういう話は事前になかった。ふん、こういうところが人類が押し込まれている理由なんだろうな」

もともと西側の衛士であるカティアの説明にアルフレートは眉を潜める。一大反抗作戦の時でさえまとまれない人類に未来はあるのか? アルフレートはそう思いつつも目の前の事態に目を向けた。

「大尉。撤退するぞ。ここに理由はない」

『同志少佐!?! 何を言っている! それでは西側の作戦の優位を示す事に……!』

「優位も何もないだろうが！　このままでは我らは砲撃の雨にさらされるぞ！　砲撃が来るのを事前に把握しておきながら愚かにも前線に居続けた結果砲撃に巻き込まれた馬鹿どもになりてえのか！」

『っ！』

撤退をしようとしてないグレーテルに対してアルフレートは怒りを覚え、叫ぶ。祖国の優位性やプライド等そんなことは関係ない。目の前に迫る回避できる死を回避しないことがどれほど愚かなのか。そしてそれを分かっているグレーテルにアルフレートは怒りを込めて叫んだのだ。

『どうなんだ!?　グレーテル・イエツケルン中尉!』

『わ、私は……!』

『……撤退するぞ。ヴァルデ少佐のいう通りだ。ここに残る意味はない』

言葉に詰まるグレーテルに変わり指示を出したのはアイリス・デーナだった。中隊長の指示という事もあって全機撤退を開始する。そしてその直後に砲撃が開始された。

『そのの戦術機部隊！　聞こえているなら北西に迎え！　脱出を支援する!』

『それはありがたい！　私は東ドイツ軍第666戦術機中隊アイリス・デーナ・ベルンハルト大尉だ』

『こちらは西ドイツ軍第51戦術機甲部隊ヨアヒム・バルク少佐！　後方の要撃級はこちらが対応する!』

分裂したドイツの片割れの支援を受けつつ第666戦術機中隊は撤退を開始する。そして、途中ですれ違った部隊、第103戦術歩行戦闘隊が放ったフェニックスミサイルを目撃した。それはミサイル内に内蔵された無数の小型爆弾が目撃地点に到着すると周囲にばらまくというものであり、第666戦術機中隊が11機で辛うじて抑えていた突撃級を全滅させる威力を見せつけた。

その様子に、一番のショックを受けたのは東ドイツに妄信しているとも言えるグレーテルだった。

『そんな……私たちがいるのに』

『わかったでしょ？　これが東ドイツの、社会主義国家の扱い。世界中から嫌われてるのよ』

『……っ！』

ポーランド出身であり、テオドール以上になれ合いを嫌うシルヴィア・クシャシンスカの言葉にグレーテルは何も言えなくなってしまう。BETAとの戦争前から国力的に劣っている社会主義国家だがBETAとの戦争が始まるとそれが激化した。そして欧州連合やアメリカなどの西側諸国は力を蓄えて満を持して戦争に参加したのだ。

アルフレートとしてはそんな経緯がある以上このくらいは出来て当然とさえ感じていた。だが、グレーテルにとっては自分たちがどれほど頑張ろうとも無意味にさえ感じられる西側の力に悔しさで歯を食いしばるのだった。

第二十一話 「海王星作戦3・確執」

橋頭堡の確保に成功したことでグダンスクには急ピッチで基地が建設され始めた。しかし、その建造速度はテオドール達第666戦術機中隊の面々から見ても異様とも感じられるほど早かった。何しろたった半年で基地として稼働できるほどに建設されているのだから。

「これが……、西側の力か」

「これだけの余力があるにも関わらず前線には社会主義国家しかない。いや、この場合は我々が断っていると考えた方がいいのかもしれないな」

テオドールの呟きに答えたのはアルフレートだがその言葉には自嘲ともとれる言葉があった。現在、テオドールとアルフレート、アネット、リイズ、カティアは建設されるグダンスクの基地の様子を確認しており、西側の驚異的な建設能力に圧倒されていた。

「少ない戦術機で戦っているのが馬鹿らしくなるわ……わっ!？」

「その分衛士の質じゃ俺たちが上だと考えればいい。囲まれたときに生存できる可能性が俺たちの方が高いとな」

アネットの嫌味な言葉を聞いたアルフレートは彼女の頭をなでながらフォローするように言うが当の本人は好意を寄せる相手になでられていることもあつて顔を真っ赤にしてうつむいている。前回食事中にイングヒルトが暴露したこともあつて第666戦術機中隊の面々はアネットがアルフレートに好意を寄せていることを知っている。小さいお姉ちゃんのように感じるアネットが真っ赤にしているのを見たカティアとリイズは微笑まし気に笑った。その瞬間だった。

「あー、良かった」

その言葉とともにやってきたのは西ドイツの衛士のジャケットを着た三人の男女だった。そして先頭に立つ女性は続ける。

「こんなところにいたのね。役立たずのテロ国家の皆さん」

「……」

笑顔を見せているが内容はアルフレート達をけなす言葉だった。彼女の言葉にアルフレート達の表情は険しくなる。

「ドイツ連邦軍、第51戦術機甲大隊 ッフツケバイン」所属、キュルケ・シユタインホフ少尉よ」

「……ドイツ民主共和国第666戦術機中隊 ッシユヴアルツエスマーケン」テオドール・エーベルバツハ少尉だ」

「東ドイツ最強、なんだっけ？ まあ、どうせプロパガンダなんだろうけど」

「……さつきから喧嘩売ってるの？」

彼女、キュルケの言葉にアネットが我慢できなくなったのか食って掛かる。キュルケの言葉はアルフレートに撫でられているにも関わらず、現実に戻すほどの威力はあったようだ。

「謝罪を要求するわ」

「はあ？」

「あなたたちを救出するために必要な損害を被ったの。ハーゲンドルフは重傷。クリストルはもう少して食われるところだったわ」

そう言っ隣りの女性を見る。その女性がクリストルというのだろう。表情は厳しかった。

「謝りなさい。無能な自分たちのせいでご迷惑をかけましたって」

「はあっ!? こっちはあなたたちの砲撃で死にかけたのよ!」

「勝手に突っ込んだだけでしよう？ あんなの面制圧だけで殲滅出来たわ。ほんと、これだから社会主義国家は……。死にたいのなら、自分達だけで死になさいよ。私たちを巻き込まないで！」

「っ！」

「落ち着けアネット」

アネットは今にもつかみかかりそうになるがアルフレートが手に力を入れてアネットの頭を押さえる。頭が固定されたことで動けないアネットはフー、フーと犬のように鼻息を荒くしているがアルフレートは構う事はなくキュルケの方を見る。

「自分達から首を突っ込んでおいてよく言うな」

「……なんですって？」

「BETAがどうやって判別しているかは不明だが攻撃を仕掛けていない国家に対してBETAは一切の侵攻を見せていない。現にイン

ドや中東、東南アジアにBETAが侵攻した事は一度としてない。にも関わらずお前から欧州連合は手を出した。それなのになんだ？ 死にたいなら自分たちで死ぬ？ 死ぬ勇気もない奴が出しゃばってくるんじゃないよ」

「っ！ あなたねえ！」

「そこまでだ」

今にもつかみかかりそうになるキュルケを第三者が止めた。それは撤退時に通信を行ったヨアヒムだった。

「し、少佐!?!」

「まったく、何やってるんだお前は」

「……………」

「………… ツツケバイン」の隊長、ヨアヒム・バルクだ。うちのキュルケが失礼した」

「第666戦術機中隊監査官アルフレート・ヴァルデ少佐だ。こちらとしてもみつともなく反論した。お互い様だ」

「え？ 少、佐……………」

そこでようやくキュルケは自分のおかしそうになった失態に気付いた。他国とはいえ自分より階級の高い相手につかみかかりそうになったのだ。そして、監査官という役職。それが何なのかを理解できないほどキュルケは無学ではない。

監査官とは軍や党が派遣する者を政治将校というのならシユタージが派遣する者がこれに当たる。いうなればシユタージ版政治将校と言えた。さすがにヨアヒムも予想外だったのか目を見開いて驚いている。

「まさか監査官殿だったとは。うちの隊員が失礼しました！」

「問題ない。階級は同じなのだ。楽にしてくれて問題はない」

「そういつてもらえるとこちらとしてもありがたい。これからの作戦、お互いに協力していこうじゃないか」

「こちらとしても敵視しあって戦闘に臨むよりは良い。よろしく頼む」

「あ……………」

お互いに握手を交わすがそれによって頭から手を放す事になり、アネットは寂しげな声を出した。

「んじやな。お互い同じドイツ人どうし、仲良くな」

そういうとヨアヒムは戻っていく。その後を悔し気な表情をしたキュルケ達が追いかけていき、何とか手を出す事態に陥ることなく終息に成功した。しかし、この一件で西側が自分達東側をどう見ているのか、本当にやっつけていけるのかという不安や不満が心に現れ、沈殿していく事になる。

「新たなBETAの群れが確認された」

数日後、基地も完成してフル稼働が始まった時に第2波とも言えるBETAの動きが発見された。

「数は6万。我々ワルシャワ条約機構軍はその敵の流れを正面から受け止める事となった」

「どうしてそんな危険なことを！」

ヴァルターの言葉に驚きの声を上げたのはアネットだった。かつては戦争神経症という病気にかかり、情緒不安定だった彼女もカティアという末の妹のような存在、アルフレートという好意を寄せる相手が出来たことで精神的安定を取り戻しており、昔では考えられない程大人しくなっていた。

「最後まで聞け！ わが軍を中央として、右翼にアメリカ軍、左翼に欧州連合軍が展開。我々がBETAを遅滞させている間に重金属雲を展開し、面制圧で包囲殲滅する」

「これが対BETA戦ドクトリン、アクティブディフェンスだ！

レーザー級を飽和攻撃する以上我々の出番はない前線近くでの遅滞、防御線が主になる。何か質問はあるか？」

その問いに手を挙げたのはシルヴィアだった。

「西側が面制圧にこだわる理由は？」

「可能な限り安全にBETAを減らすためだ」

「……ほかに理由があるんじゃない？」

「……西の衛士はBETAとの近接戦の経験が少ない。出来る限り、安全策を取りたいのだろう」

「じゃあ、面制圧に失敗したら？」

「失敗など許されない！」

シルヴィアのネガティブともとれる質問に怒鳴るようにして答えたのはグレーテルだった。権力を強めるシユタージに対して確かな功績を欲した軍部は必ずこの作戦を成功させると息まいており、その重圧が今の彼女にかかっていた。それゆえに狂気とも感じる程彼女はこの作戦の成功に拘っていた。

「我が国の威信をかけてなんとしてもこの作戦を成功させねばならない！」

「……うまくいくといいわね」

「……っ！」

シルヴィアのどこか嘲笑するような笑みと呟きを聞きグレーテルの顔は怒りで染まるがそれを必死に抑え込んだ。その様子を見ながらアイリスディーナが話を続ける。

「出撃まで時間はある。各員準備を整えておくように。解散！」

「……」

どこか不安を残しつつ、ブリーフィングが終了した。アルフレートは危うい焦りを見せるグレーテルを見ながらこの作戦について考えるのだった。

第二十二話 「海王星作戦4・包囲殲滅戦」

そして、BETAの第2波を止めるアクティブフェンスが発動した。北進を続ける6万のBETAに対して艦砲射撃を含めた攻撃が3方向から同時に行われる。それらは突撃級すら吹き飛ばし、小型の戦車級を残らず吹き飛ばしていく。

それは戦術機に乗ったアルフレート達にも確認でき、レーダーに映るBETAの反応が急速に消えていく様子に戦慄さえ覚えてた。

『これほどの包囲殲滅を成功させるなんて……』

『これが俺たちと西側の差か……。あいつらが怒るのも当然だな。戦力も戦術も、俺たちとは違いすぎる。西側の連中に、俺たちの力なんて本当に必要なのか……?』

あまりにも一方的な様子にテオドールは自分の存在意義を失ったかのようにそういったがアルフレートがそれに対して答えた。

「戦術とは対策されて当たり前のものだ。それにいくら完璧な作戦とはいえ始まるまでは机上の空論に過ぎない。ましてや相手はBETAだ。人間の予想なんて」

そこまで言ったとき、新たなBETAの反応がレーダーに映る。

「通じない」

『両翼の戦術機が次々と撃墜されています!』

『これは……! くそ! あいつら地中を掘ってきやがった!』

テオドールの言葉通り、BETAは地下から現れた。それも両翼の外側から包囲するようにレーザー級が現れたのだ。結果、奇襲を受けた両翼の戦術機に大量の撃墜判定が出る。更にレーザー級による露払いが済んだとばかりに突撃級、要撃級が出現したが悪夢はまだまだ続いた。

『内陸から要塞級の出現報告! 数は100!』

『100!? 見間違いではないのか!』

『見間違いではないようです! 無数の戦車級とともに北上中!』

「……これは、BETAは戦術を用いたという事か!」

明らかにアクティブフェンスに対するカウンターの如き動き

にアルフレートは驚く。それは他の面々も同じであり、先ほどまでの包囲殲滅が霞むほどの衝撃だった。

そもそも、BETAは戦術と思われる行動はとらない。ただ数を活かして侵攻しているだけだ。それゆえに今回のようなアクティブデイフェンスなどの戦術が生み出されたがそれはBETAが戦術的行動をとらないのが前提だ。今回はその前提が壊れたがゆえに逆に包囲を受ける形となったのだ。

『両翼の損耗率50%を超えます！』

『沿岸部に出現したレーザー級が艦隊に攻撃を仕掛けています！ こちらにも被害が！』

『北上中のBETA群海岸から15キロまで近づいてきています！』

絶望的とも言える状況に加えて通信から入ってくる兵たちの悲痛な叫びが状況の悪さを物語っていた。そんな状況に対して真っ先に動き出したのはアイリスディーナだった。

『総員傾注！ 我々は現在の任務を放棄。西側の連中の救助を行う！』

『っ！ ベルンハルト大尉正気か!? 我々が西側の連中を助けるなど……』

「こちらは了承した。で？ どうする？ 部隊を分けるか？」

アイリスディーナの命令に従う意思を見せたのはアルフレートだった。そしてそのうえで片翼に集中するのか両翼に展開するのかを問う。

『両方助ける、と言いたいところだがそれは難しい。ゆえに片翼のみの救助を行う。対象は東、左翼だ。左翼のBETA群は右翼よりもおおいからな。右翼のアメリカ軍には悪いが自力で対応してもらおう』
『ベルンハルト大尉！ 何故西側の連中を……！』

『このままでは撤退すら難しい。みてのとおりレーザー級は左右に広く展開している。沿岸部ならばともかく内陸部のレーザー級を叩かない限り逃げる事は難しくなる』

『それは！ ……そうだが』

『国連軍より第666戦術機中隊へ』

グレーテルは否定的な様子が続いているがそれをアイリスデイナーは毅然と答える。そしてアイリスデイナーのいう通りこのままでは逃げる事も難しいのは彼女にも分かっていた。そんな葛藤を心の中で抱えていると国連軍より通信が入る。とはいえその通信相手は国連というよりもそこに乗船している東ドイツの軍部からの通信だった。

『貴官らの損耗率を答えよ』

『こちら第666戦術機中隊。損耗はありません』

『ええい！ 貸せ！ 第666戦術機中隊の損耗など関係ないお前たちは今すぐに撤退だ！ この作戦は失敗だ！ 作戦失敗の責任は西側の連中に負ってもらう！ ゆえにお前たちは損害なく撤退する事だけを考えろ！』

「では艦隊にはレーザー級の殲滅を頼みましょう」

『なんだと!?!』

「現在、沿岸部から内陸部にかけてレーザー級が展開しています。これらを殲滅しない限り撤退は難しいです。そしてレーザーヤークトを得意とする我らを撤退させるという事は代わりに行ってくれるということですね？ 同志少佐」

『それは……!?!』

「……とはいえ同志少佐は理解しておられますよね？ ここで我々が真っ先に撤退した場合、東側の連中は手を組んだ者たちを見捨てて逃げる臆病者だと笑われかねないことなど」

『それは……!?! ……、……、出来るのだな?』

「出来なければ全滅するだけです」

『……』

いまだ決めかねているらしい同志少佐に対して声を上げたのは意外な事にグレーテルだった。どうやらアルフレートが話している間にテオドル達が通信を行っていたようで、先ほどの葛藤は消えていた。

『我々はこれよりレーザーヤークトを行います!』

『なっ!?! 中尉まで何を言って……!?!』

グレーテルは同志少佐の言葉を最後まで聞かずに通信を切った。

『さあ！ 行くぞ同志諸君！ 我々は東ドイツ最強の部隊、シュヴァルツエスマーケンだ！ 不埒な異星起源種どもに、頼りない西側の連中に！ 我々の力を見せてやれ！』

『その通りだ！ 総員跳躍開始！ 我に続け！』

シュヴァルツエスマーケンは行動を開始した。それと同時に各戦線においても反撃が行われようとしていた。

「おのれ！ こうなつては少しでも砲撃を続けろ！ 沿岸部だけでもBETA群を駆逐するんだ！」

艦隊では砲撃が再開され、レーザー級の殲滅を行おうと躍起になっていた。

『東の連中が動き出したようだ！ 俺たちも負けてられないぞ！』

右翼にいたジョリロジャーは奇跡的に全機健在であり、友軍機とともに過酷なレーザー級の殲滅を開始した。

「シュヴァルツ09、05。お前たちは撤退しろ」

『少佐!? 何を言つて……!』

『少佐のいう通りだ。両機は戦線を離脱。安全地帯まで後退しろ』

『大尉までなんで……』

『……全滅を避けるためですね?』

訳が分からないといった様子のカティアに変わり、答えたのは同じく撤退を命じられたシルヴィアだった。

『これまでのように無事に済む保証はない。である以上全滅だけは避けなければならない。お前には、なすべきことがあるのだろうか?』

『安心しろ。必ず生きて帰るさ』

『大尉……。テオドルさん……』

カティアがなんの目的で亡命してきたのか。それをアイリスデイナーは知らない。だが、彼女と同じようにどうしても叶えたい願いを持つアイリスデイナーはカティアを死なせるべきではないと後方へと送る事を決めたのだ。そして、カティアの目的を唯一知るテオドルも後押ししたことでカティアは覚悟を決めた。

『シュヴァルツ05、09とともに離脱します』

『皆さんどうか？無事で……！』

二機が離脱していったのを確認したアイリスディーナは改めて伝える。

『よし、これで我々は一蓮托生だな』

『慣れあうつもりはない！ 私は出来る事をしたままで……！』

『やっぱり同志中尉はそのくらい張り合いがないとね』

グレーテルはアネットの返しに照れくさそうにしているがどちらにしろここからは一機の撃墜が即座に死につながってしまったらしい。危険地帯である。全員が覚悟を決めて突撃を行おうとした時だった。

『右前方より友軍機！ フツケバインです！』

『ちょうどいいところに来たな。ベルンハルト大尉！ レーザー級の殲滅に手を貸してもらえるか？』

友軍機、フツケバインは健在のようで数を保って跳躍をしていた。そこにヨアヒムからの通信が入るが内容はアイリスディーナ達もやろうとしていた事だった。

『無論だ。我々はレーザーヤークトを主任務とする部隊だ。この状況での戦闘は望むところだ！』

『いいねえ！ 東ドイツ最強の部隊にお供するんだ。俺たちも気合い入れていくぞ！』

『行くぞ！ 総員！ 攻撃開始！』

フツケバインと合流した第666戦術機中隊は一斉射撃を開始する。そして、フツケバイン強いてはキュルケ達はシュヴァルツエスマーケンという東ドイツの強さを知る事となる。

『あれが旧世代機の動きか!? 一体どれだけの操縦技術なんだ……！』

『東ドイツ最強の称号はプロパガンダだったわけではないのか……』

旧世代機を使っているとは思えない動きにフツケバインの面々は何故東ドイツがここまで持ちこたえられていたのかを理解した。東ドイツでは徴兵によって兵の数こそ豊富に存在するが戦術機部隊は第666戦術機中隊を除いてまともに残っていない。それにもかかわらずここまで持ちこたえられた答えが目の前に存在した。

『……』

『キュルケ！ 避ける！』

『え？』

戦術機の運用のうまさを見せつけられたことでキュルケの心に何とも言えない気持ちがあふれてしまった。それが明確な隙となった。ヨアヒムが怒鳴った時にはすでに横から要撃級が迫ってきており、その腕を振り上げていた。

とつさに迎撃しようとしたがそれよりも先に腕が振り下ろされた。あ、死んだとキュルケは悟ってしまい、目の前に振り下ろされる腕を呆然と見る事しかできなくなった。そして、その腕が振り下ろされ……

「ぼさつとするな！」

『……な？』

る前にアルフレートが両腕に持った剣で切り落とし、次に胴体を切り裂いて絶命させた。あまりにも一瞬で起こった事にキュルケは何が起きたのか把握できなかったが助けられたことだけは理解できた。「今は一機の撃墜でも惜しい！ 死にたくないのなら最後まであきらめるな！」

『……あ、えつと』

「お前言つてたよな？ 私たちを巻き込んで死ぬなど。だからこそ今言つてやる！ 俺たちを巻き込んで死ぬな！ お前が死ぬば俺たちの死だ！ そう思つて行動しろ！」

そういうとアルフレートは機体の背を向けて跳躍した。嵐の如き勢いに圧倒されていたがキュルケはすぐにハツとすると顔を真っ赤にした。

『わかっているわよ！ テロ国家に負けてられないわ！』

キュルケは怒りを感じつつ機体を動かしてついていく。復活したキュルケの活躍もあり、シユヴァルツエスマーケンとフツケバインは無事にBETA群を抜け、レーザー級がいるいる位置にまでたどり着いた。しかし、そこには北上していた要塞級が迫ってきており、更なる苦難がアルフレート達に襲い掛かるのだった。

第二十三話 「海王星作戦5・終幕」

「要塞級だ！ 数は8！」

『このタイミングで、か……。仕方ない。シュヴァルツエスマーケン！ レーザー級は任せた！ 要塞級はこちらで何とかしよう！』
『済まない……。』

『ふ、何。お前たちはレーザーヤークトはお前たちの得意分野なんだろう？ ならばさっさと殲滅してこつちを助けてくれよ』
『もちろんだ』

「では俺はフッケバインの手伝いをしよう」

お互いの役割を決めたがアルフレートは要塞級の方に向かうとあったが意味では当然と言えた。そもそも、アルフレートの戦術機は高速近接戦闘型である。そういう点で言えばレーザー級よりも要塞級の相手をするのは妥当と言えた。

『いいのか？ あんた監査官なんだろう？ 監査対象の傍を離れていいのかよ』

「問題ない。この状況で何を監視する？ それに、俺はこいつらを信じている。俺がいなくても東ドイツの為に行動するさ。むしろ俺としてはお前たちが受け入れてくれるかが心配だな」

『は！ この状況で戦力が増える申し出を断るほど俺たちに余裕なんてないさ！ 監査官殿のお手並み拝見と行かせてもらおう！』

「ならばしっかりと見せつけてやるよ。シュヴァルツエスマーケンについていける監査官の実力をな！」

その言葉とともにアルフレートは刃を展開。跳躍ユニットを吹かすと高速で要塞級に近づいていく。その速度は戦術機の出せる速度を超えており、まるでジェット機の如き速度であった。

そんなアルフレートの接近に気付いた一番近い要塞級が触手を振るってくる。50mも伸びるこの触手はレーザー級並みに厄介であり、避けるのも一苦労だがアルフレートは苦も無く躲すと唯一の武器を失った要塞級の懐にもぐりこんだ。

「はあああああっ!!!」

アルフレートは両腕の双剣を平行に構えると速度を上げ、力いっばいに足を切りつける。速度が乗っていたこともあり足は簡単に切断され、バランスを崩した要塞級は倒れこんだ。

『まじか……！ たった一機で要塞級を倒すのかよ!?!』

「当たり前だ。俺の機体は本来は要塞級を圧倒するための機体だからな！」

そう話している間にアルフレートは要塞級の真横から一気に突っ込む。要塞級はその体型上左右からの攻撃をうまく対処できない。アルフレートは向かってくる触手を再び躲すと足を二本切り落として見せる。僅か数分で要塞級を二体も無力化するアルフレートにフツケバインは何も言えない。

本当は決死の覚悟を決めていたつもりが蓋を開ければアルフレートの無双を見せつけられていた。今ではフツケバインは倒れた要塞級に止めを刺す作業を安全にこなす事しかやる事がなくなっていた。

そして、順調に要塞級がやられていく隣でシュヴァルツエスマーケンもレーザー級を順調に倒していた。

『レーザー級は残り何体だ!』

『残り20』

『17だ!』

『12!』

『10!』

『5!』

『2!』

『これで! 最後!』

要塞級という最大の障害がなくなった以上この程度の任務はいつもの事だ。テオドールが最後の一体を倒したことで左翼に出現した内陸部のレーザー級は掃討された。

『よし! 要塞級は……』

「今倒した」

そして、レーザー級の殲滅とほぼ同時にアルフレートによる無双も終了した。8体という絶望的な要塞級を相手にアルフレートは難な

く倒したようでフツケバインの処理が追い付いていないほどだった。『あつはつは！ どうやら東ドイツ最強っていうのは監査官も含まれるみたいだな！ 俺たちの決死の覚悟が無駄になってよかったぜ！』『もう、あきれるしかないわね……』

あまりにも圧倒的すぎるアルフレートの活躍にヨアヒムは笑い、キュルケはあきれていた。フツケバインの他のメンバーも同じように似た反応が返ってくる。

そこへ、重金屬雲がなくなったことで通信が回復したらしく、国連艦隊から通信が入る。

『国連軍より第666戦術機中隊、および第51戦術機甲部隊へ。レーザー級の殲滅を確認した。右翼においてもジョリー・ロジャースの活躍によりそちらも片付いた。沿岸部は取り戻した。つまり、すべてのレーザー級の殲滅を確認した。これより砲撃を開始する。巻き込まれないように退避されたし』

『こちら第666戦術機中隊。了解した』
『同じく第51戦術機甲部隊。了解だ』

レーザー級の完全殲滅。これが意味するのは砲撃により敵を片付ける事が出来るという事だ。つまり、絶望的とも言えたこの戦闘を勝利で終わらせることが出来るかもしれないという事だ。

シユヴァルツエスマーケンとフツケバインはすぐに戦域を離脱する。その数分後には砲撃が始まり、沿岸部・内陸部のBETA群を駆逐していく。包囲するように展開していたがゆえに一つ一つの敵は少ない。各個撃破されるようにBETA群は駆逐されていき、戦闘開始時には夜だったが夜が明けるところには一面にはBETAの死骸しか残っておらず、動いているものは皆無だった。

そして、それが意味するのは犠牲を出し、予想外の事態に陥ったが海王星作戦を成功させたという事だった。それが分かった瞬間、全兵が喜びの雄たけびを上げ、この勝利を喜ぶのだった。

「3年に及ぶ忍耐も終わりです」

目の前の男の言葉に、私は心臓を握られたかのような感覚に陥った。私の周りに、信用できる者は残されていない。信頼していた副官も気づけば中身が変わっており、まるでBETAに囲まれているような気分が陥ってくる。いや、実際にそういう状況ではあるな。

「海王星作戦は人類の勝利で終わりましたが目的は達成されました」

「……勝利を捨てて得た利益がある、と？」

「聞きますが人類にとつての勝利とは何でしょう？」

「……BETAを地球から駆逐する事でしょう。二度と地球に来れないようにできればもつと良い」

「ではBETAの勝利とは。実はこれは存在しません」

男の外見のくせに口調は女性らしさが見えるために違和感があるがそれを消し去らんばかりの恐怖が全身を襲ってくる。3年前のあの日から、私に心休まる時間は無くなっていった。

「そもそも我々は人類と戦争をしているとは思っていません。簡潔に言えば、開拓。この言葉がしつくりきます。人類が人のいない大地を見つけ、田を耕し、港を整備し、家を建てて街を形成する。人類とはその過程に存在する障害物でしかありません。田で言えば雑草、港で言えば不安定な足場。家で言えば埃、街で言えば災害。我々はその程度の認識なのですよ」

「……なるほど」

ふ、皮肉だな。人類はBETAの勝利で浮かれているが彼らからすれば戦争ですらない。雑草を取り除く際に手を切ってしまった程度なのだ。では手を切らないように手袋を填めてもう一度やりなおす。その程度でしかないのだ。

「それでは予定通りに。決して第666戦術機中隊の面々を殺さずに捕らえるように。モスクワ派及び党は我々が対応します。よろしいですね？ ハイन्ツ・アクスマン中佐」

「もちろんさ。君達の手を取ったあの日から覚悟は出来ている」

さあ、始めようか。人類最大の裏切り者と言われるだろう私が参加する、東ドイツの完全消滅作戦を。

第二十四話 「動き出したBETA」

海王星作戦が成功に終わったことで、その立役者と言える第666戦術機中隊は英雄として扱われた。特に要塞級をたつた一機で8体も倒したアルフレートは表彰されるなどの栄誉を得ていた。

そして、グダンスク周辺からBETAが消えたことで大規模な戦力を留めておく必要がなくなり、第666戦術機中隊は東ドイツへ帰還する事となった。

「リイズはシュタージの犬ではない。でなければ命をかけてまで仲間を救おうとはしないはずだ」

「なるほど……」

テオドールはこれまでのリイズの監視を行つた報告をアルフレートにする。作戦会議でも使われたこの部屋にはアルフレートとテオドールのほかにアイリスディーナとグレーテルもいるが全員の表情は厳しい。

海王星作戦の序盤、橋頭堡を確保する際に要塞級に背後を取られたカティアをリイズは守つた。視界が悪く、味方を見失っていたという状況だったこともあり、わざわざシュタージの犬が助けに動くとは考えられなかった。テオドールはそれを以てリイズを判断したのだ。

そして、そのことに一定の納得をアルフレートは見せたがその表情はまだ疑っているのが見て取れた。

「……まあ、今はそれでいいだろう。どちらにしろ今の東ドイツに余裕はないからな。イエツケルン中尉」

「はっ！ エーベルバッツハ少尉、これはいまだ一部のものしか知らないことだが、新たなBETA群が発見された。モスクワハイヴから出てな」

そういうとグレーテルは詳細なデータをプロジェクトククターを使って画面に映し出した。そこにはモスクワから東ドイツまでの東欧の地図があったが、その大部分がBETAの占領地気を意味する赤い色で染まっていた。

「モスクワハイヴから西進する群はおおよそ15万だ」

「15万!? 海王星作戦の時よりも多いじゃないですか!」

「それだけではない」

驚くテオドールだが最悪な事にまだ悪夢の如き情報があった。

「海王星作戦の直前に発見されたのだが、ソビエト連邦領ミンスクに新たなハイヴが建設された」

「っ!」

「今はまだフェイズ1。建設間もないがいずれこの欧州を飲み込む前線基地となるのは明白だ」

「くそ! 何でこんな時期に……!」

「おそらく決め手はポーランドからの撤退だ。BETAは前線から遠く離れた場所にハイヴを作る傾向にある。これまではポーランドと近く、モスクワハイヴからでも問題ないと判断されていたのだろう」
「だが、ヴィスワ川防衛線からの撤退を受けて距離が遠くなった結果……」

「ハイヴの建設を行ったというわけか」

状況は最悪に近い。ミンスクハイヴを何とかしようにも前線からは遠く離れている。海王星作戦を行う前であれば無理やりにも攻略する事も出来たかもしれない。しかし、発見は海王星作戦の直前である。今にして思えばアクティブライフエンズ時に大量にBETAが現れたのはミンスクハイヴを攻撃する余力を残さなかったためだったのかもしれない。テオドールはそんな風にさえ感じていた。

「そして国家人民軍も最悪だ。海王星作戦の終了後、シユタージによつて複数の将校が逮捕された。容疑は反体制派の結成、およびクーデターの未遂だ。しかもシユタージの手は党にまで伸びた。党も軍も大きな痛手を受ける結果となった」

「ここにきて権力争いかよ」

「ここにまで来ても、だ。海王星作戦だつて軍が影響力を保持するためのものだったからな」

「最悪の場合、軍の指揮権をシユタージに奪われるかもしれない。そうなればわが中隊は真っ先に解体されるが海王星作戦で我々の価値は高まっている。大義名分もなく解体をするはずが……!」

アイリスデイナーがそこまで言ったときだった。船内全体にけたましいブザー音が響き渡った。

『総員！ 警戒態勢！ 総員！ 警戒態勢！ 各員は所定位置にて待機せよ！』

そのブザー音を聞き四人は外に出る。外ではアネットにカティア、リイズが既に出ており、船の進行方向先の空を見上げていた。

「何が起きた！」

「あ！ テオドールさん！ 戦術機が……！」

空を見上げれば10機ほどの戦術機が向かってきていた。その前方には一機のヘリがあり、こんなことをする組織が何なのかをアルフレートは理解した。

「シユタージか……！」

「あれは……。シウトウルムヴィント戦術機中隊！」

「アクスマン中佐か……！」

各員の予想通り、戦術機の護衛のもとヘリが着陸するとそこからアクスマン中佐が姿を見せた。彼に尋問を受けたことがあるテオドールは厳しい視線を向けており、知らないといった反応を見せたリイズもテオドールが尋問を受けたと聞いて眉を潜めている。

「何か御用ですか？ アクスマン中佐」

「どうやら警戒させてしまったようだな。何、私は職務を遂行しに来ただけさ」

前に見た時よりもやせた印象が見えるアクスマン中佐はアイリスデイナーとアルフレート両方に視線を向ける。

「アイリスデイナー・ベルンハルト大尉、それとアルフレート・ヴァルデ少佐。君たち二人を国家反逆罪の容疑で拘束させてもらう」

「……一応聞きますが詳しい理由は？」

「ベルンハルト大尉はこの前にとらえた反体制派の将校が協力者として名前が挙がったからさ。そしてヴァルデ少佐。君はもつといけな。監査官という立場を利用してアイリスデイナーの動きを見逃していたどころかシユタージ内部にも協力者を作っていたのだからね」

「……そのようなことがあると本気で思っているのですか？」

「思うも何もすでに証拠は拳がっている。シュタージ内部の不和は君の逮捕でもって完全に収まるさ」

「……まさか、モスクワ派を?!」

シュタージの動きは察知していたはずだった。しかし、アクスマン中佐の動きは早すぎた。既にモスクワ派は壊滅状態にあった。というのもモスクワ派に属していた者が密告。反体制派への協力をベルリン派に伝えたことでベルリン派によってモスクワ派の主要メンバーは逮捕または粛清された。シュタージ長官のエーリヒ・シュミットをはじめ、ベアトリクスの影響でモスクワ派に属していたヴェアヴォルフ大隊も解体。衛士は半数が逮捕、半数が粛清されていた。

結果として本人がどうかはともかくとして現状で自由な状況にあるのはモスクワ派から監査官として派遣されたアルフレートしか残っていないかったのだ。

「わかったかね? なに、安心したまえ。アイリスはBETAの動きから恩赦が決まっている。第666戦術機中隊はこれまでのような働きを十分に出来るだろうさ」

「……そうなりたければ言う事を聞け。そういう事ですね?」

「そう受け取ってもらっても構わないさ。それに、そこにいるリイズ・ホーエンシュタインと言ったかな? とても怪しいとは思わないかね? 本来、家族は同じ隊に所属できない。誰かしらの仲裁がない限りね」

「っ!!」

突然話題を振られたリイズはテオドルの腕にしがみつく。そんな彼女にアクスマン中佐は笑みを浮かべながら近づいていく。

「久しぶりだね、エーベルバッハ少尉。そして初めましてホーエンシュタイン少尉」

「……お久しぶりです、同志中佐」

「……」

「おや、すっかり警戒されてしまっているな。まあ、それも仕方ないか。だが、どちらにしろ君については話は聞いているよ。シュタージのスパイ」

「！」

「……かもしれないとね。いやはやシクタージ内部の不和は無くなつたとはいえ全員のひも付きを知っているわけではないのでね。私も誰が君を派遣したのか知らないんだ」

「っ！ 私シクタージの犬なんかじゃ……！」

「そうかい？ 怪しい経歴の君を誰が信用するといふのかね？ 私とて君を疑っているし、状況によっては君を消さないといけない」

「なっ!? 何を言つて……！」

「何しろ君が不和を招いた者たちのひも付きなら君も反体制派に協力していたかもしれないのだから」

つまり、アクスマン中佐はモスクワ派が派遣したスパイであれば肅清すると言っているに等しかった。そんな彼の態度にテオドールは怒りを覚えるが仮にも相手は階級が上である。手を出すことは辛うじて思いとどまった。

「……アクスマン中佐。この部隊は私が監査をしていました。何か問題があればすぐにでも報告をしています」

「確かに、君は思想はともかく職務には忠実だった。そこは評価しているとも。だが、怪しいのは事実だろうか？」

「中佐はここに監査官がいる部隊にいる隊員を尋問しに来たのですか？ 覚悟はどうに決まっています。行くのであればさっさと行きましょう」

「……そうか。ではアイリスとともにご同行願おうか」

アルフレートの言葉にアクスマン中佐は同意してアイリスデイナーとともにヘリに乗り込んでいった。そして、その様子を見ていた第666戦術機中隊の面々は不安そうな表情をして、それもアネットは今にも泣きそうな表情で見送るのだった。

一つの異物が混じっていることも知らずに。

—さあ、準備は整った。

—作戦実行のために障害となる奴らは消えた。

—スケープゴートも用意した。

—そして、拾った哀れな子羊の願いを果たす準備も出来た。
—始めよう。

—東ドイツのすべてを奪い取る、 “終末の革命” を！

第二十五話 「決戦前夜」

アルフレートの逮捕後、彼が戻ってくることはなかった。アイリス・デイナーはアクスマン中佐が言ったとおりに恩赦を受けてすぐに釈放された。しかし、このことで危機感を持った彼女たちは第666戦術機中隊が存続できるように動き出した。その手始めとして英雄として名を残したこの部隊を教導隊にすることで戦術機部隊の質の向上を図るという提案をすることになった。

教導隊となればシュタージとてうかつには手が出せなくなると踏んでの事だった。当初こそシュタージの根回しにより失敗しかけたものの、交渉を担当したグレーテルが相手側の不祥事で脅す事により無事に達成できた。

そして、交渉を行ったグレーテルに同行したテオドールは帰還するとすぐにアイリス・デイナーへと報告を行ったが、その帰りに彼はリーズに呼び出された。

「……随分長い間話してたんだねお兄ちゃん。ね、ベルンハルト大尉となにかあるの?」

「?」

「やっぱりお兄ちゃん、シュタージと戦おうとしてない?」

「っ! 何を言ってるんだよ! 俺は中隊長に任務の報告をしてただけで……!」

前回にもされた質問。リーズはシュタージに逆らうかもしれないとテオドールに不安を見せていた。その時はそう言った事は本当になく、本音でしれないと言っていたが今回は違う。シュタージが本格的に動きを見せてきた以上彼はアイリス・デイナーが参加していた反体制運動に参加することを決意していた。

そんなテオドールを信じているのかいないのか、リーズはテオドールの腕にしがみつき、頭を埋める。

「私、怖いんだよ。決戦も近いのに……。カティアさんやアネットちゃん、私の事を疑ってて……」

「……!」

「お兄ちゃんも、私の事スパイだと思ってる？」

「それは……！」

状況証拠だけを並べればリーズはスパイと断言出来た。それだけの証拠があった。だが、兄としてのテオドールはそれを否定したかった。

「そうだよ。シュタージに何をされたか分からないだもん。信用できるわけないよね」

「違う！ お前は俺にとって大事な家族だ！ 俺はお前を信じてる！」

「お兄ちゃん……！」

「みんなだつて、お前の事を望んで疑ってなんていないさ」

「それ、本気で言ってる？」

「っ!?」

二人の会話に入るように声をかけたのはシルヴィアだった。

「知らなかったわ。あんたたちにあんな過去があったなんて」

そういうとシルヴィアはリーズに拳銃を向けた。

「来い、リーズ・ホーエンシュタイン。お前を拘束する」

「なっ!? どういうつもりだ!」

「不安要素を排除するのよ」

突然の凶行ともとれるシルヴィアの行動にテオドールはかばうように叫ぶがシルヴィアは何のことはないと言わんばかりに答えた。そんなシルヴィアに乗るようにファムも現れ、話し出す。

「自ら怪しさを暴露して話を逸らす。シュタージが考えそうな手だわ」

「そいつが武装警察軍の衛士なら、亡命者狩りをしてた可能性もあるわ。人間狩りをしてたようやつを、中隊においておける？」

「やめろ！ これからBETAと決戦だつてのに中隊の戦力が減れば……！」

「あたしがフォローする！」

ただでさえアルフレートというジョーカーを失っているのにここで戦力を減らすのか？ そんなテオドールの言葉を否定するように

アネットが言った。その後ろではカティアとイングヒルトもおり、シルヴィアの意見に賛同しているのがうかがえた。

「アクスマン中佐も言っていたけど本来、同一部隊に家族は配置しないの。誰かの意志が介在しない限り」

「それは……！ リイズ、違うよな？ お前がシクタージなんて……」
「当たり前じゃない！」

どんどんとかばう事も出来ない状況になっていき、テオドールはするようになるにリイズに問いかけるがそんな彼女は絶叫とも悲鳴とも言える声で叫んでいた。

「あんな奴らと一緒にしないで！ 私は！ 私は！ 本当に、シクタージじゃない！」

そう叫ぶと、シルヴィアの横を通り過ぎて走っていった。泣き叫びながら、テオドールはリイズの後を追おうとすうが、その行動をカティアが止めた。

「テオドールさん！ リイズさんは、私に問いかけてきたんです。大尉が何をしようとしているのかって」

「カティア……」

「テオドールさん。約束、しましたよね？」

カティアのすがるような視線にテオドールは何も答えられない。だが、彼は兄として妹であるリイズを見捨てるという選択肢は、取れなかった。

「済まない……。だけど、俺はリイズを見捨てる事は出来ない」

「テオドールさん！」

そう言つてテオドールはリイズの後を追う。この状況でリイズが行きそうな場所は自室の可能性が高いと彼はあたりを付けて彼女の部屋に向かう。

「リイズ！ リイズ！」

テオドールはリイズの部屋の扉をたたき、しかし、部屋から彼女の声は聞こえなかった。代わりに何かが倒れる音が聞こえ、テオドールは悪いと思いつつも扉を開けて中に入る。

「リイズ……。いないのか？」

部屋は暗く、物が散乱していたが、ライズの姿はなかった。テオドールはあたりを見回しながら部屋の奥へと入っていくと、突然扉がしまり、後ろから駆け寄る足音と、抱き着かれる感触が伝わってきた。

「ライズ……！ 何を……！」

「お兄ちゃん……」

ライズは服を着ていなかった。裸の状態です。テオドールを後ろから抱きしめていたのだ。

「私、お兄ちゃんの事が好き。お兄ちゃんの為なら何でも出来るよ。……でも、今のままじゃ無理だよ。みんなに疑われながら戦えない」

「ライズ……」

「でも、お兄ちゃんが信じてくれるなら……。信じられるものをくれるなら……」

そう言つてライズはテオドールを見上げてくる。

「お兄ちゃん……」

抱いて」

そう、私はお兄ちゃんの為なら何でもする。なんでもできる。

「お兄ちゃん……」

「ライズ……」

お兄ちゃんのぬくもりが伝わってくる。いつからか抱いていた私の願い。それをこんな形で叶えたくはなかった。

「安心して、お兄ちゃん。私、お兄ちゃんが二度と戦わなくてもいいようにいっぱい頑張るから」

たとえばそれがお兄ちゃんの願いでなくても。罵倒されて軽蔑されたとしても私はお兄ちゃんが幸せになつてくれるなら何でもする。

「待っててね。お兄ちゃん。必ず、お兄ちゃんを幸せにするから」

そのためだつたら、私はシュタージでも、ソビエト連邦でも、欧州連合でも、アメリカでも……

B·E·T·A·でも手を組むわ。私のすべてを差し出すわ。

—恐ろしい女だ

声が聞こえてくる。

約束通り、私とお兄ちゃんを助けてくれるのよね？

—約束に足る戦果をお前は上げてきた。あとはお前が裏切らない限り私は約束を反故にすることはない

この手を取つてもう3年。引き返せる時はすぎた。私の事を人々が知ったら裏切り者と罵倒するでしょう。ふざけるなど怒鳴るでしょう。そして、こんなことを出来るB·E·T·Aを恐れるでしょう。でもそんなことはどうだっていい。私は、私はお兄ちゃんの為に……。

—最後の命令だ。第666戦術機中隊の面々を全員殺さずに捕らえよ。特にアイリスディーナ、グレーテル、アネットの3人は必ずな。これ以外の面々は状況によっては死んでも構わない

……了解しました。必ず任務を遂行して見せます

—期待している。が、忘れる事はないように。君はいなくても問題は無いという事を

もちろんです。

……私は本来なら予想外の人物。使えるから使っただけ。不利になつたり今後の動きに支障が出るのなら捨てるだけの存在。だからこそ、私は頑張らないといけない。たとえば、この体が壊れたとしても

第二十六話 「決戦の時」

アネットは目の前に出ている数字に絶望する。

「右翼8万、中央14万、左翼8万。計30万。前に聞いた時よりも増えてる……」

前代未聞とも言える30万という大群。これを相手する東ドイツは傷だらけの戦術機と寄せ集めの軍隊。それらが守る強固な防衛線のみ。とてもではないが勝てる相手とは言えない状態だった。

「モスクワハイヴから西進したBETAは予想外にもミンスクハイヴのBETAと合流。30万という群れを3つに分けてポーランド領内を進軍中。背後にはベルリンがあり、後退は許されない。そこで、軍は保有するほぼすべての戦術機をゼーロウ要塞陣地に集結。全戦力を以てこれを迎え撃つ」

「グダンスクの基地はどうなっているんですか？」

「そちらは30万のBETAとは別の群れが集まっている。援護は期待できない。だが、そこが引き付けられているからこそ30万で済んでいるとも言える」

あまりにも敵の数が多すぎた。これを守り切る事が本当に出来るのか不安になるがアイリスディーナが状況を説明したヴァルターに代わり話を続ける。

「作戦を前に、中隊について2つ報告がある。イエツケルン中尉は戦力補充の政治的交渉の為にしばらくベルリンに滞在する事になった。中尉の抜けた穴はファム中尉がフォローする事となる。そして先ほど、わが中隊が教導隊に編入されるという内示が下った。いずれ対BETA戦だけではなく、教育支援にも関わる事になる」

それはつまり危険な前線を離れられることを意味している。そのためか、隊の面々の表情は明るい。誰だつて死と隣り合わせの戦場よりも後方での教導の方がいいと感じるのは当然と言えた。

「すべては貴様たちが上げた武勲あればこそだ。私は誇りに思う。だからもう一度、その力を貸してほしい……。総員傾注！ 祖国の存亡はこの一戦にかかっている。最強たる我々に敗北は許されない。不

罅な異星起源種どもに、シュヴァアルツェスマーケン黒の宣告を降してやれ！ 祖国万歳！」

「「「「「祖国万歳！」「」「」「」」」」」

ブリーフィングが終わったが、その瞬間、シルヴィアは目の前に座っていたリーズと、その隣にいたテオドールに声をかけた。

「覚えておくことね。私はあなたたちを信じたわけじゃない。怪しい動きをしたら、その場で撃つわ」

シルヴィアの言葉には殺気が籠っており、確実にそういう状況となれば撃つという意味を感じ取れた。しかし、それに対するリーズは強気な笑みを浮かべてまるで挑発すかのように口を開く。

「お好きにどうぞ。私がシュタージの犬じゃないってことをちやあんと戦って証明しますから」

そういつてテオドールの腕に抱き着くリーズに前のような涙は見られない。覚悟を決めた強い心を見せる女性がそこにはいた。

とはいえそれに困惑するのは周囲の人間だ。だが、腕に抱き着かれたテオドールの様子とリーズの様子から察する事が出来たアイリス・デイナーはテオドールを呼び出し改めて確認をする。

「リーズ・ホーエンシュタインはシュタージの犬ではないのだな？」

「分からない、というのが現状だ。状況証拠だけをみれば黒だが、それにしてはおかしい点もある」

「……だから関係を持ったのか」

「っ！……ああ、そうだ。リーズは俺を愛していると言っていた。その想いは、本物だと感じた」

「愛情で以て相手を縛る、か……」

愛情というものが時にどんな強さを引き出すのか、そしてどんなものよりも硬い鎖となるかをアイリス・デイナーは理解している。テオドールのいう通りであればリーズを十分にコントロールすることも可能だと考える。

「……分かった。ホーエンシュタイン少尉の件は貴様に一任する。出撃は一時間後だ。準備をしておけ」

「……了解」

テオドールは義妹との関係を持ったこと、その義妹がシュタージの

犬かも知れないという不安を持ちつつもそうであってほしくはないという希望を胸からその不安に蓋をするのだった。

ゼーロウ要塞陣地は東ドイツ最後の防衛線である。ここはゼーロウ高地によってレーザー級の射線が切れている事から高地を越えない限り敵の攻撃が来る心配はない好条件の場所だった。

しかし、それはレーザー級が越えなければの話であり、越えれば多大な被害を受ける事は必須と言えた。

火砲やミサイル火器により近づいてくるBETAを次々と吹き飛ばしていく。対するBETAも30万という数は伊達ではなく、本当に減らせているのか不安になるほどの大群で以て押し寄せてくる。その様子は戦車級の多さと雪の白さも相まってまるで赤い津波のような勢いであった。

さらにBETAは重レーザー級という、装甲・火力・射程がレーザー級を軽く凌駕するBETAを繰り出して来る。本来、届くはずのない距離から狙撃されていくために戦術機に大きな被害が出始めた。

それを受けて、第666戦術機中隊が動き出した。

『総員傾注！ これより第666戦術機中隊は重レーザー級に光線級呐喊を開始する！』

『重レーザー級相手に?!』

「あんなの私たちだけで倒せるんですか!？」

『私たち以外に誰が出来る！ 総員覚悟を決めろ！ ここが正念場だ』

アネットの弱気な言葉をアイリスディーナは一蹴する。実際、レーザーヤークトを行って帰還率が高いのは第666戦術機中隊以外にいない。他は失敗するか成功しても帰還できないかのどれかだ。そういう意味では適任と言えるかもしれないがだからと言って相手は重レーザー級である。不安になるのもしようがないと言えた。

しかし、アネットの脳裏にふとよぎる顔があった。アルフレートだ。現在、彼がどのようなになっているのか、それは分からない。そも

そもシュタージ方面は完全にアルフレートが情報収集や同行の確認を行っており、アイリスディーナ達にそちらの伝手はない。それゆえに、彼女たちは第3者からシュタージの情報を得るしかない状況にあった。

それゆえに、思い人を連れていかれてからのアネットは目に見えて落ち込んでいた。今も尋問という名の拷問を受けているのではないか？ そう考えるだけで彼女の心は張り裂けそうなほどだった。

そんな彼女がこうして戦術機に乗って戦闘できているのもまた、アルフレートへの思いからだ。アルフレートがベルリンにいる可能性が高い。もし、ここを突破されればアルフレートが食い殺されるかもしれない。それだけはさせたくない。そういう思いが彼女に力を与えていた。

『行くぞー！』

アイリスディーナを先頭に重レーザー級へと呐喊する。彼女たちを支援するように陣地からの砲撃が続いており、重レーザー級はそちらの迎撃を行っていた。重レーザー級は火力・装甲・射程においてレーザー級を上回っている。しかし、一つだけレーザー級に劣るものがあった。それはレーザー発射までのインターバルだ。レーザー級は12秒時間がかかるが、重レーザー級はその3倍の36秒かかる。レーザー級が3発撃つことが出来る時間を用いて発射するそのレーザーは強力となっているのだ。

それだけ発射に時間がかかるものだが、第666戦術機中隊が到着したとき、運よく重レーザー級はレーザーを発射した直後であった。『陣地からの砲撃が陽動となっている！ いまなら懐に飛び込めるぞ！』

第666戦術機中隊は一気に呐喊を開始し、重レーザー級に攻撃を開始する。完全に横を見せた重レーザー級の腹部に銃弾が突き刺さっていくが装甲も高いというのは折り紙付きだった。これらの攻撃を重レーザー級は無傷もしくは擦り傷程度で防いだのだ。そして、今の攻撃で第666戦術機中隊の接近に気付いた重レーザー級は標的をそちらに向けた。

「効果なし！ レーザーきます！」

『全機バックブースト展開！ 全力で後退しろ！』

全機が離れると同時に、重レーザー級はレーザー級の何十倍もありそうな極太のレーザーを放つ。それは余波だけで戦術機にダメージを与える程であり、これによりテオドールの機体は左腕に不調をきたすようになった。

『左腕に損害！ ですがまだ戦えます！』

『でもこちらの攻撃を受け付けないあの外皮にどうすれば……』

「あたしに任せて！」

ここでアネットは跳躍ユニットを吹かすと重レーザー級に接近する。そして、盾を捨てると両腕から双剣を展開させた。これはアルフレートが使っていた黒シュヴァルツェ・シュヴェルトの剣のギミックを応用したものだ。同じ近接戦闘を行うアネットにアルフレートが自分と同じ武器を扱えるようにしていたのだ。元々、最新鋭機であったために双剣もアネットが使う長刀よりも使いやすく、切れ味が高い物だった。

残念ながら双剣をそろえる事は出来なかつたが自分に何かあつても機体が無事なら第666戦術機中隊で役立ててほしいと常々言っていたことで双剣を譲りうける事になった。アネット本人も思い人の武器を使えば士気を上げられるだろうという配慮も存在した。

「はあああああああつ!!!」

そしてその思惑通り、アネットは雄たけびを上げると瞼を閉じようとする重レーザー級に右手の剣を突き刺す。中心部という一番閉じるのに時間がかかる箇所を刺された重レーザー級は痛み悶えるように振り回そうとするがやがて動かなくなった。

「重レーザー級1体撃破！」

『こちらシュヴァルツ05。一体撃破した』

『こちらも一体撃破した。倒せない相手ではない！ 次に行くぞ！』

アイリスディーナの言葉通り、重レーザー級は倒せない相手ではない。外皮は確かに硬いがそれでも突撃級の正面装甲には劣り、レーザー以外の攻撃手段を持たない。戦車級のように数が多いわけではなく、要撃級のような素早さもない。だがそれでも消耗は覚悟しない

といけない相手ではあったが。

『残り7体……！ 手早く倒すぞ！』

「『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』」

第666戦術機中隊は残りの重レーザー級に呐喊を開始した。

第二十七話 「暗転」

「これで残り4！」

アネットは双剣を照射粘膜を守る保護膜ごと貫く。僅かに硬い感触に当たったとに剣の根元まで深々と突き刺さったことで重レーザー級は活動を停止した。

『弾薬・推進剤残り2割以下！ これ以上の戦闘は……』

『……仕方ない。テオドール。アネットに続いて近接戦闘による呐喊をしてもらう。我々はその援護を行う』

『了解』

「中隊長！ 私の武器を使ってください。どうせ双剣ばかりでほとんど使っていないので」

『済まない。では借りるぞ。……総員！ 二人の援護だ！』

アネットの武器を受け取ったアイリスデイナーはそう言って銃撃を開始する。残りの弾薬量からこの射撃は数十秒しか持たない。その間に決着をつけるべくアネットとテオドールは呐喊する。

そしてアネットは今までと同じように双剣を突き刺し、重レーザー級をしとめ、テオドールも短剣を保護膜が開いた隙を狙って突き刺した。

『残り2体！』

「これで決めるー！」

アネットはそういうと一気に残り2体のうちの1体に近づいていく。そして、双剣を突き刺そうとするがこれまでの動きを見ていたのか。重レーザー級は体をくねらせて回避し、双剣は分厚い体に突き刺さった。それでは致命傷とならなかったよう保護膜が開き、アネットの機体に照射粘膜が向けられた。

「くっ！」

アネットは双剣を抜くとその照射粘膜を×字に切り裂いた。唯一の武器をやられた重レーザー級は痛みからか体をくねらすをそこを狙って再び双剣を突き刺した。

「死ねええええっ!!!」

絶叫とも言える叫び声をあげて双剣を突き刺すと、重レーザー級もついに動かなくなり、倒れこんだ。そして、限界を迎えたのか双剣の片方が曲がってしまい、取り出すのが困難となってしまった。

『こちらシユヴァルツ08。重レーザー級を撃破！』

「シユヴァルツ06同じく重レーザー級を撃破！　だけど剣が一本だめになった！」

『了解した。だがこれで重レーザー級は駆逐できた。弾薬も空だ。一時帰還するぞ』

『『『『了解！』『』『』』』』』

重レーザー級の撃破という功績をあげたものの、すでに弾薬はほとんどが空となっている。これ以上の戦闘は不可能と判断したアイリスデイーナは撤退を決め、全機が戦線を離脱していった。とはいえ重レーザー級の撃破により、最悪の事態は脱却したといってよく、ゼーロウ要塞陣地は確実にBETAを削っていくのだった。

「第666戦術機中隊、重レーザー級を撃破！」

「……………」

国家人民軍の政治総本部にいたグレーテルはその報告に胸をなでおろした。権力を強めるシユタージに潰されないうためにここまで奔走してきたグレーテルだがその結果としてこの大事な局面で隊のみなどと一緒に戦場をかける事が出来なくなっていた。だが、彼らは自分たちの役目をきっちりこなしているのがわかり、グレーテルは自分も頑張らないと決意を新たにした。

それが二度と実行される事はないと知らずに。

それは突然だった。

部屋の扉が突如として爆破されたからだ。

「な、何事だ!？」

グレーテルは扉の近くにいたことが災いして爆風で吹き飛ばされ

た。全身に痛みが走る中必死に扉の方を見れば武装した武装警察軍の姿があつた。

「動くな！」

「全員壁に手を付け！」

政治総本部で作業をしていた軍人たちはなすすべなく無力化されていくがグレーテルは銃を突きつけられてもそういう命令は受けなかつた。なぜ自分だけという疑問に答えたのは新たに表れた男の言葉だつた。

「グレーテル・イエツケルン中尉。一緒に来ていただきます」

「……誰だお前は？」

「もうすぐでそんな口も態度も取れなくなる相手、とだけ答えておきましょう」

それだけ言うとグレーテルは周りの男たちに拘束されて部屋を無理やり出されていく。途中、複数の爆発音が響き渡り、襲撃がここだけではないと理解出来てしまい、最悪の事態が訪れたと痛感した。

「クーデターか……」

政治交渉をしていく中で判明したシュタージによるクーデター。それを教えたフランツ・ハイムはなんとか阻止するか成立してもすぐに対応できるように動こうとしていたがシュタージの迅速な行動からベルリンの制圧はすぐだと理解できてしまった。

そして、政治総本部を出れば2機のシュトゥルムヴィントがおり、その足元に一台の車が停車していた。その車に入られると車は走りだし、政治総本部から離れていく。

「……」

「先ほどの呟きに答えましょう。我々の行いは確かにクーデターに見えるでしょうが違いますよ」

どこか女性のような口調で男がそういった時だつた。銃声と破壊音が響き渡る。グレーテルが後ろを振り返れば先ほどまで自身がいた政治総本部が2機の戦術機によって破壊されていた。

「なっ!? 一体何を……!」

「すでにベルリン内の主要施設は制圧か破壊しています。東ドイツと

「この国は機能不全に陥ったと言ってよい状況です」

「貴様ら……！ そんなことをすればどうなるのか理解しているのか！？」

「もちろんですよ」

男の言葉にグレーテルは動揺を隠しきれない。今武装警察軍が行っていることは東ドイツへの反逆どころか人類への反逆に等しい行為だ。とても正気の人間がするものとは思えなかった。

「あなた方東ドイツという人類側の人間なら怒って当然です。ですが我々は違います。この行為は我々にとつてとるべき行動なのですから」

「お前、何を言ってる……」

「いずれにしろ人類はまた一步滅亡へと歩みを始めます。我々の願い通りにね」

「……まさか！」

「では少しの間その美貌を隠してもらいましょうか」

グレーテルは最悪の予想を出した。しかし、それはあまりにも突発的すぎる。第一、そんなことが出来るとは誰も思っていなかったのだから。そして自らが感じた最悪の予測が当たっていれば、人類は勝てない。グレーテルはまるで地面が崩れていき、底なしの沼に引きずり込まれるような感覚を覚えながら両脇に乗った武装警察軍によって顔に袋をかぶせられるのだった。

基地へと帰還した第666戦術機中隊の顔は明るい。何しろ危険な任務を終えて戻ってきたばかりなのだから。

整備兵たちは補給に向かい、隊員たちはつかの間の休息をとるべく戦術機を降りていく。

「よくやったなテオドール、そしてアネット」

「へへ、あのくらいいよゆうさ」

「俺としてはギリギリだったかな。さすがに重レーザー級相手に短剣は厳しすぎたな」

今回のMVPとも言える二人にアイリスデイナーは称賛した。今回は普通のレーザー級相手ではなかったが誰一人として欠けず、それどころか全滅させれたのは大きいと感じていた。いまだ予断を許さないゼーロウ要塞陣地だがこのままいけば十分に守り切れると感じていた。

「補給と機体の修復が完了すればまた出撃となるだろう。それまでは休むといい」

「うーん。そうさせてもらおうかな」

「アイリス、少し話したいが良いか？」

「ああ、もちろんだ」

「あれ？ あたしはお邪魔？ なら離れるよ」

テオドールの真剣な表情から、何を勘違いしたのかアネットはニヤニヤと笑みを浮かべながら遠くに見えたイングヒルトのもとに走っていく。あとでヴァルデ少佐の話でからかってやるとテオドールは思いつつアイリスデイナーに向き合った。

「決めたよ。俺はあんたについていく。あんたとカティアの夢のためにな」

「テオドール……」

アイリスデイナーの理想。それは東ドイツと西ドイツの統合というカティアの理想と似ており、このシュタージュによる監視国家を終わらせたいというものだった。それはもともと彼女の兄の夢であったが夢半ばでシュタージュにバレた彼はアイリスデイナーを守るために自らを密告させたのだ。そんな兄の意志を継いでここまでやってきたがそれもまもなくかなうだろうというところまで来ている。

「アイリス、俺はあんたの事が……」

テオドールがそこまで言ったときだった。突如として基地内の電源が切れ、あたりが真っ暗となる。突然の事にアイリスデイナーとテオドールはハッとした。

「総員！ 機体に戻れ！」

そうアイリスデイナーが叫ぶのと、天井が崩れ落ち、基地の入り口が爆破するのは同時だった。

「動くな！」

『全員大人しくせよ』

爆破された入り口からは武装警察軍が、崩れ落ちた天井からは完全武装のシュトゥルムヴィントが姿を現し、それぞれ武器を向けてきていた。

いきなりの事態に整備兵はあっけなく無力化され、第666戦術機中隊の隊員たちも自分の戦術機に乗る事さえできずに拘束されていく。

「くそ！ いきなり何なんだ！」

「テオドール！ 無事か!？」

結果、戦術機に乗り込めたのはテオドールとアネットのみだった。正確にはテオドールの戦術機に乗り込む形でカティアも拘束を逃れていた。しかし、そのコックピットにはシュトゥルムヴィントの銃口が向けられており、すぐにでも不審な動きを見せれば破壊するという意思が込められていた。

脱出は不可能。テオドール達に出来る事は残されていなかった。

「くそ！ どうすればいいんだ！」

『お兄ちゃん、降りて』

そんな手詰まりの状況に悪態をついたテオドールの耳に入ってきたのは知っている声だった。いや、この状況を思えばその声であってほしくはない。そんな思いすら感じつつテオドールは声の方を向いた。そして絶望する。

「リーズ……！」

『じゃないと、この女の安全は、保障できないよ?』

そこにいたのはテオドールの妹であり、シュタージの犬と疑われていたリーズだった。そして、彼女は銃をアイリスディーナの頭部に銃口を向けていた。それが何を意味しているのか、分からないテオドールではない。

「どうして……！」

『テオドール！ そっちは逃げられそう!？』

動揺するテオドールに通信が入る。それは同じく戦術機への搭乗

が出来ていたアネットだった。しかし、彼女のもとにもシュトゥルム
ヴァイントが銃口を向けていて動くに動けない状況だった。

「こっちもだめだ。動けそうにない。それと……。リイズが裏切っ
た」

『っ！……そう。言っちゃ悪いけど当然と言えば当然ね』

最悪だが予想出来ていた事でもありアネットに動揺はない。むしろこの状況をどう切り抜けるのか考えている様子だった。しかし、状況が好転するわけもなく、さらにもう一機が姿を現した。

その機体は黒シュヴァルツェ・シュヴェールトの 剣に似ており、同種の機体というのが外見から見て取れた。

『両戦術機に登場した第666戦術機中隊の隊員に告げる。降りろ』

「っ！ それで俺たちを拘束するってか？ ふざけるな！」

『では死ぬか？』

新たに表れた機体の衛士は容赦するつもりはないようで剣を取り出すとテオドール達が乗る機体に突きつけた。

『っ！ シュタージなんか屈するわけが……！』

『そんなシュタージから派遣された男に好意を持った奴がよく言う』
『なっ!?!』

『まあ、私としてはその好意はとても好ましいものだった。私も普通の人間として生を受けていればその好意に応えられたかもしれない』
『何を、言ってる……』

そこまで言っていると、機体のコックピットが開く。アネットは嘘だと思いつつも目が離せない。最悪の予想が頭から離れない。信じたくないと頭が叫んでいる。

そして、絶望する。

『ではお前の思い人からのお願いだ。降りて投降してくれ』

コックピットから姿を現したのは、海王星作戦から帰還時に、シュタージに拘束されたはずのアルフレート・ヴァルデだった。

第二十八話 「裏切り」

「な、なんで……!?!」

『なんで？ その問いにはもともとこうなる予定だったからとしか答える事は出来ない』

アルフレートはいつものように淡々と伝えるがそれはこの場においては最悪と言えた。何しろ彼が言う言葉はアネットを絶望へと叩き落とす言葉となっているのだから。

『私は確かにモスクワ派から派遣された監査官だ。だからと言ってベルリン派ではないというわけではない』

「今まで、だましていたんですか？」

『騙していた、と言えはそうなるな。とはいえ私の目的は君たちを死なせないことだ。君たちに不利になるような情報は流していないし、報告もしていない。良好な関係を築けるよう行動してきたつもりだ。ただ、この瞬間だけ君たちに武器を向けているだけだ』

それでも、裏切り行為には変わらない。アネットはどうすればいいのか分からずに震えていると、アルフレートはため息をついた。

『……どうやら両機ともに出る気はなさそうだがそれでは困る。君たちには降りてもらおう』

そういうと同時に、両機のコックピットが自動的に開く、見れば遠隔操作の開閉版を弄っている武装警察軍の兵士がおり、それによってあけられている事が分かった。

「降りろー!」

「ぐっ! ううううっ!!」

アネットは無理やりおろされると地面に叩きつけられ、両腕を拘束された。拘束から逃れようともがけば兵士に押さえつけられてしまう。遠くを見ればテオドルとカティアも同じ様に拘束されており、これで全員が捕まったことを意味していた。

アルフレートは近くに降りるとアネットのもとへと歩いていく。アネットは信じていた相手の裏切りに涙を浮かべながらにらみつけていた。

「安心しろ。お前たちがこれから痛い目に遭う事はない。それに、これは救いでもあるんだ」

「っ！ 何が救いだ！ 裏切り者が！」

「この意味はすぐに分かる。連れていけ」

「来い！」

「くそ！ 離せ！ 離せよ！」

暴れてもがくアネットを兵士が二人がかりで連れていく。整備兵も拘束された状態で外に止まっているヘリへと乗せられていく。第666戦術機中隊の面々は複数のヘリにバラバラに乗せられてしまう。

やがてヘリは離陸し、基地を飛び立っていく。アネットと同じヘリに乗せられたのはカティアとファムであり、そんな彼女たちを複数の武装警察軍が取り囲むように座っている。

「アルフレート……。なんで……」

「アネットさん……」

好きな人に裏切られた。テオドルと同じように、それも信じていた相手に裏切られた彼女になんと声をかければいいのかカティアには分からなかった。

雰囲気の暗いなか、ヘリは東へと進んでいく。前線へと近づいていく様子がカティアは不思議に思い、思わずといった様子で武装警察軍に声をかけた。

「あ、あの……」

「……なんだ？」

「っ！ わ、私たちはどこに、向かっているんです、か？」

睨まれつつも最後まで喋ったカティアに兵士は意外にも律儀に答える。

「ミンスクハイヴだ」

「えっ!？」

「なっ!？」

だが、帰ってきた答えは予想外のものだった。ミンスクハイヴ。それはBETAの拠点であり、人類が気軽に訪れる事が出来る場所では

ない。こんな大人数で向かえば自殺行為ではないか。そんな凶行とも取れる行動をとろうとしている彼らにカティアもファムも絶句してしまう。

「途中にあるゼーロウ要塞陣地にて機体を交換する。さすがにミンスクハイヴまでへりでいくのは無理だからな」

「本当に、いけるといふんすか？ それに、あそこはBETAが……」
「問題ない。我々が到着するころにはすでに終わっている話だ」

この時、兵士が言った言葉の意味をカティアは理解できなかったが、ゼーロウ要塞陣地に到着してその意味を知る事になる。

一方、ゼーロウ要塞陣地は再びの危機に見舞われていた。重レーザー級が再び出現したのだ。それも数は倍。とてもではないが持ちこたえられるとは思えなかった。

「第666戦術機中隊は!？」

「そ、それが……! 何度も呼び掛けていますが応答ありません!」
「……」

ゼーロウ要塞陣地を預かる女性司令官は先ほどベルリンでクーデターが発生したという情報を得ていた。相手はシュタージであり、第666戦術機中隊は目をつけられていたことを思えばすでに拘束されていると判断すべきだった。

だが、だからと言って戦局が好転するわけではない。このままではゼーロウ要塞陣地が突破されるのも時間の問題であった。

「っ! 後方よりアンノウン接近! これは……! 戦術機です! シュタージのシュトゥルムヴェイントです!」

「シュタージの!?! 一体何をしに……! いや、もし救援に来たとしたら……」

女性司令官は突然の事態に驚くがこの状況でなら確実に救援だと考えたが相手はシュタージである。素直に受け入れる事は出来なかった。しかし、劣勢であることに変わりはない。

「……仕方ない。ではシュタージの戦術機に通信を……！」

受け入れる事を決めた瞬間だった。ゼーロウ要塞陣地全体を揺らすような振動と爆音が響いてきた。それも何度も何度もである。明らかにかな非常事態に誰もが慌てだした。

「何事だ!?!」

「せ、戦術機が攻撃を仕掛けてきました！ 要塞陣地の火砲が破壊されていますー！」

「馬鹿な!?! シュタージは一体何を考えているの!?!」

明らかに凶行としか思えない行動に女性司令官は悲鳴の如き叫び声をあげた。しかし、ゼーロウ要塞陣地の悪夢は続く。

「重レーザー級の攻撃です！ 上部の壁が破壊されました！ 一部融解していますー！」

「火砲の減少によりBETA群の勢いが増しています！ このままではすぐにでもここは突破されてしまいますー！」

「……」

女性司令官は覚悟を決めた。このままではこの陣地を守り切る事は出来ない。であれば放棄して撤退するしかない。

「政治総本部に通信！ ゼーロウ要塞陣地は陥落する！ 時間を稼ぐので市民の避難をさせるようにと！」

「そ、それが……。先ほどから政治総本部との通信が出来ない状況にあります。それどころかベルリンの重要拠点どれともです……！」

「なんですって!?!」

ベルリンとの通信途絶。それが意味するのは今ゼーロウ要塞陣地を突破されてはベルリンの市民は逃げきれないという事だ。女性司令官は東ドイツという国そのものが滅び去る様子を感じながらもそれでも最後の最後まで抵抗を続けると指揮を続けた。

それが無意味な抵抗であると理解しながら。

「ふむ、予想外にも抵抗は続いているのか……」

カティアたちがゼーロウ要塞陣地に到着したときには地獄絵図と呼ぶにふさわしい光景が広がっていた。ゼーロウ要塞陣地は重レーザ級の攻撃を受けてところどころか融解しており、突撃級が衝突して出来たであろう穴から戦車級や要撃級がベルリンに向かって進んでいる。戦車級が壁に取り付き、もともと黒かった要塞陣地が真っ赤に染まっている。壁に出来た穴から内部に侵入している様子から抵抗が続いているのが分かるが既に大勢は決まっている状態だった。

そして、カティアたちを驚愕させたのは明らかに銃火器で破壊された火砲類がある事である。そして、それを行つた下手人であろうシウトウムヴィントがゼーロウ要塞陣地の周りを飛んでいる。

「そ、そんな……！」

「これじゃ、ベルリンは……！」

東ドイツは全域に渡り、シユタージによって疎開が禁止されているために前線に近いベルリンには今も多くの市民が残っている。それゆえに、今も行列を作つて進み続けるBETAによってどうなるかなど一目瞭然だった。

「では着陸しましょうか」

「え!？」

そして、男の言葉に再び驚愕する。下はBETAでいっぱいだ。見ればレーザ級や重レーザ級もあり、迎撃されていないのが不思議なこの状況で男はあろうことか着陸すると言い出した。そんなことをすれば着陸する前に撃墜されるだろう。

しかし、男の言葉にパイロットも素直に従い高度を下げていく。カティアはヘリの真下に大量のBETAが降りてくるのを待っている姿を想像しながら下をのぞけば、まるで着陸の邪魔にならないかのよううにBETAが着陸付近を避けて行動していた。

「何が、起きて……！」

「まさか……！」

まるで、このヘリを味方と認識しているかのような動きにカティアは困惑するばかりだがこの一連の流れでファムは最悪の予想にたどり着いた。それは人類が犯してはいけない裏切りであると同時に絶

対に出来ないと思われていた行為。

「……あなたたちは、BETAの味方になったのですか？」

そう、BETAへの恭順だ。何をどう取引したのかは分からないがその予想がこの状況では一番しつくり来た。でなければ自分たちはゼーロウ要塞陣地に近づいた時点でレーザー級に撃ち落されているはずなのだから。

そんなファムの問いに男は笑みを浮かべる。どこか女性らしい、男らしくない笑みはまるでファムが的外れな問いをしているのを笑っているかのようだった。

「味方も何も私たちは最初からBETAの味方ですよ」

第二十九話 「ミンスクハイヴ」

「さあ、降りてください」

ヘリが着陸すると男によって降りるように促される。反抗しても無駄だと理解したファムを先頭に、いまだ放心しているアネットをかばいながらカティアが続いた。ゼーロウ要塞陣地では爆発音や銃声が聞こえてくるがそれはかなり遠くの方からであり、それが意味するのはこの周囲一帯がBETAに制圧されているという事でもあった。

とはいえやはりというべきかBETAがカティアたちに襲い掛かってくる事はない。まるで興味がないと言わんばかりに戦車級や要撃級が通りすぎていくだけだ。暫くその場で待っていると他の面々もヘリから降ろされていた。この場には武装警察軍とその戦術機、第66戦術機中隊の面々がいるが端から見れば異様な光景だろう。周囲にBETAがいるのに誰一人として襲われていないのだから。

「では行きましょうか。お迎えが来ているようですので」

男は地響きのようなものを感じたためかそう言うどゼーロウ要塞陣地へと向かって歩き出す。そんな男について行けと言わんばかりに兵士が銃口を向けて無理やり歩かせる。そこに戦術機から降りたアルフレートとリイズも合流し、それなりの人数で歩いていく。

「……」

アイリスディーナは表情を崩さずに周囲を確認する。もちろん兵士にバレないように視線だけを動かして。

「(……シユタージは一体いつ取り込まれた?)」

アイリスディーナはシユタージがBETAに屈したか乗っ取られたと推察していた。しかし、比重を占めているのは後者の方だ。でなければ必ず内通者が出るはずなのだ。誰だつてBETAに心から従うわけではない。必ず心が耐えられない者が出てくる。だが、周囲の兵士にそんな様子は見られない。それはつまりこの者たちは人類を裏切る行為に何も感じないという事でもあった。アイリスディーナはその行動を見てそう結論を出していたのだ。

では、いつ取り込まれたというのか？ BETAはいつから計画していたのか？ そして、BETAの手は世界のどこまで延びているのか？ アイリスディーナはそこまで考えてふと、乾いた笑みを浮かべた。

「（もはや私たちに出来る事はない。兄さん、あなたの理想を叶えられなくてすみません……）」

アイリスディーナは兄に生かされたというのにこうして夢半ばで倒れようとしている状況を謝罪した。東ドイツの周辺は拘束され、ここに連れてこられるヘリの中から見る事が出来た。見たくもない光景だったがアイリスディーナは絶対に忘れないと目に焼き付けていた。

破壊されたゼーロウ要塞陣地の穴をくぐり、東側に出るとそこにはすでに先客がいた。

「っ！ イエツケルン中尉！」

「……お前たちも、捕まったのか」

そこには複数の武装警察軍と闘士級戦車級に囲まれているグレーテルがいた。その表情には生気がなく、すべてをあきらめているようにも見えた。

「いつからここに？」

「ゼーロウ要塞陣地がシュタージの攻撃を受けて直ぐだ。……私は見ている事しかできなつたがな」

「この状況であれば仕方がないことだ」

「……あー、よろしいですか？ そろそろ行きますよ？」

話を始めたアイリスディーナとグレーテルの間に男が割り込む形で会話を終了させた。

「……で？ 我々はここからどうすればいいのだ？ まさか歩いていくと、言わないよな？」

「もちろんですよ。きちんと乗り物は用意しています。……どうやら来たようです」

男がそういうと地響きが響き渡る。まるで地震の如き揺れに誰もが腰を低くしたり膝をついて倒れないようにする中、それは現れた。

地面が破裂したように吹き飛び、巨大な肉の口が現れたのだ。それは要塞級を軽く飲み込み込める程巨大で人間等蟻以下の大きさにしか感じない巨体だった。

「な、なんだこれは……!」

「うーん、そうですね。母艦級キャリアーでも呼んでください。長距離輸送用のBETA版鉄道だと思ってもらえればいいですよ」

「これが、輸送用だ?!」

アイリスディーナは戦慄した。この一体でどれほどの輸送能力があるのか？ それ以前にこれがどれほどの巨体なのか想像できない。地面から出している部分だけでもかなりの大きさなのにそれが長大でもあったら？ こんなのが前線から遠く離れた場所に現れば人類は大混乱となる。

そんなアイリスディーナの驚愕をよそに男が再び歩き出し、キャリアー級に向かっていく。しかし、あまりにも巨大すぎて乗り込むのは不可能だ。そもそも乗り込むのがあの口として無事でいられる保証はあるのか？ そんな心配が出てくるがその辺はきちんと対応されていたようだ。

「ではこれを登ってもらいましょうか」

それは肉の階段とも呼ぶべきものであり、男はそれを登っていく。段数はそれなりに多く、登りきるころにはそれなりの運動となつてしまった。

階段の先には電車のようなシートがあり、そこに腰を掛けるようになっていた。実際、男が既に座っており、寛いでいた。

「さあさあ！ 遠慮せずに座ってください。でないと振動で大変な事になってしまいますよ?」

「……」

歩いているだけでも肉の感触が気持ち悪いというのに座らないといけないことにげんなりしつつ全員が座る。その際に、テオドールの隣にはリイズがくっついて座り、アネットの隣にはアルフレートが座った。

「……今更何よ」

「何か問題があるか？ 少なくとも我々はお前たちを傷つけようとしているわけではない」

「……裏切ったくせに」

アネットはそう言いつつもまだ心の整理が出来なかった。裏切られたことは衝撃だったし、何でという気持ちにふざけるなど憎む気持ちもあった。だが、それでも隣にアルフレートが座るだけで好きだという気持ちがあふれてくる。そのことがアネットには腹正しく、そしてもっと近くにいたいと思ってしまう感情がぐちゃぐちゃになってくる。

「……」

「それじゃ行きましようか。しつかり踏ん張ってくださいね」

男がそういうと同時に、キャリアー級の口が閉じる。一気に真っ暗となるが非常灯のような赤いライトが付き、暗くて周囲が見えないという事はなくなった。そして、キャリアー級が移動を開始したらしくとてつもない振動が襲い掛かってくる。

「きやあつ!?!」

「ぐっ!」

「これは……!」

想像以上の揺れに座っていた何人かが倒れこんでしまう。それでは立っている武装警察軍はもつと危険だが彼らは足を床とくつつけることで直立の姿勢を維持していた。

「本来は鉄道を走らせる計画でしたがこのキャリアー級が存在したことで取りやめになったのですが大きすぎますしやはり別の方法に変えるべきですね」

男がのんきにそんな話をしているがその言葉を聞いている余裕はない。第666戦術機中隊の面々はミンスクハイヴに到着するまでの間、すさまじい振動を受け続ける事になるのだった。

「酷い、めに……。あつた……。うぷ!」

辛うじてそうつぶやいたアイリスデイーナは我慢を超えたらしく胃の中身を吐き出した。これで全員が一度は吐き出した事になり、一番酷かったのがカティアとリーズだった。最初こそ生気のない瞳で兄であるテオドルとくっついていたリーズだが揺れを受け続けている間に一番最初に嘔吐し、周辺に胃の内容物をまき散らした。それによって一番近くにいたテオドルも貫ってしまい、更なる地獄絵図が誕生した。そして、その後リーズはカティアと一緒に胃液が残っていないのではないかと思うほど出しまくりに武装警察軍の兵士たちに肩を貸してもらって歩いていった。

「しかし……。これが、ミンスクハイヴか」

一月ほどしか経過してはいないはずなのに、ミンスクハイヴはフェイズ2まで建設が進んでいた。彼女たちがいるメインホールも地上から大分下にあり、日の光があっても届き切らないほどの深さであった。

「……それで？ 私たちをここに連れてきた理由はなんだ？」

「それはまもなく分かりますよ」

一度吐いてすつきりしたらしいアイリスデイーナは毅然とした様子で男に問う。このメインホールにはハイヴのコアである頭脳級以外には存在せず、頭脳級から放たれる青白い光で光源を確保している状態だった。

こんなところで一体何をするのか？ 何をさせるのか？ それが見えてこないアイリスデイーナ達に対して男は待つように言う。そして、それは来た。

「……予想外にも全員健在。一人くらいは死ぬと思ってたのにきちんと全員連れてきたんだな」

「っ！ だれだ!？」

声の方向をみれば頭脳級の上に一人の男が座っていた。アジア人らしいその男は笑みを浮かべると自己紹介を行う。

「やあ、初めまして。第666戦術機中隊の皆さん。私は重頭脳級BETA。カシユガルハイヴにて地球のBETAすべての指揮を執るものさ」

すべての元凶にして、人類が駆逐すべき対象が、そこにはいた。

第三十話 「終焉の時」

「お前が、BETAを動かしているという事か？」

俺の暴露に対して、金髪巨乳の……そう、アイリスディーナ・ベルンハルト大尉が驚いている。まあ、その気持ちは理解出来る。BETAの正体がこんな中国人だってなったらそりゃ誰だって驚くはずだ。とはいえもう彼女たちが俺の傍を離れる事は出来ないんだ。全部話しても問題はないだろう。

「正確にはこの体の中身、いや違うか。この体を操っているものがつてところだな」

「……つまり、それは肉人形で操っている方がBETAを使って人類を滅ぼそうとしているというわけか」

「人類と戦争ねえ……。はつきり言うけど我々BETAに人類と戦争をしている認識はないよ」

前にも言ったかもしれないがこれは開拓なんだ。人類とBETAではそもそも数も力も違う。戦術機がある以上多少は抵抗できるかもしれないが今の俺でこれなんだ本来の世界ならBETAはもつと勢力を延ばしているかもしれない。

「では聞くが何故攻撃してこない国家を放置する？ 貴様の行っている事はまさに戦争に等しいではないか」

「いや、最初からすべてを一気に開拓なんて無理でしょ。少しずつ開拓して、ある程度出来たら次に移る。分かるか？ つまり侵攻しないと言っているが俺たちはただ順番に攻撃しているだけなんだよ。その結果として面白い状況になったけどな」

「……」

手を出さないようにしただけで人類の結末は面白いように崩れ去った。君たちやリイズ・ホーエンシユタインを拾ったときから、海王星作戦までの間に種は巻き終えた。この世界の物語がいつ始まるのか分からない。今すぐか、10年後か、20年後か、分からないが10年以上先なら主人公が勝利する未来は訪れない。

そういう意味で言うならアイリスディーナ達第666戦術機中隊

はまさに物語の主人公だ。キャラもいいし物語としてふさわしい設定が盛りだくさんだ。ちよつと男女比が偏っているけどギャルゲーのようなものだと考えれば納得だ。もしかしたらグロ有の18禁ゲームのようなものだったかもしれない。

だが、こういうものにはスピンオフや外伝はつきものだ。これだけ面白い世界なんだ。それらが5つくらいあつてもおかしくはない。俺が知らなかったからと言って存在しないとは限らないのだから。

「さて、本題に戻ろうか。君たちだってなんでここに呼ばれたのか不思議でしょ?」

多分全員が感じている疑問。何故自分たちはこうして生きてミンスクハイヴにいるのか。邪魔なのであればあの時に殺されているはずだと。そんな疑問に答えてあげよう。今の俺は目標が達成した高揚感で機嫌が良いからな。

「君たちには新たななる人類となつてもらおう」

「新たななる、人類?」

「そう。BETAに服従するのを良しとして絶対に反抗せずに制限された力・技術・感情で共存する存在さ」

「なっ!?!」

「私たちに裏切れというのか!?!」

驚くのも無理はないな。誰だつてこんな話をされても受け入れるのは困難だ。よつぽど人類に興味がないか、馬鹿でもない限り二つ返事で答えたりはしない。そしてこいつらが首を縦に振らないことも理解している。

「別に構わないだろう?むしろこれはチャンスじゃないか。何しろBETAによつて滅ぼされそうになつている人類は生存する事が許されたのだから。そして君たちはその一員に選ばれたのさ」

「ふざけるな!なんでBETAなんかに……!」

「アネット・ホーゼンフェルト少尉。別に良いじゃないか。君たちはよく戦った。海王星作戦なんて見事だったよ。せつかく包囲殲滅を返してやろうと思つたのにまさか返り討ちにされるんてね」

ぶつちやけ勝利云々はどうでもよかつた。とはいえ予定では勝て

るはずだったのに、ふたを開けてみれば人類に返り討ちにされている。あれには結構驚いたな。まあ、戦術の素人が現役の軍人に勝てるはずはないけどね。

「それに見てくれも良い。やっぱり生き残らせるなら美しい容姿と肉体を持ったものの方がいいしね。そういう点では第666戦術機中隊は完璧だよ」

「っ！ ふぎけるなあっ!!!」

なんだ、せっかく提案してやったというのにそんなに怒って。ほら、君の愛しのアルフレート君に押しえられているじゃないか。……ああ、そうだ。

「せっかくだ。ホーゼンフェルト少尉、君を今押さえているアルフレート君に関して説明をしてあげるよ」

「っ!」

「もうわかっていると思うけどそいつはこの体のような肉人形じゃない。俺が作り上げた本物の人間さ」

「……え?」

「まあ、BETAの肉体が使われているから純粋な人間とは言えないけど自立し、自己で物事を考えて感情を見せる。誰がどう見ても人間と言えるだろう?」

そう、アルフレート君は俺が作り上げた人間の一体だ。人間としては大分立派に仕上がったからアクスマン中佐を通して経歴を詐称。第666戦術機中隊に派遣したわけだ。

「ちなみにそこで兄に引っ付いているリイズ・ホーエンシュタインは純粋な人間だよ。ただ、偶然俺が差し出した手を握り、命が助かった幸運な娘だ」

「っ！ リイズは、BETAの手を取ったのか!?!」

「本当だよお兄ちゃん。だから言ったじゃない。私はシュタージの犬じゃないって」

あれは見ていて面白かった。確かにホーエンシュタイン少尉は嘘は言っていないかった。ただ、どこの犬かを言わなかっただけで。まあ、シュタージもほぼ俺が乗っ取っていたからシュタージの犬でも

あながち間違っではないんですけどね。

「っ！ 貴様は一体いつからこれだけ根回しを……！」

「最初に動いたのは数年前。本格的に動いたのは3年前。リーズを拾ってからだよ。あそこでアクスマン中佐を脅迫出来たのはよかった。おかげでシクターの掌握がスムーズに進んだからな」

「アクスマンも噛んでいるのか!？」

「尤も、そのせいでストレスを抱えて死にかけているけどね」

今は休養を与えている。ここまで頑張ってくれたんだ。その功績には報わないとな。彼が裏切らない限りだけど。ちなみに彼以外で人間はいない。みんな人間の皮を被ったBETAだ。ここまで数をそろえるのはめんどくさかったけどやれるもんだな。

「それじゃそろそろ君たちには協力してもらおうか」

「っ！ 私たちが貴様に協力すると思ってるのか？」

「思っていないよ。だから脳を弄って協力させるんだよ。」

まず、特殊な培養液に入れて触手を使って脳をいじくる。痛みに耐えられるように快楽を送り込みながらね。麻酔でもいいけどやっぱり作り変えられているのを感じられる方がいいかなと思っ……こつちにしたよ

そしたらあら不思議、君たちの性格・記憶・感情はそのままにBETAに絶対服従の人間が出来上がるというわけさ」

「っ！ 下衆が……！」

うんうん、みんないい表情をしているね。やっぱり美女っていうのはどんな顔をしてもいいもんだ。となるとこの美貌を永久保存できるように遺伝子も弄ろうか。永久に年を取らない。肌が劣化しない今の姿をそのままにね。

「待って！ お兄ちゃんも弄るの!? それじゃ約束が……！」

「まさか！ 君との約束だ。そのテオドル君が余計なことをしない限り何もしないさ。カシユガルハイヴにも二人で暮らせる空間を用意した。誰にも邪魔されずに永遠に二人で幸せに暮らせる空間をね。君の要望って注文多かったから少し大変だったよ」

「そう、それならいいわ」

「リイズ!? お前一体何を……!」

「ごめんねお兄ちゃん。でも、もう二度と苦しむ事はないからね。一緒に、永遠に幸せになろう?」

「おおー! 美女のヤンデレは素晴らしい! あのレイプ目を見れるだけでも拾った甲斐はあったな。」

「んじゃホーエンシユタイン少尉、奥にある部屋に行くといい。今のテオドール君は混乱しているはずだ。防音の寝室を用意した。好きに使って休ませるといいよ」

「っ! ……何から何まで感謝します」

「いいっていいって。君がお兄ちゃんの体に教え込んでいる間にこっちは済ませておくから。それじゃ、第666戦術機中隊のみなさーん。脳内改造コースにごあんない!」

「っ! そんなことを!」

「いやー! いやあああっ!!」

「くそー! こんなところで……!」

自分たちに起こる悲劇を知ったからか抵抗しようともがくけど無意味だ。手は拘束されているし武装警察軍の兵士もいる。脳さえ破壊しなければ蘇生すら可能だ。精々無駄な抵抗をしてもがき苦しむといい。

君たちが俺の前に姿を現した時にはそんな抵抗をしない従順な新^人類^形になってるだろうからね。

第三十一話 「亀裂」

東ドイツという国は一夜にして滅んだ。そう言われる程瞬時に滅んだ。詳しい事は分かっていないものの、ゼーロウ要塞陣地は突破され、避難が出来なかつた東ベルリンはBETAに蹂躪された。更にはシユタージがクーデターを実行して以降東ドイツは政府機能を消失しており住民は避難する事が出来なかつた。結果として西ドイツに近かつた地域の住民を除いた約1000万人もの人々が犠牲となつた。

東ドイツは今回の件を受けて直ぐに臨時政府が誕生したが住民の大半を失つたことで国家としての機能を喪失してしまい、臨時政府は僅か1年で西ドイツに吸収された。カティアが望んでいた東西ドイツの統一は東ドイツの政府機能喪失、人口の激減による国家維持不可能により達成された。たとえそれが望んだ形ではなかつたとしても。

しかし、東ドイツという壁がなくなつたことにより、慌てたのは欧州連合軍だ。彼らは急いで東ドイツとの国境部に戦術機を向かわせたが彼らが領地に入ってくることはなかつた。困惑する中でグダンスクの基地が陥落。そこにいた大勢の兵士が撤退する事になつたが、そちらも被害は軽微と言つてよかつた。

「……欧州連合軍はBETAへの攻撃を中止する」

欧州連合軍はBETAが自分たちを認識していないと判断。攻撃を止めさせた。実際、欧州連合軍の領土に敵は攻撃をしていない。精々がフィンランドくらいだが彼らは欧州連合軍の一員ではないために事実上見捨てられた形となつた。そもそも、彼らの最大の懸念は西ドイツの扱いであり、この一件により彼らが東ドイツを単一国家とみなしたことが分かつた以上わざわざ攻撃をする意味はないと西ドイツ国境に要塞陣地を建設するのみとなつた。

「西側は！ 我々東欧の民を見捨てるのか?!」

「ふざけるな！ 兵を動かせ！」

それに対して反発したのは東欧諸国だ。東ドイツという中央戦線がなくなつた以上その大半が南に進み始めていた。結果、東欧諸国は

これまでの3倍近い物量に押される形となり、戦線は事実上崩壊した。

一方、ソビエト連邦でもこの裏切りを強く批判し、「我が盟友たるドイツ民主共和国をいけにえとして自分達は安寧を得た裏切り者ども」と痛烈に批判。この言葉をアメリカが賛同したことで欧州連合軍は国際的信用を大きく失う結果となった。

アメリカは欧州連合軍への武器供与を取りやめ、欧州戦線からの撤退を表明した。この決定に慌てる欧州連合に対してアメリカの対応は冷淡だった。

「侵攻を受けないとなった以上兵を遊ばせておく余裕はない」

実際、侵攻を受けていない以上言い返す言葉はなく、彼らは黙ってそれを受け入れる事しかできなかった。

そして、更なる追い打ちをかける出来事が発生する。

「我らこそ真のドイツ国家である！」

ゼーロウ要塞陣地陥落時に補給に戻っていたために運よく助かった第666戦術機中隊を中核とする東ドイツの避難民数万人がドイツ民主共和国の復興を宣言。政府をソ連の首都機能が存在するアラスカと定めた。彼らは欧州連合の力を借りる事を嫌がり、生き残った船に乗せられるだけ乗せるとソ連領や公海を通って移動を開始した。

第666戦術機中隊は運よく救助されたアルフレート・ヴァルデが監査官から中隊長となつて率いる事となった。これは戦死したアイリス・デーナ・ベルンハルト大尉よりも階級が上であったことが理由とされている。

彼らは翌年の1984年にはシベリアで活動を開始。レーザー級相手に呐喊を行いシベリア戦線の安定化を成し遂げていく事になる。そして海王星作戦の英雄が近くで戦っているという事実はシベリア戦線の将兵たちの士気を上げ、限界以上の力を出して戦う事を可能としていった。

全体で見れば欧州戦線が事実上消滅しかけていることで対BETA戦はシベリアか日本海、東シナ海等が主戦場となつていく事になる。

「欧州連合はあたりを引いたという事か」

「それも最悪のタイミングで、ですな」

アメリカのとある都市のビルの一室。そこに集まった数名の男女は今回の欧州連合の行動について話し合っていた。彼らのいう通り、欧州連合は当たりくじを引いたに等しいがそれが果たしていい物かどうかは分からない。領土を失う心配がなくなった代わりに彼らは国際社会から孤立する結果となったのだから。

「ですが彼らの行為で結果的にB E T Aとの戦線は絞られました」

「左様。実際にシベリア戦線は膠着を見せ始めている。これまで止める事の出来なかったB E T Aの拡大を防ぐことが出来るようになってきているのだ」

「そう考えれば欧州連合の行動も無意味とは言えませんな」

「ですがそろそろB E T Aとの戦争も終わらせたいものです。奴らとの戦争は既に10年以上続いています。増え続ける難民に穀倉地帯の喪失。食料危機が起こり始めています。何とか手立てを考えなければ」

「そこは問題ありません。既に合成食料の開発が始まっています。研究者によると味と見た目を犠牲にして必要な栄養を獲得する事が出来ているようです」

「それはサプリメントの方がましではありませんか」

「それはまだ開発段階だからですよ。いずれ見た目も味も素晴らしい合成食料が誕生します」

「では食料危機は解決に向かってしていると判断して良いようですね」

「それとは別に最近難民たちが騒がしい。どうやら自分たちの境遇に不満を持っているようだ」

「難民か。面倒な奴らだ。いつそのことB E T Aに食われてしまえばよかつたものを……」

「同意しますがあまりそういう事は言っではいけませんよ」

「ですがどう対処しますか？ 特に国家を失った中国人どもが騒がしい。日本では政権崩壊の危機とまで騒がれる程だ」

「我が国として無視はできない話ですぞ。何しろ中国人が土地を不当に

占拠して軍に鎮圧されたという話まで出てきているのですから」

「なんと……。このままでは我が国は貪りつくされてしまう」

「だがどうすればいい？ 受け入れる国などおらんぞ？」

「無理やり徴兵して戦争に……。とはいきませんか」

「国民が黙っておるまい。それに、BETAに餌をやるようなもの。何かあつては問題だぞ」

「何とかBETAにやる以外でいい方法がないものか……」

「まあ、その辺はおいおい考えていきましょう。実は他にもいろいろありまして……」

「なら……」

彼らの会議はその後も続いていく。しかし、外にいる人間、それどころか同じビル内にいる人間も知らないだろう。彼らの決定がアメリカを、人類を左右するほどの力を持っているなどとは。

そして、そんな存在にBETAは近づきつつあることを。

「いったいどういう事よー！」

「……」

キルケ・シユタインホフは目の前にいるアルフレートに怒鳴りつけた。海王星作戦を得て東ドイツの力を認めたキルケだったがその一人であるアルフレートが拘束されたという話を聞いてから気が気ではなかった。更には東ドイツに30万もの大群が迫つて居ると聞いた時は援軍に駆け付けようとしたほどだ。

結果的にシユタインホフの暴走で東ドイツは滅び、その生き残りが西ドイツに逃れてきた。そのうちの一人が彼を含む一部の第666戦術機中隊だが彼らは西ドイツへの合流をなさずに臨時政府の一員としてアラスカへと向かう事が決定された。

「確かに欧州連合の対応は酷かったかもしれないわ！ でもだからと言って何故あなたたちまで……！」

「……君たちを信用できないというわけではない。我々は東ドイツに

忠誠を誓った軍人だ。東ドイツが健在ならそちらに合流するのは当然だろう?」

「それは……!」

「ねえ、いい加減にしてくれる? あんたが止めるせいで船の出発が出来ないんだけど」

出来る事なら一緒に戦いたい。そう願うキルケは必死に引き留めようとするがそんな彼女を叩き落すように声をかけたのは同じく生き残りであるアネット・ホーゼンフェルトだ。しかし、キルケはアネットが最後にあつた時より人間性を失つたような様子になっていたことに驚いたが祖国の状況を考えれば無理もないと考えていた。

「あたしたちはあんた達のようにのほほんとしているわけにはいかないのよ。裏切り者は邪魔だから離れてよ」

「……」

「悪いがここはアネットのいう通りにしてくれ。俺もお前までを嫌いたくはない」

それはつまり西ドイツという国、ひいては欧州連合を嫌っていることだ。アルフレートの言葉についてキルケは何も言えずに一步下がってしまう。それを受けて二人は乗船する輸送船に乗船した。この船が最後に欧州を離れる船であり、二度と彼らが欧州に戻ってくる事はないだろう。

汽笛がなり、輸送船が出港する。見送りに来る人はほとんどいない。大半の人は最初のころに旅立っている。輸送船には戦術機や武器弾薬などの物資が詰め込まれている。

それでも、キルケをはじめとする僅かな人々はその輸送船が見えなくなるまで見送った。キルケは海王星作戦前に感じていた東西ドイツの確執が二度と修復不可能なものとなってしまったと感じながら二度と会う事はないだろう戦友たちを見送るのだった。

第三十二話 「見えた未来」

俺はふと思った。神様の知識の中に28年間人類は戦っていると。それはつまり原作開始時がBETAとの戦争が始まって28年後、2001年なのではないかと。

多分これはあっているはずだ。そして今は1986年。あと15年も余裕がある事になる。

これに気付いた時は脱力したよ。これで少なくとも原作が始まるまでは安全に近いという事だ。さすがに始まる前に滅びるといふ事はないだろうからな。

「さて、リーズ・ホーエンシュタイン。サービスとして君の体を綺麗にしようか」

「? きれいにするとはどういうことですか?」

俺はリーズを呼び出してとあることをするためにそう言った。今から行うのは単純だ。肉体の入れ替えだ。元々リーズの肉体は哀れな程酷使されてきた。党の人間を抱き込むためにこの3年で一体どれだけの人間と寝たのか。処女は党のお偉いさんに破かれ、後ろは国家人民軍の将校に。体の隅々まで汚された彼女の体は見ているだけで哀れに思えてくるからな。

「……つまり私の体を別の体にするという事ですか?」

「うーん、別の体というわけではないよ。君の遺伝子から作り上げたいわば君のもう一つの体さ。魂はないから今は肉人形に等しいけどね」

これは人間を作る過程で出来た技術だ。意外とクローンの生成は簡単だ。多少のG元素が必要になるがそれはBETAでも人間も作るときにはかかるものだ。別に問題ではない。

「どうだ? これで体は完璧にきれいな状態となるんだぞ? 処女も復活させているから愛しのお兄ちゃんに捧げる事も出来る。自分の体じゃないという心配もない。強いて言うのであれば慣れ親しんだ体ではなくなるから違和感は出るだろうし失敗する可能性もないわけではない。別に強制ではないからじっくりと考えるといい」

「それなら考えるまでもありません。その体をください」

ライズとしても汚れた体で兄の傍にいるのは嫌なんだろうなあ。まあ、そういう風な仕事を与えたのは俺なんだけどね。おかげでいろいろと仕込みが旨くいったがな。

「それじゃ早速始めようか。準備は出来ているからあの部屋に入るといい。後は触手に身を委ねていれば勝手にやってくれるからな」

「……分かりました」

ライズはそれだけ言っただけで部屋へと向かっていく。さて、ライズへのサービスは完了したし次に移るか。

元々日本を最速で落とすつもりだったけど戦術機に夢中になってる間に後回しにしてしまった。その後もライズのお願いを叶えたりと忙しく動いていた。

とはいえ東ドイツの一件は俺にとっても最高の方向で進んだ。まず、東ドイツにいた1000万もの人間を回収できたことだ。やはり戦争中の軍隊から回収するよりもいつペンに手に入ったな。これならもともと困っていなかったG元素が枯渇する事はないだろう。東ドイツに関して上層部は俺が送り込んだ人間級のみで構成されている。亡命政府とはいえ一国を乗っ取ったのはでかい。アメリカなんかはともかくソビエト連邦の作戦はここからさらに筒抜けにできる。最高の毒と言える。

ああ、人間級も種類が増えてきた。最初はアジア系の顔立ちばかりだったが今じゃ白人黒人黄色人種問わずにほぼすべての民族を作り出すことが出来る。今じゃ世界中のあらゆる場所に潜んで工作を行っている。だが、その大半がきちんとした経歴を持たせられなかった者たちだ。さすがにそういった人物がまともな職に就くことは出来ないために出来る事は限られているがな。

やっぱり東ドイツとは別にどこか一つでもいいから国を思い通りに出来るといいんだけどいい感じの国はないものか。アメリカは無理だ。でかいし入り込むには慎重にならないと。ソビエト連邦はアリだ。国土の大半が陥落しているから入り込む余地はある。だがこれも慎重に行動する必要がある。欧州連合は微妙だ。イギリスあた

りは無理だがベネルクス三国のような小国はいけると思う。問題は国際的信用がないことだな。アフリカは論外。貧しい国が多すぎる。今はアフリカ連合なる共同体となっているみたいだが国力も国際地位も低すぎる。

となると中国だが……、正直に言つて中国の国際的信用度は低い。具体的に言えば欧州連合でさえ比較対象に出来ないレベルだ。理由は単純だ。BETAに侵攻されたのは中国のせいだという意見が多いからだ。考えてみれば納得できる話だが俺は攻撃をしてきた国にのみ侵攻している。そして、世界各国の意見としては中国が攻撃をしたせいでBETAが動き出したのではないかと考えるようになったわけだ。そんなわけのないのにな。攻撃しないのは油断させて一気にかつさらうつもりなだけだし。

そして、中国人の地位も低下し続けている。中華統一戦線を結成してしまった台湾は完全に巻き込まれ損だがそこは我慢してほしい。こういう同情があるから中国人の地位が今も一定に保たれているのだから。

結論としては欧州連合への攻撃停止は大失敗つてことだな。それさえなければ欧州連合を利用できたのに。いや、別に国際的信用度は関係ないか？俺としては大量に資源回収が出来ればいいし、そのために動いているわけだし……。

とりあえず15年だ。15年後までに主人公を見つけて処理する。出来なければ物語の舞台を確認しつつどんな動きを見せても抗えないように人間を対立させるんだ。そうすればBETAを倒す事は出来なくなる。地球は俺の物になるってわけだ。

「この機体は素晴らしいな」

アイリスディーナは支給された機体の試運転を終えると機体の感想を直結に言った。彼女を含めた第666戦術機中隊にはBT-02ゲシユテーパーと名付けられた最新型が支給されており、これはB

T-01 シュトウルムヴィントを軽く凌駕するスペックを誇っている。兵装で言えば拡散型レーザー照射粘膜炎を背中側の両肩に装着。胸部に重レーザー級の、頭部にはレーザー級の照射粘膜炎が装着されている。各装甲は突撃級の正面装甲を加工したものが用いられている。それは盾も同じであり重レーザー級をもつてしても貫通には至らない強度を誇っている。武器は東ドイツからの鹵獲品をそのまま転用しているが近接武器に関しては黒^{シュヴァルツェ・シュヴェーデルト}の剣の双剣が使われている。武装面だけで言えばどんな戦術機でも対応できないだろう。

しかし、それだけにはとどまらず、内部の肉体はBETAのもが使われている。これにより生物的な軽やかな動きが出来るがさらには搭乗者の意識を同調させることで自分の肉体のように素早く動かす事が出来る。

そして、様々な戦術機のデータをあ号標的が手に入れたことで跳躍ユニットも大きな変化がある。まず、燃料は独自に生成した燃料が使われている。これはG元素で構成されているために使えば使うほどコストが嵩むがそれに見合った出力を出すことが出来る。コストさえ気にしなければ大気圏を超えて宇宙に到達する事も可能となっている。

そんな代物を渡された以上アイリスデイナー達には自分の肉体並みに習熟する事が求められている。ゆえに彼女たちは支給されると早速試運転を行ったのだ。

結果は上々。初めて乗ったにも関わらずアイリスデイナーは他者を寄せ付けぬ能力を発揮し、模擬戦として相手をしたグレーテルを瞬殺するに至っていた。

「これがあれば東ドイツが負ける事はなかっただろう」

「それを作り上げたのがその東ドイツを滅ぼしたBETAというのが中々に皮肉だな」

アイリスデイナーの感想に答えたのは模擬線の相手をしていたグレーテルだ。二人とも懐かしそうに話しているが彼女たちに東ドイツを祖国と感じて忠誠を誓う心はすでない。改造を受けた彼女たちは元の性格をそのままにBETAに従順な存在へと変えられてい

た。東ドイツの軍人だったことを昔はそうだったと思いつけてももう一度東ドイツの軍人として戦いたいとは思えない。そういう感情は浮かんできてもすぐ消えるようになっていく。代わりにBETAに対する嫌悪感や敵対心が消え、同族意識や親愛が生まれるようになってくる。

つまり、彼女たちが祖国を思えば思うほどBETA側の人間となっていくのだ。それを彼女たちが不思議に思う事はない。そういう風に改造されているのだから。彼女たちは自然と過去を懐かしむことに無意識に人間と敵対する存在となっていくのだ。

「とはいえまだ習熟しているとは言いがたい。レーザー照射は人間の感覚にはないからどうしても発動までにタイムロスが生じる。それを何とかしないと」

「私はむしろ動きすぎる機体に脳が追い付かないな。どうしても脳で考えていることと実際の動きでは大幅に違っている。これを何とかしないと高機動で動くことが出来ない」

「ならばもう一度模擬戦をしないか？ 今度は互いの改善点を直すことを目標としてな。まあ、スパーリングと言った方がいいか」

「それなら私としても頼みたいところだ。ここには今同志大尉しかないからな。模擬戦が出来ないので自主練になってしまおう」

アイリスデイナーナとグレーターは楽し気に笑いながら戦術機の改善点を話し合う。それらが人類を蹂躪する者となると分かっていながら。

第3章【ひび割れた人類】

第三十三話「オルタネイティブ3」

劣勢を強いられているソビエト連邦だが彼らには切り札とも言えるものが存在する。それはESP能力という他者の思考を読み取る者たちを用いた計画、オルタネイティブ3である。これはこのESP能力者を人工的に生成、育成してBETAの思考を読み取って情報収集や平和の道を目指すというものである。

1973年のBETA侵攻より始まったこの計画は13年を迎えてようやく最初の能力者を戦線に投入する事が出来るようになった。彼女たちはその能力を用いてハイヴに突入。そこにあると思われるコアから情報を得るために動き出した。

「……というわけでそいつらがまもなくここにやってくるわけだ」

「……余裕を見せていい相手なのか？ 聞く限り厄介だと思いが」

「そこまで問題じゃないよ。事前に俺が知れている時点だね」

そう、オルタネイティブ3だが俺はこれを詳細に把握している。理由？ 簡単さ。彼らの計画に東ドイツも加わったからだ。いや、違うな。ESP能力者を運ぶ護衛に第66戦術機中隊が選ばれたってというのが正しい。彼らはハイヴ攻略ではなく奥にたどり着き帰還することを第一としており、そのために突入部隊は戦術機のみというかなり特化した状態となっている。

「そしてそんな彼らを迎撃する役目を君、アイリスディーナに任せるというわけさ」

「なるほど、この1年の成果を見せてみるという事だな」

「そういう事。無論逃がすと大変だから退路は絶つし通信も妨害する。アイリスディーナはただ敵を倒す事だけを考えてくれればいいよ。ああ、でもESP能力者だけは生かしておいてね。どういう存在か興味があるから」

「了解した。私としてもグレーテル以外の相手が欲しかったところ

いるがだからと言って作戦を失敗に終わらせるつもりはなかった。

『大隊長！ ハイヴです！ ハイヴが見えました！』

『よし！ 総員警戒を怠るな！ この周辺でレーザー級は確認されていないがそれでも用心は必要だ！』

『もちろんです！ この日のために行ってきた訓練はばっちりですよ！』

隊員たちの士気は高く、誰もがこの日のために訓練を行ってきた彼らにとってはこのくらいという事はない。実際、彼らはハイヴから迎撃に出てきたBETAを苦も無く倒すと一機の撃墜もなくハイヴへと突入する。これまでハイヴ侵入に成功した例はソビエト連邦への侵攻の原因となった奇襲作戦以来初の事であり、2回目もまたソビエト連邦が独占するに至った。

『っ！ カシユガルハイヴのデータとは大分違っているな……』

地中に通じる穴へと飛び込んだ彼らだがホールや分かれ道がない道をひたすらに降りていく。

『大隊長、これって罠なんじゃ……』

『可能性は高い。だが、我々の目的は姫君の護衛。ハイヴの攻略ではないとはいえ中心部に近づく必要がある。ギリギリを見極めるぞ』

そしてそこからどれほど降りた頃だろうか？ 地下深いためか司令部との通信は出来なくなり、引き返そうかというタイミングでついにホールへと出た。しかし、そこはメインホールと思ってしまうほど巨大な空洞であり、中心地には一機の戦術機が鎮座していた。

『あれは戦術機!? 何故ここに……!』

『っ！ 馬鹿野郎！ こんなところにある以上理由は一つしかないだろう!』

『あれはBETAだ!』

大隊長がそう叫ぶと同時に、その戦術機は動き出した跳躍ユニットを吹かすとまるでテレポートと間違えそうな程の速度で以て一番近い位置にいた戦術機のコックピットに双剣を突き刺した。

一撃で以て撃墜した戦術機によりやく大隊の面々は動き出し、射撃を開始するがあまりにも速いその戦術機には一発も当たらなかつた。

それどころか戦術機は逃げながら背中 of 装甲を開くと、そこに内蔵されていた照射粘膜からレーザーを発射した。それは照射粘膜を中心に半円形上にレーザーを拡散し、その背を追いかけていた大隊をレーザーの餌食にしていた。

『敵後部にレーザー級の照射粘膜があるようです！ それもあの様子だとかなり厄介な代物かと……！』

『くそ！ 総員背後に回り込むな！ 敵は後方を守るすべを持っているようだ！ 死にたくないなら前方から切り込め！』

『『『『y p a a a a a a a a a a!!』』』』』

その指示を聞き5人が前方から切りかかる。2人が長刀を構え、その後ろから3人が支援をする。それに対してBETAの戦術機は動きを止めると今度は腹部の装甲を開く。そこには重レーザー級の如き照射粘膜が存在した。

『っ！ 避ける！ レーザーがくるぞ！』

しかし、大隊長の指示は間に合わなかった。指示と同時に重レーザー級のレーザーが発射。射線上にいた5機の戦術機は一機残らず破壊される。この間僅か数分。たったこれだけの時間で6機を撃墜させたBETAの戦術機を前に大隊長は決断する。

『……退却だ！ これ以上の戦闘は厳しすぎる！ 総員急いで来た道……！』

『大隊長！ 来た道がありません！』
『なんだと!?!』

大隊長が来た道の方向をみればいつの間に関じたのかそこには大量の砂や土で防がれた姿があった。一番近い出口を潰されたと大隊長は歯噛みする。とはいえ道はもう一つだけ存在する。入ってきた方向とは別、まるで守護神のごとく存在していたBETAの戦術機の後方に続く、ハイヴの中心部への道が。

『……総員傾注！ これより我々は敵の中枢に続くと思われる道に突入する！』

『っ！ 大隊長、それは危険では……?』

『このままここにいるよりはマシだ！ 道がふさがれた以上留まるの

は危険すぎる。だが、中枢に行けば他の出口が探せるかもしれないし、我々の本来の目的を達成できるかもしれない!』

『……了解しました! では私が殿を務めます』

『なら私も!』

『俺も残ります!』

『……済まない。必ず脱出して見せる! 総員行け!』

3機の戦術機を足止めに残し、残りは全て中枢へと向かっていく。3機の戦術機は命をかけてBETAの戦術機の足止めを開始する。銃を撃ち、位置を特定されないように動き続けるが大隊を追いかけられないように通路からは離れない。そのように動き回る事でBETAの戦術機の足止め成功するがそれは僅かな時間でしかなかった。

まず、1機目が先読みをされてレーザー照射を受けて撃墜。2機目は近接戦闘を行い、敵の長刀を根元から切り落とし、四肢を切り落とすとコックピットに双剣を突き刺して破壊。そして最後の3機目は狂ったように銃撃を行ってきたがそれらすべてを避けていき、ゼロ距離からのレーザー照射を受けて破壊された。

「……それなりに手ごたえのあるやつらだったな。初実戦としては上々と言えるな」

計9機の戦術機を一人で破壊したアイリスデイナーは戦闘をそう評価すると跳躍ユニットを吹かして隊長機の後を追いかけるのだった。

第三十四話 「処理落ち」

人工的に生み出された私たちは “名前” というものがない。 “名前” を持つのは生きている、生物だけ。私たちは生きているけど生物として認識されなかった。だから私たちは人間たちが望む能力を成長させることが生きている、生きていい理由になった。

そして、私たちは生きてきた集大成を見せる時が来た。人類を脅かすBETAという敵の拠点、ハイヴに突入してそこにいるであろう敵の指揮官から情報を得る。それが私たちに課せられた任務。

私たちは10人で護衛の人と一緒にハイヴに突入した。でも、それは罠だった。途中でとても強いBETAが作り出した戦術機と戦闘になって9人が犠牲になった。それまで一人も犠牲を出さなかったのに4分の1が死んだ形となった。後退する道は防がれ、唯一残っているのは敵の中枢に続く道。この場にとどまってもBETAに殺されるだけ。だからとびこむしかなかった。

『っ！ こいつはすげえ……！』

そしてたどり着いたのが巨大な球体がある大きな広場。おそらくここがこのハイヴの中心部。私たちは警戒しつつ中心の球体に近づいてリーディングを開始する。

リーディング

相手の思考を “画” で、感情を “色” で読み取る特殊な能力。私たちはこの能力を人工的に付与されて生み出された存在、ESP能力者と呼ばれる私たちは自分たちの使命を達成するだけの存在。

『……どうだ？ BETAの思考は読み取れたか？』

「……これは」

そして見えた、のは……

【YOKOSOWAGAHAVUNI。 | @hfgnqa0t
y:@er.9. Was it difficult to com-
me here? ??? ?? ?? Dobpo пожал
овать Schlie·lich ist dies der
Hive, der für Sie gemacht wurd

「ぐ、ぐぐ、があああああつ!!!??」

「お、おい! どうした!?!」

『隊長! 後方から例の戦術機が!』

『くそ! もう追いついたのか! 退却するぞ! 道を探せ!』

『それが……! 今来た道以外に通路がありません!』

いひ、イヒヒ。ダメ、ぜんぜん、考えられない、のう、やかれた、だめ、だめ、だめ、だめ……

『まさか……。ここまで計算していたというのか!? 我々がここまで来ることを読んでいたというのか!?』

『隊長! どうすれば!?!』

『来た道に戻るぞ! ふさがった穴を急いで掘り出して逃げるんだ!』

道はそれしかない!』

『う、うわあつ!!?! 来t……!!』

『一人やられた! 弾幕を張れ! 死ぬぞ!』

あああ、いいい、ひひひ、ふふふ、あわわわわわわわわわ

『くそ! くそ! くそおっ! 当たらねえ!』

『速すぎる! このままじゃ……!』

『またやられた!? 畜生! 道にすら戻れない!』

……………

『済まない……! 俺がここまで来なければ……! ぐっ!?!』

『隊長!?! くそ! 大隊長がやらr……!』

『ひい!?! た、たすk……!!!』

……………うふh、kいい

【ようこそ我がハイヴに。僕は君たちを歓迎するよ。ここまで来るの

は大変だったでしょ？ 少しは休んでいったらどうだい？ 歓迎するよ。なんとたってここは君たちのために作ったハイヴなんだから。それはそうと僕は君たちの能力がとても興味深くてね。半分は生かして残り半分は研究のために解剖しようと思うんだ。君たちは許してくれるかな？ 安心してよ。解剖する者は僕が勝手に選ぶから君たちはただ運命を受け入れてくれればいいからね。でも死にたくはないと思う娘もいると思う。でもね、残りの半分は僕の改造を受けてスパイになってもらうつもりだよ。帰った先でそれがばれないように記憶は消したり無意識で報告をさせるような事になると思うけどね。僕はそのくらい朝飯前に出来るんだよ。きっと君たちは僕の感情や思考を読み取れないと思う。今僕が喋っている言葉だって君たちには把握しきる前に10枚以上追加で見せられているんだと思う。だって僕がそうなるようにしているんだから。きっと発狂したり脳が処理できなくて気絶しちゃうかもしれないけど君たちの役目はこれなんだから頑張って読み取って理解してね。それじゃ迎えが来たみたいだからまた後でね」

早口でまくし立てるように言いつつ大量の思考を送り出す。ついでに感情も一秒で10回くらい変えつつそれらすべてを大きな感情にする。これで相手の脳は処理落ちするだろう。

ESP能力。リーディングという相手の思考を読み取る能力だがこういう事が出来る相手ならば利用されて攻撃が出来るな。人間じゃまず無理だろうけど。それにしても突入してきたのは10機か。これだけいれば半分は解剖に回して能力を得る事が出来るかもしれない。残りは記憶封印と行う事の刷り込みをしてリリースするか。さて、アイリスディーナによる無双劇だけど想像以上だった。銃弾の一発くらいはもらうかなと思っただが流石は東ドイツ最強の部隊を率いていた事はある。俺でもあれだけの動きを見せる事は出来ないかもしれない。

メインホールに侵入した敵はアイリスディーナの攻撃を受けて一機、また一機と撃墜されていく。その中で10機だけ動きを見せないがそれが処理落ちしたESP能力者なんだろう。分かりやすくして大

変結構。機体は破壊して中の人間は先ほどの通りにするか。

ソビエト連邦よ。奇襲の時と言い今回と言い何かとこちらを驚かせてくれる。そんな君たちには僕から特大のプレゼントをあげよう。きつと気につてくれるはずさ。何しろ、BETAから読み取った思考の中にあつて欲しくはないだろう情報を上げるんだから。期待して待つててね。

数日後、ソビエト連邦は人類の結束を二度と不可能とするほどの情報を公開した。それは、アメリカがBETAと手を組んでいたというものだ。

正確にはこうだ。アメリカはカナダに飛来したコアを回収。BETAとの通信を可能とした。アメリカはカシユガルハイヴの重頭脳級という地球にいるBETAの総司令と交渉を行つて自国以外をいけにえと差し出す代わりに南北アメリカや太平洋などの一部島々を勢力圏として組み込むことを約束したというものである。

そのためにアメリカでは派兵部隊の縮小やレンドリースの縮小を行つているとしたものであり、この発表に世界は当然のことながら大混乱に陥つた。BETAとの戦争を主導している国だったはずが裏切つていたのである。

とはいえこの発表を完璧に信じる者は少ない。精々が中華人民共和國くらいであつたがソビエト連邦がオルタネイティブ3で得た功績として証拠も提出しているために半信半疑となつているのが世界の状況だつた。だが、これはアメリカの信用を破壊するには効果が強すぎた。たとえ半信半疑だつたとしてもアメリカを完璧に信用する事は出来なくなつたのだ。

このことにアメリカは当然のことながら大激怒をしてソ連に貸与しているアラスカの土地を返却させるべしという意見まで出てくるほどだ。しかし、それをやると不都合な発表をしたソ連を潰しかかつていると取られかねないためにそれが実行には至らなかつた。

さらに、ソビエト連邦でもこの発表は予想外だつたらしく、一部の

人間が事実ではないと慌てて訂正したり、もつと過激な内容を発表したりと統一性がない動きを見せ始めていた。とはいえ全世界に広まったこの情報を回収することなど出来るはずがなく、アメリカという国は次第に世界中から孤立するようになっていく。レンドリースや派兵は今まで通り行われているがアメリカに無条件で従う国は減っていく事になる。

そして、これ以降人類が団結して対応する事はなくなった。BET Aはまさに人類の結束という最大の強みを食い破る事に成功したのである。それも人類に気付かれる事無く。これが人類をさらに追い込む要因となっていくのだった。

第三十五話 「掌の上で踊る人類」

「これは……！　なんとという情報だ……！」

「信じられん……。本当の事なのか？」

「直接BETAから読み取った情報だ。確認のために参加していないESP能力者にも確認させた。全て事実だ」

「なんと……」

アラスカに亡命政府を構えたソビエト連邦の首脳部はこの日集められるだけの人数を集めて会議を開催した。その議題はオルタネイティブ3によってもたらされたBETAの情報である。

まず、このオリョクミンスクハイヴ突入はESP能力者が登場する戦術機10機と護衛を務める1個大隊36機が突入したが結果は散々な物だった。護衛を務めた大隊は全滅。ESP能力者も半数が撃墜され残った5機も満身創痍で帰投したのである。

とはいえそれでも一定の戦果を持つて帰っては来ていた。まず、ハイヴ内の情報だ。人類はハイヴ内がどうなっているのかを表面上しか知らない。そもそもハイヴに突入した経験と言えばソビエト連邦が奇襲でカシユガルハイヴを攻撃したときだけなのだ。ゆえにハイヴがどうなっているのか？　コアと呼べるものは存在するのか等不明な事が多かったがこれである程度は情報が増えていた。

そして、一番の成果だがそれはハイヴの奥にいたコア、頭脳級と名付けられた司令官のようなBETAから読み取った情報であった。

オルタネイティブ3では情報を抜き取るのとは別に人類がイメージできる和平も送っていたがそちらに反応はなく、完全な失敗で終わっている。そして、抜き出した情報だがこれが問題であった。

「アメリカがBETAと取引しており、自国民以外をBETAに差し出そうとして、生き残った人類を統べる存在になろうとしているなど……」

「ですがこれが本当であれば由々しき事態です！」

「そうです！　我らは東西に敵を抱えていたいという事であり、場合によっては背後から攻撃される可能性もあるという事です！」

そう、もしこの情報が本当なのであれば一番危機に陥るのはソビエト連邦なのだ。アメリカが攻撃を始めた場合一番近い位置に存在する自分達が攻撃を諸に受ける。それだけは避けなければならぬと危機感が発生していた。

「ですがこれが本当に事実なのですか？　もしかしたら我々人類の結束を乱すBETAの策略かもしれませんよ？」

「馬鹿な……。そもそもBETAにそんな知能が存在するのか？　だったら何故今頃になって動き出す？　私がBETAならもつと前に行動しているぞ」

BETAの策略とみなすことも可能だが、これまでの動きからありえないと考えるのが主流な動きだった。何しろBETAは局地戦においては裏をかく動きを見せた事があるが普段は大量のBETAによるごり押しである。策略を用いられるのであればもつと前から見せていてもおかしくはない。それが否定する根拠となっていた。

「ですが本当の可能性が高いですよ？　それに、本当なら我らも行動を起こさないとはいけません」

「そのためにももう一度ハイヴに突入させるべきでは？」

「1個大隊が全滅したのだぞ？　生き残りの報告によればハイヴ内は迷路のようになっていてBETAがわんさかいたという。脇道も多く奇襲を受ける事もあって部隊の半分はそれにやられたと」

「そこまで分かっているのだ。対策が出来るではないか。それに生き残ったやつをもう一度投入する事で道案内が出来るでしょう」

「それもそうだな。ではこんかいの情報は我々のみで共有し、確証を得てから発表するという事で……」

ソビエト連邦の上層部はそう結論づけると会議を終わらせた。しかし、そんな事は情報を渡した奴が許すはずがなかった。数日後、ソビエト連邦のとある上層部から得たとしてこの情報が世界中に暴露された。各国から真偽の問い合わせが殺到した結果、ソビエト連邦は事実を公表することを決めたが人類の結束を破壊し、修復不可能としたほどの被害を与える結果となった。

——これで人類が一致団結する事は二度と出来ないだろうな。

あ号標的は人類の様子を見てそう満足げに呟くと次の手に打って出た。欧州戦線の完全消滅である。

東ドイツ陥落後、欧州戦線は目に見えて劣勢となっていた。何しろ欧州連合がB E T Aとの戦争をやめてしまったのだから。東ドイツの残党もシベリアに向かってしまったために欧州戦線は人手も物資も不足し始めていた。加えて、東ドイツに殺到していた30万もの軍勢が南下を開始。チェコスロバキア国境に殺到した。当初こそスデーテン山地を利用して防衛を行っていたがスロバキア方面からB E T Aがなだれ込むと山脈防衛も行えなくなり、1985年にはオーストリア以外がB E T Aの手に落ちる事となった。

一方で南方戦線と呼ばれていたルーマニアでは川を用いた防衛線を引いて粘っていたがブカレスト攻防戦で主力が全滅して以降は大した防衛も出来ずにずると戦線を後退させていった。

そして、1986年の年末にはユーゴスラビアのダルマチア地方を除き東欧諸国は国土を失う結果となった。東欧諸国の国民は脱出を図ったものの、船舶すら足りないために船での脱出は難しく、ギリシャ方面に逃げる事はB E T Aとの偶発的戦闘を避けたギリシャ政府によって亡命を拒否され大半の国民が国境線でB E T Aに食い殺されることとなる。その様子をギリシャ方面の国境から見ていた兵士たちはトラウマを負って大半が除隊する事となる。

―やはり逃げ場をなくして一網打尽にするのが効率が良いな

それを見てあ号標的はまるで漁でもしているかの如き発言をのんきに行っていた。そして、このうち千人単位で人間が捕獲され、建設が始まったブタペストハイヴやミンスクハイヴに移送され、G元素の永続的採取を目的とする資源繁殖用の人間として分類されて子作りを強要されていく事になる。

これは大人と子供で採取できる量に違いがあるのか、赤子ではどれだけの量を確保できるのか、一番採取できる人間とはどういうものなのかを知るための実験も兼ねていた。捕らえられた人間たちは当初こそ無理やり子作りなど出来るわけがなく効率は悪かったが麻薬や媚薬と言った成分があるものをガス状に撒くことで子作りが進む事

になる。妊娠した母体は四肢を拘束され必要な栄養を与えられつつ
臨月まで過ごす事になる。そして出産すると母体と子のケアを行い、
再び母体をヤリ部屋と化した繁殖部屋に放り込むのを繰り返してい
く。

子供はすぐに殺して採取をしたり、成長させることで得られる量を
計測するために生かされるかのどちらかの運命をたどる。こういつ
た子供がまともな教育を受けられるわけがなく、大半は言葉さえ喋れ
ないただ生きていくだけの存在となる。そういったものたちはBE
TAという存在を恐れる事はないが食われて死ぬという事にさえ無
頓着となるが号標的としてはそちらの方が都合がいいと彼らはぞ
んざいに扱われていく事になる。

—これを機に他のハイヴも整備するか

この実験が始動すると他のハイヴにも役割を与えていくために整
備が開始された。

現在、地球に存在するハイヴはカシユガルハイヴ、トウーランハイ
ヴ、ウラリスクハイヴ、エキバストウズハイヴ、モスクワハイヴ、ブ
ラエゴスチェンスクハイヴ、ミンスクハイヴ、オリヨクミンスクハイ
ヴ、ブタペストハイヴの9つであり、カシユガルハイヴを総合として
設定しつつ、あ号標的が作り出した、改造した人間の居住区域や動植
物の管理区域が整備された。

ミンスクハイヴとブタペストハイヴ、エキバストウズハイヴは繁殖
場としての機能を追求し、BE TAの生成はほとんど行われる事はな
いハイヴとなっていく、ウラリスクハイヴ、ブラエゴスチェンスクハ
イヴ、モスクワハイヴ、トウーランハイヴはBE TAの生成、改造に
特化した生産工場へと整備された。残るオリヨクミンスクハイヴは
建設の経緯もあって引き続き人類をおびき寄せる罠として機能する
事になる。人類が気軽に突入できない程奥地となった場合にはBE
TAの生産工場へとシフトする方向で準備が進められている。

—む、こうなるともつとハイヴを増やしてもいいかもしれないな。
管理は面倒になるがそこはオートモードにして任せればいいだけの
話だしな。

あ号標的のその思い付きはすぐに実行された。1987年、この年にスルグートハイヴ、チヨルウオン鉄原ハイヴ、ウランバートルハイヴ、クラスノヤルスクハイヴ、チヨンチン重慶ハイヴが立て続けに建設された。一気に倍近くまで増えた事で実際に戦闘を行っているソビエト連邦、国連、アメリカは絶望のどん底に叩きつけられることになるが同時にBETA Aへの恐怖をあおる事となり、世界中でBETAと戦うべきではないかという機運を巻き起こすこととなる。

だが、そんなことはあ号標的は理解していると言わんばかりに人類の動きを鈍らせて、止める策を発動するのだった。

第三十六話 「中国人」

きつかけは些細なものだった。1988年3月、アメリカ合衆国ロサンゼルスにて中華系難民が地位向上を願うデモを行った。このような動きは前々から起きていたがアメリカへの信用度が下がった今なら多少は聞いてもらえるかもしれない。そう考えた人々がデモを開始したのだ。

参加人数は約1万人。ロサンゼルスのみならず周辺にいた難民のほとんどが参加した大規模なデモとなった。これを知ったロサンゼルス市長は中華人民共和国だけでも信用度を上げるべきだと考えて地位向上に前向きな姿勢を見せた。

しかし、市長がそう考えていたにも拘わらず、ロサンゼルス警察は何故か独断でデモの武力鎮圧を開始。死者が三桁も出る結果で終わったがこれにアメリカ中の難民が怒り狂い、4月には大規模な反乱という形で怒りが爆発した。

「中華の民たちよ！ 今こそ立ち上がる時である！ この地に住まう悪鬼どもを蹴散らし、我らの樂園を作り上げるのだ！」

当初はバラバラに動いていた反乱だが一人の男がリーダーとなって以降は組織的な動きが始まり、アメリカを苦しめる事となる。アメリカは早期鎮圧を狙って戦術機すら投入して鎮圧に動くも負けじと反乱軍も戦術機を用いて抵抗。数に勝るアメリカ軍が優勢となっていくがそれでも被害は増え続けていた。

この反乱に対して一番の反応を見せたのは中華統一戦線である。台湾に逃げ込み、中華民国政府と合流した中華人民共和国だがアメリカの支援を受けないと国家としての抵抗が出来ない状況にあった。何度か台湾上陸を狙ってBETAが侵攻してきており、そのたびに多大な犠牲を払って迎撃している状況だった。

そんな中でのアメリカでの反乱である。しかも反乱を起こしているのは自分達と同じ中国人。中華統一戦線は慌てて謝罪と反乱に加担した中国人への即時降伏を呼びかけたが無視。それどころか、

「中華統一戦線は人類の敵たるアメリカと手を組んでいる！ それは

つまりBETAの手先という事に他ならない！ 我らこそが真の中華政府である！」

として建国まで宣言してしまう等勢いを増す結果で終わった。これにより、中国人の地位は低下した。信用は出来なくなりつつあったとはいえアメリカの支援を受けていた国は多い。しかし、反乱のせいでその支援が一時的に止まっているのだ。アメリカは反乱の鎮圧が完了次第支援を再開すると言っているがそれはつまり鎮圧できなければ支援は再開できないという事でもあった。

結果としてこの事態を引き起こした中国人への差別や迫害が始まった。難民は更なる困窮を極め、どこに行っても迫害される生活が始まり、ならばといまだにアメリカで抵抗を続ける反乱政府に合流する者が出始めていた。反乱政府は西海岸の一部を完全に制圧し、そこから難民を受け入れる体制を築き上げていた。当初数万規模だった反乱勢力はこれ以降急速に数を増していき、数百万もの中国人がアメリカに集まり、反乱政府の一員としてアメリカ軍と戦うようになっていく。支援を受け入れられなくなった国で迫害された中国人がアメリカにわたって反乱勢力に加担する事でアメリカの支援再開は遠のくという負のスパイラルが繰り返られる結果となった。

1989年になると反乱政府は西海岸を手中に収め、ロッキー山脈を防衛ラインとしてアメリカ軍を相手に優勢に戦いをすることが出来るようになった。戦術機もアメリカ製の物だけではなく欧州連合や中国、ソ連の物も見かけるようになっていき、着々と戦力を整え始めていた。

人口も1千万を突破し、行政や立法などの政府機関が整備されるなど最早一つの国家としての様相を本格的に見始める事となっていた。そしてこの動きによって日本でも大きな問題が起きようとしていた。

「何故ですか!？」

「君、落ち着きなさい」

日本の公務員の杉原は目の前の警察官に食って掛かった。理由は単純だ。警察官たちに囲まれ、手錠をつけられている盛^{シヤン}宇沢^{ブーツァ}が原因である。難民の中で最も大成したブーツァは自分の会社を持つほどの人物となっていたがそんな彼に突如として令状が突きつけられたのだ。罪状は国家反逆罪。難民たちと共謀して日本を乗っ取るつもりだったという物である。

確かにブーツァは難民と多く関係を築いていたがそれは彼らの職業斡旋の為であると杉原は反論したのだ。しかし、警察官は令状を見せると会社に押し入りブーツァを引きづるように外に出すと手錠をかけて拘束したのだ。引きずられる事に抵抗したためかブーツァはぼろぼろになっており、警察官は殴る蹴るの暴行を行って大人しくさせた。

「黙りなさい。彼の罪は明白なのだ。逮捕されて当然の人間なんだよ」

「そんなことはあり得ない! 彼は本当にそんな事をする人間じゃない! そこまで言うのなら証拠を見せてみる! 俺たちを納得させる証拠を!」

「そうだそうだ!」

「シヤチョーをはなせ!」

あまりにも横暴すぎる警察官に杉原や社員の中国人はそう言って取り囲む。しかし、そんな彼らをめんどくさそうな表情をしながら警察官は言った。

「はあ、どうやら逮捕するべきだったのはこいつだけではなかったみたいだな。お前ら全員公務執行妨害で逮捕だ!」

「はあつ!? 何馬鹿なことを言っているんだ!」

「社長を返せ!」

「社長! 逃げて!」

「シヤチョー!」

警察官の対応にキレた社員たちが一斉にとびかかる。4名いた警

察官は50人を超える中国人にもみくちやにされ、その隙にズーツアは救助された。しかし、その瞬間だった。

一発の銃声とともに倒れるズーツア。音の方はもみくちやにされていた警察官の一人が抜け出してズーツアに拳銃を発砲した姿があった。

「ふー！ ふー！ ……くそ！ 中国人風情が逆らいやがつてえつ!!!」
「つぎに！」

銃声に驚き固まる隙をつくように警察官はそう叫ぶと社員たちに発砲する。それを援護するように他の警察官も発砲し、血だまりが生ずる。

「ふざけんな！」

「ぶつ殺せ！」

「なっ!? おいよせ！」

発砲までしてきた警察官に中国人はさらにキレて殴りかかる。それを杉原は慌てて止めようとしたが飛び掛かれた警察官の一人が腕を振った際に発砲してしまい、その弾が杉原の胸に刺さる。

「ぐっ！ あれ……？」

いきなりの事で何が起きたのか分からない杉原は力をなくしたようにその場に倒れこむ。杉原はぼんやりと意識が薄れゆく中で大勢の中国人にぼこぼこにされていく警察官をみながら、まるで去年ロサンゼルスで起きたことの焼き直しみたいだと考えていた。

「……もしか、した。ら……あれも、しくま、れ……」

杉原は最後まで言う事はなく意識を手放した。そして、彼が目覚めます事は二度と訪れる事はなかった。そんな彼の様子をズーツアが笑みを浮かべながら見ていることも知らずに。

後に警察官と思われた4名は警察官ではなく、中国人を差別する者たちであったと判明するがそのころにはその4名は殺され、焼かれ、

骨は砕かれて海に捨てられた後だった。日本政府は原因がどうあれ中国人たちを逮捕する事としたが当然ながら日本中の中国人は反対した。ここでこれが許されれば自分達も逮捕される。そういう脅迫概念がここまで辛うじて暴走を抑えていた中国人たちを刺激した。

彼らは逮捕された同胞が収監された刑務所を襲撃するといつの間にか沿岸部までやってきていた反乱政府の船に乗り込んで国外脱出を図った。日本政府は追っ手を差し向ける事も検討されたが護衛として戦術機もいたことで断念。反乱政府へ遺憾の意を示すにとどまった。

この事に逆に反発したのが日本人であり、彼らは今回の襲撃を行つた反乱政府と中国人の処罰を求める抗議運動を展開。特に日本の頂点である政威大將軍をないがしろにしていると感じているものは特に活発な動きを行つていた。結局日本政府が今は余力がない事、必ず処罰を与えると約束する事でこの抗議運動は少しづつ沈静化していくがそれでも日本政府に不満を持つ者が多く誕生する結果となった。

さらに、これ以降国内の中国人は一斉に国外に逃げ出した。元々迫害や差別が前々から起きつつあった日本では今の世界とは違い歪な安定を見せていたが今回の一件でそれが崩れ去つたのだ。アメリカの次に多く難民が訪れていた日本にいた中国人のほとんどが合流する事で反乱政府はさらに力を伸ばすこととなり、最終的に中華帝国を建国し、アメリカ政府と講和するに至った。中華帝国はロッキー山脈以西を領土とし、中国人の理想郷を作り上げる事となる。その中で領土内にいたそれ以外の民族は急速に消えていくが彼らがどうなつたのかを知る者は誰一人として存在しないのだった。

第三十七話 「終焉の時」

そろそろいいだろう。物語の開始まであと10年。ここまで来た以上開始の時までに人間の力を大幅に削いでおくべきだ。幸い、そのための準備は整っている。戦術機も量産が完了している。アイリス・デイナー達も戦術機を完璧に習熟し、自分の体以上に扱う事が出来ている。

世界中にばらまいた種も発芽のタイミングを待っている状態だ。これ以上待つについても状況は進展する事はないだろう。

「さあー。ユーラシア大陸を制圧するぞ！」

俺はそう宣言して全BETA群に侵攻の命令を出した。その結果、このカシユガルハイヴより秘密裏に延ばした坑道を通って突撃級を先頭に一齐にユーラシアの各国に侵攻を開始した。

まずはインドだ。次に東南アジア。欧州連合。中東を落として石油の供給を難しくする！そして台湾は四方八方から上陸させて包囲殲滅する！これで残った世界の半分の人口が消し飛ぶ計算だ。

とはいえまだまだこれからだ。中国を早期に落とした事で太平洋を通れるようになったことを活かしてばれないようにといろんなところにBETAを派遣している。さすがにハイヴの建設には至らなかったが建設の準備は出来ている。海底というほぼ安全な場所に本拠地を移すのもありかもしれない。侵攻がひと段落したらバックアップを兼ねて本拠地建設に乗り出そう。

まずはネパールとかブータンが滅びるな。山だが別に問題はない。本体は地中からくるわけだからな。そして地上からも侵攻はさせている。地下を進む奴らの音をかき消す目的も兼ねてな。

「アイリス・デイナー。お前たちは待機だ」

「使わないのか？」

「切り札は最後まで取っておくものだろう？ アメリカで開発されているG弾とかいう核もどきがあるみたいだし下手に出して全滅させられてはたまらないからな」

「なら私たちは結局また訓練の日々というわけか。こうなるとアネッ

トたちがうらやましく感じるな」

アイリスディーナとグレーテル、それにヴァルター、ファム、シルヴィア、カティア、リイズ、テオドールは戦死したという扱いでカシユガルハイヴにとどめている。アルフレートにアネット、イングヒルトの3名は今も第666戦術機中隊を率いて活躍してくれている。

改造当初はぎくしゃくしていたアネットとアルフレートも今では結婚までしているらしい。戦争中のために避妊はしているがやる事は既に済ましていると言っていたな。そういやリイズも4人目を妊娠中だったか？ リイズもだがテオドール君も頑張っているように何よりだ。従順な人類が増えるのは俺にとっては悪いことではないからな。増えすぎても資源にすればいいだけの話だし。

「BETAが戦術機を使えるなんて情報は世界中にとっては劇薬だ。アメリカが変に暴走されてもたまらんからな」

「そのためにロツキー山脈で講和させたのだろうか？」

「もう少し早く知っていればやりようはあったんだけどな」

G弾。なんか重力に作用する核みたいなイメージだがこれは理解しきれなかったからこういつているだけでかなりやばい代物だ。放射能をまき散らさない代わりに草木一本二度と生えてこない土地にしてしまう後遺症を持つ爆弾らしく聞いた時はゾツとしたよ。しかもすでに実用化どころか量産も始まっているとか。

「幸いなのはG弾の開発に関わっていた研究者の一部が中華帝国内にいたことだ。おかげでG弾の開発も可能となるだろう」

「G弾を迎撃出来るのはG弾のみ。厄介な武器ですね」

そう、G弾はG弾でないと迎撃が出来ないらしい。おかげで迎撃用に作らないといけない羽目になったよ。俺はこういう兵器は好きじゃないんだけどなあ。アメリカのG弾破壊できればいいんだけど保管場所が何か所じゃないから難しい。失敗したらカシユガルハイヴに集中砲火されそうだし調整はしないと。

「！　　どうやら本格的に始まったようですよ」

「え？　　本当？　　ならみんなで観戦しようか。グレーテル、悪いんだけどみんなを呼んでよ。人類の抵抗を観戦しようじゃないか」

「はいはい。嫌だと言っても呼びに行かせるんでしょ」

グレーテルは改造して以来性格が落ち着いたよな。やはり美人は素直じゃないとな！そして美女に囲まれながら見るのは最高だな！

1991年3月11日。この日、人類はBETAという存在がどういった物であるかを思い知る事になる。BETAが一斉に侵攻を開始したのだ。

最初に気付いたのは欧州連合だ。一時期は戦闘していたこともあっていまだに警戒を続けていた彼らだがそこに大量の突撃級が現れ防衛線へと殺到したのだ。突然の事に混乱するも対応を始めたが突如として地面が爆発し、防衛線のいくつかに穴が発生した。BETAはそこから西ドイツやイタリアに侵攻し、蹂躪を開始した。特にイタリアはアドリア海から上陸したBETA群によつて半島の広範囲に戦線が発生。ローマ陥落の危機に陥っている。だが、欧州連合とは孤立気味だったギリシャとトルコでは自力で抗う力などない。ギリシャは本土を失い、トルコは黒海沿岸部をほぼ喪失するに至った。

一方で悲惨なのはインドと東南アジアだ。彼らはBETA侵攻からこれまで一切侵攻も戦闘もしていない。そしてインドに至つては国境にはヒマラヤ山脈がそびえたっている。危機的意識が大幅にかけていたのだ。結果、インド政府が異変に気付いたのは国境が破られ、デリー周辺にまで近づかれた時だった。

ネパールやブータンはまともな抵抗も出来ずに蹂躪され、逃げ遅れた住民は殺されるか繁殖用に捕縛されていく。加えて、インドはこれまでBETAと戦闘をしたことがなかったためにもともな戦術機を保有していなかった。ただでさえ通常兵器が通用しにくいBETA相手に戦術機がほぼない状態で防衛する事となり、侵攻から僅か一週間でデリーは陥落した。インド政府は辛うじて政府機能を保たまま南部のバンガロールに避難する事は出来たが大勢のデリー市民は逃

げる事が出来ずにBETAの糧にされていった。

とはいえこれはまだ被害が少ない方である。今回のBETAの動きは奇襲且つ大規模過ぎた。それゆえに安全だと思われていた箇所程被害は大きい。今回、BETAはハワイやオーストラリア、ニュージーランドにまで上陸したのだから。

まず、台湾が四方八方から上陸してきたBETAによって包囲殲滅され、中華統一戦線は全滅という形で崩壊した。東南アジアではまずインドシナ半島南部にBETAが上陸。先に侵攻していた北部群と挟み撃ちの様相を見せ、マレー半島ではBETAが上陸。シンガポールを目指して南下を開始した。

ニューギニア島でも北東部にBETA群500が上陸。数が少なかったがそれ以上に少ない守備隊ではどうすることも出来ずに敗走を重ねている。ハワイでは諸島のすべてが万を超えるBETA群に蹂躪された。オーストラリアとニュージーランドは政府機能が存在する箇所には2000のBETA群が上陸。逃げ出すことも出来ずに両政府は崩壊するに至り、しばらくの間両国は混乱状態に陥る事となった。他にもフィリピン北部、ボルネオ島北部にもBETA群が上陸。戦線は一気に何倍にも膨れ上がる事となった。

中東においてはアフガニスタン政府があっけなく崩壊。イランもテヘランを失う等奇襲侵攻は人類の虚を完全についた形で成功するに至った。

いまだアフリカ大陸や南米は無事であるが太平洋を渡ってオーストラリアやニュージーランドに上陸したことを考えると安心できる状態ではなかった。人類は一丸となつてBETAと戦う事を余儀なくされたがここまであ号標的が仕込んだ種が発芽した。それは人間級と呼ばれるBETA達が結束させないよう動き出したのだ。

もともと結束など皆無に等しい中でこの暗躍は効果を発揮し、人類は一致団結することも出来ず、それぞれが個別に応戦するという最悪の状況でBETAとの戦争に挑んでいく事になる。

そして、止めの一撃と言わんばかりにBETAは次の手に打って出た。

1991年4月11日、侵攻からちようど一月のこの日。BETA
は北極海を通り、10万という大群でカナダに上陸した。

第三十八話 「最悪の戦況」

北極海を渡ったBETAはカナダのヌナブト準州に属するクインエリザベス諸島やアムンゼン湾に上陸した。一部はグリーンランド北部にも上陸したが無人の地であったために今のところは問題がないと言えた。

しかし、アムンゼン湾に到達した以上防衛を行わないといけなが今のカナダにそれを行う余裕はない。理由は単純である。まず、カナダは人口が少なく、それに伴って兵士も少ない。自国だけでの防衛は不可能だった。そして、次の理由が最も大きいがただでさえ少ない人口はBETAとの戦争が始まって以来減り続けている。別にカナダがBETAと直接戦闘をしているわけではない。原因は1974年にハイヴが落下したことだ。

1974年7月6日、カナダのサスカチュアン州にハイヴのもととなるBETAユニットが到着した。カシユガルハイヴの前例がある以上アメリカは先手必勝と言わんばかりに戦術核を用いて破壊。ハイヴの建設を阻止する事に成功したがその代償として周辺一帯は放射能による汚染が広がり、カナダ西部はほぼ居住不可能となったのだ。それゆえにもともと住んでいた人々はアメリカや東部に移住する事になるが大半がアメリカに行ったことで人口は減少したのだ。アメリカも戦術核を自分たちが使った結果であるとして手厚く保護したためにアメリカへの移住者が増える要因となっていた。

結果的に西部はほぼ無人の大地となり、今回の上陸に対して迅速な行動が出来ない状態となった。カナダ軍やアメリカ軍が現地に到着するころにはアムンゼン湾から上陸したBETAの数は数万にまで及んでいた。

『阻止するぞー！ ここでBETAに橋頭堡を作られれば本国も危険になる！ それだけは避けるんだ！』

『『『『うおおおおおおおおっ！！！！』』』』』

アメリカ軍は数が少ないカナダ軍に代わり主力を務め、上陸してきたBETAの殲滅を開始する。BETAは突撃級を前衛に、中衛に要

撃級、後衛にレーザー級を配置し、その周りを無数の戦車級が埋めるという最近では珍しくもないBETAの基本陣形で進んでくる。

とはいえこの陣形はかなり厄介である。まず、突撃級は正面装甲が異様に硬いために回り込むなどして倒すしかないがそんな事は戦術機くらいしか対応できない。つまり、戦車などの兵器にとつては最悪のBETAと言えた。

そしてその後ろを固める要撃級は防御力こそ高くはないが前にしか進めない突撃級と比べて小回りが利き、両腕の鎌で器用に攻撃できる。鎌自体の硬度も突撃級の正面装甲と同じであり破壊できないものだ。

そして、レーザー級は戦術機の天敵と言える。人類が確認できているBETAの中で唯一遠距離攻撃が出来るこれらはたった一撃で以て戦術機を破壊できる火力を持っており、射程距離も長いためにうっかり高度を上げれば撃墜されてしまう程だった。

ならばとレーザー級を倒すべきかもしれないが最後尾にいるという事と数の多い戦車級がそれを邪魔してくる。戦車級は特筆すべき能力はない。どこの硬さも戦術機の火器で倒せるし小柄ゆえに力も他に比べれば低い。だが、小柄を活かした攻撃の当てづらさとその圧倒的な数が最大の脅威だった。特に一度戦術機にしがみつけば自力ではがすことは難しい。仲間の援助がなければゆっくりと解体されて最終的に破壊される。実際にそのように死んでいった者は多い。

そんな個々の特性を活かした陣形は人類を確実に追い込んでいるが人類も負けているわけではない。突撃級を倒すために地雷を仕掛けたりミサイルや砲撃などの頭上からの攻撃をするなどして対応しているし、光線級レーザー級の損耗率は高いがレーザー級を確実に殲滅する行動もとっている。人類が倒したBETAを合計すればかなりの数になるだろう。

しかし、それでもBETAは倒した数など比較にならない物量で以て圧してくる。そもそも疲労も睡眠も食事も必要としないBETAは昼夜問わずに侵攻する。そんなのを常に相手にできる程人類は強くはなかった。

『うわあああつ?!?!?』

『中隊長——!!!?!!?』

『また一機やられたぞ!? これで何機だよ!』

『20だ! このままじゃ全滅するぞ!』

『やべえ……。アムンゼン湾にさらにBETAだ! 数は数万!』

『はあつ!? ここと合わせれば倍になるじゃねえか!』

『司令部! 至急援軍を! このままじゃ全m……。!』

『ひ、ひいいいっ?!?!?』

必死に抗うアメリカ軍はまるで津波に飲み込まれるように数を減らしていく。戦術機が飛ばばレーザーが落とし、走れば戦車級と要撃級が群がる。1匹倒すと10匹増えるBETAに戦術機は次々と破壊され、中の衛士は食い殺されていく。それはまさに人類とBETAの力関係を明確に表していると言えた。

5月1日。カナダ軍とアメリカ軍はグレートスレーヴ湖に頼りない防衛線を構築する事に成功。一時的にBETAの侵攻を抑える事に成功した。とはいえそれは一時的な物であり、BETAの殲滅に成功したわけではない。アメリカ軍は自国に迫る明確な脅威を前に他国への支援を行う事が出来なくなり、カナダに上陸したBETAに全力を注いでいくようになる。

「人類はもうだめね」

香月夕呼は友人であるまりもと共に京塚食堂に来ていたがそのテレビで報道されたBETAとの戦況報道を見てそう結論づけた。若干17歳にして帝大への編入が認められる若き天才だが自分の能力を使うまもなく人類は滅びるのではないかと思わせる程BETAの動きは早く、そして広範囲過ぎた。これまでに人類がBETAと曲がりなりに戦争できていたのは戦闘範囲に限られていたからだ。今回のようにアフリカと南米を除くあらゆる場所が戦闘範囲となった以上人類はこれまで以上戦線の兵士・物資の数が足りなくなる。そうしてずると消耗を続けていけば待ち受けるのは種の絶滅である。

「夕呼！　いくら何でもここで……！」

「そうね。確かに人前で言う言葉じゃないわね」

幸いにもこの話を聞いたのは食堂の女将とその娘、それを除けば夕呼の目の前に座る神宮司まりもただだ。これだけなら問題ないと判断したとはいえ軽率な発言であることに変わりはない。そのことを夕呼は素直に詫びた。

「……確かに夕呼のいう事も分かるわ。だけど」

「そうならないように頑張っている人たちがいるって言いたいんでしょ？　あたしだってそのくらいは理解しているわ」

戦況報道では欧州方面に話に移り、ユーゴスラビアからの完全撤退と陥落、西ドイツ領の放棄、イタリア半島のほぼ全域の陥落等が報道されており、人類に希望を与えるようなものは何一つとして報道されていない。それだけ人類が劣勢であると伝えていたのだ。

「インドは亜大陸以外をほぼ喪失。東南アジアでは国連の指揮下に入る事を嫌った国々で大東亜連合を設立すると同時にインドシナ半島から撤退を決めマレー半島の防衛に全力を注いでいる。尤も、マレーを蹂躪しているBETA群を何とかしないと防衛もままならないでしょうけどね。そしてオセアニアではパプア島守備隊の壊滅にオーストラリア政府の機能消失、ニュージーランドからの撤退と陥落。あら、たった半年でここまで追い込まれたわね」

「……ねえ、夕呼。なんでBETAは日本に上陸しないのかな？」

まりもの素朴な疑問。それと同じ疑問を持つ者は世界中にいる。何しろBETAの無差別侵攻が始まってから大陸に近い日本は唯一その戦火を免れていた。中には日本はBETAと共謀していると言いつ出す者まで出てくる程だが夕呼は冷静に、だが冷徹に答えた。

「あたしが異星人どもの考えなんて分かるわけないでしょ。……って言いたいけど多分確実に殺すためね」

「確実に、殺すため？」

「そ。台湾が良い実例よ。四方八方から上陸して住民を逃さない。確実に殺す。BETAが人間を食べるのは知っていますでしょう？　それが栄養になっているのか知らないけど人類を食べて力をつけてい

るとしたら……」

「……逃げられないように囲んで一気に食べる。まるで漁じゃない！」

そう、BETAが行っているのは狩りや漁と変わらないのだ。BETAと戦っている群を虎やサメなどと考えれば市民は逃げる事しかできない草食動物や小魚だ。どちらがコストに見合っているかなど言うまでもないだろう。

「多分ハワイを落としたのは太平洋に拠点を持つため以外にも日本の逃げ道を潰したっていう理由も大きいわ。そして、時が来たら四方八方から上陸して喰いつくす。島国という逃げ場のない場所にいる5000万の日本人をね」

かつて日本に上陸したBETAによって日本の人口は半分となった。それでもこの狭い日本列島に5000万もの人間がいるのは魅力的に映るだろう。出来る事なら無傷で捕まえたい。それがBETAの考えだと。

「実際、政府はそう考えているじゃないかしら？ でなければ甲信地方に四方八方を囲む要塞なんて作らないわよ」

最近着手された甲信地方の要塞建設。住民のすべてを強制移住させることで始まったこの要塞はまるでここ以外のすべてが陥落したときに備えているかの如き様相となっているが夕呼の話聞いてまわりもはようやく理解できた。

「……ほんとうに人類の終わりの時は近いのね」

「それなのに人類は一致団結するどころか互いに疑心暗鬼になって足の引つ張り合い。BETAとの戦争が始まる前から酷かったけど最近はもう手が付けられないわね。まるで、BETAがそう仕向けているみたい」

「ありえないわ。あんな異形の異星人がどうやってそんなことが出来るのよ」

「あら？ 案外ありえないわよ。もしかしたらBETAは人間を作り出しているかもしれないし、洗脳という手だって使っているかもしれないわ。BETAが出来ないだろうっていう思い込みがあるだ

けで」

「……」

しかし、それが真実であれば今以上に人類は疑心暗鬼に陥るはずだ。今こうして目の前に座る友人がBETAかもしれない、操られているかもしれないと思っ
てしまえば重要な場面で信用できるだろうか？ 背中を預けられるだろうか？ 自分は出来るだろうか？と考える。結局、夕呼の考えは人類にとってあつて欲しくはない絶望的な予測なのだ。

「どちらにしろBETAはこれからどんどん苛烈に行動するはずよ。たぶん次は南米にでも現れるんじゃないかしら？」

そう予測をした夕呼は食事を終えて立ち上がり会計を済ませると食堂を出た。まりもあとを追っていくがそんな彼女に夕呼は言う。「……見てなさい。あたしはあたしに出来る事で異星人どもを倒して見せるわ。だから、まりもはまりもに出来る事を頑張ってみるといいわ」

BETAの話をする前に言ったまりもの夢。今のご時世でそれを叶えるのは難しいが夕呼はそれでもまりもの夢を応援する。二人の道は大きく分かれようとも自分達の夢のために……。

『くそ！ くそ！ なんでこんな……！』

『まずい！ 新井！ 避け……！』

『神宮司！ あぶn……！』

そして、その夢は二度と叶わぬ儚い夢として散った。

第三十九話 「南米とインド」

夕呼が話した南米へのBETA上陸。それは11月に実際に行われた。最初に発見されたのはチリの首都にほど近いバルパライソである。突如として沿岸部に現れた突撃級に誰もが度肝を抜かれ、大混乱に陥った。11月という冬だったために浜辺に人がいなかったとはいえそれが何の慰めにもならないほどBETAの侵攻は過激だった。

僅か一時間でバルパライソを縦断するとその勢いのままチリの首都サンティアゴに殺到した。当然ながらBETAがここまで上陸してくることなど完全に予想外であり、サンティアゴは僅かな兵士の奮闘むなしく壊滅した。更に、その後の上陸してきた突撃級、そして戦車級によって生き残った人間は食い殺され、周辺一帯から生物を完全に消し去った。

ほぼ奇襲を受けた形のチリは政府機能の早期消失によってオーストラリアやニュージールランドの時と同じように指揮系統が麻痺し、効果的な動きが出来なくなっていた。

とはいえ彼らとチリが違うのは大陸にある国家である為に援軍がすぐに着きやすいという事だった。

「これ以上BETAの好きにさせるな！」

『『『『了解！』』』』』

真つ先に駆け付けたのは隣国アルゼンチンの戦術機部隊だった。実戦こそ初めてだがBETAとの戦闘に備えて鍛錬は続けてきたために実力はそれなりに有していた。彼らはアンデス山脈を駆け降りる突撃級を狩っていく。レーザー級はいないのかまだ山脈の向こう側なのか姿は見えず、突撃級は一方的に狩られていく。

「アンデス山脈を越えさせるな！　ここが南米の生命線と思え！」

『隊長！　戦車及び砲兵は一時間以内に到着するとの事です！』

「よし！　ならば我々はここでBETAの屑どもを食い止める！　総員訓練の成果を見せる時だ！　派手に暴れる！」

『『『『うおおおおおっ！！！！』』』』』

南米に上陸したBETAは予想外にもアルゼンチン軍の前に前進を阻まれた。アンデス山脈という巨大な山が要害となつていゝこともあつたがそれでもアルゼンチン軍は東進を阻むことは出来てゐた。しかし、それはあくまでアンデス山脈がある場所に限られてゐた。チリ軍は南北に分断された上に混乱が広がつていたために大陸南部のパタゴニア地方への侵入を許してしまつた。ここにはアンデス山脈のような険しい山は存在しない。アルゼンチン軍の展開数も少なかつたこともあつてアルゼンチン領内にBETAの侵入を許してしまつた。

一方の北部ではペルーやボリビアが援軍として駆け付けたことで戦線の構築に成功。BETAの北進を防ぐ事に成功した。BETAも一番近いハイヴが地球の反対側と言える程の為か上陸してきたBETAの数は多くはない。精々が1万ほどであり、南米諸国の軍勢に足を止められ確実に数を減らしていった。

そして1992年の年始には援軍が大量に駆け付けたことで唯一劣勢だつた南部も膠着状態にすることに成功した。そして、南米連合軍は反抗作戦を計画。年内の完全奪還を目指して準備を始めるのだった。

このように南米の上陸が失敗に近い形で終わってしまったが全体で見れば人類は劣勢と言えた。欧州ではイタリアが半島の一部とシチリア島以外の領土を失いスウェーデンは首都ストックホルムの防衛線を開始。デンマークはユーラン半島を失つた。スイスも全土がBETAの手に落ち、フランスはベネルクス三国以外の東部国境線すべてがBETAの勢力圏と繋がるという事態に陥つた。

中東ではアフガニスタンが完全にBETAに飲み込まれこそのしたBETAを駆逐出来てゐることもあつて戦線の後退は緩やかだ。しかし、シリア領の一部が奪われるなど少しづつ追い込まれてゐた。インドでは政府機能がバンガロールからスリランカに移動、亜大陸の陥落は目前にまで迫つてきてゐた。

東南アジアではマレー半島の防衛線の構築に失敗。大東亜連合軍は南北から挟み撃ちにされる結果となり、シンガポールが絶望的な防

衛線を繰り広げている。連合の艦艇による支援砲撃が行われているのが不幸中の幸いと言えた。しかし、ボルネオ島が陥落するなど大東亜連合は少しづつ消滅の危機に陥っていた。

オセアニアではようやくオーストラリア臨時政府が発足。指揮系統が復活し、効率的な防衛を行えるようになったが人口が集中していた東部沿岸を初動で失ったことで広がる防衛線をすべて維持できる数がそろえる事が出来ないなど詰みに近い状況にあった。

そして、北米においてはグレートスレーヴ湖とマッケンジー川の防衛線の構築によってBETAの侵攻を阻止する事に成功していた。しかし、北東部の諸島は確実にBETAの手に落ちているだけではなくグリーンランドが完全にBETAの勢力圏となるなど確実にBETAは版図を広げている。

「撃てえ！ 撃って撃って撃ちまくれ！ 弾薬の消耗を気にするな！」

インドは亜大陸に広がるデカン高原を要塞化していたがBETAの侵攻の脅威がなかったために遅々として進まず、侵攻してきた当初は要塞と呼ぶには不十分な設備しか存在していなかった。

それでも他の場所よりも守りは強固であることでインド軍はここで絶望的な防衛戦を展開するしかなかった。インド軍は国民を徴兵すると物資を惜しみなく消費してBETAを吹き飛ばしていく。戦術機はアメリカから供与されるはずであったがカナダ上陸によってそちらに全力を注ぐことになったことから見送られている。つまり、インドは自国で細々と開発した戦術機とそれのもとになった第一世代の供与品で戦わざるを得なかった。

「くそー！ 奴らはどれだけいやがるんだ！ 全然減らないじゃないか！」

北の地に目をやれば一面BETAだらけ。どれだけ銃を撃ち、砲撃を放とうとも一向に減らない。人類が苦戦する最大の原因が今日の前に広がっていた。

「っ！ 突撃級がくるぞ！ 衝撃に備えろ！」

前線指揮官がそう叫ぶと同時に突撃級が要塞に激突する。土台は頑丈に出来ていた要塞は突撃級の突進を受け止めず成功していたがそれもいつまでも持つわけではない。突撃級がぶつかった瞬間を狙って上空より無防備な背中に攻撃を行っていく。

「突撃級の死体を壁として利用する！ こいつらの肉体で攻撃を防ぎ、要塞をより強固なものにする！」

最前列の敵を倒せばその後ろの突撃級は身動きが取れなくなる。上を登るという手もあるがそうなれば動きが鈍った隙について攻撃され、新たな壁にされてしまうだけだ。

「これで少しはもってこれればいいが……」

「大変です！ 戦車級が接近しています！」

「っ！ 急いで迎撃するんだ！ 死骸の間を通られたら一気に接近されてしまうぞ！」

しかし、戦場においてそんなものは簡単に覆される。突撃級で駄目ならばと体躯が小柄な戦車級がその数を活かして一気に進みだした。死骸まで一匹でも多く仕留めんと砲撃や銃撃が戦車級に襲い掛かるが隣の同胞が死んでも関係ないと言わんばかりに進む彼ら相手では攻撃を食い止められているとは思えなかった。

「一部戦車級が要塞内に侵入！ 死傷者多数！」

「指揮官！ 敵後方からレーザー級が迫ってきています！ このままでは航空戦力が無効化されます！」

「くそっ！ ただでさえ戦術機が少なく、BETAと戦える戦力が少ないというのに……！ こうなったら航空戦力が使えなくなるまでに全機発進させる！ 倉庫にある爆弾を全部落としてしまえ！」

前線指揮官はどうせ使えなくなると今のうちに全弾投下する事を決めた。亜大陸にこれ以上後退できる場所はない。レーザー級によつて今後インド洋は航空戦力を投入できない場所と化す。その前に一匹でも多く倒す。前線指揮官はそう決意した。

「急げ！ BETAどもにいいようにやられたいのか!? 人類の力を見せてやるんだ！」

約一時間後、インドでの最後の爆撃が行われた。全ての爆弾を投下

したこの爆撃は地形を変える程の総火力となり、万単位のBETAを吹き飛ばすに至った。これにより、BETAの侵攻は一時的に停止され、その隙をついてインド軍は敗走寸前の西部から全面撤退を決定。半島内部の防衛に全力を注ぐことになる。

しかし、これにBETAは怒り狂ったのか、お返しと言わんばかりにボパールにハイヴを建設。更なる圧力をかけていく事になり、インドでの戦闘は苛烈さを増していくのだった。

第四十話 「二つのドイツ」

「これで、10体！」

東ドイツ亡命政府国家人民軍第666戦術機中隊を率いる中隊長アルフレート・ヴァルデ中佐は今日の戦闘において10体目となる要塞級の撃破に成功した。足のバランスを失い、倒れ行く要塞級の下には多数の戦車級があり、無残にも下敷きとなった。

『こちらシュヴァルツ02！ レーザー級の撃破に成功！ ただし燃料弾薬ともに限界！』

「こちらシュヴァルツ01、了解した。総員傾注！ 我々は役目を全うした。帰投するぞ！」

『『『了解！』』』』

アルフレートは副官であるアネット・ホーゼンフェルト中尉の言葉を受けて撤退を決めた。彼らが抜けた穴にはソビエト連邦の戦術機大隊が入る。とは言え今の第666戦術機中隊は度重なる戦闘によつて定員を大幅に下回っており、数は7機しか存在しない。つまり、本来なら30機以上で守る戦線を彼らはたった7機で守り通していた事になる。

『中隊長。だいぶ我々の数も減りましたし、そのうち小隊に降格されそうですね』

『不安になるようなことを言うな。あたしたちは東ドイツ唯一の戦術機部隊だ。事実上そうなっていたとしても上が認めるわけがないだろう』

シュヴァルツ05の軽口をアネットは注意する。この10年で戦い続けた彼女は少女ではなく立派な女性へと成長していたが、それでも幼さを残す容姿と性格から東ドイツのみならずソビエト連邦内でも人気が出始めていた。

「シュヴァルツ05。気持ちは分かる。だが、部隊編成は上が決める事だ。一軍人の我らが口にしていい事ではない」

『へいへい。隊長ってなんだかんだ言つて東ドイツへの愛国心が強いですよね〜』

『05!』

05の言葉は反逆と捉えられてもおかしくはない。言外に自分は忠誠を持っていないと言っているに等しかったのだから。

東ドイツがアラスカに亡命政府を構えて最初に行ったのは粛清だ。そもそも、国家保安省シユタージのクーデターで戦場の様子が確認できず、東ドイツは国土を失ったためにシユタージ関係者は次々と粛清されていった。

一時はアルフレートも対象となったが海王星作戦での活躍やクーデター当時につかまっていた事、クーデターを起こしたベルリン派とは違うモスクワ派に所属していたことから粛清を辛うじて免れ、戦死したアイリスディーナに代わり第666戦術機中隊の中隊長としてシベリアで暴れる事となった。

しかし、東ドイツは既に中隊規模の戦術機を保有する力はなかった。移転当初こそ数は20以上存在したがそれも度重なるシベリアでの戦闘で次々と破壊され、今では第666戦術機中隊の7機しか残っていないかった。さらに言えば歩兵戦力も1000人程しか存在しない。一番多い時でもにやってきた国民を徴兵して万近い数をそろえたが、一度の戦闘で徴兵した兵の8割を失ったことで少数精鋭の如き戦術を用いるようになっていく。

「シベリアは南部は艦隊の砲撃支援もあり防衛が出来ている。一方で北部は極寒の地という事もあり劣勢だがそのために失っても惜しくはない土地ばかり……。いずれにせよここはまだまだ持ちこたえられそうだな」

アルフレートは世界中の戦況がよくない中でここが一定の安定を見せている事がよかったと呟く。たとえそれが本心ではなく、信頼を得るためにしている事であったとしても。

『それもこれも中隊長たち“海王星作戦の英雄”がいるおかげっすね！俺その時8歳だったけど新聞で読んだっすよ！』

『わ、私もです！要塞級を一人で倒しちゃったって……！』

シユヴァルト06の言葉に07も同意する。01のアルフレート、02のアネット、03のイングヒルト以外の4名はまだ10代の若者

であり、海王星作戦は子供のころに新聞で読んだ遠い話なのだ。それでも自分たちがその英雄と肩を並べ、同じ舞台にいる以上は恥ずかしくない行動をとろうと決意を固めていた。でなければ戦術機に搭乗してまだ2年にも満たない新人が光線級レーザーヤークト呐喊を主任務とする第66戦術機中隊についていけるはずがないのだから。

『帰投したらぜひとも当時の話を聞かせてください！ 俺、包囲されたときの話を聞きたいです！』

『俺は要塞級を倒した時の話が聞きたいっス！』

『わ、私はホーゼンフェルト中尉の恋バナを……』

『うえっ!? あ、あたし!?』

『ふふ、それなら私がいっぱい話しちゃうわ』

『イングヒルトオツ!?』

「ふ。帰投中だからいいがもう少し周囲には気を配れよ新人たち。まだまだここは戦場なんだ。レーザー級に攻撃されるかもしれないと警戒は怠るな」

『『『了解!』』』』

アネットに飛び火し、そこにイングヒルトがガソリンをぶちまけたがそんな彼らの会話を笑みを浮かべたアルフレートはそう注意をして基地へと戻っていく。アルフレート達にとって10年も変わりが無い日常がそこには存在し、それを楽しんでいた。

……いずれ自分たちで壊す事になる日常だったとしても。

「はあああああっ!!!」

西ドイツの第51戦術機甲大隊フツケバインのキルケ・シユタインホフは雄たけびを上げながら目の前の要塞級を撃破する。彼女の周りにはこと切れた無数の要塞級や戦車級が転がっており、どれほどの数を葬ってきたのかがうかがえた。

『シユタインホフ中尉！ 交代の時間です』

「……了解。これより帰投する」

味方からの通信は彼女にとってありがたかった。時間が迫ってきていたゆえに弾薬も燃料も使い切るつもりで消費していたために既に限界が近かったから。

『お疲れ様でした。中尉は少し休んでください』

「ありがとう。確かにずつと戦い続けていたし少し休ませてもらうわ」

交代要員の到着を以て後方へと下がる。彼女が駆る戦術機は戦い続けたことによる消耗が激しく、しばらくは休養が言い渡されていた。キルケは久しぶりの長期の休日だが疲れからか戦術機を降りるとまっすぐ自室に戻りベッドにダイブした。

「ふう……」

彼女たち西ドイツ軍が展開しているのはフランスが国境部に築き上げたマジノ線の後方基地である。マジノ線は第二次世界大戦でフランスが築き上げた大要塞だがBETAとの戦争がはじまると国土の防衛を目的としてフランスがこの要塞を改修。第二次世界大戦時の比ではない文字通り鉄壁の要塞として完成するに至った。

そんなフランスが心血そいで作られた要塞は目論見通りBETAの侵攻を防ぎ続けている。ベルギーからイタリヤまで一つとなつたこの要塞は西ドイツ軍をはじめとする欧州連合軍が協力していることもあり、いまだに要塞が突破された、侵入されたという報告が上らないほどの堅牢さを見せている。

それでも、人的消耗や武器弾薬の消費は激しい。加えて戦術機の衛士の質はお世辞にもいいとは言えない。衛士にとって重要な初陣での死亡するまでの時間、死の8分を乗り切れる者があまり多くはない。火力による面制圧を戦術とする彼らでは戦術機の質を上げる事が難しかったのだ。

結果的に領土的損失はないが人的・物資の消耗が激しくなっている。それでも国土を失うよりは幾分マシと言えるが。

「いつまでこんなことが続くのかしら……」

北欧ではストックホルム防衛線が苛烈さを増しており、隣国のノルウェーではこれ以上の領土の損失は防ごうと絶望的な防衛戦を行っ

ている。デンマークはフェン島を絶対防衛線として定め、全戦力を配備している。その関係上、スウェーデンが陥落すれば東からのBETAに対応できずに敗北するだろう。

南欧においてはイタリアが半島の先端、カラブリアにおいて戦線を維持できている。しかし、度重なる戦闘においてイタリアは既に軍隊らしい軍を持っておらず、イギリスやアフリカ各国の義勇軍が代わりに防衛を行っている。

いまだ戦火にさらされていないアフリカ各国も近年のBETAの動きから対岸の火事として見ている事は不可能だと判断して、積極的なBETAとの戦闘に打って出始めていた。その一環として地中海を挟んだ先にあるイタリアに軍を派遣していた。イタリアが落ちれば地中海を通って北アフリカに上陸してくる可能性が出てくることもあつての派遣だった。

「……ヴァルデ少佐たちは元気になっているかしら……」

シベリアへと旅立っていった海王星作戦の英雄たち。風のうわさでも今もシベリアで活躍を続けていると流れてきている。それに対してフツケバインは散々な目にあっている。西ドイツへの電撃的奇襲を受けた際、前線にいたフツケバインはすぐに戦闘を開始したが、複数の重レーザー級が突如として出現したことで部隊の半数が撃墜される形で撤退を余儀なくされた。その後もドイツを守ろうと戦闘を続けたが次々と隊員たちが落とされていき、今では大隊36機にも満たない20機しか存在しない。それを半数に分けて補給と戦闘を繰り返しているのが現状だった。

「少しは力をつけられたと思っただけど、まだまだね……」

キルケはあおむけになり、天井に手を伸ばしながらそうつぶやくと疲労からくる眠気に身を委ね、眠りについた。次の出撃までに体力を回復させるために。

第四十一話「恐ろしきBETA」

勢力圏が増えるに伴い、管理するのが大変になってきた。既にハイヴは15あり、BETAに至っては1000万近くは存在するんじゃないかと思える程だ。とてもじゃないがすべてを管理するなんてだるくてしたくはない。そこで、本格的に各ハイヴに委任しようと思う。

やる事は単純だ。俺の意志とは独立したハイヴに指揮権を付与。勢力圏の増加をしてもらうわけだ。これはボパールハイヴと鉄原ハイヴに行ってもらおう。インドは陥落寸前だし、日本も……、さすがに台湾の時とは大きさが違い過ぎるからな。西日本くらいはこちらにとどめておきたい。

「そうだ！ 君たちもBETAを指揮してみるかい？」

そこで思ったのがアイリスディーナ達にも指揮をさせてみるという物だ。もちろん誰でもいいというわけではなく、指揮させてもいいと思った人物のみ限定だけだね。現在だけで言えばアイリスディーナ、グレーテル、などの指揮経験もある中尉達。そして俺が作った人間の中で最高傑作と言ってもいいアルフレートとかだな。他にも十数名程いるがそういった者たちなら面白い指揮をしてくれるかもしれない。

「……指揮を執る事に異論はないがどうすればいい？ 何か失敗してはいけないことなどはあるのか？」

「んー、強いて言うならハイヴを落とされるかその周辺まで後退する事だけと別に問題はないな。取られたならその分作りなおせばいいだけの話だからね」

「……！」

ハイヴ建設に必要な頭脳級はそれだけを作ったとしても数百は一気に作れる量と作成速度がある。一つ二つ攻略された程度なら何の問題もない。このカシユガルハイヴを攻略されるのはまずいけど海底部に建設中のハイヴが建設完了すればそこにバックアップを置くことが出来るしトウランにはバックアップが存在するからな。

「……私がこの体にされたときもそうだが貴方は本当に恐ろしい。人類が手を伸ばしても未だに一つとして攻略できないハイヴ。それが一つ程度簡単に補填できてしまうと人間が知れば一体どんな反応を見せるのか……」

「ふふ。その時は是非とも顔を見てみたい。きつといい表情をするだろう」

「……指揮の件だが私は了承した。何処を担当すればいい？」

「別にどこでも……。ああ、希望とかある？」

「強いていうのであれば欧州以外が望ましい」

「……ならオーストラリアにしようか。BETAも軍隊も少なくて泥沼の様相を見せているし、戦線を後退でも前進でもさせたいからさ」
「わかった。早速やってみよう」

アイリスデイーナは了承か。そして欧州以外ね。改造したとはいえかつてはともに戦場をかけた相手を直接滅ぼしたくはないんだろ
うなあ。その気持ちは何とかなく分かる。さすがにそんな彼女に欧州を掃討させるような鬼畜の所業は趣味じゃないからさせられない
な。

「あら、それなら私もやってみたいですわ」

アイリスデイーナの次に名乗り出たのは男のくせに女口調という何とも言えない性格に仕上がったガブリエル君だ。本人はたまにガブリエラっていう女性名を名乗る事もあるが、何でこんな性格になったんだらうなあ……。面白いから特に調整とかしてないけど。

「私に日本攻略をさせていただけませんか？」

「日本を？ 別にいいけどしくじらないですよ？ ここはいまだに5000万という魅力的な人口があるんだから」

「もちろんですわ。私、一度日本人のようなかわいらしい方たちを可愛がりたかったのですよ」

「……そ、そう？ ほどほどにね？」

……マジでなんでこんなになったかなあ。

「それなら私はカナダの軍勢を指揮したい」

次はグレーテルか。カナダってことはアメリカを潰したいのかな

？ 改造前は東ドイツに忠誠を誓っていて西側を嫌っていたみたいだしある意味では当然と言えるか。でもその近くに君たちの故郷東ドイツとそこソビエト連邦ご主人様があるんだけどいいのかな？

「別に良いけど近くにソ連とかあるよ？」

「？ それが何か問題あるのか？」

「ん、特にはないね」

真顔で言ってしまうあたり改造の成果は出ているのか？ 忠誠を誓っていた相手をなんの疑問も持たずに滅ぼそうとするなんて改造の効果が出ているからな。

「私はちよつと……」

「私も特に興味はありませんので」

ファムとヴァルターはやらないと。となると今のところは三人のみか。別に最初だし、単なる思い付きだし強制ではないから問題は無い。

「リーズは多分テオドール君と子育てで忙しいだろうしカティアとシルヴィアは指揮経験ないから任せるのは難しい。アルフレート達はそもそも仕事中。今はこれで様子見だな」

みんなが一体どんな風な指揮を見せてくれるのか。それを新たな楽しみとするのもありかもしれない。最近では戦術機の開発にも飽きてきたし何か刺激が欲しいと思っていたからちよつとよかつたかもな。

「まさかここで戦う事になるとはな……」

トルコ共和国軍のイブラヒム・ドール中尉は自分が所属する第94戦術機甲大隊「コブラ」の面々と共に中東の聖戦連合軍に合流していた。歴史的背景から仲が悪かったトルコと中東がともに戦場を駆け抜ける事態はそれだけBETAに対して劣勢であるという事を示していた。実際に中東諸国は宗派の枠を超えて聖戦を宣言して連合軍を結成している。迅速なその対応によっていまだに中東は持ち

こたえられており、初動の遅れからドイツやイタリアを失った欧州や東南アジア、インド亜大陸各国との違いと言えた。

一方で、トルコは東西北から迫るBETAに対抗しきれずに全土をBETAに奪われている。その際にイブラヒムはロードス島の難民キャンプの人々を救うために行動しており、ロードスの英雄と言われる程の活躍を見せていた。そのせいで部下を死なせ、大尉から中尉に降格させられていたが。

「中尉、聖戦連合軍はすごいですね。世界では疑心暗鬼が広がっているのにここでは一致団結して戦っています。……地理的要因もあるでしょうけどあの日からいまだにすべての国土を失った国家がいなのはすごいことですよ」

「そうだな。だからこそ祖国の国境部からBETAがやってくる可能性が出てきた以上我々も全力を尽くす必要がある」

トルコを蹂躪していたBETAは既に中東に進み始めている。それらが合流すれば聖戦連合軍は苦境に立たされる。それを防ごうとイブラヒムたちコブラの面々は決意を新たにしていた。

「そういえば最近また石油の価格が上がりましたね」

「仕方ないだろう。産油国は中東に集中している。そこが戦場となつた以上今までのように安定した供給は難しい。そして、供給が追い付かなくなれば自然と石油を用いた兵器も動かせなくなる」

「人類にとっての生命線ってことですね」

「そうだ。幸いにも戦況は緩やかな劣勢。戦線を崩壊させなければ反抗も可能な戦況だ。一匹でも多く駆除して人類の反抗の地にしようではないか」

「そうなれば中尉にはまた箔が付きますね。ロードスの英雄の次は人類の英雄ですね」

「……私は英雄なんかではない。本当に私が英雄と呼ばれる人物に相応しかったのなら、部下を死なせる事はなかったはずだ」

「中尉……」

ロードス島の難民を救う結果として部下を死なせてしまった事。それをイブラヒムの中では大きなしこりとなっていた。難民を救っ

たことに後悔こそしていないがもつといい方法があったのではないかと思えてならない。それがイブラヒムの中で日に日に大きくなっていた。

「そもそも我々が情けないせいで多くの国民を殺してしまっている。知っているか？ 国土がすべて奪われた時点で国外に脱出できた者は僅か500万ほどだ。分かるか？ 10人に1人しか逃げ延びられた国民はいない。もちろん、政府が把握していない者もいるだろうがそれでも国民の大半が死んだ事は事実だ」

「中尉……」

イブラヒムの言葉に部下は何も言えなくなった。実際に、奇襲を受けたトルコは壊滅的な被害を受けた。この損害を回復する事はほぼ不可能と言つてよかつた。そして、それをただ受け入れる事しかできなかつた自分では英雄には足りえないとイブラヒムは感じているのだ。

「……だからこそですよ！ 生き残った国民を助けるためにもここで頑張らましようよ！」

「……そうだな。確かにその通りだ。過去を変える事は出来ない。ならば未来ある国民を助けるべきだな。……よし！ なら早速一匹でも多くのBETAを駆逐するぞ！」

「はい！」

部下の言葉に納得し、イブラヒムは戦場へと向かう。彼らの後ろには今も数百万の国民がいるのだから。

そして、トルコ軍を受け入れた聖戦連合軍は今後も善戦し、BETAと一進一退の攻防を繰り返していくのだった。

第四十二話 「水面下」

指揮を任せてみたが、やはりそれぞれで個性があり、見るだけでも面白い。

アイリスデイナーはBETAを効果的に使っている。囿や陣形を駆使して人類の裏をかく。突然戦術を用いたことで驚いている面もあるのだろうが流石は第666戦術機中隊を率いていただけの事はある。

グレーテルはカナダで防衛線を敷くアメリカ軍を相手に面白い戦い方をしている。簡潔に言えば戦線の突破よりもアメリカ人を殺す事に重きを置いている。兵の損耗を狙っているのか、それともアメリカが嫌いだからしているのか分からないが確実にアメリカの負担になっっているのは事実だろう。

一方のガブリエルに動きはない。鉄原ハイヴというか朝鮮半島にBETAを集結させているが今のところ日本を落とすつもりはないようだ。具体的には聞かなかつたが1998年ごろを目安に準備をしているらしい。まあ、今の日本は西日本の壊滅的被害を受けてからそちらが無人の地になっているようだし何か目的があるのかもしれない。後3年程は動きはないとみるべきか。

うーん、そろそろやる事もなくなってきたぞ。G元素の生成工場は順調に稼働している。今はそこまで生産量こそ微々たるものだがいずれ安定した供給が出来るようになる。BETAもオートメーション化が完了して勝手に生産されている。近いうちにBETAが地球を埋め尽くす事になるだろう。

すると俺がするべき事がなくなった。戦術機も作成も飽きてきたし他の事で出来る事はほぼない。となると必然的に暇を持て余すこととなってしまふ。今はみんなの指揮の様子を見ているのが楽しいからいいけどこれもそのうち飽きてくるだろう。そうなった場合に備えて何か趣味を見つけておくべきかもしれないな。……出来る趣味があまりにも限られているがな。

せめて人類側でも面白いことをしてくれているといいんだけど

……。何故かあまり詳しい情報が入ってこないんだよなあ。秘密裏に動いているっぽいけどそれが何かは分からない。アメリカが持つてるG弾でもぶっ放すのかねえ。

「無理を聞いてもらい、感謝します」

「何、私としても君の話は信ぴょう性が高いと踏んだからだ。礼を言われる程の事ではないよ」

国連本部の一室にて香月夕呼は国連の高官と会談を行っていた。会談そのものが公式どころか知る人間すらほとんどいない密談であり、お互いに長く話は出来なかった。

「むしろ私たちが謝らなければいけない。このような状況にしてしまったと」

「……では、やはり？」

「ああ、残念ながらBETA側の人間が確認された」

高官の言葉に夕呼はやはりという気持ちと同時に人類の絶望的な状況が確定してしまったことに顔をゆがめた。

BETAが人類を使って、あるいはなりすまして行動していると夕呼は考察していた。あまりにもBETAに都合のよすぎる、まるで人類を意図的に分裂させるかのような一連の動きが見え隠れしていたからだ。

しかし、BETAがそのような手を用いるとは理解しづらかった。オルタネイティブ3の唯一の成果と言っているBETAの思考リレーディング。結果的に米ソの対立を生み出し、人類の一致団結を不可能とするなどの最悪の結果となったがそれでも『人類を生命体と認識していない』、『BETAにも高度な知能はある』という情報が得られていたが戦略的動きを見せるとは考えられてこなかった。

そもそもBETAは人類を生命体として認識していない以上裏でこそこそと動く必要はない以上そのような手を使ってくるとは思えないというのが通説であったがそれを打ち崩すように去年から一部のBETAの動きが変わった。

まず、オーストラリアではこれまでのごり押しから一変、まるで歴戦の軍人が指揮を代わったかのような高度な戦術的行動をとり始めた。結果的にオーストラリア政府は臨時政府を構えたダーウインを落とされ再び崩壊する事態に陥っていた。

次にカナダ。ここではオーストラリアとは違いまるで人間を殺す事に注力を注ぐかのような動きを見せている。防衛線の突破ではなくそこに張り付く人間の殺害。それを念頭に置き始めたのだ。更に、関係あるかは分からないが鉄原ハイヴでは大規模なBETA群が確認されており、日本再上陸の可能性が示唆されている。

このようなBETAの動きから、BETAは人間の特徴を知っていて、それを基に行動している可能性が浮上。その結果が人間側にBETAの手が入り込んでいるという物だ。それを夕呼は国連内でも権力を持ち、経歴がきちんと確認できた者に提出。可能性を考えていた国連もこの話を受け入れて秘密裏に捜査を開始したのだ。その結果が最悪なものであったが。

「これによつて君が発案したオルタネイティブ4は秘密裏に行わないといけなくなった。悲しい事に国連内部にも可能性が高い者が複数いる。これ以上人類側の情報の流出は避けたい」

「わかつております。そのためにも予算や人員は表向きの理由が必要だと思ひそちらもまとめています」

「早いな。だが助かる。私としても誰をどこまで信じていいのかわからなくなつてきたところだ。確認して問題ないようならそのまま採用させてもらうよ」

BETAの手が入り込んでいるのが分かったからと言って出来る事はほとんどない。下手に拘束や肅清などすればBETAがどのような手を使ってくるかは分からない。そもそも判明したのは世界中で100名ほど。それも囷とも思える程露骨な動きを見せていた者だけだ。確実に巧みに潜伏している者がいるのが確かであり、結果として軽い疑心暗鬼に陥ってしまった。

「……アメリカも今回は協力してくれると言っている。オルタネイティブ4はオルタネイティブ5となるはずだったG弾の集中運用を

隠れ蓑にして実行される」

「アメリカがよく折れましたね」

「G弾の情報が抜き取られている可能性が高い。そうなれば発射しても迎撃出来る手段を取るかそれとも発射すらさせてもらえない可能性が高い」

使つてBETAを倒せるならともかく、それが出来ない可能性が出てきたのだ。人員をいくら整理しようとも疑心暗鬼がぬぐえるわけではない。ならばこそ大々的に動いて囷にするべきだとアメリカは苦渋の決断をしたのだ。

「アメリカとしても今回の決断は望んでいるものではない。オルタネイティブ4が失敗すれば彼らは責任追及をしてくるはずだ。そして……」

「G弾の全弾投下、ですね？」

「G弾は核よりも厄介な代物だ。その分威力も高いが果たしてそれでBETAを駆逐できるか……」

「そうなつてしまえばBETAも人類を本気で潰そうとしてくるでしょう」

今までの様子から、BETAは奥の手を残している可能性が高い。軍事関連の専門家ではない夕呼から見てもBETAには余裕が感じられた。それが人類の動きが分かっているからか切り札があるからかは分からないがその余裕をつく事さえできれば人類がBETAに勝てる可能性が見えてくる。逆に言えば本気になったBETAに人類は勝てないと言つてよかつた。

「香月君。君はこれから秘密裏に準備を進めてくれ。国連も出来る限り支援をすることを約束しよう。だが、それもかなり慎重かつ小規模になる。済まない……」

「いえ、むしろこういったやり取りがBETAに察知される原因となりえると考えればそういった支援も本来は受け取らない方がいいのかもしれない」

「……ふ、国際機関の我々が人目を気にしてこそそと動く。本当に状況は最悪なのだ。……こちらにも信頼できる者を集めよう。お互

い、人類の勝利のために頑張ろう」

「もちろんです。あたしもまだ死にたくはありませんので」

夕呼と高官は互いに握手を交わすとオルタネイティブ4の準備に向けて動き出した。人類は暇を持って余すあ号標的に見つからないように反抗の準備を始めるのだった。

第四十三話 「思考」

1998年。まずはこの年になるまでに起こった出来事を簡単に語ろう。

欧州のスウェーデンではストックホルムでいまだに攻防戦が起こっている。意外にも粘っているが兵の大量投入によってなんとか防衛できているだけの話であり、数年以内に陥落するだろう。隣国のノルウェーではいよいよ首都オスロにまで我々が迫ってきているために防衛線が構築されている。この二国では国民の大半が疎開しているためにいるのはほぼ軍人のみだ。とつてもうまみがないゆえに適当に走らせているからいまだに落とせないのかもしれない。

フランスはついにイタリア方面の要塞であるアルパイン線を突破された。これはバルカン半島で暇していたBETAを向かわせたらあつけなく突破出来てしまったよ。現在はこれ以上侵攻されないようにと必死に防衛しているが要塞線での防衛ではないために犠牲者が格段に増えているうえに少しづつ侵攻を許している。いずれフランス全土が落ちるのも近いかもしれない。

イタリアでは半島を制圧。シチリア島に追いやっているが連中は半島の保有をあきらめていたようでシチリア島は頑強な要塞となつていて突破は難しかった。その腹いせとしてコルシカ島を落とし、サルデーニャ島を狙う動きを見せてやった。これだけで欧州連合軍は犠牲者を増やすか見捨てるかのどちらかの選択肢を取らざるを得ない状況になつたはずだ。

中東では腹立たしいことにほとんど進展はない。トルコ軍も合流した彼らはまともな防衛線もないのにいまだに抵抗を続けている。これまで散々宗教対立をしてきた中東が世界で見れば一番結束しているのは皮肉とも言えるな。正直ここはこれ以上の力おしでも厳しい場所だ。インドを落として空いたBETAをすべて向かわせて圧力を強めておく程度にした。ここは今は放置で問題ない。

インドは言ったとおり、に亜大陸から完全に追い出した。何やら反抗作戦も行われたようだがまともな成果を残さずに失敗している。

とは言えインド軍はスリランカに政府機能を移し終えていたためにそこで抵抗を続けている。まだ完全に戦闘が終了したわけではない場所だ。

東南アジアは大東亜連合が事実上崩壊した。一番軍勢がいたマレー半島は南北から迫るBETAによってほぼ全滅。シンガポールも全滅から一月ほどで陥落した。これにより東西を結ぶマラッカ海峡及びクラ海峡が封鎖された事になる。オーストラリアや北極でも活動している為、事実上海運は東西に分断された事になる。

シンガポールを落とした後は隣のスマトラ島に上陸。中央部の制圧を完了し、北部の敵の掃討と南進しての隣の島のジャワ島にあるインドネシアの首都ジャカルタの制圧を目指している。大東亜連合はさつきも言った通り壊滅状態だ。おそらく今年中には完了するだろう。

フィリピンではミンダナオ島を残してすべての島を失い、ボルネオ島から東進したBETAによってスラウエシ島が落ちた。今はニューギニア島のBETAと合わせてオーストラリアの上陸を示唆する動きをしている。

オセアニアはもはや陥落が時間の問題だ。ダーウィン陥落時にオーストラリア臨時政府が崩壊して以降は分裂状態となっており、アイルステイナの巧みな指揮も合わさっているようにやられている。既に東半分は落ち、僅かな軍勢で広大な戦線を支えようともがいている。ここも年内には陥落しそうな勢いだ。

アメリカ大陸はあまり動きはなかった。カナダでは特に勢力圏が増えたわけではない。グレートヘルがここ数年ずっと軍人殺しを主目標としていたからだがおかげでアメリカ軍の人的損耗率が爆上がりしている。そりや一日1000人単位で殺す勢いだ。そのくらい当然と言えるな。だが、そのせいか最近では戦術機すら前線に出なくなり、後方からの大火力で防衛を行っている。物資の消耗が今まで以上に跳ね上がっているが人の命よりはマシという事だろう。いや、人を育てるよりも物資を作る方がコストも時間も低いからか？

南米はパタゴニア地方で勢力圏が広がったくらいだ。予想以上に

南米連合軍が良い動きを見せている。最近じや欧州から逃げてきた難民も入隊して防衛に参加しているようだ。おかげで潜り込みやすくて助かった。いずれここも瓦解するだろう。

全体的に見れば俺たちの優勢だ。というか劣勢となっている箇所がない。一番人類側が頑張っている中東ですら押されているのだから。それでも人類はいまだに抵抗する力を有しているようだ。そして、なぜか団結し始めている。せつかくいろいろと団結できないようにしてきたのにここにきて連携が取れ始めている節がある。そういう報告は上がってきていないから問題はないと思うが少し気になるのも事実。中華帝国を動かして人類の分裂を謀ってみるか？ いや、中華帝国は悲しいかなまだ力をつけている最中だ。アメリカから領土を奪い取った時は奇襲且つアメリカへの不信が高まっていたからうまくいったが今はそうはいかない可能性が高い。大人しくさせておくべきだな。

となると地道に情報収集をするべきだがそちらもあまり期待できない。所詮俺が作った人間は戸籍がない者たちばかりだ。国家の中枢に入るにはアクスマンのような協力者が不可欠だがそう簡単に見つかるものでもない。あれは運が良かっただけだからな。

そうなるとうすればいいかって事だが……、正直に言って動く必要はないと思っている。別にここで動いたところで何かが変わるわけではない。というよりも動きようがないと言った方がいいか。どうせ本当の意味で団結する事は人類には無理だ。人間は疑い、他者をうらやみ、自分が持っている物や欲しがるものやしようもない生物だ。そのくせ知能があり、理性があり、集団性がある。だからここここまで増え、発展できたんだ。だが、それが人類の団結を阻む障害となっている。呉越同舟なんて言葉は所詮は理想論、そうあるように見えるだけの言葉だ。

人類が団結してこちらに挑むのならそれでもいい。G弾を連発させてもこちらには対抗手段にバックアッププランも存在する。海底のハイヴも建設がまもなく完了する予定だ。本当はマリアナ海溝にでも作ってやろうと思っただがさすがに水圧でこちらが持たない。人

類の攻撃では届かない箇所には建設出来れば十分だ。

それに、今更人類に何が出来る？ ユーラシア大陸の大半が落ち、東南アジア、オセアニアはほぼ手中におさめた。南北アメリカ大陸にも上陸し、両大陸の国々に出血を敷いている。残ったアフリカも、世界最貧国の集まりだ。簡単に制圧できるだろう。

「ああ、待ち遠しい。早く来てくれよ。この物語の主人公さんよおつ!!!」

どれだけ調べてもそれらしい人物は見つからない。日本の一般人の戸籍をいろいろ調べたが全く出てこない。きつと物語が始まると覚醒するとかの流れなんだろう。第一、今も生きてるかさえ分からない。さすがに日本を半分破壊するのはやり過ぎたか？ そこに主人公の親族がいたとしたら致命的なミスだがそれならそれで安心して人類を殺し、資源を回収すればいい。地球をすべて支配下に置いたら次はどうしようか？ 別の星を侵略するか？ それとも友好関係を築く？ 一生地球で神様のように好き勝手して遊ぶのもよさそうだ。もしくは、創造主とやたらに反旗を翻すか？

……やめとこう。地球以外にもBETAはたくさんいる。重頭脳級だけで億は超えているみたいだし俺だけで対抗するのは無理だ。創造主がどんなやつらで、どんな文明を築いているのかさえ分からないんだ。無謀な行いは控えるべきだな。

まあ、どちらにしろ俺は観察するだけだ。ガブリエルの日本上陸。それがどれだけ面白い物になるのか今から楽しみだな。

精々、俺を楽しませろよ？

第四十四話 「帝都燃ゆ・前編」

「約20年ぶり、だな……」

日本帝国海軍第六艦隊旗艦である出雲に乗艦している山口提督はそうつぶやいた。彼の視線の先には艦砲射撃を受けて爆発する朝鮮半島の姿が映っている。しかし、夜間という事と、大雨のせいで視界が悪く、視認性はひどく悪かった。

「BETA先頭集団、対馬海峡より入水。なお、後続多数！」

「……やはり艦隊の数が足りていないな」

「……連合艦隊の他の船はこの台風の影響で出港出来ていません」

「BETAもやってくれ。わざわざこの日を選ぶとはな」

1998年の夏。強い台風日本列島が見舞われる中で鉄原ハイヴに集結していたBETAが動き出した。朝鮮半島南端より入水すると日本に向けて侵攻を開始したのである。偵察兼朝鮮半島のBETAの間引きを行っていた第六艦隊がこの動きを察知して入水の阻止を行おうとしたが艦艇の数の不足から失敗。続々と入水された。

「ですが北九州はこの日のために要塞化されています。……20年前の侵攻で西日本が壊滅したために帝都以西にほとんど人は残っていません」

「あの時は突撃級のみが上陸した。おかげで我々は助かったが見たまえ。BETAは本気で日本を落とすようだぞ」

「……すでに報告は行っています。我々は少しでもやってくるBETAの数を減らすことに専念しましょう」

「……そうだな。我々ではあの数のBETAを防ぎきる事は出来ないからな」

山口提督は自分たちの無力さを感じつつも軍人としての役目を全うしていく。

1998年、BETAの日本再上陸が開始された。

「いやあああああああつ!!!」

その日、帝都にある衛士養成学校の寮に一人の少女の悲鳴が響き渡った。その悲鳴に山城上総やましろう かずさが駆けつけてみれば受話器の前に人だかりができていた。そこにいる全員が上総の親友たちであり、この学校でも切磋琢磨してきた者たちであった。

「どうしましたの!?!」

「九州に配属されていたあの子の彼氏が……」

「……そう」

上総の言葉に答えた甲斐志摩子だが最後まで言う事は出来なかった。しかし、それでも何が起こったのかは理解できた。数日前に北九州に上陸したBETAはその日のうちに要塞化された北九州を突破。九州全土に侵攻を開始した。そして、第二防衛線として同じく要塞化されていた下関を次の日に蹂躪すると本土に上陸を果たしていたのだ。この素早い侵攻により、防衛していた軍は全滅。上総達の前で泣き崩れている少女、能登和泉の彼氏は多くの犠牲者の一人となつてしまったのだ。

「さつき、ニュースで流れていたけど舞鶴と神戸を結ぶ京都前面に防衛線を敷いたって」

「多分だけど訓練の繰り上げてそれが原因だと思う」

「私たちも、戦場について事ね」

いまだに訓練を満了できていない学生である自分たちも防衛に参加する。もちろん新兵以下の自分達が前線に立つ事はないだろうが初の実戦が迫ってきているという事実の上総の表情は硬くなつていく。

「それでも、私たちでも役にたてるって事よね?」

「それはそうだけど私たちも戦えるのかな……?」

明らかに近づいてくる戦闘の気配に石見安芸は弱音をこぼす。いまだに満足に訓練も終えていない自分たちが戦えるのか。それがどうしても不安要素として安芸の心の中に燻っていた。

「……それでも、私たちはやるしかないのよ」

そんな彼女に対して覚悟を決めた様子でそう言ったのは篁唯依だった。譜代武家の娘として育った唯依は常にこの時が来ることを想定して心構えを作っていた。そして何より、亡き父からの言葉が大きいと言える。

『あの日、私は自分の無力さを嫌という程思い知った。古き良きこの古都が蹂躪されていくのを私は見ている事しかできなかった。いや、その時には避難していたから実際に見ることすら出来なかった。だから唯依、お前はそんな無力感を感じないように努力しなさい』

約20年前に上陸してきたBETAは突撃級のみであったが人口の約半分を失う程の打撃を日本に与えた。日本アルプスで辛うじて駆逐できたが、そこに至るまでの土地は突撃級に蹂躪されてしまっていた。今の帝都も、その後には再建された都市である為にかつての歴史は写真でしか見る事が出来ない過去の物と化していた。

「もう二度と大切な物を失わないために……!」

「……そうね。確かにそうだね」

「やろう! 訓練の成果を見せるんだ!」

唯依の言葉に誰もが同意して覚悟を決め、士気を高めた。そして、それぞれが来る防衛戦に備えてそれぞれの準備を進めていく。この戦争で死んでしまうかもしれないと覚悟を決めながら。

1998年7月15日。ついにBETAは帝都付近にまで侵攻した。この日に備えて最終防衛線には日本帝国軍・在日米軍・国連軍の三軍が集結しており、射程圏内に入ると同時に激しい砲撃を開始した。

BETA群はいつも通りの陣形でもって進んでくるがその数は異常とも言える程だった。先頭の突撃級だけで五重の波となっており、方は超えていそうな勢いだった。さらに、レーザー級が先頭集団にいるように突撃級を上空から攻撃する戦術機が次々と撃ち落されていく。

『くっ！ 第一防衛ライン突破されました！ わが隊の損耗率60%を超えます！』

『ひ、ひい!? た、戦車級タンクが取り付いて……!』

『っ、潰さr……!』

司令部につながる通信には現場の悲鳴がいくつも聞こえてくる。その内容からもまともな防衛が出来ていないのがうかがえた。

「BETAの勢いが激しすぎる……!」

そんな現場の様子は後方に配置された嵐山補給基地にいる唯依たちにも聞くことが出来た。如月佳織の指揮のもと補給基地の防衛任務についた唯依たちは前線には出来ずに待機状態となっていた。それゆえに、聞こえてくる通信は彼女たちの心に恐怖を植え付けてくる。

「大変ですよ！ BETAの一部が鷹峯にまで来ていると!」

「鷹峯!? 目と鼻の先じゃない!」

上総が教えてくれた情報を聞いて唯依たちは外に出る。見れば先ほどまではなかった炎と黒煙が真っ暗な夜を照らしている。あまりにも早すぎるBETAの動きに誰もが不安となるがその不安を掻き立てるような出来事が発生する。

「っ！ 戦術機だ!」

「補給、よね?」

前線から嵐山基地に向かって飛んでくる二機の戦術機。激しい戦闘があったためか二機ともボロボロであり、辛うじて飛んでいるという印象を受ける程だった。そんな戦術機を見て安芸が補給の可能性を考えた。しかし、

「違う……!」

何かに気付いた唯依が断言すると同時に、後方の一機がレーザー級の攻撃を受けて撃墜された。目の前であっけなく破壊された戦術機に小さな悲鳴が上がる。そして、レーザー級の攻撃が飛んできたためかもう一機が回避行動を始めるがそんなことは関係と再びレーザー攻撃が行われ、命中。煙を上げて墜落した戦術機は地面にぶつかると爆発四散した。

これから自分たちが乗る戦術機があっけなく撃ち落とされる様子は恐怖と不安を植え付けるには充分だったが、そんな彼女たちに構っている暇はないと言わんばかりに警報音が響き渡る。出撃の合図だった。

「っ！ 行こう！」

出撃の準備は整っている唯依たちは急ぎ自分の戦術機のもとに向かう。整備兵たちが準備を整えており、唯依たちは戦術機を起動すると動き出す。

『BETA先頭集団が突出！ 数はおおよそ300！ 突撃級がその半数を占めている。その後方から要撃級、戦車級。レーザー級がその後ろに控えている。レーザー級を最優先でたたき！ 攻撃部隊と支援部隊に分け、速やかに排除！ 局地的にでも制空権を奪い取るぞ！』

「『『『了解！』』』」

如月中隊長の言葉を受けて唯依たちは出撃する。それぞれの思いを胸に抱きながら。祖国を守らんと、彼女たちは戦術機に乗り、空を駆けていくのだった。

そして、そんな彼女たちをはるか西方より見ていたとある男は目を見開くと大きく口角を上げ、顔をゆがめると呟いた。

「いいね。あの娘たち。可愛いから手に入れようか」

少女たちの覚悟を踏みにじらんと悪意が急速に駆け回る。逃れる事すら難しいそれは彼女たちを覆い、そして離れる事が出来なくなっていく。

彼女たちに悪意が接触するまで、残り僅か……。

第四十五話 「帝都燃ゆ・後編」

篁唯依は成績の良さと家柄から嵐山守備中隊の第二小隊隊長に選ばれている。初の実戦でいきなり指揮を行う事になったが何とか小隊をまとめてBETAと戦闘を開始した。

しかし、戦闘開始から十分は経過した頃から唯依は違和感を感じ始めていた。最初は気のせいかと思っていたが死の8分と呼ばれる新兵が死ぬ平均時間を超えるとほぼ確信へと至った。

「私たちが避けている……？」

BETAはどういうわけか唯依たちを攻撃する事はほとんどない。正確には攻撃してくるが優先順位が低いのか、他の小隊を狙う傾向にある。いくら唯依たちが攻撃をしてもその傾向が変わる事はない。最初こそ背中を見せるBETAを殺していった小隊の面々も次第に困惑してくる。

『唯依、これってどういう事なのかな？』

『私たちは敵にすらなっていないって事……？』

攻撃をあまり受けないのはいいことなのかもしれないが、そのせいで他の隊員が襲われるのなら罪悪感も出てくる。だが今は好都合と無防備に背中を見せるBETAを駆逐していく。

『っ！ 増援を確認！ 数は……、見える限り300はいます！ 突撃級を先頭に急速接近中！』

『増援だど!? そんな報告は……！ コマンドポスト！ 応答しろ！』

『コマンドポスト！』

報告にない増援の出現に、如月中隊長はコマンドポストに呼びかけるが一切の返事は帰ってこない。それもそのはずであり、すでに嵐山基地は陥落しており、中の人間は逃げるか喰われるかのどちらかとなつている。それに伴い一時的な指揮系統の混乱が起こっており、それにつけ入るようにBETAは攻勢を強めていた。いくつかの防衛ラインは崩壊、または突破されており、京都の都市部にまで入り込みそうな勢いであった。

「くっ！ 弾薬が……！」

『120ミリ100！ 36ミリ1マグ！』

『36ミリ残弾0！』

まともに補給が来ない状況である為に弾薬は激しく消耗していく。しかし、彼女たちを囲むように要撃級の群れが迫ってきており、危機的状況に陥り始めていた。

『……ここを死守する意味もはやない、か。全小隊に告ぐ！ 直ちに戦域を離脱！ 第8ラインにまで後退せよ！』

『『了解！』』』

如月中隊長の指示により中隊は一気に飛び立っていくがその中で一機、長刀で戦いを続ける者がいた。九州で恋人を失った和泉であり、BETAを殺すことに一番意欲的だった少女だ。

「和泉！ 撤退よ！」

しかし、和泉は長刀を振るうのをやめない。既に事切れた要撃級に対して何度も何度も長刀を振り下ろしていく。それはまさに憎い相手を殺すときに行う行為のようであった。

「和泉！」

『いや！ 逃げるなんてできない！ 敵を……ここで敵を討つんだ！』

「和泉……」

和泉の気持ちは唯依とて分かっている。だが、ここで一人だけ残って戦っても無駄死に等しい。それゆえに唯依が強い口調で命令をしようとした時だった。

「っ！ 和泉避けて！」

『……え？』

和泉の背後より要撃級が接近。無防備な背中に前腕部を叩きつけた。

『きやあああああつ?!?!』

「和泉!!」

『よせ！ 篁！ レーザー級が迫ってきている！ 急げ！』

足を失い、うつ伏せで倒れる戦術機に要撃級は馬乗りになり今度は腕を破壊していく。そんな目の前の光景に唯依が銃撃を行おうとし

たが如月中隊長がそれを止めた。遠くを見ればBETAの後方からレーザー級が見えており、今は味方が斜線上に居るために問題はないがすぐにでも攻撃が始まりそうな様相を見せてた。

「……………ごめんなさいー」

唯依は和泉を見捨て、撤退を始める。その後ろで、和泉の乗る戦術機に戦車級が群がっていくのが見える。四肢をもがれ跳躍ユニットも破壊された彼女の戦術機に抵抗する力はない。通信がイカれたのか彼女の悲鳴や悲痛な叫びが聞こえてこないのが不幸中の幸いと言えるだろう。

『急げ！ 直ぐに飛んでくるとは思えないがいずれにせよここd……！』

『中隊長!?!』

中隊の面々に指示を出していた如月中隊長は突如飛んできたレーザー攻撃によって撃墜された。後方を見てみれば丘の上から唯依たちを狙っているレーザー級の姿があった。他のBETAが丘を降りたことによつてレーザーの射角が開けたのだ。

複数のレーザーが飛んでくる。それらは数少ない中隊の戦術機を次々と撃ち落していき、気付けば残ったのは倒された和泉以外の何時もの面々のみだった。

『このままじゃ全滅よ！ 何とかしないと……！』

『でも向こうの丘までまだ距離が……！』

悲鳴にも似た叫び声が通信されてくる。それだけ絶望的な状況であり、逃れるのが難しい局面であった。しかし、そんな彼女たちを救うようにレーザー級をはじめとするBETA群に大量の砲弾が突き刺さる。

『爆発!? 一体何が……！』

『艦砲、射撃……?!』

それは琵琶湖に停泊する第二艦隊による砲撃であった。まだ前線には多くの兵がいる中での砲撃、しかも帝都を自ら破壊するような攻撃を行わなければならず、艦砲射撃を実施した小沢提督の心は荒れていたが、おかげで唯依たちは後方に撤退する事に成功していた。

しかし、すでに防衛ラインのほとんどが機能していない。アメリカ軍に至っては勝手に後退までし始める始末だった。現在戦闘を行っているのは日本帝国軍の残党と国連軍、琵琶湖にいる空母艦隊とその艦載戦術機のみだった。それに対して、BETA群はさらに数を増していた。軽く見積もっても戦闘開始時の倍は存在しているだろう。

『私たち、どうなっちゃうのかな……?』

『BETAにだけは喰われたくはないわね』

BETAは人間を食べる。それはこの世界の誰もが知っている常識だった。それが栄養を摂っているのか別の目的があるのかは判明していないが、食い殺されるのだけは嫌だと誰もが思っている。

「せめて味方と合流出来ればいいんだけど……」

たった4人しかない現状。それも全員が訓練を繰り返し出てきたばかりの新兵である。不安しか感じない状況であり、味方と合流する事を考えていた。

そんな唯依の思いが通じたのか？ 唯依たちの通信にノイズが走る。

『……よ。こ……は……』

「っ！ こちら嵐山守備中隊第2小隊隊長篁唯依です！ 聞こえますか!？」

『……えている。私は国連軍第66戦術機大隊隊長ベアトリクス・ブレーメ少佐だ』

「っ！ 失礼しました！ 少佐殿！」

『篁と言ったか？ 貴官も後退中か?』

「はい！ 私を含めて5機が健在です！」

『よろしい。ではともに行動しよう。あいにく我が隊も損耗が激しく3機のみしか残っていないくてな』

大隊にも関わらず3機しか残っていないという時点で激しい戦闘が行われたことは確実と言えた。やがて防衛ラインの方から3機の黒い戦術機が現れ、唯依たちに合流した。

『篁、済まないが先導を頼む。日本に来たのはつい最近でな。まだ地理を把握できていないのだ』

「了解しました。我々が先導します。ついてきてください！」

そう言つて唯依たちは飛び立つ。ベアトリクスと名乗った女性は、通信オンリーでカメラが起動していないためか、口角を上げた。

『もちろんだ。だが、ここから先は我々が案内しよう！』

「……………」

その瞬間、味方と思つていた3機の戦術機に唯依たちは銃撃を受けまともな抵抗も出来ずに戦術機を落とされた。

第二艦隊による艦砲射撃によつて辛うじてBETAの勢いを止める事に成功した日本帝国軍は戦力を再編成すると京都の防衛を継続したが、8月15日に京都は陥落。戦場を東日本へと移すこととなった。

そして、初日に発生した嵐山補給基地の陥落においてその守備についていた戦術機中隊で生存が確認されている人物は誰一人として存在せず死亡判定を受けていた。更には一部の者が目撃した黒い戦術機に関しても情報はなく、見間違いという線で落ち着くことになるが、一部の者は最悪の想定を考えるようになるのだった。

第四十六話 「佐渡島」

1998年夏より始まったBETAの日本上陸。たった一週間で九州・中国・四国地方を落とすと日本帝国軍・国連軍・アメリカ軍による三軍共同の京都防衛ラインを一か月の戦闘によつて陥落させた。帝都が陥落したが首都機能は既に東京に移していた事で被害と混乱を最小限に抑える事が出来ていた。

しかし、だからと言つてBETAの勢いを抑えられたわけではない。京都陥落後、BETAは上陸当初の勢いこそないものの、ゆつくりと東進しており、前回の上陸では最終防衛線として機能した日本アルプスに猛攻を仕掛けていた。

ここはBETAが四方八方から上陸したときに備えて建設されている要塞が存在しており、その建設の目的通りBETAの侵攻を食い止めていた。しかし、もともと建設途中という事もあり完全に防げているわけではなく、少しづつ損害が出始めていた。さらに言えばこの要塞にこもる場合には放棄する予定である沿岸部の東海地方や北陸地方はBETAの侵攻を受け大きく後退していた。

そして、京都陥落より約一月後の9月25日。佐渡島は戦場となった。元々新潟方面に戦力を割いていた佐渡島には極わずかな戦力しか残されていない。それらも新兵などで数をそろえている状況であった。しかし、幸いにも日本海防衛の要所として早くから要塞化されてきていた。そのため迎撃準備は整っており、一方的に蹂躪されるような事はないと言えた。さらに言えばこの時帝国海軍第二艦隊が哨戒中であり、防衛戦闘に参加するべく動き出していた。海上からの支援もあり、少しは防衛が出来ると思われていた。

「BETA群第一波機雷源に接触！」

「機雷源、第3から第7まで消滅！」

佐渡基地中央作戦司令室ではBETAの接近により騒がしくなっていた。BETAの接近の叫び声が響き渡り、関係各所への通信でいつも以上の騒がしさを見せる。

「砲台から砲撃準備よろし、との報告！」

「十分に引き付けるまで待て！ どちらにしる海底のBETAに有効打にはならん！ それと各戦術機中隊は出撃体制を急げ！」

「BETA進行速度落ちません！」

「第一波、第二警戒ラインに突入！」

佐渡島を取り囲むように張り巡らされた地雷源は効果を発揮しつつもBETAを止めるには至らなかった。何しろBETAはそんな地雷で倒しきれない程の数で以て侵攻してきているのだ。むしろ一匹でも数を減らせられたと考えるべきだった。

そして、一定の距離にBETAは接近してきた。最初に突撃級が海上に姿を見せ、海に浸かっているために遅くなっているとはいえその巨体から信じられない速度で近づいてくる。

「各砲、所定の目標に向けて効力射開始！」

岩城副官の命令に従い、佐渡島中に設置された砲塔から一斉に攻撃が始まる。更には第二艦隊が反対側の沖合より艦砲射撃を実施。BETAを次々と葬り去っていく。その威力はすさまじく、あつという間に接近していた第一波のみならず第二波まで殲滅する威力だった。

「第一波及び第二波消滅！ 続いて第三波及び第四波来ます！」

しかし、そんなものはBETAにとっては何の損害でもない。人間に例えるなら10万の軍勢の中で一人が戦死した程度の損害ではない。そして、100から1000の兵士が常に補充されるようなものなのだ。

それを示すように第三波が全滅する間を縫うように第四波が防護壁に取り付いた。沿岸部に作られたこの防護壁は海から出て直ぐであつたために勢いが足らなかつた突撃級の足止めに成功していた。急こう配のせいで登る事は出来ず、後ろに下がろうにもその後ろからやってきた突撃級によって身動きが取れない状況になつてしまつていた。

『防護壁沿いの突撃級を掃討する。全機兵器使用自由！ 猪どもを黙らせろ！』

『『『『了解！』』』』』

そんな突撃級を背後より攻撃していくのは佐渡島に配備された戦術機中隊の一つであるA中隊だ。ここには10日前に配属されたばかりの駒木少尉をはじめとして4名の新兵がいた。うち3名は初の実戦であったが今の状況はBETAとの戦闘において最も楽な実戦と言える。何しろ防護壁に邪魔されて身動きが取れない突撃級を背後から攻撃するだけなのだから。新たにやってくるBETAに背後を見せる形にこそなるが現状においてはただ掃討するだけでいい流れ作業であった。実際にA中隊は僅か数分で突撃級を殲滅すると補給のためにいったん戻り、B中隊に後を任せていた。

「A中隊防護壁周辺の掃討を完了」

「第五波到達まであと1分です！」

報告をする兵たちにも安堵の雰囲気が見え始める。まだまだ予断を許さない状況だがそれでも防衛に成功しているのは事実なのだから。

「想定していた戦力に対して何とか回っているようです」

「予備の戦術機部隊はない。薄氷の勝利でしかない。本当の防衛戦はここからだ。米軍の支援はまだか？」

日米安保条約はいまだに有効である。それを証明するように京都の防衛線でも活躍していたがここにきてアメリカ軍の動きは確実に鈍くなっていた。

「依然として山形沖に停泊したままです……」

「くっ……！」

そしてそれはこの佐渡島の状況を見ても同じだった。アメリカ軍に動きはなく、確実に見捨てていると言われてもおかしくはない行動だった。そして、それが分かるからこそ基地司令の橘雅清は怒りを露わにした。

「もしここで大量に来るか要塞級のようなBETAが来ればこの戦況はひっくり返る。……そうなれば佐渡島は陥落し、日本海防衛の要所を失う事になる！ それがどういう意味につながるかを連中は理解しているのか!? そんなにカナダに全力を注ぎたいのなら変な期待を見せずに帰ればいいのだ！」

カナダの防衛に戦力を注ぐアメリカは世界中の戦闘から戦力を引き始めている。京都陥落こそ日本帝国の帝都であつたから防衛を行つたがそれ以外では戦力の消耗を避けたい。そんなアメリカ軍の思惑は見え隠れしている。

「B中隊第五波掃討完了」

「A中隊も補給完了。いつでも出撃出来ます」

そんな基地司令が怒りを露わにしている中でもBETAとの戦争は続いていく。現状では特に問題もなく防衛に成功している。このまますべての攻撃を防ぎきれたら……。そんな淡い願いを打ち砕くように警報が走る。

「っ！ 5606地点より新たなBETA反応！」

「5606だと!? B中隊と同一座標ではないか！」

『こちらB01! 要塞級の出現を確認! それも2、3……5体だ!』

「馬鹿な……!? 要塞級の入水報告はなかつたはずだ！」

「それが……、大陸側からの侵攻と思われます……」

「大陸側……。厄介な……」

本来は大陸側からの侵攻を防ぐ目的の佐渡島。その本来の役目通りにBETAがやってきたわけだが完全に目の前のBETAに気を取られてしまつていた。

「っ！ 防護壁の一部が破壊されました! BETA第六波、佐渡島に上陸！」

「A中隊の出撃を急がせろ! B中隊はこのままでは全滅するぞ！」

ただでさえ戦闘を終えたばかりのB中隊は消耗しているのにこのまま要塞級と戦闘できる余力はほとんど残っていない。

「くそっ! 支援要請を出せ！」

「本土も師団規模BETA群と交戦中。こちらに向かえる状況ではなく……」

「米軍は!？」

「……いまだ、一切の返答がありません」

「何のための安保条約だ! 要塞級がレーザー級を排出すれば終わり

だぞ……」

今でこそ空を自由に飛び回り、BETAの侵攻を食い止めている戦術機もレーザー級が出現すれば空を飛べなくなる。そんなことをすればレーザー級の餌食になるだけなのだから。

「A中隊出撃！ 迎撃を開始しました！」

「新たな要塞級出現！ 数は5体！」

「これで10体……。ここまでか……」

あまりにも絶望的な戦況に基地司令はあきらめの感情が浮かんでくる。米軍の援護もなく、現有戦力では防衛すら難しくなってきた。

「！ A中隊が上陸地点の要塞級を5体撃破！」

「新たな要塞級出現！ 7体！」

倒した数を上回る数が補給されるように出現する。更には要塞級の攻撃によってA中隊にも悲哀が出始めていた。

「A中隊05、06、08通信途絶！」

「第七波来ます！ 数は1万2千！」

「B中隊は!？」

「出撃可能な機体が残っていません……」

「！ 撃破した要塞級より溶解液が発生！ 防護壁によりかかっていた事で壁が傾いています！」

「なんだと!? 止めろ！ 防護壁を破られれば市街地が……!」

「だめです！ ……防護壁、倒壊しました」

司令部の中央モニターにはBETAを示す赤いマーカーが壁を越えて市街地に入っていく様子が移されていた。それが意味するのは佐渡島の防衛線の決壊と失敗を意味していた。

「市街地、被害甚大！」

「だ、第八波が沿岸部より来ます！ 数は2万！」

「BETA共め……!」

基地司令はそこまで報告を聞くと深く息を吐く決断をした。

「佐渡島を放棄する。各員撤退をさせろ。各戦術機中隊は逃げる島民の警固をさせろ」

「……了解しました」

佐渡島の放棄。それがどれだけ大きい意味を持つのかをこの場の誰もが理解している。しかし、すでに大勢は決し、島に残っても蹂躪されるだけである。ならば少しでも助け次に備える。いつか訪れるであろう人類の勝利の日のために。

「……第二艦隊より司令部へ。両津港へ退避せよと通信が入っています」

「小沢提督か……。感謝するとだけ伝えてくれ」

「了解しました！」

基地司令のその言葉の意味。それが何を意味しているのかは簡単であり、それがどれだけの決意と責任感でなされているのかがうかがえる。たとえそれが無意味どころかBETAに利する行動であったとしてもだ。

1998年9月25日。この日佐渡島は5万近いBETAの侵攻により陥落した。同時に北陸地方も陥落。日本帝国軍は更なる戦線の後退を余儀なくされた。更にはアメリカ軍がカナダへの戦力集中を理由に日米安保条約を一方的に破棄。日本国内から軍隊を引き揚げさせてしまった。これにより展開していた戦力としてみれば大幅に低下せざるを得ず、更なる劣勢が予測された。

しかし、これ以降BETAは不審な動きを見せた。佐渡島と横浜にハイヴが建設されたのだ。これまでBETAは沿岸部からそれなりに距離があるか前線から遠く離れた場所にしかハイヴを建設してこなかった。にも拘わらずまるで攻撃してこいと言わんばかりのこの動きは挑発とも、人類をなめているともとれる行動だった。そんなハイヴの建設に対して人類が出した結論は簡単である。その挑発に乗る事だ。

たとえ罨だとしてもその罨ごと叩き潰す。その覚悟で以て日本帝国軍は国連軍と共同で横浜ハイヴ攻略戦、明星作戦を1999年に決行するのだった。

第四十七話 「明星作戦1・始動」

ふふ……

はは……

あははははははっ!!!

やっぱ楽しいわあ！　これだからやめられないのよ！

「……ガブリエル。今回の一件は説明してくれるんだな？」

「もちろんですよ」

ふう、怖い顔をしているわね。彼、と言えいいのかしら？　彼で

も彼女でもないけれど名前はないし彼と便宜上呼ぶことにしましょうか。彼は見ただけでも怒りを露わにしているわね。

「ならば聞かせてもらおう。何故、態々前線にハイヴを建設したのか。佐渡島はまだ理解できる。あそこからならBETAを日本中に送り込めるからな。だが、横浜の方はなんだ？　建設の理由が不明すぎる。しかも態々自ら赴く程の事でもあるのか？」

「もちろんですわ。とは言え先に言わせてもらえれば別に横浜だから建設したわけではありませんわ。一般市民を大量にとらえられたのがここだっただけの話ですわ」

それさえかなっていれば横浜じゃなくても問題はありませんでした。佐渡島は可愛らしい少女を見つけたからと言って途中から彼が指揮してしまっていましたし、それ以外の日本ではほとんど一般市民はいませんでした。そんな中で横浜に侵攻したときには逃げ遅れた一般市民が大勢いましたわ。

「だから横浜に作ったと？　だがそれでは……」

「攻撃を受けると言いたいのですね？　問題ありませんわ。彼らが行動するのも計画のうちですので」

私が考えているのはこうだ。まず、この横浜において快樂実験を行う。人間をどのように刺激すればショック死寸前の快樂を送り込めるのかを知りたいために一般市民を使って実験します。そして、そんな彼らをハイヴ攻撃に来た者たちに見せる事でその表情を楽しめるでしょう。ハイヴ攻略戦はきつとすぐにも行われると思いますわ。

こんな前線にハイヴが建設されるなんて今までなかったんですもの。だからBETAの勢力圏内の奥深くに位置してしまう前に攻撃してくると予測しています。たとえば罫だと分かっていたとしても。

「……なるほどな。だが、この計画だとハイヴの中枢にまで入り込ませるのだろうか？ 問題ないのか？」

「ええ、実はこのハイヴは特殊なつくりにしようと思っています。」

まず、メインシャフトを深く掘ります。具体的にはフェイズ4あたりまで掘れば言う事はないですね。そしてそこに死角となりやすい位置を作り、レーザー級を配置。欲を言えば重レーザー級がいればいいんですが数が少ないので無理強いはしませんわ。後は穴の下まで降りた人間を四方八方からレーザー攻撃で袋叩きにする、というものですわ」

「理解は出来たがうまくいくのか？ 一撃で葬り去れなければ反撃が来るぞ」

「その時は最下層にドリフトを作って大量のBETAを用意。それらで殲滅すればいいのです。そのために横浜ハイヴは地上に通ずる道をメインシャフトのみにして横道を潰します」

「……まあ、良いだろう」

ふふ、あなたならそう言ってくれると思っていましたわ。

そう、この横浜ハイヴは意図的に用意された狩場。かつてのオリョクルミンスクハイヴとやっている事は同じですわ。ただ、それが戦術機の実戦であったか人類を狩る為のものかの違いでしかありません。

ああ、楽しみですわね。戦術機は破壊する必要がありますが一般兵が入ってきた場合はわざと殺さずになぶるように攻撃しましょうか。闘士級を使って両足を潰し、そんな状態で石を投げさせて遊ぶ。……いい、良いです！ これならいつまでも楽しめそうですわ！

「アメリカは日米安保条約を破棄して撤退したみたいだし日本に構う事はないだろう。そっちからの増援はないとみて間違いないだろう」

「ふふ、米軍がなんですか？ この狩場はアメリカ軍にも有効ですよ？」

「G弾を用いる可能性もある。油断はできないだろう？」

「確かに日本で使用する可能性はありますがそれならカナダの方が先でしょう?」

カナダはグレーテルさんが執拗に人的損耗を念頭に置いて攻撃しています。元々カナダは不毛の土地となっっていますし今更G弾を落としても問題はないでしょう。

「……お前が良いなら止めないがまさかここで観察するのか?」

「もちろんですよ。実際に見てこそ楽しいのですから」

どっかの誰かさんのように奥で引きこもっているなんて私には出来ませんね。リスクを背負って行動してこそ楽しいのですから。

「……まあ、良いが死んでもお前の肉体に予備はないし復活は出来ないからな?」

「あら? そんなもの必要ありませんよ」

そんな分かり切った安全なんていりません。あなたはそうやって安全に安全を重ねて後方で震えていればいいんですよ。私はあなたに作られた以上逆らいはしませんがだからと言って行動まで縛られる事はありませんよ?

「そうか。それじゃ俺はこれで失礼するでしょう。佐渡島と京都で確保した娘達を改造しないといけないからな」

「ええ、どうぞごゆっくり」

そうやって女のお尻を追いかけているといいわ。私は私で楽しむだけですから。

オペレーション・ルシファー
「明星 作戦ね……。まあ、仕方ないわ」

香月夕呼はオルタネイティブ4の責任者として日本帝国の帝都機能が移転された仙台にて活動を行っていた。そんな彼女の最近の仕事内容は目前に迫ってきた明星作戦の準備である。既に必要な手筈は整っており、今日にでも参加する兵が横浜に向かう事になる。夕呼は非戦闘員である為にこの仙台で見守る事しかできない。

「どちらにしる実戦での威力を確かめたいという気持ちも分かるし隠れ蓑になっている以上ここで使うのは理に適っている、と言いたいわね……」

夕呼は手に持った明星作戦の大まかな内容書類を見て眉を潜める。納得もしたし理解もした。だけど人間として、日本人としての夕呼の心は否定していた。今すぐにでも止めたい。そんな気持ちで襲ってくるがそれを義務と責任感でもって押しとどめる。既に賽は投げられたのだ。作戦の変更も中止も出来ない。

「横浜ハイヴにG弾を投下してからのハイヴ攻略戦……。もしオルタネイティブ5が本格的に始まればこれが通常の行いになるのよね……」

G弾の威力はこれまでの起爆実験で立証済みだ。そしてその結果もたらされる被害にも。それでも、今のオルタネイティブ4はオルタネイティブ5のG弾の運用を隠れ蓑にして発動している。それを示すためにもG弾は一度使っておく必要があったのだ。そんな中での横浜ハイヴの建設はまさに渡りに船であった。

「BETA、あなたたちが何を考えているのか知らないけど、これまで人類が失ってきたもの、その一部だけでも返してもらおうよ」

夕呼は決意を秘めた瞳で横浜ハイヴが撮影された写真を睨むように見ながらそう言うのだった。

様々な人物の思惑や決意が重なりあい、複雑に絡み合った明星作戦が今、幕を開けようとしていた。

「……」

そしてそんな作戦の舞台となる横浜ハイヴをあ号標的はるか遠く離れたカシユガルより真剣な表情で見つめるのだった。

第四十八話 「明星作戦2・G弾」

「ついに始まったな」

1999年8月5日。今日この日について人類の反抗作戦が始まった。見る限りかなりの戦力が参加しているな。……これは海王星作戦を超える量かもしれない。

「艦砲射撃が始まりました」

「見りやわかる。相変わらず凄まじいがな」

この世界の日本帝国は戦艦をいまだに保有している。というより航空機の無力化によって空母がお払い箱になっているし、火力の高い戦艦がいまだに活躍出来ているわけだ。そして艦砲射撃によって横浜ハイヴ周辺のBETAが吹き飛んでいく。レーザー級による迎撃が戦艦の撃沈も行われているが数が違う。よく見れば日本海側からも攻撃をしているようで挟み込むような重厚な攻撃だ。日本列島の形をうまく活かしていると言えるか？

「おいおい、大分削られているが大丈夫なのか？」

「地上のBETAは相当数がやられるでしょう。ですがハイヴ内にはかなりの数が健在ですので問題はないと思われます」

「そうか」

流石は軍人だけあってアイリスデイナーは落ち着いているな。言い忘れていたが今は3人が余裕で座れるソファで右にアイリスデイナーを、左にカティアを侍らせて観戦中だ。やはり観戦のお供は美少女だろう。

「カティアはどう思う？」

「わ、私ですか!?! えっと……。艦砲射撃は短期で終わらせて戦術機を投入すると思います。さすがにハイヴを攻略するのなら艦砲射撃では出来ないのです」

「ふむ」

というか現状だとそれ以外のハイヴ攻略法はないようだし仕方ないか。それにしても意外とカティアはこういつたことをスラスラと答えられる。第666戦術機中隊では新兵みたいな感じだったが西

ドイツでしつかりと軍人として教育を受けてきたという事だろうな。

……そうだ！

「なあ、カティア」

「？ どうしましたか？」

「ずっと聞きたかったけど西ドイツが陥落したじゃないか？ どう思った？」

「どうって……」

カティアはなんでそんなことをと思っているようだが俺はカティアがどうこたえるのか楽しみで仕方ない。

「そんな事どうでもいいじゃないですか。それよりもいきなりどうしたんですか？」

「……いや、何でもないさ」

ああ、顔が歪んじゃうよ。あれだけ東西ドイツの統合を願っていた少女が今じゃ祖国をどうでもいいと！ 興味がなくなっている！ ああ、やつぱり癖になる。脳内で大切なものが変わってもそれを受け入れてしまい、なんの疑問も抱かなくなる！ 楽しい！ 楽しい！ これが終わったらこれで遊ぶのもよさそうだ。というか遊ぼう！ 絶対に楽しいから！ いや、いっそのこと主人公で遊ぼうか。ヒロインとかを使って絶望を与えるのもよさそうだ。その時は一体どんな顔を見せてくれるのか……！

「あ、アイリスディーナさん。なんか物凄く怖い顔してるんですけど……」

「気にするな。たまに悪だくみを考えている時にこんな顔になる。スルーしていればいい。そのうち収まるからな」

「そ、そうですか……」

おっと、今は観戦してたんだったな。そっちに集中するか。

艦砲射撃は大分続いているな。数だけで言えば万近くがやられているんじゃないか？ まあ、艦艇の方も被害が結構出ているがな。それにしてもハイヴ内から大量にレーザー級を出しているがどんだけ資材をため込んでいるんだ？

「鉄原ハイヴにいた時からG元素はため込んでいたようです。おそら

く頭脳級を黙らせない限り無限にわき続ける。そう思えるだけの数が出てくるはずです」

「となると戦術機は厳しい戦いを強いられるというわけだな。果たしてハイヴを攻略する事なんて出k……」

その瞬間だった。視界は一瞬で光に包まれた。正確にはモニターが、だが。突如として何も映らなくなり、音も聞こえない。……これは感覚をつなげていたBETAが一掃されたという事か？ とりあえず無事だったハイヴ内のBETAと感覚をつなげつつガブリエルに通信する。

「ガブリエル。一体何が起きた？」

『そ、それが私にも分からず……。今確認するために地上に上がっているところです』

「は!? 馬鹿野郎! 今すぐ戻れ! そんなのはBETAにやらせれば……!」

『ですg……』

瞬間、モニターが再び真っ白に染まると同時にガブリエルとの通信が途絶する。明らかに先ほどの攻撃と同じものだ。そして、これは艦砲射撃ではない。こんなバカみたいな威力を出せるはずが……!」

「まさか、G弾か?」

「G弾? ですが米軍は今回の作戦に参加していないと……」

「そんな動きも見せていなかったから油断したが確実にそれだ。でないとこんなバカみたいな威力は説明がつかない」

「あ、あの! ハイヴ内に戦術機が降下し始めてます! これ指揮をとらないといけないんじゃないですか?」

「っ! そうだな」

カティアの言葉にハツとする。そうだ、最低でも委任モードにしないと指揮官を失ったあいつらは棒立ちになってしまう。とりあえず迎撃だけ命じるがもうあそこは無理だな。

「G弾。まさかこんなところで使ってくるなんて……!」

「ですがG弾の威力を確認できたことは幸いと受け取るべきでは? 結果的に横浜ハイヴを失う形になりますますがむしろそこを失う程度で

済んだとみるべきでしょう」

アイリスディーナの意見は尤もだな。やはりデータで知ると実際に見て知るのでは違ってくる。そしてこれだけの威力なら連発はしてこないはずだ。何しろ威力がでかすぎる。代償も考えれば決戦時に使うくらいで普通の戦争では使う可能性は低い。追い込まれれば遮二無二使いそうだがな。

「ガブリエルはG弾で吹き飛んだとみるべきか。……まあ、死体が残らないで死んでくれたようだし特に気にする必要はないな」

別に失って困る人材でもない。今はそんな事よりもG弾の方だ。これは作戦に組み込まれていたとみるべきだろう。爆破後の戦術機の動きから見てもここまででは想定通り。後はハイヴ内のBETAを掃討し、頭脳級を破壊して攻略完了ってところか。さすがにこんな決着のつき方は予想外だしなんも対応も出来ないじゃないか……。

「……仕方ない。今回はG弾の威力を知れたって事で無理やり納得するしかないな。それに西日本は落としたんだ。目標は完了している。これ以上望むのは身を滅ぼしかねないな」

バックアップも含めて準備は着々と進んでいる。いずれG弾なんて気にしない物量や力で人類を詰ませる事は可能だ。今日はこれで満足しよう。

『こりやひでえ……』

横浜ハイヴ内に突入した国連軍の戦術機は目の前に広がる光景にそれしか言えなかった。二発のG弾によってBETAをほぼ吹き飛ばす事に成功したらしく、ハイヴ内にはほとんどBETAは残っていなかった。

そしてそんな彼らが最奥の場所で見つけたのが脊髄と脳だけの状態にされた人間たちだ。顔も胴体もなく、生きているのかさえ分からない状況のそれに吐き気を催してしまう者も出てきていた。

『とりあえずこれはこの状態で専門家を呼ぼう。俺たちが気軽に扱え

るものじゃない……』

『隊長！ この奥に頭脳級が存在します！』

『よし！ 俺たちは奥に行くぞ！ ……すまない。必ずここから出してやるから少しだけ待っていてくれ』

隊長と呼ばれた男は脊髄だけとなった人間たちに謝罪すると頭脳級のもとにむかっていった。

それゆえに、その中の一つで気泡が生まれ、何かを訴えているように見えたことに気付く事はなかった。

第四十九話 「明星作戦3・事後処理」

「艦隊損耗率8%、各戦術機部隊総合損耗率2%。戦車部隊及び一般歩兵部隊ともに損耗率0%。……結果だけをみれば大勝であったな」「ですが結果的にG弾を披露する事になりました。必要な事だったとはいえBETAはなにかしらの対策を講じてくると思います」

横浜ハイヴの攻略を目的とした明星作戦は全て順調に進み、見事攻略に成功した。人類が初めてBETA相手に勝利したといつてもいい作戦であったがその分失ったものも大きい。

まず、G弾発射までに消費した弾薬。次に太平洋上に展開していた艦隊。これらの補填は既に行われているために問題はなかった。しかし、G弾の発射によつて各国ではG弾の脅威論が浮上している。G弾を現状保有する国はアメリカしかない。そして、アメリカはこれまでに様々な失態ともとれる行動を起こしている。時間が経過したとはいえソ連が発表した内容をいまだに信じている者も多い。

「各国の反応は想定内だ。むしろ事前に説明をしたために批判的な声は上がっていない。問題はその下だ」

「下……。その国の国民達ですね？」

「ああ、最悪な事に一部の国では暴動にまで発展している。アメリカという裏切り者を今すぐ倒すべきだとな。全く、これもBETAの仕業かね？ 彼らの気持ちも分かるだけに何と言えればいいのか分からないぞ」

そう話す国連の高官は肩をすくめているがそれに対して香月夕呼は毅然と答えた。

「確実に噛んでいるでしょう。暴動の発生から鎮圧までの流れをみれば一目瞭然です。彼らの中には銃火器で武装する者もいました。詳しいルートは分かっていますませんがただの暴動でそんな武装が出てくるとは思えません。それも百丁近くも」

「BETAは人類の結束を引き裂く行為が好きなのかな」

「ただ出来るから実行しているだけかもしれないよ？ 人類の結束なんて脆いものなんですから」

そもそも、カシユガルハイヴが出来た時でさえ中国が独断専行を行い、被害を拡大させている。その時から人類は結束なんてできていなかったのだ。それなのにBETAの手が入り込んだ現在で一致団結するなど不可能に近い。

ならばするべき事は数少ない信頼できる者のみで敵の中枢を一気に破壊する。それを行うために必要な情報を集めるのがオルタネイティブ4であり、G弾投下と他星系への移住を目的としたオルタネイティブ5を隠れ蓑にしているのだ。

「そういえばついにオーストラリアにもハイヴが建設されたそうだ。南東部のミルパリンカに確認できた」

「これでオーストラリアはBETAの手に落ちますね」

「全く……。ようやくハイヴを一つ攻略したというのにこの調子では地球がハイヴで埋め尽くされてしまうな」

「ですが確実に人類はBETAへの反抗の準備を整えつつあります。特に横浜ハイヴで見つけたこれなんかは非常に助けとなるでしょう」
そう言つて夕呼が手に持ったタブレットの画面を高官へと見せる。それを見た高官は不愉快そうに眉を潜めつつ夕呼に問う。

「本当にこれが役にたつのかね？ 私としては今すぐにも楽にさせるべきだと思うが……」

「あたしは人類を救うためならどんな非道な行為も行いますよ。それで後世の人に貶されたとしても」

「……分かった。どちらにせよオルタネイティブ4の最高責任者は君だ。君なりの方法で頑張り給え。我々はそのために支援をしよう」

「ありがとうございます。では早速ですがこれを運用するにあたり横浜ハイヴ跡地に国連軍の基地を建設していただきたい。表向きは前線基地兼特殊部隊の訓練場として」

「裏ではオルタネイティブ4の本拠地として、か。確かにこれを見る限りハイヴ跡地から動かせないな。分かった。日本政府と協議しつつ実行にむけてなんとかしよう。それで？ 人員は決めているのか？」

「ええ。あたしの友人に教官としてぴったりな人物がいます。今は帝

国軍で部隊長として頑張っていると風のうわさで聞きました。これがその詳細です」

「……ほう？　中々に優秀な経歴だな。そして出自もはっきりとしている。強いていうのであれば初陣時に戦術機を撃墜されて一月近く前線で行方不明になっていた事くらいか。だがその後の調査で怪しい行動もない。問題はないだろう」

そう言って高官は神宮寺まりものプロフィールが記載されたタブレットを夕呼に返す。その後も二人は実務的な話を続け、オルタネイティブ4の今後について調整を行っていくのだった。

「横浜にてG弾が使用された」

「！　それは本当ですか……！」

ソ連領シベリア。BETAとの最前線となっているそこにある基地でアルフレートはアネットとイングヒルト、その他数名を集めて会議を行っていた。しかし、その議題に上がった内容に誰もが絶句する。この場にいるのは全てBETAに精神を書き換えられた者。いふなればBETAの尖兵と呼べる者たちだ。

そんな彼らもG弾の事は知っていた。しかし、実際に使用されたのは今回が初めてであり、そのこともあり誰もが驚きを露わにしていた。

「これによって横浜ハイヴは上部構造物が吹き飛び、二発目で中部までが破壊された。その際に指揮を執っていたガブリエルが死んでいく」

「想定以上の威力ですね。確か重力がなんちゃらで迎撃も難しいんですよね？」

「そうだ。G弾はG弾でしか迎撃出来ない。とは言え数が有限だ。今はそんな事よりも受け取った指令を伝えるのが先決だ。」

我々東ドイツは今後も継続して戦闘を続けよとの事だ。幸いここ数年で東ドイツはほぼ手中に収めたと言っている。ソ連内部にも大

量の内通者を作り上げている。もはや共産陣営は我々の操り人形と
言っている。問題はアメリカだ」

「アメリカですか？でもオルタネイティブ3と中華帝国、そしてカ
ナダへの上陸で国際的影響度は低くなっていますよね？」

今更アメリカに何の用だとイングヒルトが声を上げるがそれにア
ルフレートは簡潔に答える。

「そのアメリカがG弾を持つ唯一の国だ。警戒するに越したことはな
い。それにやつらは国際的影響度や信用度を落としているが生産能
力や国力においてはまだ世界トップだ」

削げたのは周囲への心象であり、力ではない。アルフレートはそう
考えていた。その言葉に誰もが納得し、改めてアメリカへの警戒を強
める事となった。

「そういえば最近BT-03が開発されたらしい」

「03……。それって日本侵攻時に手に入れた同志たちのために？」

「その通りだ。彼女たちはもともと日本人。つまりピーキーな性能に
慣れている。そんな彼女たちのために作られた機体だそうだ」

BT-03ヤーパンは日本の設計思想である密集格闘戦・近接射撃
戦に特化した機体となっている。機動性能はシフトウルムヴェイント、
ゲシュテーパーを凌駕している上に燃費も上がっている。一方で機
動性を確保するために防御は薄くなっている。武装は74式長刀を
基に突撃級の正面装甲で作られた頑丈なものとなっている。

「加えて専用機の開発も始まっている。BT-04と仮名されている
らしいがかなり高性能になるようだ」

「専用機って事はあいつ以外扱えない代物になるってことだよな？」

「そうだ。まだ詳しくは確認できていないがすくなくとも生半可なも
ので終わるはずがない。大型の機械の龍と呼ぶべき超兵器も研究し
ているらしい」

「ええー。そんなの完成したら人類に勝ち目ないじゃん」

「そもそも今の時点で人類に勝利出来る可能性は低い。太平洋にオリ
ジナルハイヴのバックアップハイヴの建設が進められている。既に
フェイズ3相当になっているそうだ」

「あれ？ それならもうバックアップはしているのか？」

「していないそうだ。残念ながらもまだ重頭脳級の予備を配備するには内部が完成していないらしい。海中での作業だ。仕方ない面もあるだろう。完成は2002年ごろを予定している」

「って事は大崩壊と同時にバックアップハイヴが起動するって事か。それは面白そう！」

「そうなるだろう。それまでに我々は自らの任務をこなし、その日に備えるぞ」

「「了解！」「」」

大崩壊。BETAが位置づけた人類の終焉の日。その日が設定できてしまう程人類に後がなく、あ号標的は勝利できると予測を立てていた。

オルタネイティブ4に向けて準備を進める香月夕呼と人類に止めを刺すべく準備を進めるあ号標的。圧倒的にBETA有利で進む中でついに2001年を迎え、両者にとってキーマンとなる主人公。白銀武は横浜に姿を現した。

第4章 「マブラヴオルタネイティブ」 第五十話 「マブラヴ」

2001年10月22日。明星作戦から二年以上経過したがいまだに主人公らしき人物が現れる様子はない。後一月ほどで今年も終わってしまう。そろそろ現れてもおかしくはないのだがな。

そもそもこの世界の作品を知らない事が致命的すぎるよな。今更ではあるけど原作を知っていれば俺の行動の差異を知ったり、原作をどうするかを決める事も出来たしどこにいるのかもわからない主人公を探してこんなに苦労する事もなかったはずだ。

仕方ない。今はもう一つの重要事項の精査をするか。とある人物の脳内から受け取った情報で人類がやろうとしている事が判明した。

オルタネイティブ4。俺は当初こそG弾の集中運用によるハイヴ攻略と厳選された人類の他星系への移住が計画内容だと思っていたがどうやらこれは違うらしい。オルタネイティブ5という予備案だったこれを表向きは採用しつつこれを隠れ蓑に本来の計画が進められていた。

00ユニットと呼ばれる生物的根拠が0だか何だかを使ってBETAとコミュニケーションを取る。そしてその過程でこちらの情報を引き出して今後の戦争に役立てるといふものだ。俺が、というよりBETAが人類を生物として認識していないからこそ計画されたものらしいがかわいそうに。人類を生物として認識していないのはBETAの一般常識のようなものであり、俺は生物として認識しても滅ぼす事には変わりはない。他のBETAがどうなるかは分からないがそれこそ俺を止めたいのなら創造主とやらに炭素系生命体を生物として認識させないと無理だ。

創造主。俺たちBETAを作った宇宙人で驚くべきことに珪素、つまりシリコン生命体との事だ。創作上ではよく見かける生命体だが俺も詳しくは知らない。というか見たことがないからどういう姿かたちをしているのかが分からない。もしかしたら人型ではないかも

しれないしな。ちなみに、実際に珪素生命体が存在するか否かという話があるが存在しない可能性が高いらしい。理由は忘れたがな。それにそのことを理由に否定した場合、まさにBETAの認識と同じになつてしまう。BETAは創造主が炭素から生命体が生まれる確率は低いと言われてその事を前提に動いているのだから。

さて、話がそれたが主人公が見つからない以上このオルタネイティブ4の計画からして物語に深くかかわっているのは確実だ。だが残念ながらこの計画の最高責任者である香月夕呼はBETAが人類内部に入り込んでいる事に気付いているようだ。だからこそオルタネイティブ5を隠れ蓑にして極秘に動いているみたいだしな。その秘匿性と言えはさすがと言わざるを得ない。初手の人選を間違えていなければ俺も気づかずG弾の対応に追われていただろう。香月夕呼という女性は高校生の時に大学に飛び級するくらいらしいしかなりの天才である事は確定的だ。

である以上こちらにも慎重に動く必要がある。すくなくとも手駒を近くに配置する事は出来ない。内部の様子は偶然にも親友だったまりもちゃんに任せよう。どうせ彼女自身も自分の体に気付いていないんだ。こつちが不必要に動かない限りバレる心配はないと言える。後は外部から揺すつてみたりつついて反応を見るか？ いや、下手に干渉はしない方がいいか。あくまで他の基地と同じように接するだけで情報を秘匿できていると考えられるはずだ。

ふふ、楽しみだなあ。気づかれないように隠匿に隠匿を重ねた結果、最初から知られていたと知った時の彼女の表情。常に澄ました表情でいる香月夕呼がどう歪むのかすごく楽しみだ。それまでに「終焉の日」の準備を完璧にしないとね！

白銀武という男がいる。彼は尤も数奇な運命にある人物と言えた。彼はもともと平凡な学生でしかなかった。まるでラノベのごとく美

少女に囲まれる生活を送っていたとはいえ戦争とは無縁の青年だった。

しかし、彼の平穏な生活は突然終わりを迎えた。10月22日、武はその日パラレルワールドと呼べる別世界にやってきてしまった。平和な日常は終わり、BETAと呼ばれる地球外生命体との戦争に明け暮れる事となったのだ。

そして人類の敗北とオルタネイティブ5の発動。それによるG弾の投下と絶望的な戦争を終えた彼は気付けば存在しなくなっていたはずの自室にいた。まるでBETAなど最初から存在していなかったと言わんばかりに。

「……夢？」

そうとしか言いようがない。そうでなければ目の前の光景が説明できない。武はゆつくりと立ち上がると部屋を出る。目指すは外だ。「そうだ。BETAなんて存在しなかったんだ。外に出ればいつも通りの風景が……！」

しかし、現実とは非常である。外に出た武が見た光景はこの世界にやってきたときと同じ、荒廃した横浜の姿だった。だがこれは既に過去のものであった。では何が起こっているのか？ 単純である。この世界にやってきた時間に巻き戻っただけである。

「くそー。またこの日なのか!? 今度は過去に戻ってきたとでもいうのかよ！」

武は地面をたたいてそう叫ぶが叫んだところで何かが変わるわけでもない。武は混乱する頭を何とか落ち着かせて周囲の様子を見る。全てはこの世界にやってきたときと同じ、いや、少し荒廃しているがBETAに蹂躪されている世界で間違いないだろう。

「ここは間違いなく現実だ。つてなると今までの事は予知夢って事になるけどそれでもいい……! 今度は絶対にオルタネイティブ4を完遂させる！」

武はそう決意を固めると横浜基地に急ぐ。前回の時は現実と受け止められずに拘束されてしまったがそれでも人類を救うキーマンとなる人物に出会う事が出来た。今度こそオルタネイティブ5を防ぐ

ためには彼女に、香月夕呼に出会う必要があった。

「！」

途中、武は一本の桜に気付いた。本来、その桜の下には明星作戦において出た犠牲者を記した石碑があったがあるはずのそれがなかった。それはこの世界では初めて感じる大きな違和感だった。

「見間違いい、か？ もっと別の場所にあったとか？」

流石の武も記憶違いかと気に留めることなく再び歩き始めた。しかし、この時に感じた違和感は香月夕呼と対面し、理由が判明するまで武の胸の中でとどまり続ける事になる。

本来なら死んだはずの人間である武がこの世界に現れたことにより、この世界は歩みを加速させた。その先に待っているのは終焉人類の敗北の日か、あ号人類の勝利の死滅かはまだ誰にも分からなかった。

第五十一話 「世界情勢」

「ちくしょう……」

白銀武は突如としてパラレルワールドのBETAに襲われる地球にやってきて彼らとの戦争に身を投じる事になったが気付けば自分がこの世界に来た10月22日に戻ってきていた。そして後二か月で始まるオルタネイティブ5を阻止するべくオルタネイティブ4の最高責任者である香月夕呼に会うべく横浜基地を訪れたのだが……。「なんでまた牢屋に……」

そう、前回と同じように彼は牢屋に入れられることとなったのだ。元の世界では学ランだった白い制服を身にまとった武が基地に近づくと突如として門兵たちに拘束。抵抗や何かを発言する暇もなく牢屋にぶち込まれることとなったのだ。

「しかもなんで検査みたいなことや尋問まで……」

加えてCTスキャンや採血などの検査に加えて顔のいかつい軍人やハニトラでも仕掛けてきそうならマスな女性から尋問を受けて武は前の時以上に混乱していた。

「俺何もしてないんだけどな……」

こうしている間にもタイムリミットは近づいてきている。それに関わらず武はまだ香月夕呼に会う事さえかかっていない。このままではいけないと検査や尋問のさいに何度も会わせてほしいと言ってみだが聞き届けられることはなかった。

「このままじゃ……!」

「このままじゃ何が起るのかしら?」

「っ!」

独り言を拾った声。その声はまさに武が待ち望んでいた人物の声であった。牢屋の中であおむけに寝ていた武は体を起こすと牢屋の外を見る。そこにはまさに香月夕呼の姿があった。

「夕呼先生!」

「……あたしは教え子を持った記憶はないけど?」

「あ、えつと……」

厳しい視線を向けてくる夕呼に武はしどろもどろになってしまいがそれでも何とか落ち着かせて真つすぐに彼女の眼を見る。

「……信じられない話かもしれませんが聞いてください」

そうして武は話し始める。自分がどういった存在で、何を見てきたのかを。そしてその目的のために夕呼と話したかったことを。

「だからオルタネイティブ5が発動するまであと二か月しかないんです！ その前になんとしてもオルタネイティブ4を完遂させないといけないんです！」

「……あなたの言いたいことは理解したわ。それにそれが嘘ではないことも、ね」

「！ 信じて、くれるんですか？」

「ええ、信じるに値する方法があるからね。でも、その前に言わないといけない事があるわ」

夕呼は先ほどよりも険しい表情で告げる。

「まず、この世界においてオルタネイティブ4はあなたが話したオルタネイティブ5となっているわ」

「なっ!？」

「表向きはね」

「……表向き？」

一瞬自分が見てきたオルタネイティブ4は存在しないのかと思つた武だが夕呼の話を聞く限りそうではないと安心しつつ次の言葉を待つ。

「ええ、まずあなたが言うオルタネイティブ4は今秘匿して行われているわ。G弾の集中運用によるハイヴ攻略を隠れ蓑にしてね」

「なんでそんなことを……」

「その前にあなたが見てきた世界の歴史を教えて頂戴。たぶんそれを聞ければ話すことが出来ると思うわ。とりあえずあたしの部屋にいきましよう。あなたは敵ではなかったようだしね」

「……？」

夕呼の言葉に疑問を感じつつ牢屋を出た武は部屋に向かうまでに前の世界で夕呼に教えてもらった世界の歴史を言っていく。所々で

ピクリと夕呼が反応を見せつつも口をはさむことなく最後まで聞き終える。そのころには部屋にたどり着いており、自身の椅子に座った夕呼は深くため息をつく。

「あなたがいた世界はとても平和だったみたいね」

「……平和、ですか」

「ええ、平和よ。すくなくとも何も警戒することなく人類が結束できるんだもの」

まるで自分たちは出来ないかのような言い方だが次の言葉で武は驚愕しつつその理由が理解できた。

「まずいうわ。この世界のBETAは狡猾で人類を知り尽くした動きを見せているわ」

「それは、どういう……」

「そうね。順を追って説明するわ。」

まず、カシユガルにオリジナルハイヴが建設された事は同じよ。だけどそこからBETAは中国のみを攻撃したわ。翌々年には攻撃を仕掛けたソ連にも攻撃を開始したけどね」

「……」

最初から違っていた。BETAは西進をしていたはずなのにここでは東進。それも攻撃された国にのみ攻撃を仕掛けている。本当に人類の事を知っていないと出来ない動きだ。

「そこで人類は気付くのよ。攻撃しなければ襲われないとね。結果としてソ連と中国以外の国は援助を取りやめたわ」

「なっ!? そんなこと……!」

「誰だっけ手を出さないと襲われないと攻撃してこない相手にわざわざ攻撃を仕掛けたりしないでしょ? 結果的に中国に派兵をしていた日本、アメリカ、国連以外は武器弾薬などの物資の支援だけで済ますようになったわ。その結果でしょうね、1977年には中国全土がBETAの手に落ちたわ」

「そんなに早く……」

「そうね。あたしは中国が20年以上持ちこたえていたと聞いて驚いてしまったわ。」

で、1979年にBETAは日本に上陸するわ。ただ、この時は突撃級のみは蹂躪でそれ以降の侵攻はなかったけど。だけどこの侵攻で西日本は壊滅。日本アルプスで殲滅出来たけど人口の半分である5000万人が犠牲となったわ」

「……」

衝撃と言わざるを得ないこの世界の歴史。夕呼のいう通りこれを聞く限り前の世界はまだ平和だったかもしれないと思いはじめがそれを補填するように話は続く。続いてしまう。

「1981年にはモスクワが陥落。1983年には東ドイツとベルリンが落ちたわ。この時欧州連合軍も攻撃をしていたけどBETAは東ドイツで動きを止めて欧州連合軍の土地には一切入らなかったわ」

「それは何故？」

「後の話になるけど確実に戦闘する国を減らしたといったところね。実際欧州連合軍はBETAとの戦争から離脱したわ。結果的に世界から信用を失う事になったけど国土を蹂躪されるよりはマシと考えたんでしょね。」

これ以降兵数が減った欧州戦線は完全に瓦解。人が住める領域はほぼ喪失したわ。そしてここからがひどいわよ。まだ聞いていられるかしら？」

「ここまで聞いたんです。最後まで聞かせてください」

「……いいわ。BETAは攻撃してこないなら攻撃されない。この話が世界に広まるとヘイトを集めた民族が出始めたわ」

「……中国人ですね？」

「そうよ。中国人が攻撃したからBETAは動き出したと考える人が出始めて中国人は世界中で迫害される事になったわ」

「人類で結束しないといけないのに迫害なんて……！」

「あなたのいう通りよ。結果的に最悪の形で浮彫となったわ。1988年、中国人がアメリカの西海岸で暴動を起こしたわ。これはあつという間に拡大して1990年には西海岸を占領してしまっていたわ」

「なっ!？」

「これを受けてアメリカはロッキー山脈を挟んで講和する事になる

わ。中国人は迫害されない自分たちの国を手に入れたのよ。人類同士で争って国力を削ってね」

「……」

「そしてその直後よ。まるで準備は整ったと言わんばかりにBETAは無差別に侵攻を開始したわ。この時侵攻されてこなかった国々の動きは恐ろしいほど鈍くて国境線はあつという間にBETAに塗り替えられていったわ。

BETAも準備は進めていたんでしようね。1991年に始まったこの侵攻では年を迎える前にアフリカ以外のすべての場所に進出していたわ」

「それじゃ、オセアニアとか南米、アメリカも？」

「ええ。北米はカナダとハワイに、南米はチリに、オセアニアはほぼ全域ね。結果的にニュージーランドは陥落。オーストラリアも政府が崩壊して無法地帯となっているわ。おそらく来年には完全にBETAの手に落ちるわ

そして、これが今の地球の現状よ」

そう言つて夕呼は壁のモニターに世界地図を映し出す。そこにはBETAに占領されたことを意味する赤く塗られた箇所が世界の半分近くを占めていた。

前に武が見た地図よりもBETAの勢力圏が広がっていた。前の世界においては欧州が完全に陥落していたがこの世界ではいまだに国土を維持している国がある。だが、その代わりと言わんばかりに北南米両大陸にBETAが侵攻し、オセアニアのほぼ全域が占領されていた。

「大東亜連合は去年のバタビア防衛線で全滅。南米連合軍はパタゴニア地方を放棄して河川沿いに防衛線を構築しているけどハイヴを作られた以上これまでの数倍の規模のBETAによる侵攻が予測されているわ」

「そんな……！ これじゃ人類は……！」

「残念だけどBETAに敗北する、とほぼ確定的な予測が出されてい

るわ」

「だ、だったら残った戦力を結集して一致団結して抗えば……！」
「不可能よ」

武の言葉を夕呼はバツサリと切り捨てて険しい表情で言った。

「話を聞いて不思議に思わなかった？ BETAはまるで最初から人類に詳しかったように的確に人類の心理をついていたわ。そして中国人の暴動でアメリカが力を落としたのを見計らったかのような大規模侵攻」

「……まさか!？」

「そうよ。BETAは人類の中に潜んでいる。もしくはBETAの協力者がいるわ。それもかなりの数のね。」

おそらくオリジナルハイヴが中国に侵攻を開始した時点で始まっていたはずよ。そしてそれに気づくには人類は遅すぎたわ。BETAは人間社会の中枢近くにまで潜り込んできている。誰が敵で誰が味方なのか分からない。疑心暗鬼に陥りかけているのが今の人類なのよ」

「……」

「だからこそあたしたちはG弾の投下を隠れ蓑にして活動しているわけ。理解できた？」

「……はい」

前の世界ですら悲惨だったのに今度は比べ物にならない程の最悪な状況。前の世界で身に着けた知識や技術、肉体を持っている武には理解できた、理解出来てしまった。

人類に勝利は訪れないという事を。

第五十二話「日常」

夕呼の手引きによって武はこの世界における戸籍などの身分を手に入れる事が出来た。バックストーリーとしては親にこの年まで大切に育てられてきたが昨今の情勢を受けて軍に志願したというものであり、それに向けた準備も行ってきたという事になっている。

—前の世界と同じ207衛士訓練小隊への編入とセキュリティパスの発行はしておいたわ。でもあなたが信用したわけではないわ。あたしがいくら信用できてもあなたが突拍子もないことも事実。暫くは監視されるけどむしろそれを活かして信頼を勝ち取りなさい。でなければあなたは何かを変える前に独房か棺桶のどちらかに入られるわよ。

そんな脅しともとれる言葉と共に受け取った身分を基に武の新しい日常は始まった。とはいえこの世界においても武の周りの面々に変化はない。強いていうのであればあまりかわりのない整備兵や衛兵が初めて見る者が多い程度だ。元の世界ではともに青春を謳歌し、前の世界ではともに訓練を行い最後までBETAと戦い続けた戦友たちはこの世界でも健在だった。

「白銀さん本当にすごいね！」

「まあ、ここに来るまでにいろいろと経験したからな」

そんな戦友の一人である珠瀬壬姫の純粋な称賛を受けて武は曖昧に返答しつつ称賛を受け取った。前の世界で蓄積された身体能力と兵士としての技能、技術、知識は持ち込めたように武はそれらを駆使して訓練を効率的にこなしている。それは教官を担当している神宮司まりもから見ても称賛できる水準であり、周囲が見る彼は好印象に映っていた。

「だけどこれでもまだまだ足りない。早く衛士にならないと……」

「だけど焦ってはだめよ。そういう時に限って重要な場面で大きく躓くものだから」

「……それもそうだな。ありがとう委員長」

「だから委員長じゃなくて分隊長！」

どこか焦りを見せた武に落ち着くように伝えた榊千鶴だが武の委員長発言に頭を押さえている。武にとっては元の世界の名残でしかないのだがそれを知らない者からすれば何故委員長？ という疑問と同時に彼女の性格や容姿から納得を見せる事になり、それが余計に千鶴の頭痛を引き起こしていた。

「白銀の気持ちも分からなくはない。10年前のあの日からBETAの動きは活発になっていく。少しでも訓練を早く終わらせて戦いたいという気持ちは理解できる」

そんな武に同調したのは愛国心が強い御剣冥夜である。武の言葉はまさに自分と同じ思いだと思っただろう。特に10年前から始まったBETAによる無差別侵攻時には彼女も物心つく年であったためにBETAの動きをリアルタイムで見せつけられていた。そしてそれはこの場にいる誰もが見た光景であり、絶対に世界を救うと覚悟を持たせる要因となっていた。

しかし、それでもこの世界の情勢は悪すぎた。ハワイを失い、東南アジアオセアニアを喪失した現状では日本は孤立気味になっている。シベリアが完全に落ちた際には完全に孤立してしまう程日本の周囲はBETAの勢力圏となっているのだ。前の世界では国土を失いつつも莫大な人口で勢力を維持していた中国は既になく、人類に非協力的な中華帝国がアメリカの力を削ぐ形で存在している。アメリカも反米感情を高める行動をしている点は同じだがカナダへのBETA上陸と中華帝国の一件から他国に援助をする余裕は残っていない。

欧州連合は国土こそ維持しているがアルプス線の突破によるフランス国内の蹂躪にベネルクス三国方面も突破された事でフランスが陥落するのも時間の問題となっている。10年近くに渡り防衛を続けているストックホルムではコペンハーゲンの陥落によって南からスウェーデンになだれ込んできているBETA群に包囲されつつある。脱出路は既になく、残った軍人、市民らは最後の一人になるまで抗い続ける事を宣言して以降通信を遮断している。シチリア島ではイタリア軍が全滅する形で陥落し、イタリアという国は大半の人口と共に亡命政府すら機能できない程の損害を受けている。

そもそも、マジノ線で防衛を続けた欧州連合軍は人的消耗が前の世界の比ではなく、半分以下の数にまで減っている。フランス国内のBETAを掃討できていない理由の最大の原因がこれであった。

唯一中東の聖戦連合軍がイラン、イラク、シリアを失うだけの損害で以て防衛に成功しているがそれもトルコ軍やアフリカ諸国の援助があつてこそ成り立っているまでに厳しい状況に追い詰められている。南米ですら中東よりはマシ程度であり、人類は継戦能力が大幅に低くなっていたのだ。

―はつきり言つて人類が今の調子で戦えるのは後数年が限界よ。物資も人口も加速度的に消耗しているからそのうち土地は残つても人がいないつていう状況になつてしまふかもしれないわ。

それでもまだ人類が一致団結できていれば希望はあつたかもしれない。それも出来ない以上夕呼は一か八かの賭けに近い計画を練り上げていた。

―はつきり言つて今さらな気がするけどこれ以外に出来る事がないのよね。幸いな事に狙えるだけの戦力は確保出来たわ。後は実行時までにかくにそれを維持してられるかよ。

夕呼の計画がどんなもののかを武は聞かされていない。聞かされるだけの信頼を得ていないという事と秘匿性を重要視した結果であり、武はそれ以上は聞くことはなかった。

「（今の俺に出来る事。それを一歩ずつ確実にこなして人類を救つて見せる……！）よし！　もう少し自主練を試みるか！」

「えー!?　あんなに走つたのにまだ走るの!?!」

「自主練もいいが訓練に支障がないようにな」

「……あ！　お兄ちゃん、また蹴つたよ。今回の赤ちゃんはとっても元気だね！」

「……ああ」

カシユガルハイヴの中層に設置されたホールの一つ。人間が住め

るように環境が整えられたいくつかのそののつにリーズ・ホーエンシュタインは最愛の兄テオドールと共に暮らしていた。正確には二人の愛の証である子供たちと一緒に、だ。

リーズは少し大きめのログハウスのウッドデッキでロッキングチェアに座っていたがお腹の中の子供が腹を蹴った事で隣に座っているテオドールの手をお腹にあてながら嬉しそうに言うが対するテオドールの反応は簡素だった。しかし、それもテオドールの生気のない顔を見ればむしろ反応を示しただけでも奇跡と呼べるかもしれない。それだけ今のテオドールは異常と言えた。

「ふふ、これで10人目だね。この体は本当にすごいわね」
「……ああ」

リーズは汚れ切った体を捨てて綺麗な体に替えてからというもの簡単に妊娠するようになっていた。それだけ二人が毎晩のように愛し合っているからでもあるがそれ以上にそう言う体になっているというのが理由だった。

生まれた子供たちはBETAに逆らわないように改造を赤子の時より受けている。リーズとしてもテオドールが最優先である為に拒むことはなく差し出していたために二人の子供はBETAの都合のいい駒として教育を受けていた。

長男から4男と次女、三女は量産型戦術機級のコアとして適正が高く、それに見合った改造を施されている。残りも指揮官としての能力や潜入などが得意という事でそれぞれに見合った教育を徹底的に行われている。この10人目の子供も生まれればすぐにBETAの改造を受けて育つことになるだろう。

「ふふ、この子が生まれたら前で楽しもうね！　ずっと後ろばかりじゃ飽きちゃうでしょ？」

「……ああ」

そう言って笑うリーズはどこか狂っているようにも見える。だが、こんな状況で狂っていない者などいないだろう。リーズはテオドールの手を両手で優しく包み込むとどこか光の宿っていない目で笑みを浮かべ、テオドールを見るのだった。

第五十三話 「12月5日」

「日本帝国でのクーデター、ねえ……」

12月5日。今日驚くべき報告が上がってきた。日本帝国でクーデターが発生したのだ。一部の帝国軍が將軍を蔑ろにする政府に不満を持ったが故の行動だったらしいが、ぶっちゃけ驚いている。なんてたつて俺はなんも関与していないんだから。とは言え中国人の暴動の時点でそれっぽい動きはあったから予測は出来たかもしれないがだからどうしたとしか言いようがない。別にクーデターを成功させようとさせまいとこっちの不利になる事はない。大なり小なり犠牲は出て混乱する。その隙について侵攻させるのもありだがどうせならもう少し弱らせた。日本をいただくのは終焉の日と決めているからな。

「それに主人公らしきものも候補はあれど確証には至っていない」

俺が撒いた特殊な個体から得た情報の一つ。白銀武。こいつは無双系主人公のごとく各能力が優れている。それに記録上だと死んでいるというのもミソだな。今のところは主人公乃至それにかかわる重要な人物とみて監視を行っている。それにこのクーデターでも何やら動くようだしそれを見て見定める事も出来るだろう。日本最強の帝国斯衛軍の衛士の活躍を是非とも見てみたいからな。出来る事ならそう言ったものを戦力として取り入れたいがそれはあくまで可能ならばだ。出来ないなら潰す。一騎当千の実力者はBETAにとつて脅威だ。たとえ人類が詰んでいるとしてもそういうった者が活躍するだけでこちらの損害が跳ね上がる。最初のうちに潰しておかないといけない人物と言える。

「にしてもこの横浜基地、なかなかに嚴重だな」

オルタネイティブ4の最高責任者である香月夕呼が厳選しただけの事がありこの基地に人間級は入り込めていない。整備兵一人に至るまではつきりと身分が証明できる者のみで固められている。明らかに人間級の存在に気付いている証拠だ。

衛士の訓練兵だつて親が帝国軍の将校、皇族、国連事務次官、日本

帝国総理大臣、情報省の課長と権力者の娘達ばかりが揃えられている。一体どうやって集めたんだと聞きたい程のそうそうたる面々だ。これでは基地にもぐりこませることも出来ないし、まりもちゃんからの情報提供で我慢するしかないな。

「んー、しかし。こうしてみるといよいよ最終局面と言えるな。アイリスデイナー、お前は思う？」

「私ですか？　そうですね……。おそらくですが人類の動き次第で時間が大幅に変わってくると思います」

「人類の動き、ねえ。それは反抗作戦をするか否かで温存される国力が変わってくるって事だろ？」

「その通りです」

確かにそうだな。いまだアメリカはかなりの国力を有しているし日本も見方を変えればクーデターを行ってしまえるだけの余裕があると見える。本当に余裕がない国はクーデターすら出来ないからな。

「反抗作戦をさせたいのであればこのままじわじわと侵攻を続けるのが得策です。反抗作戦を行う余裕を与えれば確実に実行に移すでしょうから」

「でないと人類は滅亡するからな。反抗作戦実行まで時間はかかるがそれすらさせない強気の攻めで侵攻するよりかは早く決着がつくか」

「その場合は欧州連合を最初に潰すべきでしょう。そして欧州のBE TAを地中海を通じてアフリカに送り、聖戦連合軍の背後を脅かすのです」

「確かにそうなれば聖戦連合軍は戦力を割かないといけない。10年以上耐え続けてきた頑強な防衛線を崩す事が可能となるな」

そうなった場合はアメリカに工作をするのも忘れてはいけない。アメリカはG弾という厄介な兵器を保有している。止める手段は用意しているが一番いいのはそもそも使わせないことだ。発射前にG弾を使用不可能にしてしまおう。そのための保管場所も特定しているしな。

「そういえば人類が海上に逃げた場合はどうするのですか？　流石に海中や陸上からレーザー照射するのは厳しいと思いますが……」

「心配はいらないさ。アルフレートからの報告で東ドイツは完全に掌握し、ソ連も8割がた取り込み終わっている。それらの国の戦艦や輸送艦を用いるさ」

輸送艦だつてレーザー級と重レーザー級を乗せれば戦艦すらしのご最強の戦闘艦艇に変貌する。それが出来ない場合は海を干上がらせるだけだ。そういやハイヴ内の人間の為にも水を確保しないと。このままいけば地球は草木一本存在しない惑星になってしまう。そうなれば大気は薄くなったり酸素が消えたりして人間が住めない土地になつてしまうだろう。それに備えた地下環境の改善を図らないといけないか。

「少しもつたない気もするが別にいいか。今更な話だしな」

「……？」

「あ、いや。なんでもないよ。こつちの話だから気にしないでね。そんな事よりもいつでも出撃できるように準備は整えておくように。終焉の日が早まらないとも限らないしその前に人類にお披露目をする可能性だつてあるからな」

「了解しました。ですが我々はいつでも出撃できる準備は整っています。あなたがつれてくるように命じた日本の少女たちもBT-03の扱いを完璧にしています。さすがにエリート候補生だけあり実力は我々にも劣っていません」

「へえ？ アイリスディーナがそういうって事はかなりの実力者つて事だな」

東ドイツでは数年、BETAとして18年間戦術機に乗っているだけあつてアイリスディーナの実力はBETAの中でトップだ。そんな彼女が手放しでほめるあたりいい拾い物をしたつて事だな。

「その後にはひろつてきた佐渡島の少女もなかなか高い実力を見せています。さすがに一般人であつたために実力面では劣りますが経験を積みめば十分強くなれる人材と言えます」

「つて事は拾っていて正解だつたな。衛士でもなつていたら中々手ごわい相手になつていたつて事だしな」

あの時、祖父と思わしき人物にロッカーの中に入れられる少女を目

にしていなければ見逃してしまっていたかもしれない。でもあの娘も哀れだな。押し込められ、気絶してしまつたが目を覚ました時には人ではなくなつていたんだから。そしてそれを頭できちんと理解できるのに恐怖を抱くことも悲しむことも出来ずに淡々と受け入れてしまつている自分を把握できる。やはりこういつた改造は楽しいなあ。

「んじゃ今以上の実力を身に着けられるようにしてくれ。撃墜される可能性だつてあるんだ。アイリスデイナー達第666戦術機中隊の面々は肉体のバックアップが出来ているがあいつらはまだできていない。撃墜されて死んでしまえばそれでおしまいだからな」

「了解しました。そうならないように訓練をさらに厳しくしましよ
う」

おや？ 何か言つてはいけないようなことを言つてしまつたか？

まあ、訓練だし死にそんな目にあつても実際に死ぬわけじゃないし甘んじて受け入れてくれよ。これも実力をつけさせるには必要な事なんだから。

「ああ、それと今北歐に勇猛果敢で知られるあの部族の少女と共に幾人か送つてある。使い捨てだがいいデータをもたらししてくれるだろう。何しろ本格的な戦術機同士の戦いとなるんだから」

「なるほど。それは楽しみですね」

アイリスデイナーはそう言つて笑う。きつと俺も笑っているだろう。全世界への大規模侵攻の開始時に手に入れた人間。それを改造して生み出した戦術機級BETAがどれだけの実績を残してくれるのか本当に楽しみだ。

第五十四話 「アルゴス」

「これは中々に厄介ね……」

スウェーデン王国陸軍少尉ステラ・ブレイメルは目の前に立つ戦術機を見てそうつぶやいた。目の前の戦術機は味方ではなく、いままさに自分を殺そうと狙っている敵であった。

というのもスウェーデン王国はほぼ全戦力とデンマークやノルウェーの残党を吸収してストックホルム周辺の防衛を行っていた。世界との通信は途切れ、補給もなくなった三方向より迫るBETAに蹂躪されるのを待つだけの状態となっていた。そのためか、それらは突如として現れた。漆黒の戦術機はBETAの中を突き進んできてストックホルムに攻撃を始めたのだ。そんな戦術機に混乱しつつもスウェーデン王国軍も反撃を開始したが元々損耗が激しい軍隊は次々と撃破され、今では北部からやってくるBETAによって市街地の6割を失う痛手を負っていた。それにも関わらずBETA側にいると思われる戦術機は一機たりとも落とせていない。

スウェーデン王国軍はこれまでにJ-35 ドラケンやJA-37 ビゲンに加えて第三代機であるJAS-39 グリペンを開発・配備していたがそれらは度重なるBETAとの死闘で大きく損耗しており、現在はそれぞれ2機の計6機が残るのみだった。そこにデンマークやノルウェーの戦術機も加わって十数機がストックホルムに集結していたが漆黒の戦術機はセンサーで追う事すら難しい最大速度に人類の戦術機の後ろを軽く取れてしまえる平均スピード、突撃級を思わせる各部の装甲、銃火器に加えて頭部につけられたレーザー級の照射粘膜、そして何よりも十数機に対して合計50を超える圧倒的な数で押し寄せる漆黒の戦術機に僅か一時間ほどで半数が撃墜されていた。

ステラは現存するグリペンに乗っているが既に弾薬は尽きかけている。弾薬の補充をしないといけないが目の前の戦術機はそれをさせてくれないだろう。となると残りの弾薬と気持ち程度に装備された短剣で倒すほかない。

「全く。BETAも中々やってくれるじゃない」

ステラは愚痴を零しつつ距離を取ろうと跳躍ユニットを吹かして飛ぶ。しかし、それに対して漆黒の戦術機もついてくる。幸いにもその一機以外に反応はなく、後方の機体に集中が出来る状態となっていた。

「これなら、どう！」

ステラはビルの合間を縫うように進み途中でセンサーを反対方向に飛ばすと物陰に息を潜めた。並みのBETAならこれで簡単に騙される手であり、無防備な背中を撃ちこころまで生き残ってきた。そしてそれが漆黒の戦術機にも通じれば……。

『っ!!!』

「やつぱり駄目ね」

漆黒の戦術機はセンサーの方につられて背中を見せたものの発射と同時に急上昇して回避して見せた。対応の早さと運動速度は他の機体よりも高く、明らかにエース級の実力者と感じられる動きだった。

「っ！ やばい！」

そして急上昇した漆黒の戦術機は頭部の装甲を開き、レーザー照射を開始した。ステラは慌てて斜線上にビルが来るように回避するがレーザー照射によってビルは破壊されてしまう。あたりに土煙が巻き起こりその隙をついて再びビル群の間に隠れるが漆黒の戦術機は先ほどの事を警戒してかはるか上空から索敵を行っていた。BETA側であるがゆえにレーザー級の脅威がない彼の戦術機は悠々と空中を飛んでいる。ステラが同じことをすればすぐに撃墜されるであろう光景だ。

「決めるなら一撃で決めないと……！」

『出てこい！ ぶっ殺してやる！』

ステラが決意を固めているとノイズ交じりの叫び声が聞こえてくる。戦闘前にも聞こえていたその声は戦術機を動かしている衛士の声だろう。ステラはその声を聴いて最初こそ驚いていた。何しろその声は明らかに幼いのだ。別にこの世界でそれが珍しいわけではな

い。だが、そんな幼い少女がエリートになれるだけの實力を持っていた事に驚いていたのだ。

「何故貴方がBETAに組したのか知らないけど私だってここで死ぬわけにはいかないのよ……！」

『っ！　そこか！』

お互いに通信は通じていない、というよりもステラの声が相手に通っていないだけであるがそれでもステラは叫びながら銃口を向け、発砲する。二発放たれたそれは発砲と同時に見つかったことで軽くよけられた。それどころか跳躍ユニットを全力で吹かして隕石のごときスピードで一気に接近すると背中に背負っていたブレードを振り下ろしてくる。落下の力も加わったそれはステラをして避けるだけで精いっぱいであったが完全にはよけきれずに左の肘先から切断された。

「っ！　厄介、ね！」

とはいえやられっぱなしというわけでもない。右手に装備していた突撃砲を左の脇腹に当てるとゼロ距離で発射した。

『なっ!?　コノヤロー!!』

「っ！」

銃弾は36ミリであったためか貫通には至らなかったがダメージを与える事には成功したらしく、少女が怒りの声を上げた。それと同時に左腕で殴り飛ばされ一度距離を取らされる。

「これで少しは動きが鈍ってくれるとありがたいんだけど……！」

『絶対に許さねえ！』

「そう簡単に倒れはしないわよね！」

漆黒の戦術機は特に動きが鈍る様子もなく高速で接近をしてくる。ステラはここまでの戦闘において敵が高機動・近接格闘戦を得意とする、もしくは好んでいる者と推測できた。そんな敵を破るには距離を取って戦うのが一番いいがそれは出来ない。

まず、敵の運動性能の高さから引き離すのは難しい。更には相手は好んでいるだけで遠距離の兵装を有している。照射粘膜炎を始め背中には突撃砲を、背中には要塞級の触手らしきものが存在している。遠

距離戦といえど苦戦は必至だ。加えて遠距離の要である弾薬の残量が少なく打ち合いになればさき力尽きるのは明らかだった。

「仕方ないわ。せめて相打ちに持ち込む！」

『死ねえ!!!』

それゆえにステラは逃げる事をやめた。漆黒の戦術機はブレードを両手でもち、大ぶりの軌道で横なぎに払ってくる。防ぐことも難しい必殺の一撃と言えるがそれゆえに躲すことが出来れば大きな隙となる。

ステラは横なぎが行われる瞬間に全力で以て機体を下に落とす。そしてそれは見事成功して躲す事に成功した。後は右手の突撃砲をコックピットがあると思われる胸部に押し当てる、それだけのはずだった。

「……え？」

瞬間、ステラは機体全体から感じる衝撃に襲われた。よくよく見れば足元を通じて背中中の触手が伸びており、その攻撃によって起きた衝撃だと推測できた。問題はそれによつて起きた損害であるが確認するのも惜しいとステラは強行する。

「うあああああつ!!!」

『ういっ……!!!』

ステラは機体が動かなくなる前にと言わんばかりに突撃砲で殴るかの勢いで胸部に押し当てる。胸部は装甲で守られているが隙間がないわけではない。銃口すら入らない小さな隙間だがそこに見事押し当てると弾切れの心配などしないと言わんばかりに連射する。

『お、おまえええええつ!!!』

「悪いけどただで負けるつもりはないのよ！」

『ぢ、くしょ……!!!』

最初の数発は装甲に弾かれたがそこからは隙間を大きくして見事中にダメージを入れていった。そのダメージがどれだけの被害を与えたのかは少女の声が聞こえなくなり、漆黒の戦術機が動かなくなつたことから理解できるだろう。

「……あ」

そしてそれを見て力尽きるようにステラの機体も倒れた。正確には触手の攻撃を受けた箇所から上下に分断されたのだ。辛うじて駆動系は生きているが上半身だけでは全く動かず、加えて突撃砲も弾丸が0となっていた。

「……までね……」

ふと、遠くを見れば漆黒の戦術機がさらに5機向かってきているのが見えた。それらは頭部の装甲を開き照射粘膜を露出させて今にでも攻撃してきそうな様子だった。

「ふふ、最後に一機を倒せた事。誇っていいのかしらね……」

ステラはそう言って目を閉じる。瞬間、5つのレーザーがステラの機体に向かっていき、稼働しなくなった漆黒の戦術機ごと爆炎に包まれた。

2001年12月8日。日本帝国においてクーデターの後処理が進む中でストックホルムは陥落した。スウェーデン王国軍とノルウェー王国軍・デンマーク王国軍残党は全滅。北欧は完全にBETAの手に落ちる事となった。

北欧のBETA群は資源回収のための群を除きすべてがフランスに向けて南進する事となり、ただでさえ防衛線が突破されたフランスはこれ以上の戦線維持は不可能と判断してフランス全土の放棄を決定。生き残った部隊をイギリスとスペインに撤退させて戦力の再編を始める事となる。

そしてスウェーデン王国の一報を聞き、国連軍横浜基地の副指令香月夕呼も新型OSのトライアルを予定を早めて10日に行う事を決定した。

第五十五話 「後の話」

「スウェーデンが落ちたわ」

「っ！」

クーデターの後処理が進む中で武は夕呼からのお使いを終えたところだった。というのもも夕呼が進めているオルタネイティブ4の計画において必要な数式を武が元居た世界の夕呼自身から受け取ってきたのだ。これは以前に行われていた事であり、武に改めてこの世界で戦う決意を生み出させる要因にもなっていた。

そんな武が預かった数式を渡した中で言われたのが上記の言葉だった。

「もともと通信自体は前々から途絶していたわ。衛星からもストックホルム全体でスモークが発生しているせいであまり詳細に確認できなかったけどそれでも8日の時点で陥落した事は間違いないわ」

「……」

前の世界ではこの時期にはすでに陥落していた場所ではあるがここではスウェーデン王国軍の奮闘もあり10年近く防衛線が行われていた。そんな都市が陥落したという報告は武の胸にもくるものがあった。

「そのせいで北欧のBETA群は南下してフランスに向かっていくわ。フランス政府は国土を放棄。イギリスとスペインに改めて防衛線を構築する事にしたそうよ」

「フランスが……。住民はどうなったんですか？」

「アルパイン線が突破された時点で全土に避難命令が出ていたから犠牲者はほぼいなかったそうよ。ただし後退する際に軍の一部が損害を受けたけどね」

それでも人が残っている方がいいと武は感じている。武田信玄の名言にもある通り人の命にはなにものにも代えられないと感じているし、BETAと戦うには人がいないと力は発揮できない。

「だからこそ、ってわけじゃないけど例の新型OSのトライアルを行うわよ」

「っ！ いやいよですか……」

「ええ、本当はもう少し後にやる予定だったけどね。明日行うわよ」

「明日……明日!?!」

「そうよ。それに伴ってあなたたちは正規兵となるわ。よかったわね。あなたが望んでいた力が手に入るのよ」

「っ！」

前の世界においては正式任官は引き延ばされ、オルタネイティブ5を迎えていた。しかし、ここではそんな事はなく正式に任官されるのだ。それがこの世界だからなのかそれとも誰かの意志があつてなのかは武には分からないがこれでBETAと戦えると思志を燃やす。

「正式な話はこの後されると思うから急ぎなさい。一人遅れてしまつて正式任官が取り消される、なんてことがあるかもしれないわよ?」
「！ 確かにそうですね！ 失礼しました！」

武は少し駆け足気味に部屋を出ていく。それを見送った夕呼は部屋のモニターに移された世界地図を見る。北欧はBETAの勢力圏である色たる赤に完全に染まり、また一つ人類の生存圏が消えたことを意味していた。

「本当にBETAの動きは早くて強くて予測が難しいわね。そしてストックホルムを陥落させたのは本当にBETAなのかしら? 少なくともまだ戦つていける力はあつたはずなのに一夜にして滅びたと言わんばかりのあつけない陥落。BETAは何か新しい力でも手に入れたつて事? そしてその舞台にストックホルムを選んだ。通信できないから情報が漏れないと踏んで。だとするとストックホルムでその証拠があるかもしれないけど、無理ね」

そもそもストックホルムの部隊が全滅したのは逃げ場がなかったからだ。ノルウェー、デンマークが陥落したことでストックホルムだけ孤立してしまつていたのだから。だからこそBETAが大胆に動けたわけであり、たとえ証拠があつたとしても見つかる事は出来ないと予測していたに違いない。

「ふう、本当に厄介だわ。そしてあたしも、白銀も動くのが10年遅かったわ」

せめて大規模侵攻が始まる前かその直前に今の地位があれば話は変わってきた。人類は、特にBETAの脅威にさらされていなかつた国々はあまりにも脆すぎたのだ。そしてBETAと戦った国々は力を消耗し過ぎた。人類の終焉はあの日から始まっていたと夕呼は感じている。

「最悪の場合、無条件降伏もしないといけないわ。勝てない以上、一人でも多くの人類を救わないと……」

BETAに負けないと意気込んでいたかつての夕呼は既にいない。彼女が動き出した時にはすべてが遅かつたのだ。これから人類が出来るのは10年以内の滅亡か、その前の特攻か、そして、BETAへの命乞いだ。そして武がもたらしたもので人類に相打ちの可能性が出てきたのだ。

「人類が勝てたとして、その時の地球に果たして人類は残っているのかしら。残っていたとしても文明は維持できるのかしら。そして、次のBETAが来ることはないのかしら」

夕呼は考えれば考える程底なし沼に引きずりこまれるような感覚を感じながらも抗うように思考を巡らすのだった。

「あはははははははっ!!! まさか落とされるなんてな！」

『うるさいー』

ストックホルムにおいて量産型戦術機、正確には戦術機級と呼べるBETAの起動実験を行ったが結果は意外なものだった。何しろ相手側の消耗からみて完勝出来ると思っていたのに結果を見ればエース機が撃破されたんだから。そして俺の目の前で怒りの声を上げる戦術機級がそのご本人というわけだ。

ここで戦術機級を軽く説明しておこう。元々人が乗れるタイプの戦術機と並行で作っていたわけだが当時は頭脳級を乗せるという方法で動かしていたわけだがそれではコストがかかってしまう。そこで代わりに人間の脳を搭載する事にしたんだ。正確には人間を戦術機級に憑依させて自分の体のように動かすといった感じだ。だから

動きが人間らしい様をのこすこととなったがそれでコストの心配は消えた。幸いにも使える人間は万近く存在する。資源に回している家畜人間と呼ぶにふさわしい奴らに教育を施せばさらに倍は増える。教育も脳に詰め込めれば一週間はあれば完了する。操作と敵の識別方法、連携なんかを教えればいいだけだからな。

「それで？ 敵はどうだった？」

『……強かったよ。しかもあいつは近接戦闘よりも遠距離とかを得意にしてそうだった』

「つまり得意分野のお前が分野違いの敵に負けたって事か！」

『うう、うるさい！』

きつと人間の姿だったら顔を真っ赤にして叫んでいるんだろうなあ。人間の姿はどこかアネットと似てて面白かったなあ。戦術機級を動かす関係上操作に慣れてもらうために人間の体に戻る事はほとんどない。だから戻ったとしてもうまく体を扱える奴はいない。なまじ戦術機級の方が出来る動きが多いからな。

「まあ、これでいい実戦になっただろう？ 安心しろよ。普通の人間は動かす体を変えて再び戦う事なんてできないんだ。それが出来るお前はこれからどんどん成長していけるって事だ。今回の敗北も次に活かせばいいさ」

『……』

理解できても怒りは収まらないって感じだな。暫くは荒れそうだし怒りを発散できるようにホールの一つを貸し出すか。BETAなり戦術機なり相手にすればいい。戦術機はともかくBETAはいくら殺しても問題ないしな。すぐに補充が出来るから。

「そーいやそいつは回収できなかったのか？ それだけの腕前があるなら是非とも戦力に加えたいが……」

『直接見たわけじゃないけどあたしがやられた後に乗ってた機体ごと吹き飛ばされたみたいだぞ。死体すら残らず粉みじんだよ』

「あらら。それは残念だ」

まあ、別になんでかんで必要なわけではないから死んだら死んだで別にいいけどな。どうせ戦場でのことだ。下手に捕縛に動いて逃げ

られる・反撃されるよりはマシだ。余計な損害や損失を出すくらいなら必要はない。経験豊富な者は育てないといけないが育てればいいだけの話だからな。

『で？ 次の出撃はいつなんだ？』

「んー、不明だな。ただ長くても数年だな。それも人類の動き次第で長くも短くもなるな」

『えー！ せっかく動けたのに暫くお預けかよ！』

「別に良いじゃないか。お前らが暴れる時は人類の終焉の時だ。つまり、それ以降はまともに暴れる事は出来なくなるって事だ。それに楽しみを取っておいた方が行動する時がさらに楽しくなるだろう？」

『それは、そうだけど……』

「安心しろって。お前にはとっておきの相手を用意してやるからさ」

不満たらたらな彼女をなだめつつ俺は考える。終焉の日を実行した場合、俺は本当にやる事がなくなってしまう。その際に俺は退屈な状況に耐えられるのだろうか？ いくらBETAという寿命も不明な生物になったんだ。最悪の場合地球の消滅まで生存する可能性がある。そうなる場合に備えているいろいろな娯楽や趣味を作っておくべきかもしれないな。

第五十六話 「甲21号作戦1・ブリーフィング」

「これより甲21号作戦の概要を説明する」

ある日の横浜基地にてハイヴ攻略ブリーフィングが行われた。武は訓練兵を卒業し、正式任官した事で横浜基地のA01部隊に配属となっていた。そんな彼にとって初めてとも言えるハイヴ攻略戦であり、自然と拳を握りしめていた。

「これは佐渡島ハイヴの攻略を目的とする大規模作戦である。本作戦には帝国と国連両軍が参加する事となっている。

まず、第一目標はハイヴの攻略乃至無力化だ。そして第二にハイヴ内での情報収集である」

横浜基地の基地司ラダビノットはそこまで言うところからの説明をA01の隊長、伊隅みちるに引き継いだ。

「本作戦における我が部隊の任務は戦闘ではない。正確には投入される新型兵器の支援及び護衛である」

「はつきり言ってしまうえば今回の作戦はこの新型機のテストのために組まれた作戦と言っているわ。つまり投入される戦力は全てこの新型兵器の護衛と言えるわ」

それはつまりハイヴの攻略戦を行える戦力すら上回るポテンシャルを持っている可能性がある兵器という事であり、誰もがぐくりと喉を鳴らす。武とて前の世界では聞いたこともない新型兵器に注目していた。

「護衛対象はこれ。滅亡しかけている人類を救える可能性がある対B E T A 戦略の切り札。」

XG-70b 凄乃皇・式型よ」

みちるより言葉を引き継いだ夕呼はそう言ってメインモニターに新型兵器を映し出す。映し出されたそれは明らかにこれまでの兵器とは一線を画すものと一目でわかる姿をしていた。

まずその巨体が目に入る。人が映っている事でどれだけの大きさなのかが一目瞭然であった。そして次に戦術機にしては手足がなく、要塞と思わせる姿をしている事。最後に試作段階なのか一切の武装

が見えないことだ。これがどんな武装を持っているのか外見からはよくわからないものだった。

「もともと米軍が研究していた兵器で単独でハイヴまで呐喊して破壊・攻略をしてしまう事を目標とした機体の2番目の試作機よ。搭載された抗重力機関から発生する重力波でBETAのレーザー攻撃を無力化し、重力制御で生じる莫大な余剰電力を利用した荷電粒子砲による攻撃でハイヴを殲滅するのよ」

抗重力機関も荷電粒子砲も元の世界では空想上の兵器でしかなかった。それがこの世界では既に実用化がなされている事に武は驚愕する。

「もつとも、そんな夢の兵器だから完成せずにお蔵入り。モスボール処理されてた機体を接收・改修したってわけよ

今回が実戦テストだから不測の事態に備えてこれだけ嚴重な護衛を敷いているけどこのテストの結果次第では次回以降のハイヴ攻略作戦は今回の100分の1以下の戦力で済むようになるわ」

「っー」

100分の1以下の戦力。それが一体何を意味しているのかは武にも分かる。この世界は前の世界でオルタネイティブ5が発動した後よりも悲惨な状況となっている。つまり戦力が足りていないのだ。そんな中でこの新型兵器が戦場に出るようになればそれも解消され、本格的に人類の勝利が目に見えてくるというわけだ。

「この作戦の成否次第で人類の道は大きく変わるわ。頼んだわよ」

「「「了解！」「」」」

「作戦の概要は決行の前日に通達する。以上だ」

ブリーフィングはそれで終わり、基地司令や夕呼、みちるは部屋を出ていった。残された面々は今回の作戦について話していたり決意を固める者があるなかで武も同期と話をする。武たちにとっては本当の意味での初陣となる。クーデター時に戦術機と戦闘を行っているがそれでもBETA相手では初の戦闘である事に変わりはない。た。

「(今度こそ、人類を……)」

武がそう決意を胸に士気を高めていく中、相手も大きく動きを見せる事になる。

さてはて、人類は決断したみたいだな。自分たちの寿命を。それも早める方に。いいだろう。俺も乗ってやるよ。お前たちがそんなに死にたいのなら望み通り殺してやる。どうせ人間の必要数は確保しているんだ。ボトルネック効果が不安だが別に近親相姦と言える程酷い結果にはならないだろうし多少は問題ないだろう。元々人類は遺伝的多様性がなくなっているからな。

「やつらは佐渡島ハイヴを攻略するつもりのようなうだ。ぶっちゃけ海からの支援も受けられるし攻撃目標としては最適と言える」

「ですが攻略出来れば日本帝国は本土の全土奪還が視野に入りますよ。BETAはハイヴの頭脳級よりエネルギーを供給できないと機能を停止してしまいます。佐渡島ハイヴが落ちれば最短の補給所は鉄原ハイヴです。九州中国地方ならともかく北陸や東海までを維持するのは難しいです」

「日本は島国だからな。さすがにBETAも海の中では移動速度が落ちる。補給距離が足りなくなるか」

やはり経験豊富な軍人がいるのは心強い。アイリスデイナを始めアメリカから呼び戻したグレーテル、意外と戦略的・戦術的視点で物事を見れるカティア、他にも第666戦術機中隊で指揮をすることもあるファムとヴァルター等が参加してくれている。他にも京都防衛戦では小隊の指揮を執り、撃墜された中隊長に代わり指揮を執っていた篁唯依も参加しているが彼女は学習という面が大きくなっている。

「佐渡島ハイヴ攻略作戦、甲21号作戦は12月25日に行われる。それに合わせてこちらも人類の滅亡を目指す終焉の日を開始する。段階としてはこうだ。

第一段階。各国に配置された人間級によるクーデターや襲撃を開始。国の中枢を破壊もしくは掌握する。東ドイツおよびソビエト連

邦はほぼ掌握が完了している。これらは第二段階の主力として活動する。

第二段階。ソビエト連邦、東ドイツ、中華帝国を主力としてアメリカの早期撃滅を目指す。それが出来なくともアメリカの継戦能力を潰す事が目的だ。それが確認でき次第第三段階に移行する。

第三段階。各国の主力部隊を殲滅する。大体の国家は軍勢をほぼ前線に張り付けている。そこを戦術機級を投入して叩きつぶす。戦術機級の性能はストックホルムの一件で確認済みだ。撃墜される機体も出るだろうが各ハイヴに設置済みの予備機に意識を移してすぐに出撃。破壊してもその日のうちに次の戦力を投入できるようにする。

そして第四段階。各戦線をBETAに突破させ、人間を殲滅する。可能な場所は沿岸部からも上陸して複数の戦線を作り上げて人類を圧迫していく。第三段階が完了した時点で人類の継戦能力はほぼ喪失している。確実に手が回らずに蹂躪できるはずだ。

なお、ここまでの過程でアメリカによるG弾の投下が懸念されるがそこはこちらも開発したG弾で迎撃する。まあ、各発射基地を第一段階で襲撃する予定だ。G弾を全弾撃つことは不可能だろう。

「ここまでで質問は？」

「はい」

「なんだカティア？」

「もし第一段階や第二段階で躓いた場合はどうするのでしょうか？」
「各国の中枢の破壊や掌握、アメリカを潰すに至らなかつた場合か。考えはある。その場合は予備プラン、というよりも各戦線以外のBETA、戦術機級をアメリカに向ける。我々の総力を以てアメリカを叩き潰すんだ」

そうなればいくつかの戦線は劣勢や崩壊に陥り人類に領土を奪還されるかもしれないが別に問題はない。取り戻したからと言ってすべてが元通りになれるわけではない。不毛の土地を手に入れるだけで人口や国力が回復するわけではないんだ。多少の戦線後退は許容範囲内だ。

「……なるほど、理解しました」

「それはよかった。お互いに勘違いや理解できていないところがあつた、なんてことは避けたい。勘違いしたまま行動するのはとても危険だからな」

「では私からも質問をさせてもらおう。我々はどこに向かうのかだ」
あー、確かに戦術機級の話はしたがアイリスディーナ達には触れていなかったな。

「簡単な話さ。全員で佐渡島ハイヴに行ってもらおう。人類は何やら面白い新型兵器を投入するらしい。それはレーザー級の攻撃すら効かず、ハイヴを吹き飛ばせるポテンシャルがあるそうだ。是非ともここで叩き潰しておきたい。アメリカを潰してもこれが健在なら意味がないからな」

「了解した。という事は唯依たちも？」

「そうだな。唯依、最悪の形で里帰りする事になるが問題ないな？」

「ええ、もちろんです。出撃の準備は整っています」

別にそういう意味で言ったわけじゃないんだけどなあ。これもカティアと同じように祖国の思いが強かったせいで真つ先に染まったからなあ。他は今も現状に思うところがある娘もいるというのに……。ま、だからこそ安心して送り出せるんだけどな！

「それじゃ他に質問は？ ないなら準備を進めてくれ。時間はないんだ。今日中にカシユガルハイヴから鉄原ハイヴまで行ってもらおう。甲21号作戦開始に合わせてこちらも終焉の日を開始する！ いいな!!」

「了解！」

ふふ、いよいよ迎えるのか。タリサに人類次第とは言ったがまさかこんなに早く訪れるなんてな。ああ、楽しみだ。今はこの終焉の日を楽しむことに集中しよう。素晴らしい日になる事間違いないから。

第五十七話 「甲21号作戦2・開始」

2001年12月25日8時56分。ついに人類はBETAへの反撃の一步を踏み出した。

「国連軌道爆撃艦隊の突入弾分離を確認！ 5、4、3、2、1……甲21号よりレーザー照射確認！」

連合艦隊第一戦隊の旗艦を務める最上の戦闘指揮所では甲21号作戦の開始によって始まった最初の一撃が報告される。

そしてそれをレーザー級が迎撃に移る一定の距離に入ったらしく、メインモニターに映る突入弾が次々と撃墜を示すLOSTで埋め尽くされていく。

「作戦区域上空に重金属雲発生。なおも拡大中」

しかし、それは人類にとつては何の問題もない迎撃だ。そもそもレーザー級という明確な脅威が存在する以上迎撃される事は想定内であり、人類は迎撃されることを前提とした重金属雲というレーザー照射の威力を抑える雲を発生させる砲弾を撃ち込んでいた。結果、BETAは遠距離の火力を減少させられる結果となった。

「撃ち方、はじめ！」

そこへ間髪入れずに第一、第二戦隊を含む全艦艇による砲撃が開始される。一度は迎撃をしてしまったためにこの艦砲射撃を撃ち落すレーザー級はほぼおらず、次々と沿岸部に展開していたBETAを吹き飛ばしていく。

「海神分離。わたつみ分離後各潜水艦浮上してミサイル攻撃に入れよ！」
「ウイスキー部隊各機甲師団は上陸に備えよ！」

強襲上陸用の戦術機である海神は陸上における機動性能こそないに等しいがその代わりに水中における航行能力と火力に特化した機体となっている。これらが一斉に上陸したことで上陸地点のBETAは次々と掃討されていく。ハイヴ周辺の部隊だったからか、突撃級を先頭とした何時もの陣形ではなくすべてのBETAが入り乱れる秩序ない様相となっていた。

「海神、八幡新町上陸を確認！」

「旧中興へ侵攻。旧石花、金丸、畷田を制圧」

「ウイスキー部隊各機甲師団へ。上陸を開始せよ」

今回の作戦において投入された3つの部隊の一つ。ウイスキー部隊が指示に従い上陸を開始する。戦術機は跳躍ユニットを吹かして飛び、戦車等は上陸艇を用いて海上を進む。

が、そこまで楽に人類を上陸させるほどBETAも甘くはない。飛び立った戦術機の一機を極太のレーザーが飲み込む。重金属雲というレーザーの威力が減少されている中、そのレーザーは佐渡島ハイヴに重レーザー級が存在する事を指していた。

「ステイングレイよりH^{ヘッドクォーター} Q！ 支援砲撃を要請する！ 重レーザー級が戦術機母艦を狙っているぞー！」

その直後、重レーザー級が第二射を発射。その一発が戦術機母艦に命中し、中にいた戦術機ごと爆沈した。その後も次々と重レーザー級の攻撃が飛んでいき、ウイスキー部隊は作戦開始してすぐに多大な損害を出していった。

「作戦第2段階進行中。帝国連合艦隊第2戦隊は砲撃を続行。残弾40%」

「ウイスキー部隊上陸に成功。旧八幡新町及び旧川原田本町を確保。機体損耗率7%」

それでも上陸には成功し、戦線を内陸部に押し込んでいく。佐渡島には沿岸部に防護壁が築かれていたが僅か3年でそれらは残骸が多少残っているだけという状況になっていた。ウイスキー部隊の一員として上陸した第九九九懲罰大隊の駒木咲代子がかつて佐渡島の防衛に参加していた者の一人として言い知れない気持ちを抱いていた。「HQよりエコー艦隊。現時刻を以って作戦は第3段階へ移行。砲撃を開始せよ」

そして、西側にBETAの眼を引き付けた事で作戦は次の段階に入った。国連軍を中心としたエコー艦隊が佐渡島の東側、両津港を目指して進んでいたのだ。

HQからの指示を受けて国連軍艦隊の司令長官は待ちわびたと言わんばかりに声を張り上げて攻撃の命令を下す。それにより東側に

展開していたBETAが気付くがレーザー属種は全て西側に引き付けられている。砲弾を迎撃してくれる物はおらず、次々と吹き飛ばされていく。

「エコーアルファよりHQ、全艦艦載機発進準備良し！」

「HQ了解。アルファストライク。繰り返す。全機発進せよ！」

そして、この作戦が初陣と言えるオルタネイティブ4の戦術機部隊が佐渡島に向かう。

「行くぞヴァルキリーズ！ 全機続け！」

「了解！了解！」

隊長の伊隅の言葉に従い伊隅ヴァルキリーズの名を持つA-01部隊が発進する。海上すれすれを高速移動するA-01はあつという間に上陸を果たすと周囲のBETAの掃討に入る。

新型のOSであるXM3を搭載した機体に乗る彼女たちは本人たちの技量もあれど瞬く間にBETAを殲滅していく。

「サラマンダーよりHQ。旧両津市一帯を制圧。両津港を確保！」

「了解。第2機甲部隊揚陸を開始。周辺掃討を願います」

そしてそれに遅れをとってたまるかと言わんばかりに国連軍の戦術機も両津市の確保に成功した。それによって更なる部隊の揚陸が可能となり、戦線の安定化を図る事が出来るようになった。

「ウイスキー全隊の損耗率33%、エコー全体の損耗率13%。ともに作戦継続に支障なし」

「ウイスキー主力部隊は旧沢根、旧高瀬に戦線を構築。部隊最後尾は旧窪田を放棄、西進中」

「エコー主力部隊は旧北松ヶ崎を確保。なおも北上中」

作戦は第一段階における地上戦力の完全駆逐を達成できていないことに目をつぶれば順調に進んでいた。損害もかなり出ているが想定していた範囲内の損害であり、まだ焦るような状況ですらなかった。

「現時刻を以って本作戦の第四段階への移行を宣言する」

「HQより全軍に告ぐ。作戦は第四段階へ移行」

そして最終段階である第四段階に移行。本格的にハイヴ内の攻略

を始める事になる。これは軌道上から第6軌道降下兵団が突入・降着してハイヴに攻撃する事となっている。そしてそれを確認後ウイスキー部隊も順次ハイヴに突入して占領を目指していく事になっていた。エコー部隊は全体的に支援に回る形となっており、エコー主力は海底からのBETAの上陸に備え、A-01は新型兵器、凄乃皇・弍型の侵攻ラインの維持を行う事になっていた。

「さて、ここまでは順調ね」

順調に進む甲21号作戦だが夕呼はこのままハイヴを攻略させてくれるとは思っていない。必ずBETAは動きを見せる。それを見極める事も作戦を行った理由の一つにあった。そのために危険性が高いハイヴ攻略を行ったのだ。凄乃皇の試験も重要であるがBETAの動きを確認するのも大切な事であった。

「他の地域のBETAに動きは？」

「今のところ確認できません」

「そう……。余裕か、罨か」

「香月副指令、私としては罨と考えるべきだと具申します。BETAとしても人類にここまで好き勝手させるとは思えません。確実にこのまま進めば何かしらの罨が潜んでいるでしょう」

「それは事前に予測できている事です。どんな罨が来ようとも跳ね返す。それが出来ると判断してこの作戦を行っているのですよ？」

「……そうでしたな。我々としても新型兵器の性能に期待したいところです。あれがあれば人類は滅亡の淵から助かる可能性が出てきますからな」

「……そうですね。あれが人類の希望となってくればいいのですが」

夕呼は作戦の経過とともに感じる嫌な予感に蓋をしながら作戦を次の段階へと移行していく。

――準備は完了した。

――後は指示を出すだけで人類に終止符を打てる。

―全戦術機級が各国に向かい、蹂躪する。

―人間級が役目を終えて自爆テロや暴動を起こす。

―政府や企業にもぐりこんだ者たちによってそれらは機能不全に陥るだろう。

―そして人間は自分以外を、いや自分すらも信じられない疑心暗鬼に陥り結束できなくなる。

―もういいだろう。

―主人公も把握した。

―白銀武。

―君が一体どんな存在かは分からなかったがお前が主人公という事実は変わらない。

―そしてお前を潰すにはそれだけの理由で十分だ。

―お前らが行っている甲21号作戦。

―それを君たちの墓標が立つ場所にしてやるよ。

―我がBETAが誇る最強の駒を使ってね。

―大崩壊を開始せよ。

―人類の終焉の日は今、訪れた。

第五十八話 「甲21号作戦3・大崩壊」

それは突然に発生した。オービットダイバーズと呼ばれる部隊が佐渡島ハイヴ内の攻略を順調に行っていたが、突如として世界中から大量の報告が上がってくる。

「副指令！ 世界中でテロや暴動が発生！ 一部の国家では国家機能の消失まで起きているようです！」

「っ！ ついに始まったわね……。他に動きは？」

「今のところはありません。ですがアフリカ諸国は半分の国との通信が途絶。中東は聖戦連合軍内で混乱が広がっています。南米ではサンパウロ、リオデジャネイロ、ブエノスアイレス、リマがクーデター側に落とされています。他の国々は鎮圧に成功したようですがかなり混乱しているようです」

世界規模でのクーデターや暴動。明らかにBETAが起こしたものだと分かるものであり、BETAがついに動き出したと夕呼は頭を回転させる。しかし、BETAの動きはそんなことをさせないと言わんばかりに迅速過ぎた。

「っ！ 大変です！ 中華帝国が国境を越えてアメリカに攻撃を開始しました！ さらにソ連を含むワルシャワ条約機構加盟国もそれに追隨しています！」

「なんですって!?! 状況は!?!」

「アメリカは軍隊の大半をカナダに投入していたようで防衛に失敗。国土の侵略を許している状況です」

「……BETAは、国家を既に奪い取っていたってわけね」

夕呼は理解した。既に打てる手は残されていないと。このままいけば数日後には国家機能を維持できる国は半分以下になり、BETAの攻撃に耐えきれなくなる。そして大量の国力を保有するアメリカはソ連と中華帝国の奇襲を受けてしまっている。東海岸に国力が集中しているからといって跳ね返せるかと言われれば不可能だろう。確実にBETAが両国と共闘するように動き出すと。

「これは……！ まさか今回の作戦が引き金になったと!?!」

「確実にそうでしょう。まさか我々の動きに合わせて動くなんで……！」

夕呼としては人類は詰んでいるとはいえ絶滅させるにはまだまだ時間がかかると思っていた。しかし、実際にはすでにBETAはいつでも人類を滅ぼせる状態にあったのだ。今回、大胆に動いたのはそれを見せつけるためであろう。

「……とにかく今はハイヴの攻略に集中するのよ！ 今更撤退すればそれこそ無駄な消耗で終わってしまうわ！」

「副指令！ ハイヴ内に大量のBETA反応！ 数は……最低でも軍団規模です！」

「3万以上の数ですって!? 一体どこにそれだけの数が……！」

BETAは世界だけではなく佐渡島でも動きを見せた。最初に殲滅した数を超えるBETA群が地下から湧き出してきたのだ。ハイヴ内に突入したオービットダイバーズは一瞬で全滅し、ウイスキー部隊とエコー部隊に群がっていく。

「凄乃皇は今どこに!？」

「佐渡海峡を渡っています。攻撃開始地点到着にはまだ時間がかかります」

「……」

ここでハイヴ攻略を優先しても問題はないが万が一の場合を考えて撤退させるべきだろうか。夕呼はそう考えつつも今ならまだ攻略できる可能性があるとして作戦の継続を決定した。

「急がせなさい。伊隅達はこのまま攻撃地点の防御をさせて」

「了解！」

未だ佐渡島は大量のBETAが現れたこと以外作戦の予測通りの状況となっている。損害も許容範囲内であり、この調子であれば攻略も可能であった。

それゆえに、この動き自体が作戦を継続させる罠と気付く事が出来なかった。何しろBETAはいまだに切り札を投入していないためにそれに気づくことが出来なかった。だからこそこの数こそがBETAの最高戦力であると誤認する結果となった。

戦術機中隊は佐渡島に突入した。

『っ！ 高高度を飛行中の戦術機が接近中！』

『馬鹿な……!!? あんな高度を飛んだら光線級の的だぞ!!』

しかし、光線級は依然として彼女たちを狙わない。それによって最悪の予測が軍の間で広まるがそれを確定させるように5機の戦術機が降り立つと、日本刀の如き長刀を抜刀してウイスキー部隊に切りかかった。

『こ、こいつら敵だ！』

『は、背後に気を付け……!』

『た、助け……!』

奇襲を受ける形となったウイスキー部隊は次々と破壊されていき損耗率を増やしていく。この時点でウイスキー部隊も乱入した戦術機が敵であると認識して攻撃を仕掛けようとするが前方のBETAにも気を付けないといけず、満足な対応が出来ずに破壊されていく。

『安芸！ 後ろに敵よ！』

『え!? あ！ 本当だ。ありがとう……!』

『気を付けて。私たちは敵より数が劣っているのよ。性能差があるとはいえ気を付けて!』

『う、うん!』

五摂家を守る最強の衛士として育てられた彼女たちが人類を敵と認識して牙を向けている。BETAを駆逐するために鍛えられた力が人類に向けられているのは皮肉と言えるだろう。

『っ！ 回避行動!』

『きやあっ!!?』

『志摩子!』

しかし、そんな彼女たちの無双は長くは続かない。高速で接近してきたそれに気づいた唯依が命令を出して自らも後退するが回避が間に合わなかった志摩子が乗る機体の左腕が切り落とされる。断面からは戦術機ではありえない真っ赤な血が噴き出し、それがただの機体ではないと人類に教えていた。

『ほう? まさか避けられるとは思わなかったぞ』

『っ！ 武御雷……』

切り落としたのは赤色塗装された武御雷、人類最強の一人である月詠中尉が搭乗する機体だった。京都防衛戦を生き残っていたればいずれ上司となっていたであろう人物の登場に唯依は少し悲しげな表情をした後にすぐに思考を切り替える。

『何者かは知らないが人類の敵と判明した以上、ここで倒させてもらおう』

『っ！ 斯衛軍！』

『これはちよつと厳しくない？』

そして武器を構える月詠を支援するように斯衛軍が姿を現した。衛士としての腕は確実に斯衛軍の方が上であり、唯依たちは機体の性能差を活かして戦うしかない。

『行くぞ！』

『っ！ 一機でもいいから斯衛軍を削るわよ！』

『『『了解！』』』』

唯依たちは高速で接近する武御雷に長刀を振り下ろした。人類最強と言える月詠中尉との戦闘を開始するのだった。

第五十九話 「甲21号作戦4・死」

「くそー！ 一体何が起こっているんだ！」

白銀武は凄乃皇の攻撃地点にて各地から流れてくる戦況報告を聞いて悪態をついた。オービットダイバースがハイヴ攻略をしていたにも関わらず気付けば全滅し、地下から大量のBETAが湧き出していた。攻撃地点にやってきたBETAを駆除し終わると佐渡島に正体不明の戦術機が乱入したと武たちに届いた。

『ヴァルキリー・ママより各機。現在正体不明の戦術機が佐渡島に上陸。戦術機は中隊規模で小隊ごとに分かれてそれぞれウイスキー部隊、エコー部隊を攻撃中。うち3機がそちらに向かっています』

『たつたの3機だと？ 舐められたものだな』

ヴァルキリー・ママのコールサインの元戦域管制として活躍している涼宮遥の通信により状況を把握するがその結果として更なる疑問が生まれる結果となった。なぜ人類の兵器である戦術機が攻撃を仕掛けてくるのか？ それもハイヴを攻略中の自分たちを？ 武を含め誰もが感じた疑問だがそれと同時に自分たちのもとに向かってくる戦術機が僅か3機というのがなめられているように感じられた。

A-01部隊は確かに実戦経験を持った者こそ少ないが新型OSを搭載した精鋭部隊であり、オルタネイティブ4直属の部隊である。そんな自分達を相手するのが僅か3機というのはどうしても屈辱に感じられたのだ。

『まあいいさ。たつた3機で向かってきたことを後悔させてやる。B小隊を前衛にしてAC両小隊はその援護を行う。速瀬、やれるか？』

『もちろん！ B小隊！ ストーム・ヴァンガード 突撃前衛の証を見せるわよ！』

『「了解！」』

『ヴァルキリー・ママより各機。まもなく3機の戦術機と接敵します。警戒を厳にしてください』

その報告が入ると同時だった。丘を飛び越えて3機の戦術機が姿を見せた。漆黒に塗りつぶされたそれらは既存の戦術機とは思えない程生物的な姿をしていた。その一方で部隊を示すようなものはな

いがそれに近いようなものが左肩にペイントされていた。666の文字と角の生えた髑髏が描かれたそれは数字の不吉さと合わせて不気味な様相を呈している。

『所属不明機に告げる。現在我らはハイヴ攻略中である。今すぐに攻撃をやめよ!』

先ずはと言わんばかりに伊隅が警告を促すがそれに対する漆黒の戦術機の返答は武力による返答だった。双剣を両腕に装備した1機が一番前にいた武に切りかかる。残りの二機は突撃砲を両腕に装備して援護に入る。

「くっ!? こいつ……!」

武はそんな戦術機の攻撃を辛うじて避けるが前の世界と合わせて数年近く戦術機に乗り、X M 3という新型OSを搭載した武の機体でも避けるのが精いっぱいなほどに敵の戦術機は高性能過ぎた。

加えて敵は歴戦の、それも戦術機同士の戦闘に慣れていると言わんばかりに武の動きを先読みして必殺の一撃を喰らわしてくる。

『武!』

『あたしたちをガン無視なんてなめてるじゃない!』

『援護する!』

しかし、武だけを攻撃させないと言わんばかりに他のB小隊の面々が援護に駆け付けるがそれすら漆黒の戦術機は即座に対応して見せる。まず、冥夜が繰り出した長刀を分断すると蹴りを繰り出して吹き飛ばすと次に向かってきた彩峰の銃撃を躲し突撃砲を持った右腕を切り落とした。

『くっ!』

『彩峰! 下がれ!』

これ以上損害を出すわけにはいかないと小隊長である速瀬が代わりに前に出るがそれは後方の二機に邪魔をされてしまい失敗に終わる。

『速瀬! 無事か!』

『損害はありません! ですがこいつら3機で来るだけの事はあります。……舐めてかかったらこちらが押し負けます』

この短い戦闘でA―01部隊の誰もが理解できた。目の前の敵は自分たちを殺しうる存在だと。本気でかからなければ命を散らす結果になると。

「くそー。なんで俺たちを攻撃するんだ！ 敵はBETAのはずだろうが！」

だからこそ武は許せなかった。人類同士で戦っている今の現状に。目の前の3機の戦術機は少なくとも精鋭になれるだけの実力がある。それをBETA戦に使う事が出来ればこんな絶望的な状況を少しでも覆す事が出来ると。

そんな武の嘆きとも怒りとも取れる言動はある意味では的を得ているだろう。問題は目の前の戦術機が本当に人類の物であればの話だが。

『……その通りだろう。私もそう思う』
「っー」

そして、武の言葉に返答するように目の前の戦術機の衛士が声を発した。凜とした女性の声は芯が通った強い女性を武に幻視させる声をしていった。

『ではそんな君に一つ教訓を与えよう。既存の常識に囚われるな。相手が常識に沿って戦ってくれるわけではないのだから』

「それは、どういふ……！」

『こういうことだよ、白銀武』

その瞬間だった。3機の戦術機の頭部装甲が開くとレーザー級の照射粘膜が姿を現し、3つのレーザーが武に伸びていく。

「不味い！」

『っ！ 避ける白銀！』

慌てて回避行動に移るが一步遅かった武は跳躍ユニットと左腕にレーザー照射を受け地面にたたきつけられた。慌てて伊隅達が救援に向かうが漆黒の戦術機が立ちはだかった。そして、先ほどとは比べ物にならない速度で以て近接戦闘を展開する。

「や、やめろー！」

武は操縦桿を動かすがレーザー照射で駆動系がやられたのか身じ

ろぎ一つする事は出来なかった。にもかかわらずモニターも通信も良好であり、A―01部隊の様子が簡単に見える事が出来てしまった。

『っ！ こっちに……………！』

『そ、狙撃を……………きゃあっ!!??』

『たま!?! ?でしよ……………！』

『近接戦は危険だ！ 距離を取って……………！』

『大尉いっ!!!』

次々とA―01部隊は撃墜されていく。縦横無尽に部隊内を駆け回る漆黒の戦術機に翻弄され、距離を取ろうとすれば残りの二機がレーザー照射で破壊していく。最初に壬姫が、次に中隊長である伊隅が落とされ指揮系統を崩していく。ただでさえ劣勢な状況でのそれはあまりにも致命的過ぎた。

「くそっ！ くそっ！ くそおおおおおっ!!!!!!」

『ま、まずい！ こっちに……………！』

『がっ!!』

『ひ!?!』

『そんな……………！ 皆が……………。あ……………！』

『武……………。すまない……………』

武は戦友が、仲間たちが次々と死んでいく様子を見せられ、聞かされ続けた。そんな事はさせないと機体を動かそうとしても一向に動かず、気付けば付近に戦術機は4機しか残されていなかった。

『無様だな。白銀武』

「……………なんで俺の名前を……………」

『お前を最優先で始末しろと命令されていたからな。我々の中で貴様を知らないやつはいない』

「……………お前ら、BETAか」

『答え合わせをするには状況証拠が多すぎるな。確かにそうだ。意外だったか？ BETAが戦術機を運用している事に』

「……………そうだな」

知っていれば、予測できていればもつと対応できていたはずだ。であれば仲間が死んでいく事はなかったはずなのだ。

漆黒の戦術機は武の機体の前に立つと双剣を振り上げる。最優先で始末しろと言われているために彼女たちが武を生かす理由はない。武は悔しさを歯を食いしばっていると、モニターに凄乃皇の姿が映った。

『武ちゃんー!』

『……どうやら人類の新型兵器が登場したようだな。いささか遅すぎたようだがな』

『武ちゃんから離れる!!!』

凄乃皇に搭乗する00ユニット、武の幼馴染にして相思相愛と言えた鑑純夏は怒りの声を上げる。そんな純夏を見て漆黒の戦術機の衛士はにやりと笑みを浮かべた。

『……なるほど。どうやらあれの中身はお前にとって大切な存在のようだな。なら……』

そういうと戦術機は双剣を武に振り下ろした。まるで純夏に見せつけるような一撃に武は抵抗する事も出来ずに双剣に潰され、純夏は怒りで顔を真っ赤にした。

『おまえええ!!!』

『最優先事項は完了した。どうせだ。新型兵器の実力を見てみようではないか』

そういうと漆黒の戦術機は仲間の機体と共に凄乃皇に向かっていく。武は潰されたコックピットからその光景をぼんやりと眺めながら少しずつ意識をなくしていった。

「純夏……」

最後に守りたかった少女の名前を呟き、武の意識は完全に暗転するのだった。

第六十話「回る世界」

2001年10月22日。明星作戦から二年以上経過したがいまだに主人公らしき人物が現れる様子はない。後一月ほどで今年も終わってしまう。そろそろ現れてもおかしくはないのだがな。

そもそもこの世界の作品を知らない事が致命的すぎるよな。今更ではあるけど原作を知っていれば俺の行動の差異を知ったり、原作をどうするかを決める事も出来たしどこにいるのかもわからない主人公を探してこんなに苦勞する事もなかったはずだ。

仕方ない。今はもう一つの重要事項の精査をするか。とある人物の脳内から受け取った情報で人類がやろうとしている事が判明した。オルタネイティブ4。俺は当初こそG弾の集中運用によるハイヴ攻略と厳選された人類の他星系への移住が計画内容だと思っていたがどうやらこれは違うらしい。オルタネイティブ5という予備案だったこれを表向きは採用しつつこれを隠れ蓑に本来の計画が進められていた。

00ユニットと呼ばれる生物的根拠が0だか何だかを使ってBETAとコミュニケーションを取る。そしてその過程でこちらの情報を引き出して今後の戦争に役立てるというものだ。俺が、というよりBETAが人類を生物として認識していないからこそ計画されたものらしいがかわいそうに。人類を生物として認識していないのはBETAの一般常識のようなものであり、俺は生物として認識しても滅ぼす事には変わりはない。他のBETAがどうなるかは分からないがそれこそ俺を止めたいのなら創造主とやらの炭素系生命体を生物として認識させないと無理だ。

創造主。俺たちBETAを作った宇宙人で驚くべきことに珪素、つまりシリコン生命体との事だ。創作上ではよく見かける生命体だが俺も詳しくは知らない。というか見たことがないからどういう姿かたちをしているのかが分からない。もしかしたら人型ではないかもしれないしな。ちなみに、実際に珪素生命体が存在するか否かという話があるが存在しない可能性が高いらしい。理由は忘れたがな。そ

れにそのことを理由に否定した場合、まさにBETAの認識と同じになつてしまう。BETAは創造主が炭素から生命体が生まれる確率は低いと言われてその事を前提に動いているのだから。

さて、話がそれだが主人公が見つからない以上このオルタネイティブ4の計画からして物語に深くかかわっているのは確実だ。だが残念ながらこの計画の最高責任者である香月夕呼はBETAが人類内部に入り込んでいる事に気付いているようだ。だからこそオルタネイティブ5を隠れ蓑にして極秘に動いているみたいだな。その秘匿性と言えはさすがと言わざるを得ない。初手の人選を間違えていなければ俺も気づかずにG弾の対応に追われていただろう。香月夕呼という女性は高校生の時に大学に飛び級するくらいらしいのかなりの天才である事は確定的だ。

である以上こちらにも慎重に動く必要がある。すくなくとも手駒を近くに配置する事は出来ない。内部の様子は偶然にも親友だったまりもちやんに任せよう。どうせ彼女自身も自分の体に気付いていないんだ。こつちが不必要に動かない限りバレる心配はないと言える。後は外部から揺すつてみたりつついて反応を見るか？ いや、下手に干渉はしない方がいいか。あくまで他の基地と同じように接するだけで情報を秘匿できていると考えられるはずだ。

ふふ、楽しみだなあ。気づかれないように隠匿に隠匿を重ねた結果、最初から知られていたと知った時の彼女の表情。常に澄ました表情でいる香月夕呼がどう歪むのかすごく楽しみだ。それまでに「終焉の日」の準備を完璧にしないとね！

「……はっ?!!」

白銀武は自室にて目を覚ました。この光景を見るのは二回目であり、それを理解すると飛び起きるように立ち上がると部屋を出て外を確認する。外にはずっと過ごしてきた平和な日常、ではなく荒れ果てた横浜の姿があった。そう、また戻ってきてしまったのだ。

「うっ！」

それを理解すると同時に武は口を押えて蹲った。次々と殺されていく仲間、そして自分。夢と呼ぶには痛みと感触が残り過ぎている。脳が夢だったと思い込みたくても実際に受けた肉体がそれを否定する。あれは現実だと。夢なんかではないと。

「……ぐっ！」

胃液をある程度吐き出した武は青白い顔をしつつも確かな意思を持って前を向く。最初の世界を1回目、次を2回目とするならば今回は3回目の世界となる。2回目の世界と同じかそれとも違うのかは分からないがそれでもあのような悲劇を起こしたくはないと武は決意した。

「今度こそ、みんなを救うんだ……！」

フラフラと歩きだした武は横浜基地に向かって歩いていく。たとえまた捕まるとしてもあの場合が世界を変えられる唯一の場所だ。それを確信している武は確かな足取りで向かう。あの悲劇を繰り返さないために。

「夕呼先生！」

「……あたしに生徒はいないけど？」

「大切な話があります！　どうか聞いてください！」

「あなたのいう事は理解したわ。そして本当なんでしょうね。

いいわ。信じてあげる。だからあなたが見てきたことをすべて話さない。未来を変えたいというのならまずはそこからよ」

「もちろんです。俺もあんな悲劇は繰り返したくはないですから」

「白銀って本当に兵役についたことがないのか？ とても素人とは思えない手さばきだが……」

「あー、我流で鍛えていたからそのおかげかな？」

「それにしてもすごいわよ。まるで歴戦の軍人みたい。これで衛士としての腕前も文句なしなら何も言えないわね」

「あ、あはは……」

「なんで……。沙霧大尉！ どうして……!?!」

『今の日本に未来はない。なればこそ実力で以てそれを分からせる必要があるのだ!』

「くそっ！ また俺は……!」

「XM3。これはすごいな！ これを全戦術機に搭載できれば戦死する者を格段に減らせるぞ！」

「俺もそう思っています。だからこそ今回の試験結果をいろんな人に共有してほしいんです」

「任せろ。これだけすごい結果となったんだ。誰でもこの有用性に脱帽するはずさー！」

「純夏……」

「あなたのおかげで00ユニットは早く開発出来たわ。後は白銀、分かるわね？」

「もちろんです。もう二度とあんな事にならないようにします！」

「ふふ、期待しているわ」

「凄乃皇の試験をしたいけど甲21号作戦は出来ないわね。すくなくともBETAが戦術機を運用していると判明した以上うかつに攻撃すれば返り討ちにあってしまうわ」

「でもハイヴ攻略をしないとBETAを止める事なんて……」

「だからこそ今回は新型兵器の情報は伏せておくわ。新型兵器の投入がきつかけになった可能性は十分にあるんだもの。だからこそ今回は横浜基地の人間以外に漏らさないわ。それと白銀、BETAはあなたを狙っていることも分かっているから悪いけどあなたはお留守番よ。いいわね？」

「……はい」

「安心しなさい。必ず人類の光となれるような戦果を持って帰るから」

「……そんな……」

「……A―01部隊は乱入してきた漆黒の戦術機によって全滅。最上にて指揮を行っていた香月夕呼以下最上乘員は艦と運命を共にした。投入兵力も9割を失った。……極東戦線の戦力は事実上消滅したに等しい。00ユニットを回収できたのが唯一の救いと言えるが……」

「夕呼先生……」

「くそ！ 白銀！ 北海道まで撤退するぞ！ 急げ！」

「で、ですがまだ味方の機甲部隊が……！」

「これ以上衛士を失うわけにはいかない！ 急いで……白銀避けろ！」

「しまっ……!!!」
「白銀えええっ!!!」

2001年10月22日。明星作戦から二年以上経過した。主人公は一体いつ見つかるのかな？

第六十一話「露見」

「また、みんなを……！」

白銀武はこの人類が詰んだも等しい世界で3回目のループを経験した。つまり、BETAとの戦争が続く世界にきて4回目のループとなった。しかし、武は3回目においてあまりにも大切な人たちを失い過ぎた。

2回目と同じく行われた甲21号作戦で香月夕呼をはじめとするオルタネイティブ4の実行者を軒並み失った事で事実上とん挫する結果となった。元々香月夕呼の天才的頭脳に依存する形で進められたこの計画は彼女がいなくなったことで今までのような進行が出来なくなったのだ。

加えてBETAが総攻撃を開始。世界中で戦術機が目撃され、僅か一年で人類はフリカ以南と北海道、ラテンアメリカを残して全てを失った。特に北海道はカムチャツカ半島が2002年の4月に落ちて以降北方からの防衛もしなくてはならなくなり武が死ぬ直前には安全圏と呼べる場所は残されていない程荒廃してしまっていた。

そもそもあの3回目は武が回避しようと動いた出来事全てが裏目に出る結果となっていた。

クーデターを回避しようとしたら実際よりも早く起こり、政威大將軍である煌武院悠陽が右腕を失う重傷を負う結果となり、甲21号作戦では上述の通り2回目の時を超える損害を出す結果で終わった。

そして武は再び死に、また10月22日に戻ってきたのだ。最初こそ次こそは、という思いで挑み、夕呼とのコンタクトを取り、訓練兵という立場になることも出来たがターニングポイントとも言える甲21号作戦の日付に近づくごとに武の胸の中では不安が広がっていた。

— 今度こそ本当に助けられるのか？

— 何度繰り返しても同じなんじゃないか？

— むしろ俺が動かない方が事態が良い方に進むんじゃないか？

— 俺は何の為に戻ってきているのか？

「……いつそ、全てを捨てて逃げた方がいいんじゃないか？」

気づけば武の情緒は不安定になり、訓練にも顔を出す事が出来なくなっていた。辛うじて00ユニットに必要な論文を前の世界に取りに行く事は出来ているがそれ以外の行動はもう出来なくなっていた。

「俺は……俺は……」

そしてこの日も武は毛布にくるまり部屋の隅で蹲っている。ブツブツと何かを呟くその姿は誰がどう見ても憔悴していると分かる姿をしており、とても痛ましい様相をしていた。

「白銀？　入るぞ」

「……」

ドアのノック音の後に聞こえてきたのは元の世界でも武の先生だったまりもだった。まりもは蹲る武の隣に座るとゆつくりと話を始めた。

「一体どうしたんだ？　みんな心配しているぞ」

「まりもちゃん……」

武はまりもの来訪に気付き、元の世界で言っていた愛称を口にしていた。そんな武にまりもは特に気にした様子もなく話を続ける。

「何があったのかは分からないがきちんと食事はとっておけ。いざというときにお腹がすいて力が出ませんでした、では話にならないからな」

「……」

別に死んでしまってもいい、武は無意識のうちにそう思っていた。そして、どうせ死んだとしても次に目に入るのは自分の部屋の光景だ。

「……白銀。貴様がどんな過去を歩み、どんな経験をしてきたのかを聞く気はない。だがこれだけは言わせてもらおう。お前を待っている者たちはここにはたくさんいるんだ。せめて顔くらいは見せてやれ。出来るのなら相談しろ。たとえ解決に向かう事がなかったとしても心は軽くなるのだから」

「……」

まりもの言葉に武は答ええない。だが、心にすつと入っていったのも

事実であり、それが理解できたまりもはそれ以上は何も言わずに立ち上がり部屋を出るために扉へと向かっていった。

「……まりもちゃん。俺が、この世界の人間じゃないと言ったら、信じてくれますか？」

「……もちろんだ。白銀、お前の言葉ならどんな狂言でも信じられる」
「俺は……」

武は話し出した。自分の過去を。これまでに経験してきたことを。人類を2回、救う事が出来なかったことを。まりもはそれに対して笑うわけでも貶すわけでもなく静かに聞いていた。

「……以上が、俺が見てきた世界です」

「……白銀」

「っ!？」

突如としてまりもは武を抱きしめる。母性すら感じさせるあたたかな感触に包まれ武は狼狽えるがまりもは気にせず頭に撫でながら抱きしめ続けた。

「今までお疲れ様。白銀、もう無理をする必要はない。よく話してくれた。後は任せてゆつくりと日々を過ごしていい。後は私が何とかするから」

「まりもちゃん……」

「だから今はお休み」

武はまりもに促されるように目を閉じる。暖かいぬくもりに包まれた武は自然と眠気に襲われそれに身を委ねていた。辛い現実を忘れるように。実際に、眠る武の表情はとても穏やかであり、元の世界で過ごしていた日々の感情を取り戻したかのようにであった。

「……白銀武。話してくれてありがとう。これですべてのピースは揃った」

それゆえに、まりもが口角を上げてそう言っている事に気付くこと

はなかった。まりも、正確にはまりもの意識を乗っ取り表層に出てきたあ号標的は武をベッドに寝かせるとその隣に腰を落ち着かせた。

「2回目と3回目。白銀武が死ぬとループすると分かった以上俺がとるべき行動はたった一つだ。ふふ、お前は感謝する事になるぞ。俺はお前を殺さずに生かし続ける。」

絶対に殺さない。肉体的にも精神的にも絶対に殺さないさ。だがそれでもお前は必要ない。男に興味はないんだ。お前が女なら考えただけだな。

だからお前には夢を見せてやるよ。お前がいた世界を再現したいつまでも続く平和な日常。映画のワンシーンを永久に体感する事になるが疲れ切ったお前にはそれに気づけず、気付いたとしても抜け出そうとは思えなくなるはずだ。そうすれば外的要因がない限りお前は死なない。つまりループしないで済むというわけだ。

流星に絶対に死なないとは言い切れない。肉体には限度があるからな。だがBETAの技術を用いれば億単位で延命させる事は出来る。それだけ生きられれば俺も満足できる。その時は殺してやるよ」

あ号標的はそこまで言うとは再びまりもに肉体を返す。横浜基地の特性上BETAとかかわりを持つ人間がいるとは思わせないためにもあ号標的が出てくる時間はほんの僅かとしていた。

「それじゃまたな。白銀武。近いうちに迎えに行かせるとしよう」

最後にそう言ってあ号標的の意識はまりもの中から完全に消え去った。

――大崩壊を再設定する。

――世界をループさせないためにも今後主人公白銀武は抹殺ではなく保護を最優先事項とする。

――その関係上BETAによる一斉攻勢は白銀武の保護が完了してからとなる。

――それゆえに、我々が行うべき事はただ一つである。

—横·浜·基·地·を·襲·撃·す·る。

—さあ、俺の切り札たちよ。

—横·浜·基·地·を·攻·撃·せ·よ！

第六十二話 「横浜基地防衛線Ⅰ・強襲」

12月5日。本来であれば帝国軍によるクーデターが発生するこの日に、日本帝国はこれまでにない危機に直面していた。

佐渡島ハイヴから10万近いBETAが新潟に上陸。更には樺太から5万のBETA群が北海道に、ハワイからしき3万が宮城に上陸した。三方向からの同時侵攻に帝国軍、在日国連軍はそれらの対応に追われることとなった。

とはいえ横浜基地においてそのあわただしさは感じられない。オルトナイティブ4の本拠地であるこの部隊を動かすべきではないという事とそもそもいまだに訓練兵ばかりである事、この戦力まで投入した後に南から侵攻されたときに即座に対応できる兵がない事などから待機命令が出されていたのだ。

「全く。BETAは何を考えているのやら」

夕呼はこれまでとは違うBETAの動きに怪訝な表情をした。そもそも日本がいまだに無事なのはここの国民5000万を確実に手に入れるためだと予測していた。実際、その予測通りの行動を起こしており、それゆえにBETAの動きを多少なりとも読むことが出来た。が今回の侵攻はそれまでの動きを全否定するような無差別な侵攻だ。

「……BETAは何か行動を変更せざるを得ない状況に追い込まれたとか？」

他の戦線に動きはなく、BETAがこれまでとは違う動きを見せているところはない。日本でのみ不自然な行動が起きているのだ。そうである以上何かがあったと考えるのが自然であろう。

「……まさかオルトナイティブ4の本当の計画がバレた？ それとも5000万の国民を全員捕らえる必要がなくなった？ でもそれだと他で動きがない事の理由にならないしわざわざ三方向というもの……」

そこまで考えた時、夕呼は南からBETAが来ない理由に思い至った。日本の南には何かがあるか？ 帝都東京と横浜基地だ。日本内部における最重要と言える場所はそのくらいであるがそれらが関係し

ているように思えてならなかった。

「帝都？ いえ、今更すぎるわ。……なら、BETAは……！」

『副司令！ 東京湾にBETA出現！ 数は3万！ 現在も数を増しています！ 予測進路は、横浜基地です！』

「っ！ やはり狙いはここなのね。急いで伊隅達を出しなさい！ 帝國軍にも応援要請。無理だとは思うけど一応ね」

『り、了解！』

日本と在日国連軍の主力は北に向かってしまっている。一番近い新潟は一番の激戦区であり戦力を引き抜くことは難しい。他の戦線はそもそも遠すぎて到着するころには戦闘が終わっている可能性すらあった。つまり、横浜基地内の兵力で対応するしかない状況となっていたのだ。

「(だけどA-01部隊以外はほぼ北に向かってしまっている。それ以外だと白銀達訓練兵くらいしかない。……せめて平時の半分でも戦力があれば……!)」

あまりにも間の悪い、明らかにこうなるように動いていたBETAに踊らされた形となった夕呼は歯噛みしつつ現状の打破を考えるがどう考えても詰んでいるとしか言いようがなかった。対応できる戦力はごくわずか。それに対してBETAは平時の横浜基地の戦力全てを投入して対応できるような大規模な群れ。その様10mの津波を2m程度のテトラポット一つで防ごうとしている並みに厳しい、いや不可能な出来事だった。

「仕方ないわ。どちらにしろここは放棄出来ない。すればオルタネイティブ4は失敗に終わる」

00ユニットの維持のためには横浜基地の下、横浜ハイヴの反応炉からのエネルギーを必要としている。人類が攻略出来たハイヴがここしかない以上ここ以外に移設する場所は存在しないのだ。

『BETA群第一波到着まで残り20分です！』

「早いわね。いえ、この場合は見つけるのが遅すぎたというべきね。部隊はいつ出撃できるの？」

『それが……。最短でも25分後です』

「……そう」

横浜基地に漂っていた戦場離れた空気。それを改善しようと夕呼は計画を立てていたが結果的に改善される前にBETAの侵攻を許してしまった。今まさに最悪の結果として迎えようとしていた。

「わかったわ。ピアティフ中尉、横浜基地の全職員に武装させなさい。出撃よりBETA到着の方が早い以上基地内での戦闘になるわ」

『了解しました！』

ピアティフとの通信を切った夕呼は自分の仕事を全うするべく自室を後にする。既に基地内は警報が鳴り響き、職員たちが慌ただしく動き出している。

夕呼はこの中の何人が生き残れるのだろうかと考え。まともな部隊が残っていない以上最悪の場合、全滅の可能性もあり得ていた。「幸いと言えはいいのか斯衛軍の一部がここに留まっているのが救いね。でもおそらく……」

武より聞いたBETAの切り札。人類の戦術機を模したであろう漆黒の機体は聞いた限りでもBETAの技術が転用されている事は事実と言えた。そうである以上この機に乗じて彼らがやってくる可能性は高い。

「……駄目ね。考えれば考える程抗いようがないとしか言いようがなくなってくるわね」

夕呼はそう呟きながら何処か諦めたような表情をする。どんなに打開策を考えようともBETAの物量と横浜基地の現状、そして投入される可能性の高い漆黒の戦術機がそれを無意味な策になり下げてくる。夕呼はこれまでの人生の中で初めて、諦めを抱くのだった。

「現在BETA群約3万が東京湾を北上している。最終到達地点はここ、横浜基地と推定されている」

ブリーフィングルームに集められた207B小隊の面々は教官である神宮司まりもの言葉に少なからず驚愕した。既に日本中にBE

TAが上陸してきている事は知っているがまさかここにまでやってくるとは思っていなかったのだ。

「本来であれば貴様ら訓練兵は基地内で待機、のはずだが今この基地にはA―01部隊と斯衛軍以外に衛士は存在しない。よって貴様たちも前線に出て戦ってもらう事になった。幸い貴様たちは戦術機の教習を終えている。戦力にならずとも足手まといにはならないはずだ」

実際、本来あつた世界ではカシユガルのオリジナルハイヴを攻略する彼女たちも今はただの訓練兵に過ぎない。エース級どころか一般衛士並みの動きを期待する方が酷だろう。しかし、現在の状況ではそうでなければ生き残れる状況ではないのも事実だった。

「お前たちはすぐに着替えて戦術機に搭乗せよ。搭乗後は武装してそのまま待機。敵の速度からここ横浜基地内での戦闘となるだろう」

「質問よろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「白銀は、どうするのでしょうか？」

「……」

武はあれからもほとんど部屋から出てきていない。それにも関わらず衛士としての腕前はエース級の実力を持っている。彼がいればこの状況もマシになるだろう。戦える状況であれば。

「白銀については私が責任をもって対応する。お前たちはただ目の前の敵に集中せよ」

「……了解しました」

「他に質問はあるか？ ないのならすぐに行動せよ！ こうしている間にも敵は刻一刻と迫ってきているぞ！」

「……了解！……」

まりもの言葉を受けて207B小隊の面々は部屋を後にする。一人残されたまりもはその足で武がいる部屋に向かう。

「白銀、入るぞ」

部屋についたまりもがそう声をかけるが中から反応はない。しかし、それを無視してまりもは中に入る。中では前と変わらない様子の

武が俯いていた。

「まりもちゃん……」

「白銀、BETAがこの横浜基地に侵攻してきた。現在基地内のすべての人間が迎撃の準備を行っている」

「……だから、俺にもそれに参加しろって事ですか？」

武とて今ここで俯いている場合ではないことは理解できた。しかし、諦めにも似た感情がその動きを阻害する。どうせやっても変わらない。そんな感情が武から行動する意欲を奪っていた。

「……いや、お前は動く必要はない」

「え？」

「どちらにしろこの横浜基地の戦力だけで防ぎきることなどできないのだ。ゆえに本来なら基地の放棄をした方がいい。だけどそれをしていない。おそらくお前が言っていた00ユニットが関係しているのだろう。だからこそ動くことが出来ない。オルタネイティブ4は失敗に終わるだろう」

「それは……」

「そしてその場合、お前は死ぬことでまた10月22日に戻る事が出来る。つまりこの世界を見捨てる覚悟さえ出来れば情報収集に徹して次に活かせるかもしれないという事だ」

ループものの強みはそこにある。一回の人生では知りえない情報を複数回経験する事で知る事が出来る。

「だからこそ、お前を殺すわけにはいかないのだ」

「ま、りもちゃん？」

どこか様子がおかしいまりもの様子に気付いた武が顔をあげるがまりもはそんな武を押し倒し、覆いかぶさった。

「安心しろ、白銀武。これからお前が見るのはかつての世界すら霞んで見える極上の夢だ。二度と終わらないとさえ思える時間をくれてやろう。それが私が、いや俺が前に進むために必要な事なんだよ」

「お前、まさか……!」

「普段、俺は人類に声をかける時に言っていた言葉があるが今回は違う。あえてこの言葉をお前にプレゼントしてやろう」

そう言うまりもの顔が変わっていく。粘土を超えるかのように変貌する顔はまるで化け物のような、それこそBETAと言える顔になった。武は気付けば目を見開き涙を流していた。

「我らBETAの為に人類を裏切ってくれ」

BETA群が横浜基地に到着する数分前、神宮司まりもは白銀武と共に姿を消した。

第六十三話 「横浜基地防衛線2・悪夢」

『き、来たぞー!』

そう声を発したのは見張り台についていた兵士だった。彼の視線の先には海より顔を出してこちらに向かってくる突撃級の姿があった。それを皮切りに一つ二つ、10、20と数を増していった。

『っ! BETA先頭集団上陸!』

顔を出してからは一瞬だった。荒廃する横浜に上陸した突撃級は海中の時よりも素早い動きで突進を開始する。しかし、そうはさせないと横浜周辺から砲撃やミサイルが突撃級に突き刺さっていく。

「BETA先頭集団に着弾を確認! しかし、完全撃破には至っていません!」

「仕方ないわ。むしろ今ので半数を撃破出来たことに満足するべきよ」

「っ! 要塞級出現! 数は10! さらにその周囲から要塞級多数出現!」

「それらは後回しよ。今は先頭の突撃級に火力を集中して」

突撃級の厄介な点は正面からでは決定打を与えられないという事だ。地球上のどの物質よりも硬い突撃級の正面装甲では戦車砲や突撃砲をすべて無力化してしまう。それゆえに柔らかい他の場所を攻撃するのが望ましいとされているために砲撃など背後を攻撃できる火器は全て突撃級の掃討に充てられることとなった。

「突撃級殲滅完了。続いて要塞級、要塞級来ます!」

「ここからが正念場よ。絶対に守り抜くのよ!」

横浜基地に残されたすべての火器が火を噴く。出し惜しみなんてしてられないと激しい砲火がBETAに突き刺さっていくがそもそも彼らの真骨頂はその圧倒的物量である。一体撃破することには3体は出現するような膨大な数が波となって押し寄せてくる。

『くそ! く、来るなあああっ!!!』

「第一防衛線突破されました! 第二防衛線までに敷設された地雷が起爆! 多少ですが損害を与えています」

「そうでないと困るわ。ただでさえ絶望的な防衛だっていうのに……。それよりも戦術機は？」

「斯衛軍は既に出撃準備を完了しています。A―01部隊はまもなく出撃準備が整います。207B小隊はまだ時間がかかります」

「急がせて。最低でも戦術機を動かせる状態までもつていかないとBETAに殺されるわよ」

動けない戦術機などでかい棺桶でしかない。であれば格納庫を最終的に壊す事になったとしても動ける状態にする必要がある。既にBETAは上陸し、あと一步のところまで来ているのだから。

「斯衛軍出撃。要塞級の排除に動き出しました」

「いいわ。彼女たちはあたしたちとは別の指揮系統を持っている軍よ。彼女たちの好きにさせましょう」

「了解。……っ！ BETA先頭集団第二防衛線に到達！」

「くっ！ やはり火力が足りていないわね」

横浜基地の主戦力が引き抜かれた影響が諸に出始めている。この調子なら基地の外壁を利用した最終防衛線の到達まで極僅かだろう。

「副司令！ A―01部隊発進準備完了しました！」

「なら第二防衛線の敵排除に回らせて！」

「了解！」

しかし、辛うじてA―01部隊の出撃準備が整う事に成功した。この状況においては焼け石に水に近いとはいえ新たな戦力を投入できる意味は大きい。横浜基地の司令部で喜びの感情が沸き上がった。

そんな彼女たちの期待を背負ったA―01部隊の出撃を口角を上げて喜ぶ存在にも気づかず。

「へえー。あれが斯衛軍か。めっちゃくちゃ強いな」

横浜基地からそれなりに離れた東海地方の某所にて神宮司まりもはどこか感心したような口調でモニターに映る光景を見ていた。

現在彼女たちがいるのは静岡県内に作られた穴を利用した仮拠点

「さて、こんな風に遊んでいる間に横浜基地はクライマックスを迎えているぜ？」

「っ!？」

「ああ、そういえばあそこにはお前が元の世界で一緒に過ごした者たちがいるんだよな？ 安心しろよ。すぐに会えるさ。どんな形になるかは分からないけどな」

モニターには第二防衛線に殺到するBETAを突撃砲で駆逐していくA-01部隊が映っているが膨大な数を前に劣勢であった。そして、そんな彼女たちに止めを刺すようにあ号標的はトランシーバーのようなものを取り出すと告げる。

「アイリスデイナー・ベルンハルト率いる第666戦術機中隊、そしてすべての戦術機級よ。横浜基地を無力化せよ！ 事前に伝えた通り一部の人間は極力捕縛。それ以外は全て潰せ！ ストックホルムでの実戦を中止にしたんだ。我らの切り札たるお前らを隠しておく必要もなくなった。さあ！ 思う存分暴れろ！」

絶望的な戦況にあらがう事さえさせない悪夢が今到来する。

第六十四話 「横浜基地防衛線3・破綻」

「ふ、副司令！ 西及び南から飛行する未確認物体の反応があります！」

その報告がピアティフ中尉より発せられたのはA―01部隊が攻撃して暫くたった頃だった。第二防衛線は辛うじて維持できている、斯衛軍が大暴れしていることもあって予想外にも順調に防衛が出来ていた時の事であった。

「反応から戦術機と思われませう！」

「……ついに来たわけね」

武から聞かされていたBETA側の戦術機。それがついに登場したという事だろう。戦局が安定した途端のこれである。夕呼を絶望させるには充分すぎた。

「ただでさえ敵の方が性能が上なのにA―01部隊と同じ中隊規模なんて……」

「そ、それが副司令……。確認できた数は200を超えています……」
そして、絶望はいつでも夕呼達人類の予想を簡単に超えてくる。武の報告から中隊規模である事は分かっていた。別にそれ以上の数がないとは限らないが武が2回目、3回目の世界で経験した事から大隊以上の数はいない可能性があった。

しかし、実際には違っていた。確かに戦術機はそれほど多くはない。実際のところ中隊規模しか保有していない。東ドイツやソ連の者たちを合わせれば大隊すら超える規模となるが今の手持ちはそれだけだ。

だが、BETAには戦術機級というBETA型の戦術機がある。さすがの武もそれらの存在は知らなかった。2回目はそもそも戦場において世界の様子など知らなかった。3回目は最後まで生き延びた武に警戒して戦術機級を温存し続けていたために知る機会がなかったのだ。

「200!?! 間違いじゃないの!?!」

「レーダーは全て正常です。確かに200機が……っ！ さらに10

0機の反応！ 計300機です！」

「……BETAは、すでに……」

たった一機の戦術機でさえ一国を落とせるポテンシャルを持つそれが300機。夕呼は地面がなくなり、底なしの穴に落ちていく感覚に襲われる。

「……伊隅たちに連絡して。300機以上のBETA側の戦術機が向かってきている。迎撃しなさい、と」

「……了解」

ピアティフ中尉もその指示が何を意味しているのかを理解しつつ命令を傳達する。たとえそれ以外の行動をしても300機という物量の前には意味をなさない。それだけの差が存在していた。

「……仕方ないわね」

夕呼は指示を終えると基地司令であるパウル・ラダビノット准将に向き直った。

「司令。国連に連絡をして下さい。もし、大勢が決したと判断した場合には容赦なくG弾を投下してくれて構わないと」

「……いいのかね？」

「ええ、残念ですがそれがBETAに対して最も効果的な一撃を与えられる方法です」

夕呼としても苦渋の決断であり、本来であれば行いたくはない一手だった。しかし、すでにそれ以外に有効打を与えられないのも事実。こうしている間にもBETAは次々と上陸し、横浜基地に殺到してきている。第二防衛線が破られ、最終防衛線まで到達するのは時間の問題だった。

「……了解した。すぐに連絡を行おう」

「ありがとうございます」

「構わない。私としてもこのままいいようにやられてしまうわけにはいかないからな」

ラダビノット基地司令もまた、オルタネイティブ4の終焉を感じつつもBETAに一矢報いるために行動を開始するのだった。

レーザー照射が当たったらしい涼宮茜が機体から煙を吹いて墜落していく。助けようにも伊隅達にはレーザー照射が降り注いでいる。漆黒の戦術機は当てる気がないのか態と躲せる位置に放っているために気を抜くこともよそ見をする暇もなかった。

「圧倒的強者の余裕というやつか？ だったら！」

そんな傲慢ともとれる漆黒の戦術機に一泡吹かせようと突撃砲を放つ。今度は弾かれる装甲ではなく照射粘膜に攻撃を絞る事でレーザー照射出来る数を確実に減らしていった。しかし、所詮は遊ばれていた状態での優勢である。伊隅が照射粘膜への攻撃を始めると報復と言わんばかりにA-01部隊の機体に命中させていく。それすらも狙われるのは跳躍ユニットや脚部などの移動手段ばかりである。

「(殺さずに生け捕りにするつもりか?)」

敵とさえ認識されているのか分からなくなってきたがそれでも伊隅はあきらめずに戦い続ける。既に陣形はないに等しい。というよりも漆黒の戦術機が跳躍ユニットなどを攻撃し始めてから僅か一分足らずで伊隅以外は全て撃墜されている。その伊隅も技量や運で生き延びているというよりも生かされているといった具合が強かった。

「一体何が……」

『貴様か。戦術機部隊の隊長は』

「っ!?!」

伊隅の前に出てきた一機の機体。そこに乗っているだろう衛士が発した言葉に伊隅は警戒を強める。態々このタイミングで出てきた以上何かしらの目的があるのは明白だった。

『そう警戒する必要はない。私はただ貴様と戦ってみたくなっただけだ』

「なんだと……?」

『あいにく私の相手はこいつらばかりでな。経験を積もうにも積みめない状況にあったんだ』

「……つまり経験を積むために私を生かしたと」

『その通りだ。では、悪いが貴様に拒否権はない。さっさと始めさせてもらおう』

そういうが否や目の前の機体は瞬時に伊隅の前に躍り出ると手にした双剣を振るってくる。それを辛うじて回避する伊隅だが機体の性能差から完全には躲しきれずに一部損傷を負ってしまう。

「くっ！」

『おっと……』

近づくなと言わんばかりに突撃砲を放てば漆黒の戦術機は照準すらできないほどの速度で以て離脱する。

『なるほど。機体性能に差があるが技量は互角と言ったところか』

「生憎私としてはうれしくないね！ 長年戦ってきた私と互角なんて！」

伊隅としても長年衛士として戦ってきたという自負がある。それをBETAごときに抜かされるわけにはいかない。そういう思いを込めて突撃砲を放つ。回避行動すら予測したうえでばらまくように放ったそれらは人類の戦術機であれば完全に避けきる事は出来ない弾幕となって漆黒の戦術機に襲い掛かった。

『そうか。だが私は20年以上戦術機に乗っているんだ。むしろそんな私と互角のお前に驚嘆しているよ』

「なっ!？」

漆黒の戦術機は跳躍ユニットを吹かし、弾幕の中を突っ込み瞬きの間に伊隅に接近した。一発の銃弾にも当たらずに。そして、両腕の双剣を振り上げ、伊隅の機体の両腕を落とすと今度は横なぎに払い下半身と頭部を切り落とした。

『安心しろ。お前たちのような見目麗しい優秀な衛士を殺そうとは思っていない。……経験したからこそ分かるがせめて抵抗しないことだ。それが賢明な判断となる』

漆黒の戦術機、それに乗るアイリスディーナ・ベルンハルトは落下していく伊隅に同情的な視線を向けた後横浜基地を陥落させるべく戦術機級を引き連れてそちらに向かっていくのだった。

第六十五話 「横浜基地防衛線4・絶望の光」

A-01部隊を全機撃墜したアイリスディーナは300機もの戦術機級を引き連れて横浜基地を強襲した。既にまともな防衛戦力が残されていない横浜基地の上空に到達すると一斉にレーザー照射を開始。基地の表層部の破壊を開始した。

「1号機から50号機は野砲陣地を、51から100号機は訓練校などの建造物。101から150号機は滑走路だ。残りは半分を突撃班、もう半分を護衛組としてそれぞれ待機。次の指示を待て」

アイリスディーナの無慈悲とも言える命令によって横浜基地は表層部を次々と破壊されていく。レーザー照射の中には重レーザー級のレーザー照射も混じっており、爆発に加えて融解まで起こる地獄絵図となっていた。

『表層部、破壊、完了』

「よし。では突入の前に要塞級による溶解液の投入を行う。敵の反撃に注意しろ」

あ号標的と違い、アイリスディーナに油断や慢心はない。常に敵が思いもしない反撃をしてくる可能性を考慮して慎重すぎるとも言える手で確実に追い詰めていく。

要塞級による溶解液の投入が開始された。横浜基地の地下に通ずる3つのゲートすべてに同時投入されたそれらによって中から多数の人間の悲鳴が聞こえてくる。更には酸が生み出すガスに回避できずた者も呼吸困難に陥り倒れていく。

「まだだ。後5分間投入した後には戦術機級による突入を開始する。……！ 全機回避軌道！」

最初の要塞級が溶解液を出し終え、次の要塞級に交代しようとした時だった。要塞級に突撃砲の粘着榴弾が突き刺さり、破裂した。それが起こる少し前にレーザーの反応を見つけたアイリスディーナは回避行動の指示を出した。

『これ以上好きにはさせない！』

「まだ残っていたか……！」

ゲートより飛び出してきたのは武も所属していた207B小隊の面々だった。冥夜を先頭に300機もの戦術機級の群れに突っ込むあたり冷静さを欠いているように見受けられた。

「あまりの惨状に我を忘れて飛び出してきたか？ だったら……！）先頭のやつは私が相手をする。残りはA―01部隊と違い即座に落とせ。ただし極力傷つけないようにせよ」

アイリスデイナーは双剣を両手に持ち冥夜に突撃する。飛び上がる形の冥夜と違い落下するアイリスデイナーはその相乗効果を利用して最大の一撃を冥夜に叩きつける。

『くっ!?!』

「剣に自信があるようだがまだまだだな」

冥夜は長刀でガードを行おうとするが長刀は触れた箇所から切断されてしまう。しかし、威力を軽減する事は出来たらしく双剣は冥夜の機体の両肩に叩きつけられたが切断するには至らずに機体を地面にたたきつける形となった。

「ほら、見る。貴様が一人飛び出たために残りの仲間が落とされていくぞ」

『っ!』

アイリスデイナーがいうように他の者たちはレーザー照射を受けて跳躍ユニットを破壊、さらには起き上がれないように両手両足を破壊され完全に達磨の状態で地面に転がっていた。一矢報いる事さえできないまさに瞬殺であった。

「確かにあのまま要塞級の溶解液を投入されていれば戦う事も出来なかっただろう。だが結果として貴様たちは戦術機という特大の戦力を失う結果となった。愚かだな」

『っ! お前たちBETAに言われる筋合いなどない!』

「……話しても無駄なようだな」

もとより人類が素の状態でBETAと分かりあうことなど不可能だ。それだけBETAは人類に対してヘイトを稼ぎすぎたし態々BETAも人類と分かり合う必要はない。

「さて、思わぬ邪魔が入ったがさっさと横浜基地の制圧に移ろう。要

塞級は予定通り溶解液を投入せよ。……ん？」

ふと、レーダーに高速で接近してくる反応があった。それらが来た方角から最前線でBETAを食い止めていた斯衛軍が戻ってきたものと思われた。

「やはり来るか。225から300号機、予定通り護衛としての役目を果たせ。破壊する必要はない。横浜基地に近づけさせなければいい」

アイリスデイーナの指示を受けて75機の戦術機級が飛び立つ。本来、大隊規模の30機ですら大規模と称される中で75機もの戦術機は異常とも言える数である。それらが人類屈指の精鋭たる斯衛軍に殺到するのだ。ただでさえ消耗しているなかでのそれは確実に斯衛軍をすりつぶす事になるだろう。

「(想定したが少し時間を取られてしまっている。……これ以上人類に反撃する時間を与える必要はないな)溶解液投入後は戦車級を先頭に物量で以て制圧をする。大通りは要撃級、突撃級が制圧し細かいところは戦車級と闘士級が対応せよ」

横浜基地の構造はスパイである神宮司まりもによって詳細に報告されている。ゆえに溶解液によってゲート付近の防衛能力を失った横浜基地を直実に制圧していく。人類側も銃火器を片手に抵抗していくが闘士級ならともかく要撃級や突撃級、それどころか戦車級ですら人類が携帯出来る武器では殺すには至らず、次々と食い殺されていく。

「メインシャフトは確保。反応炉までの道は抵抗なし。……残った敵は司令部に固まっているというわけか」

実際、その周辺だけ異様に戦力が集中していた。戦車級がギリギリ通れる程度の通路でしかないために闘士級の特徴たる速度を生かした接近は難しく、戦車級は倒されればそのまま道をふさぎかねなかった。

「仕方ない。闘士級を大量に投入するか直上から溶解液で道を作るしかないな。……しかし、何故ここまで抵抗する？ 戦況は既に詰んでいる。なのにいまだに抵抗をし続ける。自害している者もいない。

まるで、何かが来るまで我らを引き付けるかのよう……っ！」

そこまで考えてアイリスディーナは最悪の想定にたどり着いた。人類はまだBETAを駆逐できる超兵器を有しているのだ。そして、すでに助かる術のない自分たちを囷にしてBETAに一泡吹かせようとしてもおかしくはない。

「緊急事態だ！ 人類がこの横浜基地にG弾を投下する恐れがある！ 戦術機級はすぐに退避！ BETAも要塞級やレーザー級を中心に後退せよ！」

「……その必要はない。」

「っ!」

アイリスディーナが被害を抑えるべく行動しようとした時、脳内に直接あ号標的の言葉が聞こえてきた。

「G弾を投下してくる可能性は既に想定済みだ。横浜基地がG弾の投下を要請したことも送信先の人間級から情報を得ていて対処済みだ。現在存在するすべてのG弾発射基地に襲撃を仕掛けている。」

「……制圧したと？」

「残念ながら3か所だけ失敗した。とは言えG弾を1発ずつ発射されただけでその後には制圧した。これで人類はG弾という切り札さえ失ったのだ。」

「ですが3発は発射されたのは事実ですよね？」

「だからこそこちらも迎撃に出た。目には目を歯には歯を、ってね。だから万が一に備えつつそのまま横浜基地の制圧を続ける。」

「了解」

すでに手を打っているというのならアイリスディーナがする事はただ一つだ。これまで通りに制圧作業を続ける事だ。

やがて、はるか上空に輝く3つの光が現れるが、それらに別の3つの光が接近、接触した。瞬間、横浜基地周辺の大地を光が照らしだした。その光は本来横浜を吹き飛ばすものであったが見る者からすればそれらは最悪の結果で終わったことを意味していた。

一時間後、司令部の完全制圧を以て横浜基地は陥落した。逃げられた者は事前に避難した者以外におらず、香月夕呼を始めとする一部の

者とA―01部隊、そして207B小隊の面々のみがBETAに捕縛される結果で終わった。

横浜基地陥落より半日後、BETAは北進を開始。帝都を含む関東圏のほぼ大半を手中に抑め、日本帝国は事実上壊滅した。

第六十六話 「香月夕呼」

12月10日。日本帝国という国は事実上消滅した。12月6日に帝都東京、12月7日に仙台。そして今朝札幌が陥落したこととでそこに避難していた日本帝国の官僚がほぼ全滅したのだ。政府機能は消滅し、日本帝国の象徴たる将軍も東京を陥落させたときに確保した。

世界全体で見れば大崩壊が始まり、アメリカはソ連と東ドイツ、中華帝国によってズタズタ。南米では人間級による暴動やクーデターで機能不全に陥っている。欧州ではイギリスに四方八方から上陸して沿岸防衛を行えないようにしている。フランスはほぼ完全制圧し、今はピレネー山脈を盾に抵抗を続けるスペインに止めを刺すべく大量のBETAを繰り出しているところだ。それとストックホルムは今も頑強に抵抗を続けているがこの調子なら後一週間もしないうちに全滅させられるだろう。

これらが終わればいよいよ総仕上げとしてアフリカを落とす。その前に中東の対処が必要になるだろうがアラビア半島以外はほぼ喪失した彼らだ。アフリカと同じように総仕上げの対象にして問題はない。

「さて、こうして会うのは初めてだな。白銀武。そして香月夕呼先生」
「……BETAに先生なんて言われてもうれしくはないわね」

「そうか？ そのうち気にならなくなるさ」

俺は長年愛用し続けている中国人の体で香月夕呼や白銀武と相對している。俺たちが今いるのはカシュガルハイヴ。生き残りを輸送するのに5日もかかってしまったよ。ちなみに香月夕呼達以外にもA-01部隊の皆さんに白銀武の愉快的仲間たちもいる。全員が拘束され、口以外動かせない状態にされている。周りには武装したシュタージにアイリスディーナなど白兵戦が出来る者たちが待機している。それらがやられても俺ごとBETAが全員を踏みつぶす手筈になっっているから暴れられても問題は無い。精々が新しい体を用意しないと行けなくてめんどくさいといったところだな。

「君たちはオルタネイティブ4？ とか言う計画で俺とコミュニケーションを取ろうとしていたみたいだけどよかったじゃないか。計画を立てなくてもこうして話す事が出来ているぞ？ 感想はどうだ？」
「まあ、予想はしていたわよ。ぶっちゃけ、あなたはあたし^{人類}たちにくわしすぎたわ。で？ いつから人類の情報を得たのかしら？」
「んー？ 最初からだけど？」

香月夕呼、主人公にちなんで夕呼先生と呼ぶか。夕呼先生には普通に話す。下手に誤魔化してもバレそうなくらい頭が良いしどうせ改造するんだから言っても問題はない。というか人類は2002年内には滅びるだろう。

「……あたしは何時からと聞いたわけだけど？」

「だから最初からさ。俺がこうして誕生した時には人類の情報を持っていたし何ならその一人だったさ」

「っ！ まさかあなたも!？」

そこで黙っていた伊隅……、なんたらが話しかけてきた。まあ、間違っているが正常な思考ならそうなるであろうという答えではあるな。むしろ何かを察したらしい夕呼先生が異常なだけだ。

「……そう。なら聞かせてくれない？ どうやったのかは知らないけど同族をここまで追い詰めた感想を」

「……ふ」

ああ、やっぱり怖いなあ。この人がもし軍事方面に知識を持っていたら俺も危なかったかもしれない。そっち方面がてんでだめだったからこそここまで完勝できたんだな。そしてこいつを手に入れる事が出来れば俺たちは更に飛躍できる。それが確信できた。

「？ 副司令一体どういう……」

「こいつはもとは人間だったという事よ。とは言えBETAという存在を作ったのかもとから存在したBETAになったのかは分からないけどね」

「さすがは夕呼先生。お察しの通り俺はもとは人間だったさ。感想を言うのなら意外とうまくいくもんだなって感じた。俺としてはもっと苦戦するか駆逐されるもんだと思っていたけどな」

実際、初期のころに人類が一丸となっていれば俺は負けていたかもしれない。ただでさえ初期のころにソ連にハイヴ内への侵入を許してしまっているんだ。あっけなくやられていた可能性が高いだろう。「ツ！ そんな！ 元は人間だったのにこんな惨状を引き起こしたというのか!?!」

「確かにそうだがここまで状況を悪化させたのはお前たちさ。おつと、人間なのにこんな酷いことを！ なんていうなよ？ 全員が全員俺のような行動をしないわけじゃないんだ。むしろ俺は優しい方だぞ。態々こうして一部の人間は生かしているんだから」

そう、人類はもつと俺に感謝してもいいくらいだ。本来、BETAは炭素より生まれた生物を生命体として認識しない。だから容赦なく殺すが俺は違う。元が人間だからこうして生かすこともあるんだ。「そんな生かさされた人間となつたお前たちはもつと俺に感謝して自分の幸運を喜ぶべきだ」

「そんな事……!」

「別にどう思おうと勝手だけどな。どうせそうやって反抗できるのも今のうちなんだから」

「あら？ あたしたちを洗脳でも出来る装置を持っているという事かしら？ それを使って周りの人間を洗脳したと？」

お、やはり夕呼先生は頭がいい。いや、この場合は察しが良いというべきか。

「その通り、と言いたいところだがその武装したシユタージの面々は違う。俺が人間の遺伝子から作り上げたBETAだよ。人間級、と俺たちは呼んでいる」

「！ あなたはそこまで……! それにシユタージって事は完成させたのは東ドイツ陥落した18年前からかしら？」

「……そこまで言い当てられると俺も怖くなってくるよ。そうさ。18年前には俺は技術を完成させて人類に潜ませていたよ。東ドイツはたまたまシユタージの権力者と接触できたからスムーズに潜り込ませられたけどな」

「という事は今の東ドイツはBETAの手先ってわけね。……もしか

して海王星作戦の英雄もあなたの?」

「あれは俺が作った人間級の中でも最高傑作でね。18年分の経験はとても役にたっているよ」

海王星作戦の英雄という事もあってアルフレートは何かと一目置かれる存在になっていった。だからソ連の作戦は筒抜けに出来たし情報面で融通してもらえることも多かった。英雄を作り出せた事はあつちで動いていた時の最大の功績と言っいいいな。

「さて、そろそろ話も終わりにしようか。話は改造を終えた後になんぼでも付き合っつてやるからな」

「……それじゃ最後にいいかしら?」

「ん? なんだ?」

「あなたは人類を滅ぼしてどうしたいの? 人類は既に詰んでいるわ。おそらく半年後にはほぼすべての大地がBETAで埋め尽くされているはずよ。そんな世界にしてあなたは何を望むの?」

「……」

何を望むか、か……。それは俺にも分からない。ぶっちゃけ神様に転生させられてからBETAの使命らしきものに従ってここまで来たからな。だけど俺がこれまでやってきたことを言い換えていうのならこう答えるべきだろうな。

「簡単さ。俺は開拓をしているだけだ。それが終わればスロライフでも送るさ。幸いにも夕呼先生、あなたという人類での最高の頭脳が手に入ったんだ。これからはいろいろと助けてもらうさ。連れていけ」

俺の言葉を聞きシクターに連れていかれる夕呼先生たち。白銀武はまりもちやんの体で心を極限までぶっ壊したしA-01部隊を手に入れた事で純粋な戦力アップとなる。まだこの世界をループさせるにはやりたいことというより終わらせたくはないという気持ち強い。精々白銀武が死ぬ時まで満足できるようにいっぱい遊ばないかね!

最終話 「大崩壊・終焉の日」

2002年7月。本格的に夏が到来するこの時期にようやくカシユガルハイヴ地下の大都市の開発に成功した。将来的に地球から酸素と大気がなくなり人間が住む事が出来ない環境になる事を想定して建設していたがついに完成したのだ。大気と酸素が常に供給され、人間が過ごしやすい環境にしてある。これはこのカシユガルハイヴ以外にもいくつも建造されており、いずれは1億人くらいは余裕で済める状態にまでもっていかうと思っている。

「夕呼先生。新たな研究室は気に入ってくれたか？」

「ええ。そうね。あたしとしては悪い点を探すのが難しいくらい完璧ね」

大都市の一等地には俺やアイリスディーナ達の住居が並んでいるがその中で唯一住居以外の建造物が建っている。それは夕呼先生の研究室で、前々から希望を出されていたからこの機に作ってみたわけだ。夕呼先生は研究者なだけあって研究しているのが好きみたいだしこれからは思う存分研究に没頭してもらうつもりだ。

「それにしても酸素や大気まで作り出すなんてあなたは何を目指しているのやら」

「そうでもない俺はともかくアイリスディーナ達が生きている事は無理だろう？ あれでも人間と変わらないんだから」

「その辺も改造してあげればいいのに。態々人間の状態を保持するなんてあなたも物好きね」

確かに夕呼先生のいう通りだ。BETAである以上人の形は保つても中身まで同じにする必要はない。むしろBETAのようにどんな環境でも動ける肉体にするべきなのかもしれないが俺としてはそこまでするつもりはない。

「こう見えても人間よりも頑丈で多少の悪環境には耐えられる肉体にしているんだ。まあ、態々人間に近づけているのは人間だった頃が忘れられないかもしれないな」

この身だけではなく精神まで俺はBETAに汚染されている。人

間が食い殺されても何とも思わないしむしろ人間を生命体として認識できなくなってきた。そのうち夕呼先生たちを認識する事も出来なくなるかもしれない。それもあつて人間に近づけておくことで人間のころの様子を保持しておきたいと思っている。

「態々不完全な状態にすることで自我を保つ。あなたもどうやら人間としての意識が残っているようね」

「それはないさ。現に俺は人類を滅ぼしたんだから」

2002年1月1日、欧州完全陥落。1月10日、アメリカ崩壊。2月5日、南米確保。2月24日、北アフリカ上陸。翌日スエズ運河制圧。3月10日、北米完全制圧。4月1日、アフリカ南部を残したすべての大地を制圧。そして5月10日、アフリカ南部陥落。この日をもって俺が確保した個体以外のすべての人類は絶滅。地球はBETAの星となった。

6月からは各地にハイヴを建設しまくりハイヴ数は2001年までと比べて倍以上に増えている。いずれ地下を通じてすべてのハイヴが繋がり、地球は中身がスカスカな死の星となるだろう。

「結果的に生き残ったのは僅か1000万ほど。それも大半が繁殖場のやつか。つまり人類はBETAによって家畜となったわけだ。アイリスデイナー達はさしずめ牧羊犬と言ったところだな」

「それならあたしはどう言う立ち位置になるのかしら？」

「知るか。たとえばでしかないんだ。態々掘り下げられても答えられねえよ」

ただでさえ地頭では夕呼先生の方が上なんだ。理論的な話では絶対に勝てない相手だ。だが、そんな夕呼先生も改造済みであるために反抗する事はない。そういう意思は思えば思う程消えていくんだ。だから最終的にはもとから反抗の意思が薄いやつが一番反抗的な心を持つている。そんな皮肉とも言える状態に陥るわけだ。

夕呼先生やA-01部隊はまさにそうなっている。彼女たちは人類の事は路肩の石程度にしか既に感じていない。BETAに親近感と愛情を持ち、それに対して疑問を持たない。アイリスデイナー達が辿ってきた状況となっているわけだ。

「そういえばあなたが作り上げた中華帝国、大規模な間引きをしたそうね」

「そうだ。さすがに人口の3割くらいは普通の人間だったからな。抵抗しなければ？ 殖場に、抵抗すれば殺して資源にしたさ」

数年のうちに地球上から大気と酸素は消え失せる。既にその兆候が出始めているんだ。そのために俺が駒としたソ連や東ドイツ、中華帝国の人間をハイヴ内の都市に移住させようとしたわけだが中華帝国にはいまだに何も知らないやつらが大勢いた。だからそいつらの間引きという形で処理した。

「間引きは完了したし今はこの地下都市に人類を移送中だ。今はゴーストタウンと化しているこの都市もいずれ規模に相応しい喧騒に包まれるだろうさ」

すべてが改造したか人間級だからと言って人間らしい生活をしていないわけではないんだ。特に問題もないしそのまま人間らしい生活をさせるつもりだ。

「それじゃ俺はそろそろ他の所を見てくるか」

「あらそう？ ならあたしはこのままここにいるわ。今まで仕事だった分いろいろと研究したいこととかあるから」

夕呼先生と別れて俺は次に向かう。向かった先は京都防衛戦でゲットした篁唯依が住む日本家屋だ。かなりの豪邸と言える様相となっているが唯依の話によると実家と同じという事らしいからさすがは武家の家系と感心したなあ。

「唯依姫いるか？」

門をくぐり玄関にやってきたが返事はない。まあ、ここまででかいと声だけでは届かない場所もある。今唯依がいるであろう道場もその一つだ。唯依は予定がない時は冥夜達と一緒に稽古をしている事が多い。人間の時よりも無茶が効く体になったから鍛えがいがあると言っていたっけな。

道場に顔を出せば唯依のほかに冥夜を始めとする207B小隊の面々がいた。正確には唯依と同じ衛士学校に通っていた者たちもある。今日は初めて見る大所帯だ。

「あれ？　どうかしましたか？」

「いや、単純に顔を見にきただけだ。それにしても今日は何時もより多く集まっているな」

「ええ、唯依殿の道場は広く、使いやすいので今日はとことん訓練するために集まったんです」

「私はともかくたまは完全に巻き込まれた形になるけどね」

千鶴の言葉通りなのだろう。彼女の隣でたまと呼ばれた少女がくたばっている。きつとしごかれたんだろう。こんな彼女が狙撃の腕ではこの中でトップというのが何とも言えないがな。

「あなたもどうですか？　一緒に汗を流しませんか？」

「遠慮しておくよ。この体は特殊性で鍛える事が出来ないしその必要がない物だからな」

俺が使う事を前提としているために人間らしい機能はない。だから汗を流して体を鍛える必要はないし出来ない。メンテナンスをすればそれに比例する事がすぐに完了できるしな。

「んじや俺は行くわ。訓練も良いが程ほどにな」

「わかりました。では折り返しとして今までにやったことをもう一度やったら今日は終わりにします」

冥夜がそういった瞬間にたまの悲鳴が聞こえてきたがまあ大丈夫だろう。きつと死ぬことはないだろう。それよりもつらい目にあいそうではあるがな。

さて、次はどうしようか。この後に回る予定だった面々がみんないたしまわる予定がなかった伊隅姉妹の所に行くか。

「よう。伊隅シスターズ。相変わらず元気そうだな」

「そっちこそな」

とある一軒家に来れば伊隅四姉妹がそろっていた。A-01部隊の隊長である伊隅みちるを改造後、彼女に懇願されて四姉妹を回収する事になった。まあ、四女がまさに食い殺される寸前だったから少しでも遅ければ3姉妹となっていただろうが何とか回収できた。んで全員改造して以降はこうして4姉妹で穏やかに過ごす事が増えているようだ。長女以外は軍人であるために常に臨戦態勢であったこと

の反動かな。残念ながら4姉妹の思い人は食い殺された後だったからあきらめてもらおうしかないがその辺は後に引かないように改造済みだ。場合によっては忘れさせてもいいかもしれないな。

「ん？ 何してんだ？」

「見ての通りカードゲームだ。あんたが作ったやつの一つだよ」

「……あー、それかあ」

伊隅4姉妹はテーブルを囲んでカードゲームをしていたがやっている物が微妙過ぎた。何しろやっているのは友情破壊ゲームの異名を持ったカードゲームだからなあ。あれをやるとマジで信用って言葉が無価値に思えてくる。

「あー、まあ。程ほどにな」

「わかってている。……あきら、これはねずみだ」

「本当？ 信じるよ？」

「姉を信用できないか？」

「わかった……」

あーあ。後ろから絶叫が聞こえてくるからきつと騙されたんだろう。4姉妹の絆にひびが入らないことを祈るか。

「……む」

「……お」

次はどうするかと考えながら歩いていたらアイリスディーナと遭遇した。東ドイツの軍服を着ているという事は戦術機に乗っていたわけではなさそうだな。

「見回りか？」

「そうだな。夕呼先生とか唯依とか伊隅4姉妹の所を見てきた。新しい家には慣れたようだし作った甲斐があったというものだ」

「それはよかったな」

そういう会話をしながら俺とアイリスディーナは歩く。碁盤の目になるように作ったこの町は道が直線状にずっと続いている。そんな道を歩いているとふとアイリスディーナが話し始めた。

「……正直に言っただ改造された当初はこうなるとは思っていなかった。正確にはこうなっては欲しくはなかった」

「……BETAが駆逐されることを望んでいたと？」

「ああ。そうだ。その時はまだ私にも人類を思う気持ちがあったのだろう。そんなもの、今では欠片も残っていないがな」

「それはそうだ。そうなるように改造したんだから」

思えば思う程それがどうでもいい存在となる。改造した者たちに共通する事項だ。

「だからこそ私は今この状況に満足してしまっている。ふふ、祖国を守るために戦っていた私も堕ちたものだな」

「そんなことを言うのなら俺はBETAとなつて積極的に人類を駆逐し始めた最悪の裏切り者さ。気にするだけ無意味な事だ」

そう、すでに人類は滅びたんだ。である以上そんなことを考えるよりもこれからを考えるべきだろう。

「アイリスデイナー・ベルンハルト。人類は滅びたがだからと言ってお前の役目は変わる事はないんだ。これから戦術機部隊の長としての活躍を期待しているぞ」

「ふ、一体何と戦わせようとしているのかは分からないが精々期待以上の活躍を見せてやろう」

「ああ、期待しているよ。……さあ、次の楽しみを探しに行くとするか」

俺はそう言つて嗤つた。

外伝1「GATE BETA かの地にて斯く蹂躪せり」

第一話「GATE」

2002年の夏を迎えることなく人類は滅んだ。そしてそこからBETAによる地表の採掘がはじまった。G元素というBETAを構成する物質に変換され無数のBETAを生み出す材料となっていく。

その結果、2015年を迎えた地球は大気がなくなり、海は完全に蒸発した死の星と化した。全ての生命は息絶えスーパフラットとなった地球の上をBETAが闊歩する地獄のような場所となった。

しかし、それはあくまで地表部の話である。BETAによって確保された人類は二つのルートに分かれて生存を許された。

一つは？殖場と呼ばれる場所で子供を産む家畜となるルートである。誕生した赤子はG元素の予備という扱いで大人になるまで育てられるが知識は不要とただ生かされた状態で成長を遂げる事になりまともな思考すら持たず生きる人形となっている。そして、この繁殖場では子供を産めない女性や種がない男性は即座にG元素に変えられる。ただ子供を作るために生かされている彼らはそれが出来なければ不要と判断されるからである。

二つ目は脳を改造される事で人類を裏切り偽りの平和を享受できるルートである。こちらは人類への思いが強ければ強い程その感情が消えていくせいで大半のものが人類を路肩の石粒程度の認識しか感じ取れないようになっていく。

地球にはこれらの人類を収容する繁殖場と大都市がハイヴの下にいくつも存在している。その中でもオリジナルハイヴと呼ばれるカシガルハイヴは尤も巨大な都市であり、人口も100万を超えている。また、アイリスディーナ・ベルンハルトや篁唯依、伊隅みちると言ったBETAが作り上げた戦術機を駆る衛士のすべてが集まって

いる最重要都市となっていた。

「いやー。あれから10年以上経ったがここもにぎやかになったなー」

あ号標的は人で溢れかえる都市を見て自然とそう呟いていた。彼は都市の一角に設けられた小高い丘の公園のベンチに座っていた。最近では暇な時間が増えてきたためかこうして都市を眺める時間が増えてきていた。

人間を滅亡させる経緯が生きる理由となっていた節があり、あ号標的は一種の燃え尽き症候群に陥っている状態となっていた。彼の熱意が復活する事があるとすれば再び人類を滅ぼすような大きな出来事でもない限りありえないだろう。

「ここにいましたか？」

「アイリスデイナーか。どうかしたか？」

「開発に関する報告書に目を通してください。昨日から見えていないでしょう？」

「んー。その辺に置いておいてくれ」

アイリスデイナーの呆れを含んだ声に対してやる気のない声で返事をする。アイリスデイナーから見えるあ号標的は長年の仕事を生きたがいとしていた老後を迎えた老人のようにすら見えてきた。それだけ今のあ号標的の燃えつき具合は酷かった。

「……少しはやる気を見せてはいかがですか？ 貴方の専用機は試験運転をする段階で止まり、*“プロジェクト・機龍”*に至っては設計図の段階で止まっています。これらは貴方が号令を出すだけですぐにでも完成する状態にあるのですよ？」

「でもそれを完成させてしまえばさらにやる事はなくなるよ？ 俺としてもいつまでもここまで暇な状態にいるのは辛いし……」

そう、あ号標的は開発中の二つの機体を完成させてしまえば本格的にやる事がなくなる。そうなれば今以上に暇を持って余す事は確実であり、ただ生きていくだけの人形へとなり下がるだろう。

「……」

「せめて何か面白い事でもあればいいんだけどさ。こども自己完結し

ているとそんなことも……ん?」

ふと、その反応に気付いた。本来ならこの空間はBETAの反応で溢れている。人間級が都市の人口の大半をなしているからであるがアイリスディーナや伊隅達もBETAとして認識できるようにしてある。でないとな能を持たない普通のBETAはアイリスディーナ達を襲いかねないからだ。そしてそれに加えてアイリスディーナなどの指揮をする者には上位者としての権限を渡している。これでBETAを自由に動かすことが出来るようになっていいるのだ。

「? どうしかしたか?」

「……いや、なに。久しぶりに面白い者が見れそう。いや、出来そう。アイリスディーナ、急いで戦術機に乗って今から言う場所に向かってくれ。それで全てが理解できるよ」

そう命令を出すあ号標的の表情は10年以上見る事のなかった心の底からの笑みと楽しみという感情で溢れていた。何しろこのBETAだらけの空間に人間の反応が複数現れたのだから。

それが現れた時、付近の人間級は呆然と眺めていた。都市を十字に分断するように走る道路の中心部、つまり都市の中央に突如としてローマ建築風の門が出現したからだ。摩天楼がそびえたち、現代建築しかないこの空間においてそれはあまりにも浮いていたし突如として現れたそれはまるで魔法のようにすら思えた。

「これは一体……」

そうつぶやいた壮年の男性の上を、影が通り過ぎた。上空を見れば文字通りの竜騎兵ドラグーンが空を飛んでいた。それも一騎だけではなく何騎も。

「なっ!」

そして、次いで現れたのは無数の矢。それらは呆然と眺める人間級に次々と突き刺さり赤い血だまりを起こしていく。

「っ! 回避! この場を離れろ!」

男がそう叫ぶのと門より異形の怪物や騎兵が飛び出してきたのは同時だった。門の付近にいた人間級は次々と切り殺され、潰され、死んでいく。慌てて逃げ出し始めるがそもそも人間級は一般的な人間と大差はない。ゆえに騎兵という足の速いそれらから逃げ切るのは不可能であり次々と犠牲になっていく。

「急ぎあの方に報告をしろ！ それと戦術機か戦術機級の出勤要請！」

人間級が住まうこの都市が形成されているホールにBETAは入ってこれない。そもそも彼らが闊歩すれば都市は瞬く間に荒廃してしまうために入り口まで来れても入る事は出来ない。たとえ闘士級であろうともそれは厳命されていた。ゆえにこの場合は戦術機等を用いるしかない。人間級を用いた軍隊など必要なかつたら存在しないのだから。

「蛮族どもよ！ よく聞かすよ！ 我が帝国は第一皇子ゾルザル・エル・カエサルの名においてこの地の征服と領有を宣言する！」

敵の指揮官らしき者がその声を張り上げて一方的な征服宣言を出した。彼の隣には人間級の死体の山が築かれ、その頂上に敵、帝国の国旗が高々と掲げられていた。

「さあ！ 帝国の将兵たちよ！ 我ら帝国の力を蛮族どもに教えてやるのだ！」

指揮官が愉悦交じりの声でそう叫んだ時だった。頭上を飛んでいたドラグリーンが突如としてはじけ飛ぶ。それも一騎ではなく何騎にもわたって。

「なっ!? 何が……!?」

突然の事で困惑する指揮官は上空を見上げてそれに気づいた。全てを飲み込んでしまいそうな黒い巨人が空を飛んでいた。手にはクロスボウのような物が握られ、それらがありえない連射速度でドラグリーンを肉片へと変えていた。

「やつらは一体……!」

指揮官は空飛ぶ巨人の出現で固まる。そしてその時に発した言葉が彼の最後の言葉となった。ドラグリーンを全騎撃墜した巨人、戦術機

第二話 「異世界へ」

「つまり、あの門の向こうには別世界が広がっているという事だな？」
10年ぶりに感じる興奮を抑えつつ俺はアイリスディーナに問いかける。あの襲撃から二日が経過し、漸く状況整理がついたところだ。

「はい。闘士級を複数体と人間級数名を偵察に向かわせた結果、門の先は平原が広がっていたようです。こちらがその写真になります」

そう言つてアイリスディーナはモニターに写真を映し出す。あ、ちなみに俺たちがいるのは都市の地下に作つてある会議場だ。U字の形に並んだテーブルには俺やアイリスディーナの他に夕呼先生や伊隅みちる、篁唯依などの主要メンバーが参加しているよ。

んで、写真だが確かに平原だ。向こうは昼らしく降り注ぐ太陽光に一面に渡り生い茂る野草。歩きづらそうな山や丘など地球では見られなくなつた自然の姿がそこにはあつた。

「見る限りこの世界ではなさそうだな。で？ 襲撃者に関して情報は？」

「今は急ピッチで翻訳作業を進めているところよ」

俺の質問に答えたのは夕呼先生だ。ぶっちゃけこの人のおかげでこの都市が機能していると言つても過言ではない程の成果を出している。今回の翻訳作業も夕呼先生に丸投げしてしまっているし。

「翻訳は4割が完了しているわ。ただ、向こうの固有言語らしい一部の単語の翻訳に手間取っているわ。それさえ完了すれば解析はほぼ出来たも同然なのだけど……」

「いやいや、たった二日で4割完了している時点でヤバイよ？ 俺だったら一月はもらわないと」

思い出すのは中国語を学ぼうとしていた時の事だ。あの時は会話を成り立たせるのに多くの中国人を犠牲にしたなあ。今となつては懐かしい日常の一コマだ。

「それで今の状態で得られた情報は

敵が帝国という国名である事

こちらには征服と侵略、後は略奪を目的にしている事
人間とは違う種族が存在する事

くらいかしらね。まあ、帝国の兵士たちの装備を見る限り火薬兵器
が登場する前、中世までの文明である可能性が高いわね」

「なるほどね……。異世界ファンタジーか」

「異世界ふあんたじー？」

ああ、そうか。夕呼先生たちこの世界の人間は知らないんだよな。
そもそもこの世界自体娯楽がほとんどないからサブカルチャーも発
展しなかったのか……。

「要は異世界、つまりこことは異なる世界という事だ。はっきり言お
う。異世界を俺たちの常識で当てはめるのはやめておけ」

「それほどまでに危険なんですか？」

「危険というよりは何が起こってもおかしくはないんだ。それこそB
ETAを超える力を持つ者がいるかもしれないしな」

自分としては某宇宙人による格闘漫画のようなヤバイ奴らがうよ
うよいる世界ではないことを祈りたい。あんなのが大量にいてはB
ETAなんて物量という強みが無効化されてしまうからな。

「……だが、少なくとも門周辺にいるのは帝国で確定している。そし
て帝国は圧倒的に技術力で劣っているくせに俺たちに襲撃を仕掛け
てきた。……態々こちらから手を引いてやる必要はないよな？」

やられたらやり返す。俺たちに手を出したことを後悔させてやる。
だが、別に怒っているわけではない。久しぶりの興奮を覚えるような
出来事を提供してくれたあいつらには感謝しているんだ。是非とも
最後の一滴まで搾り取って楽しみたいところだ。

「それではすぐにも異世界へとBETAを派遣しよう。残念ながら
要塞級が通れる大きさではないが突撃級、要撃級さらには戦術機も辛
うじてだが通る事が出来る。ハイヴ建設も視野に入れて大規模侵攻
と行こうではないか」

「それならまずは戦車級を偵察兵代わりにだしましょう。ないとは思
いますが敵の反撃でこちらが損害を受ける可能性もありますので」

確かに戦車級は最も数が多いが能力としては問題ない。この世界

でも歩兵はバズーカとかを使わないと倒せない程度の頑丈さに戦車程度なら破壊できる筋力もある。そして戦車級は100だろうと1000だろうと失っても懐が全く痛まないコストの安さもある。前衛としては申し分ないか。

「よし、ならそのようにしよう。アイリスデイナー、唯依姫、伊隅次女が連携して指揮を執れ。ぶっちゃけ用兵に関しては俺よりもお前たちの方が上手いからな。臨機応変に対応してくれ」

「了解！」

「さあ、諸君。新しい世界に行こうではないか」

ゾルザル・エル・カエサルが門を開いたのは現状に不満を持っていたからだ。少し前に行われたアルヌスに設置された門。その先から得られる富を利用して帝国をさらに発展させようとしたが結果は異世界側の反撃に遭い失敗。逆に侵攻される結果となっていた。

とはいえ最初こそゾルザルはそれに対して興味はなかった。そもそも異世界側が積極的な侵攻を行っていない事は明らかかな上に妹であるピニヤ・コ・ラーダが率いる薔薇騎士団が偵察任務に出ている事から自分から動く必要はないと静観していた。むしろこの失敗で皇帝の権力が落ちれば自分が皇帝になる機会が高まるとさえ考えていたがそこに待ったをかけた人物がいた。

「ここで殿下自らが別の世界に軍を送り成功させることで殿下の権力を高めるのです」

元首狩り兎の女王であり、かつての侵略で奴隷としたテューレに唆される形でゾルザルはアルヌスから離れた場所、もともとウオーリアバニーの国があった草原に門を開き、兵を突入させた。

「これで俺は皇帝にさらに近い存在となるのだ！」

そう確信していたゾルザルだが彼のもとに入った報告は最悪なものだった。

侵略先の巨人によって門を潜った軍勢の9割が死亡。

その三日後には逆侵攻を受ける。
侵攻してきた軍勢は化け物ばかりであり、次々と人を食べた。
化け物は基本的に人よりも巨大であり、馬よりも速いスピードだった。

現在は草原一帯が敵の支配下になっている。

と、見方によればモルト皇帝以上の失態をやらかしたと言える。侵攻失敗より約二週間。この失敗をゾルザルは隠してこれたが化け物が侵攻を始めればたちまちゾルザルの失態が知れ渡る事となるだろう。

「くそー！ なんとしても奴らを駆逐せねば……！」

ゾルザルは自分の邸宅にてそう焦りを零す。そんな彼をテューレは冷めた目で見下していた。自分を奴隷としたゾルザルに復讐するためにゾルザルを積極的に行動する馬鹿として仕込んだ彼女はの一環として異世界侵攻を提案していた。

そもそも、帝国が門の先を侵攻先に選んだのは近場に侵攻できる場所がなくなつたからであり、帝国としても異世界への侵攻は初めての試みだったのだ。それが盛大に失敗したことを考えれば今回も失敗する可能性が高いというのは簡単に想像できた。

結果的にゾルザルは失敗し、自分の失態を隠そうと焦りを見せ始めている。こういう時は少し甘い言葉をかけるだけで楽だとテューレは更なる一手を打とうと動き出す。

「殿下、こうなつては仕方ありません。帝国軍を用いましょう」

「馬鹿な……。既に帝国軍は敗れ去っているのだぞ？ しかも大半はいまだに練兵中だ。とてもではないが使えないぞ」

「ええ、ですので怪異を使うのです。敵の化け物にはこちららも怪異を用いて対応するのですよ」

「なるほど……。確かに怪異は大量に存在する。帝国兵が少なくなっている以上管理する個体数を減らす意味合いでも使用できるか……。よし！ では早速その通りに動こう！」

ゾルザルは良い解決策が出来たと喜び喜んで部屋を出ていく。その背をテューレはうまくいったと歪んだ笑みで見送るのだった。

第三話 「動き出す理不尽」

「前進！」

アイリスデイーナの指示により、突撃級を先頭にBETAが動き出した。門の出現より二週間。周辺の草原を完全に制圧したBETAは橋頭堡を確保できたとして侵攻を開始した。前日には化け物が攻勢を仕掛けていたが大半が戦術機級や戦車級に蹂躪されてほぼ全滅している。もはや彼らの侵攻を阻む存在は周囲に存在しなかった。

「見れば見る程懐かしい光景だ」

アイリスデイーナは目を細めながら懐かし気に草原を見つめる。草原に見覚えがあるわけではない。ただ、惑星の地表に自然が存在するというのがアイリスデイーナにとっては久しぶりの光景なのだ。

「アイリス、私は東に向かう。西は任せたぞ」

「ああ、任せろ」

伊隅の言葉にアイリスデイーナは返事をして自分が担当する西側を見る。草原のはるか先には山脈がそびえたっており、とりあえずはそこまでを支配下に置くことを最初の目標にしてあった。

この二週間で夕呼による言語翻訳が完了し、情報を得られるようになった。それによって帝国の情報がある程度入手できるようになっていた。そして、その情報の中には同じように門を開き、失敗して逆に侵攻を受けているアルヌスに関するものもあり、アイリスデイーナは興味を持っていった。

「(鉄の象に鉄の天馬……。もし、これらが戦車やへりを表しているのならこの異世界最大の脅威になりうる存在となる。最悪の場合ミサイルを撃たれて門を破壊されてしまう可能性もある。レーザー級による対空迎撃とハイヴの建設を急がせるか……。) 唯依、ちよつといいか? ハイヴに関してだが……」

門周辺の防衛を担当する唯依に今後の状況を話す。あ号標的はただこの異世界には降り立たず、アイリスデイーナ達に全てを一任していた。

「(楽しみと言いながら積極的に動きはしない。……。彼は一体何を考

えているんだ？」

どこか不気味とさえ感じるあ号標的の様子にアイリスデイナーは恐怖を感じつつ自分に与えられた役目を淡々と果たしていく。

この日、帝国はフアルマート大陸東部を喪失した。その地に住まうすべての住人は逃げた者以外すべて捕らえられ、繁殖場やG元素に変換されることとなる。特に亜人と呼ばれる者たちは研究対象として解剖などが行われ、繁殖場に優先的に回されることとなる。

特別地域、通称「特地」と呼ばれるこの世界に進出した自衛隊は一月にも満たない期間の間に様々な出来事を経験していた。まず、異世界において最強の存在と言ってもいい特地甲種害獣、炎龍との戦闘や帝国の要衝イタリカの防衛やそこを襲った賊の殲滅。更には帝国の皇女ピニヤを介した講和交渉の開始など、とても濃い時間を過ごしていた。

「陸将、帝国東部が何者かによって占領されたとのことです」

そんな自衛隊にBETAの動きが伝わったのは大陸東部陥落から僅か二日の出来事だった。見知らぬ土地にやってきた自衛隊は門の防衛体制を固める一方で偵察隊を組織して周辺地理の把握に専念していた。そのために比較的早い段階で情報を入手出来ており、同時に帝都に向かった外交官からも同様の連絡が入っており、信ぴょう性は高いと判断されていた。

「どうやらここ以外にも門が開いたようで帝国はしっぺ返しを食らったようです」

「つまり我々と同じように帝国に反撃しているという事か？」

「どちらかと言えば逆侵攻をしていると言った方がいいでしょう。彼らは僅か数日で帝国の東部を占領しているのですから」

一体その者たちがどんな勢力かは分からないが接触する場合は穏便に、そして友好的に行きたいと特地に派遣された自衛隊の総指揮官である狭間陸将はそう願った。帝国を一方的に反撃できる力と進行

速度から見ても機械化された軍隊である可能性が高く、場合によってはこちらと同等の技術力を持っている可能性すら感じられた。であればそんな者たちと戦闘すれば両者に被害が出るのは確実だ。ただでさえ特地に自衛隊を派遣する事に反対する意見は多いのに戦闘すれば撤退すらあり得るだろう。

「……今は様子見だな。偵察隊を出して情報収集に専念するんだ。もし、攻撃を受けた場合は撤退を優先させるように」
「はっー！」

狭間陸将に報告を行った柳田はそう指示を受けると部屋を後にする。今はまだ情報が少なく推察する事しか出来ないがその勢力が日本に敵対的な存在でない事を祈るのだった。

「これは中々面白い技術ね」

夕呼は都市の中心部に突如として現れた門の解析を行っていた。この解析作業を始めておおよそ一週間。まだまだ分からない事が多いがそれでもこれが科学技術を用いた物ではないという事だけははっきりと判明していた。

「夕呼先生、これは本当に科学ではないのか？」

「そんな物ではないわ。これを科学で再現しようというのなら後30年くらい先の技術が必要よ。これは同じ世界に瞬間移動するのはわけが違うのよ。異なる世界に道を作る。とてもではないけど既存の技術じゃ再現なんて出来ないわ」

「となるとこれは魔法、か」

「魔法、ね。随分とロマンティックな言葉を使うのね。でもその通りよ。これは一種の超能力のようなもので作られているわ」

この世界にはあくまで転生した存在であるあ号標的にとつては魔法という言葉の意味は異世界ファンタジーにおけるそれである。しかし、そんな娯楽が存在しないこの世界で生まれ育った夕呼にとつては少し意味合いが違っている。夕呼が考える魔法とは錬金術などの

非科学的現象の総称でしかないのだ。

「どちらにしろこれを俺たちではすぐには作れないわけか……」

「ええ。だからこれが欲しいのであればあちら側でこれを作り上げた人から聞き出すしかないわ」

「……」

あ号標的は少し厄介だと感じる。ただ蹂躪するのであればBETAを動かすだけでいい。しかし、特定の人物を捉えるとなるとそれは出来ない。そいつがどんな奴なのか分からない以上下手にBETAを侵攻させては誤って殺してしまう可能性がある。最悪の場合、すでにそうなっている可能性もあった。

「……仕方ない。侵攻は始めたばかりだが一旦停止させよう。そしてこの世界の人間をベースとする人間級を四方八方に送り出して情報収集をさせるべきだな」

「それが最善ね。どうせならESP能力も付与してみれば？ あれは中々有用だと思うけど？」

「それもそうだな。試してみるか」

あ号標的はどこか楽し気に人間級の改造プランを考えながら門を離れていく。そんな彼の様子を見ながら夕呼は呟いた。

「あ号標的、貴方は本当にBETAという人間とは相容れない存在なのね。人間を蹂躪する事にしか楽しみを感じられないなんて人間にとっては天敵ね」

あ号標的が燃え尽き症候群に陥った理由や門開閉後に楽し気にしている様子から彼の精神を読み取った夕呼は改めてあ号標的というBETAに恐怖を抱くのだった。

第四話 「ハーデイの誤算」

やはり明確な相手がいると全てが楽しく思えてくる。今なら何でも楽しく出来そうだ。

この機に専用機と機龍を開発させてしまおう。敵はかつての人類と比べても圧倒的に劣る奴らだが異世界である以上警戒を怠るべきではない。異世界においては魔物や亜人は定番の存在だ。捕らえたものの中にはそういったやつらも多い。今は繁殖場にて品種改良を試しているところだ。

とはいえ明確な目標もなしに品種改良なんて出来ない。だから目指すべき目標としては短命長命にかかわらず、早熟で繁殖能力が高い個体だ。短命でも構わないのは平均的な収穫時期が15歳であり、犬程度の寿命さえ確保できれば問題はないからだ。だが、早熟であればそれだけ早く収穫が可能というわけだ。必要な栄養も大幅に減らす事が出来、その分だけ数を増やすことも可能となるだろう。

そして？ 殖能力。これはネズミとまではいないまでも犬猫のように一度に10匹くらいは増えられればいいと思っている。妊娠から出産まで時間がかかる以上一度に産まれる数を増やせればと思ってしまうのは仕方ない事だろう。

「ふむ、繁殖能力に変わりはないか……」

「んー… んー！」

肉々しい、というかまんま肉で出来た椅子に拘束されている亜人達の検査結果に目を通す。ここにいるのは全て雌であり、子を宿す能力を持っていると確認できた者たちだ。そして残念な事にここにいる亜人達は驚異的な繁殖能力を持っているわけではないようだ。若干猫耳の亜人、この場合は獣人と呼ぶべき種だけ出産が早いことが分かっている。これは子供が早く成長するわけではなく早期出産でしかないためあまり意味はない。

「んー！」

「……つたく、うるさいぞ。そんなに騒ぐようならあつちに放り込んでもいいんだぞ？」

「んう!？」

俺が指さした方向、そこでは戦車級によるG元素変換作業が行われている。周囲には血肉が飛び散りほとんどが原型を留めていないほど悲惨な状態となっているが俺にとっては何時もの光景だ。だが、こいつらにとつては衝撃的な光景であり、そこに放り込まれると言われれば黙るしかないだろう。これでも騒ぐ奴がいるなら容赦なく放り込むつもりだしな。

「さて、次は実際に妊娠させて見てG元素の変換効率と成長速度のデータを取ってみるか」

「……」

俺の言葉の意味を理解したのか雌たちはおびえた目をしてくる。ちなみに俺が喋っているのは日本語だけど彼女たちには異世界の言語で聞こえているだろう。これは翻訳作業を終えた夕呼先生によって作成された翻訳機を使っているからだ。元々この世界ではこういった物が、正確には英語を国際標準後に定めて英語に翻訳する機械だけでなくそれがあつたから意外と簡単に作成できていた。それを試験も兼ねて使用しているのだ。彼女たちとのコミュニケーションも特に問題ないようだし翻訳機は十分な性能となっているな。

「……まさかとは思うけど俺がお前らを犯す、なんて考えてないよな？俺はそんなのに興味ないし出来ないからな、代役はきちんと存在しているから安心しろよ」

「……」

そもそもこの体に生殖器官は存在しない。だからやりたくても出来ないが別にどうでもいい。どうせ使わない器官だし取り除いても問題ないからな。

「んじや早速？殖場へぐ案なーい」

「んう!？」

シユタージによって雌たちは連れていかれる。亜人はかなり力が強い物もいるからな。拘束は解かずに椅子を変形させ、車いすのように移動可能な状態にして運ばせる。？殖場では様々な国の、というか黒人白人黄色人種の男がそれぞれ10人待機している。雌たちはこ

れから男たちと行為に入っていくだろう。

「んー、やっぱり敵がいるのといかないのとは全然違うな。……やっぱりなんとしても門の技術は欲しいな」

あれがどれだけの能力があるのか分からないがもし、異世界へと道をつなげるものであるならあの異世界とは別の世界に行くことも出来るという事だろう。そうなればつながった世界の技術や人間を集めて更なる発展や進化を促進できるという事だ。それに、それを続けていけば俺が退屈することもなくなる。アイリスディーナ達だつて指揮経験や戦闘経験を積めるしな。皆が幸せになれる良いアイディアじゃないか。

ああ、早く手に入らないかな。アイリスディーナ、伊隅次女、唯依。誰でもいいから早く持ってきてくれよ？ そしたらもう異世界に用はない。さつきと蹂躪を再開しようじゃないか。だから、早く、早く、早く！

頼むぞ？

—ああ、もう！ なんなのよあいつら！

冥府の神、ハーデイは新たに門を潜ってやってきた存在にいら立ちを覚えていた。というのも帝国に門を開く技術を与えたは良いがその結果として帝国は反撃に遭い大きく揺らいでいた。現世を面白おかしく引つ掻き回すのが好きなハーデイにとってはそれ自体は喜ばしい事であつたが誤算はこの後の事だ。

なんと帝国の皇子が皇帝の座を手に入れようと別の門を開き、侵攻したのだ。こちらにも反撃にあつたが問題はそこからやってきた奴らにある。それらは人間どころか怪異とさえ思えない異形の化け物であり、門が開いた周辺を確保すると少しの間動きはなかったがその後瞬く間にファルマート大陸東部を占領してしまったのだ。

ここまでならまだ許容範囲だった。門はもともと別の世界の人間がこの地にやってきて永住するための道でもあるのだ。しかし、彼ら

はあろうことか丘や山を削り、生きとし生けるすべての生物を食い殺す、もしくは門の先に連れていき始めたのだ。門周辺は平らな土地にされ、草木一本存在しない荒廃した土地に変貌している。

—早く何とかしないと世界が荒らされるじゃない！

すでに事態に気付いた他の神から責任を取って対処しろと詰め寄られている。とは言えハーデイに直接干渉する力はないために自らの使途であるジゼルを向かわせるべきなのかもしれないがジゼルは現在休眠の周期を無視して叩き起こした炎龍を用いて最初の門の対応を行っていてすぐには動けない状態にある。第一ジゼル一人でどうにかするには敵の数が多すぎた。化け物だけでも万を超える数がやってきているのだ。

—仕方ないわ。ジゼルには炎龍をこっちの門に充てるように伝えましょう。

門を閉じないといけない事に変わりはないがどちらを先に対応すべきかは一目瞭然である。日本と通じた方は自衛隊が偵察に専念していることもあるが温和的である。一方の東部の門は化け物が行っていることを止めないとファルマート大陸が何も無いフラットな土地にされてしまう上に生命が存在しない死の大地となってしまう。

—炎龍一匹でも十分だとは思うけど念のために小龍も出してきつさと追い払わせましょう。

今は速度が大事と早速ハーデイはジゼルに連絡を行った。

数日後、炎龍は住みかとしていたシユヴァルツの森より姿を消した。これによりとあるダークエルフの村が救われる結果となったがとある騒動のせいで炎龍討伐を行う事になった自衛官がそのまま炎龍搜索の任務を受けてファルマート大陸を旅する事になる。

第五話 「炎龍」

アイリスデイーナ達は这个世界に関する情報がある程度入手できるようになっていた。四方八方に放った人間級から毎日情報が送られてくるためにその精査で時間を取られるくらいには膨大だった。

その中の一つにどうしても無視できない情報が存在した。

「炎龍。架空の生物であるドラゴンね……」

「どうやらこれは私たちを襲った帝国の聖地アルヌスより南に位置する森に住みかを作っているようだ。だが、数日前より炎龍が姿を消したと」

「巢を移したという事ですか？　であればどこに巢を作るかですが……」

「そうではない。炎龍はまっすぐにこちらに向かってきているようだ」

唯依の推察を否定してアイリスデイーナは炎龍の動きを伝える。人間級からはリアルタイムで飛んでいく姿も確認できている。それに付き従うように飛ぶ二匹の龍の姿も。

「……私たちを攻撃しようとしていると？」

「そのようだ。だがドラゴンはそもそも一生物に過ぎず、わざわざ巢を離れてまでこちらにやってくる理由がない」

「つまり誰かが操っていると？」

「可能性が高い。そうなると我々がどう動けばいいかだが……」

アイリスデイーナ達はまだ知らないが炎龍は空飛ぶ戦車の異名を持つ厄介なドラゴンである。自衛隊ですら炎龍を安全に仕留める方法に大部隊による高火力砲撃を提案するくらいだ。鱗も硬く、モース硬度は9を誇っている。

「レーザー級100、重レーザー級10。現在この世界に進出しているすべてのレーザー属種及び戦術機級20を投入する。敵の強さが分からない以上全力で以て対応するべきだ」

「それもそうだな。私は賛成だ」

「私も賛成です。一応他のBETAも囷として投入しましょう。空を

飛んでいるとはいえ囿には役立てると思うので」

アイリスデイーナが提案した戦力ははつきり言って過剰戦力過ぎた。そもそも、炎龍はレーザー級が数体いれば方がつく。モース硬度9とはいえBETAからすれば紙装甲に等しい。ましてや重レーザー級の攻撃など受ければどの部位に当たっても即死に至らしめるだろう。

さらに言うのであれば戦術機級の突撃砲でも炎龍を討伐可能だ。36mmはともかく120mmなら確実に炎龍にダメージを与えられる。弾薬の種類ではさらに簡単になるだろう。

とにかく我々は炎龍が到達するポイントにこれらの戦力を配置する。もし炎龍が進路をずらす場合はそれに沿って動かすが最悪の場合は戦術機級のみで対応する事になる」

「ならレーザー級の指揮は私が執ろう」

「では私は囿部隊の指揮を」

「という事は私が戦術機級の指揮だな。……炎龍をしとめるぞ」

「ああ」

「はい」

「……」

テューレは自らに与えられた部屋に戻ると天井を見ながら考えていた。ゾルザルを唆して怪異を投入させることには成功していた。そしてファルマート大陸東部を占領してしまっていることも判明している。

だが、そいつらはまさに化け物と呼ぶほかない奴らだった。密偵のボウロが放った者たちは9割が殺されており残った数名が命からがらな状態で情報を持ち帰っていた。

「人のみならず大地まで喰らう化け物、ね。まるでイナゴじゃない」

ゾルザルはまさに開いてはいけない世界に門を開いたのだ。場合

によつては日本すら霞んで見える程の脅威となるだろう。

「そしてそんな奴らを率いている女たち。彼女たちはこの世界からすれば悪魔に等しいわね」

別に化け物がいくら暴れようともテューレとしては何の問題もなかった。むしろ帝国の力が弱まると喜んでさえいる。問題は別にあつた。

「まあ、貴方たちからすれば化け物を許せるわけないわよね」

ボウロからのもう一つの情報。それは炎龍が二匹の新生龍と共に化け物の勢力圏に向かつてるというものだ。新生龍の背にハーディの使徒であるジゼルが乗っていた事から神々が動き出したことを示していた。それもアルヌスの門の破壊に用いるであつただらう炎龍を投入している事から優先度が逆転したという事だろう。

テューレはこのまま化け物が負けてしまうのではないかと不安を覚えていた。炎龍とはこの世界において天災そのものであり、相対すれば死は確実とさえ言われている存在だ。化け物がいくら数が多くても炎龍に勝てるとは思えない。ましてや新生龍二匹も一緒ならば一方的に蹂躪されてしまうと考えていた。

「せめて、少しでも帝国の力を削いでから死んでよね」

テューレは炎龍の勝利を疑う事すらなく化け物、BETAが門に逃げずにファルマート大陸に散つて人々を襲う事を願うのだった。

「へえ、ここが帝都か」

Q. 俺が今いるのはどこでしょう？

A. 帝国の帝都

そう、俺は今帝都にいる。いつも使っている中国人の体は目立つたためにこの世界の人間に合わせた人間級の一体を操作している。帝国はどうやらローマ帝国っぽい要素が多くみられる。街並みや人々の服装とかもそれっぽさが出ている。

「ん？ あれは……」

俺はもう一人の人間級と一緒に悪所？　って呼ばれているところに来てみたがまあ、酷い場所だ。スラムって言葉がぴったりの場所だ。そして帝都内では珍しい亜人達の巣窟だ。人間至上主義らしい帝国における亜人の掃きだめってところだろう。

そしてそんな悪所で面白い人物を見つけた。斑模様服、つまり迷彩服に身を包んだ人物だ。明らかにこの世界の人間ではない。という事は彼が自衛隊、この世界とも違う別の異世界から者たちなのだろう。

「よう！　お前なんか変な格好をしているな！」

「っ!!　……!?!」

「ん？　俺の言葉分らないのか？」

気さくに話かけたせいだろうか。自衛隊員は驚いて言葉らしい言葉を言えていない。まあ、仕方ないだろう。誰だっけいきなり気さくに話しかけられて驚かない奴なんていないし、しかもそいつが見知らぬ人物だったら困惑するだろう。

「ところでお前って誰？」

「自、自分は……!」

「ああ！　最近噂の自衛隊ってやつだろう？」

「そ、そうですけど……」

「態々こんな悪所に来たって事は帝国の偵察か？　ご苦労なこつたな。こんな掃きだめのような場所までくるなんて……」

正直に言っただけはあまり居心地が良くない。別に悪所が悪いわけではない。帝都のどこだって、おそらくこの世界のどこだって俺は居心地が悪いだろう。理由は簡単だ。周りにいるのは何時敵になってもおかしくない、俺が改造をしていない、作った者たちではないからだ。

「ま、お前も頑張れよ。帝国に気付かれれば兵を投入されて皆殺しだろうからな」

「は、はあ……」

最後まで困惑したままの自衛隊員から離れる。帝都も悪所も表面は確認できた。珍しさはあるがそれだけの場所だったな。具体的に

言えば生活している人がいる古代ローマの遺跡って言葉がぴったりだ。遺跡に興味ない俺としては退屈だ。炎龍っていうドラゴンが接近しているらしいしそちらの方を見てみようかな。

「それじゃ俺は帰る。後の偵察はきっちり行えよ？」

「了解です」

従者のごとく後ろにいた人間級にそう言っただけ俺は操作をやめ意識を戻す。今頃操作から解放された個体は偵察を再開しているだろう。こういうところが遠隔操作の利点だよなあ。

「さて、それじゃ何時もの肉体で炎龍との戦闘を見学するとしますかね」

負けるなら負けるで問題はない。その時は門を破壊して帰ればいいだけの話だ。もったいない気がするが勝てない相手をこちらに引き入れる必要はないわけだしな。

だが、討伐出来るようなら是非とも炎龍は回収したい。あれ単体だけでも膨大な情報の塊だ。夕呼先生に渡せば従順なクローンでも作ってくれるだろう。何ならBETAとしての改造を施してドラゴン級にしてしまうのもありだな。いやあ、楽しみだなあ。早く来ないかなあ。でもその前に俺が向かわないとな。

頼むから向かうまでに戦闘が始まるなんて事にはなってくれないかな？

第六話 「圧倒的なヒエラルキー」

「全く、主上さんもめんどくさい仕事を回してくるもんだよ……」

冥府の神ハーデイに仕える亜神であるジゼルは新生龍の背に乗ってファルマート大陸東部に向かいながら愚痴を零した。当初こそ日本に通じた門を閉じるために炎龍を用いようと行動しており、後は実行するタイミングを伺っているという最中にハーデイより新たに開いた門を至急破壊するようにと命令を受けていた。

その結果として炎龍と新生龍二匹を必死に北東に向かわせる羽目になり、長い旅を余儀なくされていた。何しろ炎龍が住みかとしたシュワルツの森から大陸東部まではかなりの距離があるのだ。一日二日とんだくらいでは全然足りなかった。

「ま、それもそろそろ終わりだけだな」

とはいえ北東に飛んでいけば自然と到着するものだ。ジゼルは草木が一本たりとも見えない、地面が露出した死の大地と化した大陸東部に足を踏み入れる事に成功した。

ジゼルが見える範囲ではこの元凶である化け物の姿は見えず、ただ荒れ果てた大地が続くのみだった。

「んー、もう少し飛んでみないと分かんねえなあ」

せめて一匹でもないものかと炎龍を飛ばしているとついにそれらしい化け物を発見した。それはサソリの如き姿をした化け物で、しっぽの部分が人の顔のようなものになっているのが特徴的な姿をしていた。

「お、まずはあれから行くぜ！」

ジゼルはその化け物、要撃級10匹に狙いを定めると炎龍に指示を出す。完全に飼いならす事は出来なかったものの子である新生龍を通してある程度の要望を出す事には成功しており、その成果と言わんばかりにジゼルの指示通りに要撃級に攻撃を開始した。

炎龍は急降下をしながらブレスを放ち、列の中央を焼いていく。そのまますれ違うように上を飛ぶ炎龍は勢いを殺しながら地面に着地。向かってくる要撃級に近接戦闘を挑んだ。

まず、一番近くにいた個体に右腕を振り下ろし、自身の体重も合わせつつ要撃級は人間に潰された蟻のように潰される。続く二体目を3体目、四体目もろとも尾で薙ぎ払い一撃で絶命させる。炎が直撃して動かなくなった二体と合わせて炎龍はたった数分で6体もの要撃級を瞬殺して見せた。

この結果をジゼルは満足げに見ながら何度もうなずいた。

「うんうん。やっぱり炎龍に勝てるわけなんてないよなあ。よし！ さっさと門を破壊して残った連中を駆逐してやるぜ！」

ジゼルがさっさと終わらせようと考えている間に要撃級は残り二体まで減っていた。ここまでで炎龍が受けた傷はなく、まさに圧倒的と言える戦闘力だった。

と、勝ち目がないと判断したのか要撃級は一斉に逃げ出した。

「お？ 尻尾撒いて逃げ出しやがった！ 炎龍！ 追え！ 絶対に逃がすなよ！」

ジゼルも新生龍に乗り飛び立つ炎龍の後を追う。炎龍も要撃級の背を追うが意外にも素早く動く要撃級を仕留めるのは難しかった。それでも炎龍はまるで狩りをするかのように要撃級をいたぶりながら追い詰めていく。そして要撃級は数少ない平たんではない場所、崖下のような場所に追い詰められた。

「よし！ これで終わりだな！」

半円形のような形のそこは入り口を炎龍と新生龍二匹で閉じる事で要撃級を完全に追い詰めた形となった。ジゼルは好戦的な笑みを浮かべると要撃級に止めを刺すべく指示を出そうとしてやめた。

「……せつかくだ。こいつらにやらせてみるか。お前ら！ このサソリ擬きを殺せ！」

ジゼルは新生龍に経験を積ませようと思い炎龍ではなく二匹に指示を出す。新生龍は咆哮を上げるとゆっくりと向かっていく。その姿はまさに恐怖を掻き立てるような演出であり、実際に新生龍二匹は加虐的な笑みを浮かべていた。

そして、二匹の新生龍が要撃級に止めを刺すべくとびかかったその瞬間、二匹の頭部をレーザーが通り抜け、それなりの大きさの穴をあ

けた。当然ながら頭部を大きく損傷した二匹は一瞬で絶命し、崩れ落ちるように落下した。

「なっ!? 一体何が……!?」

ジゼルが驚き、あたりを見回した。そして、それを見つけた緑色の体をしたどこか羽のない鳥にも見える化け物が崖の上から覗いていた。それも一匹ではない。何匹も、確実に10匹以上の数がジゼルたちを見ていた。

「まさか罠か!?」

そしてそんな化け物がこれだけいる理由。そんなのはこの状況が仕組まれていたからに他ならない。ジゼルは狩りをしているつもりが誘導されていた事によりやく気付くがすぐに冷静さを取り戻すと炎龍を置いて逃走を開始する。

炎龍は新生龍によって間接的に操作していたにすぎない。そんな中継機のような役割をしてくれていた新生龍が死んだのである。炎龍が負けるとは思えないが大暴れする可能性は高い。それゆえにジゼルは自分の安全のためにこの場を離れる事を決めた。

「まさか新生龍がやられるなんて……。仕方ねえがここは出直すしかないよな。まあ、化け物共は炎龍が倒してくれるだろう、し……」

ジゼルはそう言いながら後ろをみたせいで、最後まで言う事が出来なかった。今まさに絶対の信頼を寄せていた炎龍の体を無数のレーザーが貫く姿を見てしまったからだ。炎龍は小さな悲鳴を上げるとそのままおおむけに後ろに倒れた。この世界において何よりも硬い鱗を柔らかい肉を貫くようになるなんの障害も感じさせずに貫かれ、自慢のブレスは吐くことも出来ずに絶命した。

あまりにもあつげなく、そして圧倒的すぎる化け物にジゼルは改めて現状のまずさを理解した。何しろ炎龍すら瞬殺出来る化け物が存在する場所にたった一人でいるのだから。いくら不死であり、死なないとはいえ痛みは感じるし何より炎龍よりも確実に弱いのだ。化け物に対抗出来るわけがなかった。

「急いで逃げないと……!!!」

そして、そんなジゼルを逃すまいと来た方向に無数の化け物が待ち

構えていた。その中には炎龍を倒したレーザー級も複数混じっており、ジゼルを絶対に逃がさないという意味が感じ取れた。

「は、はは……」

ジゼルは改めて、自分たちが狩る側ではなく、狩られる側だったことを認識するのだった。

「ヨウジイ、貴方は大陸東部で起きていることを知っているかしら？」

「大陸東部？ いや、知らないけど……」

ひよんなことから『二重橋の英雄』と呼ばれ、現在では最も特地の住民と交流しているといっても過言ではない伊丹耀司は帝都での活動前にロウリイ・マーキュリーの質問に答えた。実際、彼を始めとして自衛隊は大陸東部の現在、BETAによって開拓が行われていることをまだ知らなかった。

「それがどうかしたのか？」

「主神が大層怒り狂っていてえ。私に何とか出来ないかって聞いてきているのよ」

「……何かあるのか？」

耀司とてさすがに帝国東部、この場合はファルマート大陸東部に別の門が出現しているのは知っており、そこから現れた者たちが何かしているのかと真剣な表情となった。

「大分不味い状態ではあるわあ。何しろ今の大陸東部は地獄よ。生きとし生けるすべての生物が殺され、草木は踏みつぶされて大地は均さされているわ。おかげで東側の生態系はほぼ消滅していて死の大地って呼ぶにふさわしい状況になっているのよ」

「なんだそりや……。その門から来た奴らは土に至るまで根こそぎ奪っているって事か？」

「そういう事になるわね。今は門を開く技術を与えたハーデイが責められていてジゼル……。ハーデイの亜神を向かわせたそうよ」

「そうなのか……」

この世界の神々が慌てる程の脅威が東に存在する。それは日本にとっても無視できない情報だ。耀司はロウリイに礼を言うとともに報告書の作成を始める。普段なまけ癖がすごい耀司と言えどそんな存在が近くにいる以上はすぐにも上に報告すべきだと判断していた。

「(生命体を皆殺しにして大地を均す……。なんかどっかで聞いた事があるような……)」

そしてそんな耀司は東部で起きている状況を何処かで聞いた事があるなど思いつつ報告書の作成に意識を集中させるのだった。

第七話 「発覚」

本当に異世界というのは面白い。何が起こるのか分からないし僕を飽きさせない。

ただ、正直に言って炎龍は残念だった。僕も物陰から見えていたけどまさかレーザー級の攻撃で絶命するとは思ってもみなかったよ。まあ、あれを何発も耐えられたらそれこそヤバいと言えるがおかげでアイリスディーナ達が切り札として用意していた重レーザー級が全く出番がなかったよ。重レーザー級みんなしよぼんとしているようにも見えるし。

まあ、別に殺せたんだしそれでいいや。炎龍っていうすごい素材が手に入ったんだ。これをG元素にするのは少しもつたいない気がする。BETAに改造して量産するのもありかもしれない。そろそろBETAも飛べる種類がいてもいいんじゃないかと思っていたところだし。いつまでも空戦を戦術機級頼みってわけにもいかないからね。

「それで？ こいつが炎龍を操っていたやつか？」

「はい。どうやらこの世界において神に最も近い存在である亜神のようです」

アイリスディーナによって連れてこられた青い肌の少女は亜神といういずれ神になる存在だった。名前くらいは聞いた事があるがまさか亜神がこんな格好をしているなんてな。どう見ても露出の激しい白ゴスだ。これがこいつらの正装なのか趣味で着ているものかは知らないが青い体に白い衣装はとても映えるという事だけは事実だな。

「亜神って確かあれだよな？ 不老不死？」

「人間級の報告通りであるならそうですね」

「……」

目の前のドラゴン娘は口をふさいではないが喋る気はないようでこちらをずっとにらみつけたままだ。まあ、僕も別に話したい事はないから困ったりはしていないけどね。それにしても不老不死か

……。これは良い掘り出し物かもしれない。もし、G元素に変換した部位が生えてくるといふのなら僕はG元素を取りたい放題出来る素材を手に入れたって事になる。そうなれば今は大量にあるG元素の残量を気にしないで使っていけるって事になる。そうなればいろいろと実験とか改良とかにバンバン使っていけるという事だ。

大きさは人間と大して変わりはないから一度にとれる量は少ないが永久に採れるってところが素晴らしい。

「よし、それじゃ早速G元素にしてみようか。まずは左腕からね」

「了解しました」

「っ！ 俺に一体何を……ギッ!？」

左腕を切り落としてG元素に変換してみるが……。へえ、こいつが亜神だからか人間ではないからかは分からないが採れる量は二倍つてところか……。後は再生するかだが……。

「どうだ？」

「再生はしていますがあまり早いとは言えませんね。60秒で肩から肘までと言ったところですよ」

「となると二分で腕一つの再生か……。ならば足で試してみよう。二分で再生できるのが四肢単位なのか部位の完全再生にかかる時間を調べないといけない」

「了解です」

「お、お前ら俺にこんな仕打ちをしてただで……アアッ!!!」

ふうむ。やはりこのドラゴン娘は素材としては素晴らしいな。G元素変換量は20代女性の倍以上だと判明した。これなら一度に採れる量の問題も多少は目をつぶる事が出来る。それにおおよそ10分で女性二人分だと仮定すればたった一日で100人分という事になる。これは繁殖場用のハイヴで収穫する時の数と同じだ。それをたった一人で供給できる。素晴らしい。

「アイリスディーナ。この亜神は他にもいるんだったな？」

「ええ、数は確認できていませんがまだいると思われれます。……手に入れますか？」

「そりゃ、これだけ優秀な素材がいくらいても困る事はないからな。」

後3体くらいは欲しいところだ。そうすれば俺たちは事実上無限のG元素を手に入れたも同然の状態となるわけだからな」

「それは胸が躍りますね。ではそれらの発見、捕獲も今後の目標に？」
「ああ。とは言えしばらくは本当に情報収集を最優先してもらう。情報を知らないと動くことは出来ないし出来ても目標を達成する事は出来ないからな。しつかり頼むぞ？ 人間級は大量に用意したからうまく使ってくれ」

「わかりました。あとでみちる達と配分を決めておきます」

「頼んだぞ〜」

「……あ、ああ。ころして、くれ……」

「だめだめ。これから君は毎日G元素の生成を行ってもらうんだから死なせなんてしないよ。というか不老不死なんだろ？ どちらにしろ殺す事なんて出来ないよ」

素材がなんかうわごとを言っているが僕としては別にどうでもいい。むしろこれから永遠に続くんだから少しは耐性を持ってもらわないとな。早く慣れるといいな！

「嘘だろ……」

その日、第1偵察隊の面々は大陸東部にたどり着き、目の前の惨状を実際に目にした。特地を襲った地震や皇族の奴隷とされていた邦人の救出などが起きている影で第1偵察隊は同じく偵察隊を率いる伊丹耀司の報告書を受けて急遽大陸東部にやってきていたのだ。

「ヤバい……。あれはマジでヤバい……」

偵察隊の隊長は双眼鏡から見える光景にそれにはしか言えなかった。戦車すら小さく感じられる体躯の化け物がうようよしており、その間を縫うように小型の化け物がいくつも存在する。そしてそれらは大地を削り、均していき掘り返した土をどこかへと運んでいく。途中で出会う生物は容赦なく襲い掛かり次々と食い殺されていく。

「畜生……！ 帝国のやつらあんな化け物共を呼び寄せやがって……」

！」

大陸東部があっけなく陥落したというのもうなずけると隊長は写真を撮ると即座に撤退を決めた。化け物とはそれなりの距離が離れているとは言えあんなのの近くに、それこそ視界に入るところにいたくはなかった。それに写真を撮り、情報を入力したのだから任務は成功だと言い聞かせながら隊員たちを連れてアルヌスへと引き返していく。

そして、持ち帰られた写真を見て一番の驚きを見せたのも伊丹耀司だった。

「こ、これってBETA!? 嘘だろ!」

「伊丹二尉、知っているのか?」

報告書を提出したために参考人として呼ばれていた伊丹は第1偵察隊が持ち帰った写真を見て顔を真つ青にした。考えていた中でも最悪の連中が来たと思ひ、BETAの事を知らない狭間陸将や柳田に説明する。

「BETAっていうのはマブラヴっていう18禁ゲームに登場する地球外生命体です。実際は生命体として人間を認識していないんですがそこは関係ないので省きます。こいつらはマブラヴの世界でユーラシア大陸を制圧して人類を10億人にまで追い込んだ化け物です」

「それほどか? で、これらは我々で対処は出来るのか?」

狭間陸将が一番気になるところ、それは自衛隊で対応が出来る相手なのかだ。それによつては今後の特地での動きが大きく変わってくる。最悪の場合は撤退すらあり得る話だ。そして、伊丹が話す内容はその最悪の場合が必要なものだった。

「無理です。マブラヴの世界は2001年ですが技術だけで言えば俺たちより上です。ですがこいつらはそんな技術すら無意味にしてしまふ厄介さを持っているんです」

「……分かった。伊丹二尉、急で悪いがこのBETA? という生物の情報をまとめてくれ。そして場合によっては隊員たちに周知させてほしい」

「……了解しました」

普段ならめんどくさい業務であり、お断りしたいところだが相手が相手なだけにそうもいっていられなかった耀司はきな臭い事になってきたと感じつつ、BETAの情報を事細かにまとめる作業をするべく狭間陸将たちのいる部屋を後にした。そして、部屋に残った狭間陸将と柳田は深刻な表情のままため息をついた。

「……柳田二尉、濟まないが特地からの撤退準備を始めてくれ」「わかりました」

「我々の力が及ばない相手。伊丹二尉の言葉が嘘だったと、間違った情報だったと信じたい出来事が起こるとはな……」

狭間陸将はここにきて特地という場所が最悪の結果を生み出そうとしている状況に再びため息をつくのだった。

第八話 「用済み」

情報収集に専念した結果が出始めている。この世界、正確には門が通じた場所がファルマート大陸という名前であり、帝国という国家が統治していることも分かった。この国はローマ帝国に酷似しており政治体制も皇帝を頂点してその下に元老院が存在している。そして帝国が今、二つに分裂していることも。

一つは主戦派。愚かにもまだまだ戦い続けようと言う者たちで相手との力量を謀れない馬鹿者だ。二つ目が講和派。皇帝の力を制限して元老院が主導となって講和を結ぼうというチキンな奴らだ。ちよつと反撃された程度で態度を一変させる芯のない軟弱者どもの集まりだ。

とはいえそれはBETAがファルマート大陸東部を占領するまでの話だ。異形の化け物呼び寄せる形となった第一皇子ゾルザルが主戦派講和派関係なく責められており、皇族の権力を抑制するべきではないかという意見が増え始めているようだ。そして帝国は自衛隊よりもこちらに意識を向けているようで日本とさっさと講和してこちらに全力で対処するべきだと言い出す奴らまでいるようだ。

そして悪いが俺はもう、お前たちに興味はなくなつた。ついに俺は門を作り出した奴にたどり着いたのだ。それは人ではなく、神。俺が捕らえた亜神ジゼルが仕えるハーディだった。ここまで調べ上げるのは意外と簡単だった。というのもハーディのお膝元であるベルナーゴという都市にいるらしい。詳しい事は分からないがそこでハーディが降臨？するらしくとにかくそこでなら会う事は出来るようだ。

そして門を生み出した以上それを閉じるのも彼女の役目なのだろう。だから素材のドラゴン娘を投入して物理的な破壊を試みたという事だろう。となるとあのドラゴン娘を交渉の材料にして門の技術を手に入れるか？流石に神様相手に物理攻撃が通用するとは思えないしそうなると交渉という手段になるわけだが……。

「帝国、いらぬいよね？」

「そうですね。ベルナーゴ周辺に手を付けなければ問題ないと思います」

俺はこのファルマート大陸侵攻の最終戦略会議を開始している。参加者は俺、アイリスディーナ、伊隅次女、唯依姫、夕呼先生、アルフレート達愉快な第666戦術機中隊の仲間たちだ。

「ハーディという神が技術を持っていると判明した以上帝国を滅ぼさないでおく理由はありません。このまま西へBETAを向かわせれば一月でファルマート大陸全土を蹂躪する事が可能だと判断します」
「その場合に衝突する可能性の高いアルヌスの者達、日本国の自衛隊ですが不利と判断した時点で門を破壊して撤退すると考えられます。なので自衛隊に関しては叩けるなら叩くで基本的に放置で問題ないと思います。無論、彼らの動向は確認し続ける必要はあると思います」

「俺としてはこのままあっちの世界にも攻めていいが門でしかつな
がっていない以上無理か……。ならば彼らにはピエロになってもら
おう」

「ピエロ、ですか？」

せっかく繋がったんだ。どうせなら関わりたいと思ってしまうのも仕方がないだろう。だからこそ彼らに行うのはBETAによる侵攻じゃない。餌を対価に踊ってもらうのさ。幸いにも俺はそう言った経験が豊富だ。失敗しない程度にはうまく行える自信がある。問題は自衛隊だな。俺が知っている自衛隊であるのなら潔癖とも言える程規律に縛られた者たちだ。賄賂やハニトラが通用するとは思えない以上日本人の弱点を突くのが手っ取り早いだろうな。

「ではファルマート大陸侵攻は計画通りで。日本に関しては俺が主導して行おう。補佐としてはアイリスディーナとカティア、後は適当に数名程残して全員は侵攻の方に手を回してくれ。アイリスディーナがこつちを手伝う以上アルフレートが総指揮を執れ。ファルマート大陸での侵攻経験がある伊隅次女と唯依姫が副官としてサポートをするように」

「「了解！」「」」

「夕呼先生は引き続き門の解析と門の開発をしてくれ。開発が出来、安定して繋がる事が出来た場合、ベルナーゴも吹き飛ばして構わない」

どうせ門の技術が欲しいがために延命させるだけだ。必要がなくなれば用済みとして処理すればいいだけの話だ。

「ああ、それと亜神を発見したら積極的に捕縛するように。不老不死である以上手荒に扱っても構わない。逃げられない、反抗されないことを最優先にせよ」

ドラゴン娘のおかげでG元素は劇的に増えているが欲を言えばもっと亜神が欲しいところだ。最低でも3体いればG元素はほぼ無尽蔵となる。使いたい放題になりいろいろと研究や改造も出来るからな。

「全員自前の戦術機を使って構わない。戦術機級も全機出し徹底的に蹂躪せよ。特地で最強と言われていたドラゴンの能力も大したことはなかった以上お前たちだけでも十分すぎるだろう」

帝国には翼竜という竜騎兵がいるがそれも脆い。対応は楽だ。

「さあ、諸君。蹂躪を開始しよう」

「帝国東部を占領する勢力がエロゲーの宇宙人どもだった？ 何ともつまらない冗談ですね」

伊丹耀司によって判明した大陸東部に居座る勢力の情報を確認した森田首相が最初に発した言葉に外務大臣である嘉納は呆れた。確かにその気持ちは分かるが証拠として現物の写真とそのエロゲー、マブラヴに登場するBETAの絵も提出されているのにそれらを見ていながらの発言なのだ。

「だいたいゲームのキャラが出てくるなんてここは何時からフィクションになったのですか？」

「ですが首相、門というフィクションが実際に起こっているのです。可能性は充分に高いでしょう」

事なかれ主義の森田は米国をはじめとする国際社会からの圧力もあり門を閉じたくはないという気持ちで嘉納には感じられた。しかし、その場合は最悪BETAが門を超えてやってくる可能性もあるのだ。圧力があるとうと門を閉じる決断は必要だった。

「それにせいつらは今のところはおとなしくしているのでしょ？」
「ならばこのまま放置でいいではありませんか」

「馬鹿な……い。あれが大人しくしているからと言ってこのまま手を打たないのはあまりにも危険すぎます！」

嘉納はマブラヴをプレイしたこそないがエロゲーの皮を被った鬱ゲーと名高いこの作品を知ってはいた。それゆえに森田の言葉はあまりにも危機感が足りないと感じていた。悲しいかなマブラヴの世界は舞台となる2001年の時点で二足歩行のロボットを開発し、月面に行ける宇宙船を持っており、自分達よりもはるかに進んだ技術を持っていた。そんな彼らが足の引っぱり合いをしていたとしても敵わない相手がBETAなのだ。

「無論米国を始め各国には詳細を報告してあります。そんな彼らの反応はわかりますか？ 嘲笑ですよ。日本人はついに現実とフィクションの区別がつかなくなったのかと言われましたよ。そんなことよりもさつさと特地の情報を寄せとね」

「ですが……！」

「この話は終わりです。外交官には引き続き帝国との講和を進めるように伝えてください」

それ以上は聞きたくないと言わんばかりに話を終える森田に嘉納は歯を食いしばりながらもその場を後にする。実際のところ、国民にこの情報を提示した場合BETAの脅威を真に理解できる者は1割にも満たないだろう。誰だって自分たちの攻撃が通用しない化け物というのを想像するのは難しい。だからこそその脅威を理解できる自分たちが動くべきだと。

「狭間陸将に連絡。責任は俺がすべて取る。必要と判断した場合は現場の判断で門を破壊しろとな」

それゆえに、嘉納は一切の責任を背負う覚悟を決めて狭間陸将に命

令を下すのだった。

第九話 「会談」

「よし、アルヌスには問題なく来れたな」

ファルマート大陸制圧のためにアルフレートが準備を始めている横で俺は俺の役目を全うしている。ちなみにアルフレート達はハイヴ建設やBETAをこの世界に移動させてきている。一応は東部侵攻時の10倍を目安にしている。一気に侵攻する以上数は必要だからな。

そして俺は日本に通ずるアルヌスの門付近にきている。ここはもともと何もない丘だったらしいが自衛隊が駐屯してからはあつという間に町が誕生したらしい。まあ、門周辺はこの世界にはない貴重な品が大量に送られてくる場所だからな。

「へえ、結構賑やかじゃないか」

「そうですね。街並みも綺麗ですし治安も悪くはないようです」

俺の呟きに答えたのはアイリスデイナーだ。今回は俺とアイリスデイナーの他にカティアの三人で来ている。今回の目的は戦闘ではないために武装は特にしていないが念のためにと頭から全身を覆えるフードを羽織っている。まあ、たとえ捕まったり殺されたとしても予備の肉体に意識が移るために問題はない。強いて言うのであれば長年愛用してきたこの肉体を失う事になるがそれはそれで買い替え時だったと考えればいい。

「さて、これが自衛隊の基地か。中々堅牢な要塞じゃないか」

軽く見た限りでも自衛隊基地は星型になっついてかなり堅牢な様子だった。ま、俺らには関係ないけど帝国相手じゃ防衛は楽だろうな。これを破るには空から制圧するか防衛線力を遥かに超える物量で以て一点突破を図るしかないがアウトレンジから一方的に攻撃できる自衛隊が相手ではそれらも難しいだろう。

ま、そんな自衛隊基地の評価は置いておいて。早速中に入るとしますか。『撤退なんてさせないぞ☆』計画のスタートだ。

「ん？ 止まりなさい。ここから先は関係者以外立ち入り禁止です」

基地に通ずる道を通れば途中で自衛隊員に止められる。当然だ。

こいつの言う通りここは関係者以外立ち入り禁止の自衛隊基地。普通なら俺みたいな部外者は入る事さえ出来ない。むしろ自衛隊は甘い方だろう。ここまで近づかれてるのに引き返すように警告するだけなのだから。他の国の軍隊だったら警告も込めて発砲しているかもしれないな。こいつは銃すら向けてきていないからな。

「このトップに話したい事がある」

「……アポイントは取られていますか？ 申し訳ありませんが事前に連絡がない者を通す事は……」

「ファルマート大陸東部を占領する化け物のトップ、と言えば通してくれるかな？」

「……そういう冷やかしは別の者に……」

めんどくさいな。仕方ないと言えばそうなのかもしれないがやはりきちんと話が出来ると手土産が必要だったか？ 俺は今手ぶらだし証明できる物はない。駄目だな。事前連絡や相手に証明させるなんてBETAに転生してからやってこなかったから忘れてしまっているな。次回があるかは分からないが失敗しないように頭の隅で覚えておこう。

「冷やかしじゃないんだがなあ。アイリスディーナ」

「はっ！」

「何を……ぐあっ?!」

アイリスディーナに指示を出し自衛隊員をうつ伏せに押し倒す。アイリスディーナのような古参は脳だけじゃなく肉体面でも改造を施しているから屈強な兵士だろうと遅れをとる事はない。

「別に無理やり押し入ってもいいんだけど俺は話し合いに来たんだ。このこのトップに、取り次いでもらえるな？」

「ぐっ！ ああああああっ!!!」

俺が脅すように言えばアイリスディーナが自衛隊員を締め上げていく。拒否は許さない。そういう圧力を込めれば自衛隊員は首を縦に振って肯定の意思を示す。声を出す力もないんだだろうなあ。悲鳴ですら殆ど出せなくなっているからな。

「よろしい。ではさっさと話し合いに来ていってこい。あまり

遅いと俺がどういう態度に出るかは分からないぜ?」

そう言つて俺は自衛隊員を解放させる。そいつは呼吸を整えると基地の中に走り去つていった。ふむ、彼がきちんと伝えてくれるかは分からないがとりあえず今は自衛隊の出方次第だな。

「アイリスデイナー。どうだ? 肉体に損傷はあるか?」

「いえ、損傷らしい損傷はありません。強いて言えば肉体の動きに視力が少しいついでこれていないですね。最大速度の際に視界がかなりぶれていました」

「ありやりや。そっちの方は要改造つてわけか」

今回のためにアップデートした肉体の改善点などを話し合つていと先ほどとは別人物の、険しい表情をした自衛隊員がやってきた。それも数名。先頭に立つ男以外は完全武装状態に見える。

流星に動きが早いな。だが、こちらを拘束する気はないようで先頭の男が話し始める。

「お待たせしました。狭間陸将が話になるそうです。ご案内しましょう」

「へえ、随分と早いな。実は知っていたとか?」

「まさか。あの化け物共に人間のトップがいたなんて知りませんでしたよ。尤も、貴方が人間とは限らないわけですが」

眼鏡の自衛官は皮肉を込めて言ってくるがまあ初見じゃそう思うし納得する。なので特に怒りを覚える事はないし眼鏡の案内に素直に従う。プレハブ住宅らしき場所の一室に入ると壮年の男性が座っている。おそらくこれが狭間陸将という人物、つまりこの自衛隊基地のトップという事だろう。

「初めまして。私は日本国自衛隊狭間陸将と申します」

「初めまして。俺の事は……、名前はないんであ号標的と呼んでくれ。人間たちが付けた、俺の識別名さ」

さあ、歴史に残る会談を始めようか。

「まさかこんな事になるとはな……」

「ええ、私としても予想外でした」

日本国自衛隊は嘉納大臣の密命により門の破壊及び特地からの完全撤退を視野に入れた準備を進めていた。

その一方で対BETA対策本部を設立。伊丹耀司を中心に様々な分野の専門家が集められていた。更にはアドバイザーとしてマブラヴの開発スタッフをひそかに呼び寄せてBETAの情報により精密に解析していた。

しかし、その矢先になんとBETAのトップを名乗る人物が乗り込んできたのだ。その報告に当然ながら狭間陸将を始めとする幹部陣は驚愕したが何よりもトップが人間らしいことが問題だった。

「これでBETAは我々の知る存在とは違う可能性が浮上したな」

「その傾向はありましたがさすがにここまで違うとは……」

作品を知っているだけに思い込みがあったのも事実だがそれでも今回は予想外過ぎた。とは言え相手は既にこつちまで来ているのだ。失礼な態度を取って完全に敵対関係になるよりは良い。幸いにも相手は対話という手段を取っている事から穏便に済ませられる可能性があるのだから。

そして、柳田の案内の下あ号標的と狭間陸将は対面した。この部屋には自衛隊側は狭間陸将の他に柳田と護衛の自衛隊員、あ号標的側ははまだフードを深くかぶったアイリスディーナとカティアが同席した。

「さて、態々ご足労いただいたようですが要件はなんでしょうか？」

「へえ。いきなり本題にはいるのね。手っ取り早くて嫌いじゃないよ」

狭間陸将としてはお世辞が通じるとは思えない相手であったためにさっさと要件を聞き出そうとしただけなのだがあ号標的は好感をもったようで表面上では笑みを浮かべた。

「いやなに、俺たちの事を知ったら門を破壊して逃げ出そうとするんじゃないかと思ってね。撤退しないでほしいというお願いをしに来

たのさ」

「お願い、ですか。ですが我々としても貴殿らが大陸東部を占領している事実からいつまでも門を繋げておく方が危険だと判断しているだけです」

「では君たち及び友好勢力には手を出さない。そう約束してもいいぞ」

「残念ですが貴殿らはそれらがあつたとしても信用できない程の脅威なのですよ」

「……」

あ号標的は狭間陸将の言葉に目をすつとほそめる。その眼には狭間陸将の真意を探ろうとする感情が浮かんでいた。

「……随分と我々に詳しいようですね。あなた方の世界にありますね？」

「何のことでしょうか？」

「いいよ。とぼけなくて。なるほど。知っていたのか。どうりで動きが早いわけだ……」

あ号標的は天を仰ぐとため息をつく。そして再び狭間陸将に向き直ると信じられない提案をしてきた。

「では日本の首相に会わせてくれ」

「……何故ですか？」

「君たちでは俺は説得できそうにないと思ったからだよ」

「であれば会わせる事は出来ませんか」

「……なるほど。撤退は自衛隊のみの決断つてわけですか」

日本政府が強固な意志で門から撤退を考えているのであれば会わせたとしても問題ない。いくら説得しようとも意思が変わる可能性は低いからだ。だが、会わせようとしないう事とは日本政府は一枚岩ではない、もしくはそもそも撤退を考えていないという事になる。あ号標的はにやりと笑みを浮かべると話を続ける。

「日本としては特地从撤退したくはない程魅力的な場所という事ですね。もしくは外の大きなお友達が許してくれないのかな？」

「どうやらそちらも我々に詳しいようで」

「まあね。それじゃカードを一枚切ろうかな。実は現在門の技術を解析していてね。優秀な先生のおかげで門の再現は出来ているんだ。つまり、その気になれば君たちの世界に直接門を繋げる事が出来るわけだ」

「……それをしないから会わせろというわけですか？」

「そうだね。門を再現したとはいえ繋げるにはいろいろと手間がかかるんだ。君たちの説得の為だけにつなげるのは勿体ないんだよ」

「……」

狭間陸将としてもBETAがこれ以上侵攻せず、すみわけが出来るのであれば交渉する事は可能だと考えている。そして、さらに言うのなら本当に門の再現が出来ている場合、彼らが日本に門を繋いでしまつては相手側有利の交渉となる可能性が高い。そうなればどのような要求を突き付けられるのか分かつたものではない。ならば今ここで相手の要求を？むことでこちら側が少しでも有利になれる状態に持っていくべきだろう。

「……分かりました。ですが我々にとって不利益と判断した場合は」

「仕方ないね。その時は好きにすればいいよ」

こうして、急遽あ号標的は森田首相と会う事になった。急遽決まつたこの決定は自衛隊や嘉納大臣が中心となる事で森田首相本人の意思に関係なくすぐに実現する事になるのだった。

第十話 「超大国」

「面白いことになったな」

アメリカ合衆国大統領のディレルは日本が門を通じて繋がったもう一つの地球ともいふべき世界の宇宙人と会談するという話を聞き、その言葉を漏らした。アメリカにとつて特地とはフロンティアであり、未開拓の大地という思いが強かった。それゆえに日本政府に対していろいろと援助を行いつつ特地進出の機会をうかがっていた。

そんな特地に厄介な宇宙人がいると発見されたのはつい最近の事だった。とは言え最初こそディレルは日本からもたらされた情報を信用しなかった。何しろその宇宙人というのが日本で開発・販売されている18禁ゲームの敵だというのだから。

「日本がついに現実を見えなくなったのかと思つたが違うようだ。それでもいまだに信じるのは難しい」

「お気持ちお察しします大統領。我々も確たる証拠や情報を入手した今でも半信半疑といった具合なのですから」

しかし、そこは超大国アメリカである。即座に様々な分野から情報を集めるとそれが真実であると真つ先に理解し、準備を開始していた。いまだ他国ではサブカルチャーの見過ぎだとみなして取り合わない国しかない状況でのアメリカの判断は迅速と言えた。

「とにかく日本政府と会談するというのなら今は見守るのみだ。会談の様子は見る事が出来るのか？」

「相手側の要望によりビデオ撮影が行われ、編集なしで各国に渡す事が決まっております」

「それはつまり彼らは我々と取引を望んでいるという事だ。そして門を閉じさせたくないのだろう」

ディレルはあ号標的の狙いを正確に見抜いた。日本政府が今後門からの撤退を選んだとしても会談の内容次第では世界中の国々がそれを阻もうとしてくるだろう。それでも強硬手段に出たとすれば日本は国際的信用を落とす事になる。最悪の場合世界から孤立する可能性すらある。そうなれば日本と領土問題を起こしている国々が何

かしらの動きを見せてくるだろう。

「なるほど……。ではエイリアンどもは我々を満足させられるだけの物を持っていると?」

「クリアロン君。君はエイリアン共が登場するゲームを概要だけでも見たかね? 見たのであればそのような言葉は出てこないはずだよ。エイリアンどもがどんなものを出すかは分からないが確実に世界が欲しがるもののはずだ」

クリアロンの懐疑的な言葉にデイレルはそう言って断言した。実際、マブラヴ通りの世界であるのならどんなものでも魅力的だろう。あちらの世界ではあり触れた物でもこちらではその何十倍の価値がする場合だってあるのだ。デイレルはそう言ったものがこの世界に流れてくることを期待しつつ、自国の利益になるように準備を進めていた。

「是非ともエイリアンを我が国に招待したいものだ。前回は失敗したが今回はあの時以上に合衆国に利益をもたらしてくれるだろう」

「わかりました。日本政府に圧力をかけてみます。エイリアン側も我々の招待を受けない、という可能性は低いでしょからね」

マブラヴの世界であろうともアメリカは強大な国家として存在していたのだ。それは彼らにも分かっているだろう。たとえ分かっていたとしてもこの世界においてもアメリカは超大国として君臨をしている。日本政府程度強請る事は容易かった。

こうして、アメリカが着々と準備を進めていく中でロシア、中国と言った大国も情報が真実だと気づき、水面下で動き出したがその時点ですでにアメリカに大きく後れを取っていたのだった。

「大変な事になった……!」

伊丹耀司がすべての事を知った時には事は終わった後だった。耀司は異世界で出会った三人娘の一人、レレイ・ラ・レレーラの学都ロンドンでの発表に会わせて留守をしていた間にあ号標的が自衛隊と

接触。耀司が戻ってきたときには日本政府との会談日すら決まりその日を待つのみ状態だった。

「あれが……」

「ああ、自分からあ号標的と名乗った。つまり、エロゲーの世界ではない可能性があるという事だ」

「分からないですよ？ 転生者っていう可能性も残ってます」

「転生者、ね……。こちらとしてはその方がやりやすいな」

耀司は自衛隊の宿舎前でなぜかバーベキューをしているあ号標的達を遠目で見ながら柳田と話をする。見た目は中華風の好青年といった感じだがあ号標的を名乗った以上あれが本当の姿かどうか疑問すら感じてしまう。その理由の一つとしてここまでたった三人で来るだけのフットワークの軽さも存在していた。

「……あれって!?!」

「気付いたか？ すぐなくともあの世界は1983年より後という事だ。それも東ドイツが陥落したとみて間違いはない」

「……」

フードを外し、バーベキューをつついているアイリスディーナ・ベルンハルトとカティア・ヴァルトハイムの姿に耀司は驚き、柳田は警戒する。マブラヴオルタネイティブのスパインオフ作品で去年完結したばかりのシュヴァルツェスマーケンの主要人物二人が敵であるはずのあ号標的と一緒にいる。それがどれだけ不自然なのか耀司には痛いほど理解できてしまった。BETAと和解できた、とは考えない。すくなくとも特地においてはBETAが本来の用途通りの見せているのだから。人間と和解したとは思えない行動だ。

「……それで？ 三人娘はどうしているんだ？」

「ああ、レイとテュカはロウリイに付き添って街に隠れているよ。流星にあの警戒しようじやな」

ジゼルが捕まり、拷問ともとれる悲惨な状況にある事は主神であるハーデイを通じてすべての神に伝えられている。そして今後亜神が狙われる可能性も高い事から近づかないようにと命令が伝えられており、ロウリイもその命を受けてBETAの親玉が来ていると聞いて

からは常に周囲を警戒するようになってしまったために、信頼できる者たちだけで町に隠れる事になったのだ。

「その方がいいだろう。あんまり言いたくはないがおそらくここが特地で一番安全だ」

「……そうなのか？」

「ああ。最近入った情報だがBETAが動き出した」
「っ!？」

「一斉に西に動き出している。つまり、BETAは帝国と会話する気がないという事だ」

「でも今更なんで……」

「それはあ号標的との会話で判明している。やつらは門を作り出す技術を欲していたようだ。だからそれが誰かは分からないうちは動きを止めていた。そして」

「それが分かったから、用済みと判断されたって事か……」

「その可能性が高いだろう。今は急ぎ帝都から外交特使を呼び戻している最中だ。帝都は目と鼻の先だからな……」

耀司は想像する。突撃級に吹き飛ばされ、要撃級に潰され、無数の戦車級に食い殺される特地の民たちを。それを思えばバーベキューをして楽しんでいるあ号標的が本当の宇宙人に思えてくる。すくなくとも転生者であったとしてもその中身は既にBETAと同じになっっているとさえ思ってしまった。

「そんな状況にもかかわらずに世界中ではあ号標的を招待しようという国が多い。特にアメリカなんて真っ先に名乗りを上げてほぼ決定事項のような感じにさえなってしまったっている」

「あ号標的はそれを了承しているのか？」

「あいつが望まなかったら決定事項になんてなっていないさ。すくなくともあいつはどこの国が影響力を持っていて誰に接近すればいいのかを理解しているようだ。厄介な相手だよ」

日本政府は門が通じているから便宜を図っているだけで目標はお前らじゃないと言わんばかりに両者の動きは早すぎた。それだけに柳田は両者が合意に至った場合、どのような事になるのかを想像が出

来なかったが悪夢と呼ぶにふさわしい事になるだろうと予測はして
おり、耀司にもそれがなんとなくだが察する事が出来、憂鬱な気持ち
となるのだった。

第十一話「終幕」

「ふざけるな！ こんなことがあつてたまるか！」

第一皇子ゾルザルは自分の宮殿内で荒れていた。本来であれば彼の傍でおびえている使用人たちがいるはずだが今日は誰一人としておらず、彼の怒鳴り声がいっつも以上に響き渡っていた。

BETAが侵攻を開始して一週間。この一週間の間に帝国はファルマト大陸の東部から中央部にかけてほぼすべての地域を失っていた。犠牲者は今も右肩上がり得上昇しており、兵を出しても報告に戻る事さえ難しい程の速度で以て進んできているために情報が中々入って来づらい状況にあつた。

そのために、帝都でも西へ逃れようとする人でごった返しており、貴族だろうと平民だろうと関係なく持てるだけの財産をもつて西へ西へと逃げ出していた。

「我が帝国は無敗の大国！ すべての世界を統べる選ばれた国家なのだぞ!? それが化け物どもに蹂躪されるだど!? そんなわけがあるはずがないだろうがっ!!!」

そう怒鳴り、ゾルザルは手に持ったグラスを地面にたたきつける。甲高い音を立てて割れたグラスだが使用人がいないこの宮殿に片付けようとする者は皆無だった。一人を除いて。

「殿下。あまり怒りすぎては体に害ですよ」

「テューレ……」

唯一自分の傍に残った元奴隷のテューレの姿を見てゾルザルは一度冷静さを取り戻した。テューレは慈愛すら感じさせる表情と姿でゾルザルに話しかける。

「殿下。今こそ殿下の力が必要な時でございましょう。皇帝は化け物と戦う事をせずに民を逃がし、己の権威を少しでも維持しようと躍起になっており、元老院は我先に逃げ出しているために機能しておりません。今こそ殿下のお力で民をまとめ上げ、化け物に一致団結して立ち向かうべきでございます」

「それは理解している！ ……それで？ 今言うという事は準備は

整ったという事だな？」

「はい。今も帝都に残っている兵の8割が殿下に恭順し、貴族も賛同する者を集めました。後は殿下が号令を降すだけです」

「……いいだろう。これ以上帝国を汚さぬためにも我らで生まれ変わらせるのだ！ 行くぞテューレ！」

ゾルザルは機嫌よさげに宮殿を出ていく。そんなゾルザルを後ろから冷ややかな目で見下すテューレの近くの影が揺らめく。

「テューレ様。これで帝国は終わりですな」

「ええ。ゾルザルは帝国を破滅から救う道だと信じているみたいだけど違うわ。貴方がこれから進むのは破滅への道。それも一度進めば後戻りはできない片道航路よ」

テューレはそう言つて嗤う。この世界で最強と言われていた炎龍を降した事は密偵のボウロを通じて判明している。炎龍さえ倒す異世界の化け物相手に帝国が抗うことなど不可能だ。しかも相手は群れ。炎龍一匹よりも被害は大きいだろう。

「ではテューレ様。我々はこれで失礼します。クーデターが失敗しないように手は打っておりますのでどうぞ心配なさらずに復讐をお果たし下さいませ」

「そう。分かったわ」

ボウロは役目を終えて西へと逃れるためにこれが最後の仕事となった。ボウロが率いるハリヨと呼ばれる混血種の過激派たちはいずれ世界を統べる存在になると信じているが帝国がある限りそれは難しい。だが、その帝国は今まさに風前の灯火と化している。化け物とて門を通じて存在するだけの者たちでありいつまでも門が繋がっていないわけではないためにいずれは門は閉じ、化け物も増える事はなくなる。そうなれば自分たちが化け物を駆逐していき世界の頂点に君臨するという野望を掲げていた。それがたとえ不可能な話であつてもハリヨ達はそう信じてここまでやってきていた。

「……………」

ボウロが消え、一人になったテューレは歩き出す。今帝都は東側にはほとんど人は残っておらず、西側に人口が集中している。それも数

日後にはなくなり、帝都はほぼ空の状態となるだろう。しかし、ゾルザルのクーデターが成功すれば今いる帝国の臣民たちは徴兵されて化け物との無謀な戦いに投入されるだろう。そして、それはゾルザルが殺されるまでか、送り出せる臣民がいなくなるまで続くだろう。

まさに帝国は全ての力を出し切って消え去るのだ。テューレから全てを奪っていたゾルザルたち帝国にはお似合いの末路と言えるだろう。

「こうしてみれば日本と講和しようがしまいがどうでもよかったわね。さあ、早く来なさい。貴方たちが食べやすいように一か所にまとめておいてあげたんだから一人も逃さないでよね」

そう言つてテューレは嗤う。帝国の、ゾルザルの末路を想像して嗤った。

「では、これで我々はビジネスパートナーとなったというわけですね」「ええ。お互いに妥協点を決める事が出来てよかったです」

そう言つて俺は差し出された手、アメリカ合衆国大統領ディレルの手を握った。所謂握手というやつだ。

俺が今いるのはホワイトハウス。アメリカ合衆国の政治的中心地だ。具体的に言えばホワイトハウスで最も有名な大統領の執務室にいる。本来は応接間らしいが大統領がよくここにいて執務室と思われているらしい場所だ。

俺の周りにはたくさん人間がいるが俺側のやつはアイリス、デイーナとカティア以外で残りは全て合衆国の人間たちだ。つまり、最悪の場合は周りのすべてが敵という事になる。結果的にそんなことは起こらなかつたために周囲の人間は表面上は笑みを浮かべて合意に至ったことを喜んでいる。

日本政府との会談自体はスムーズに進んだ。やはりというべきか門の閉鎖に消極的だった為に日本と友好関係にある場所を攻撃しないという条件を出すことで閉鎖を出来ないようにして、前々から言わ

れていたアメリカの招待に応じた形になった。

アメリカとしては特地もそうだが俺たちが持つ技術も欲しいよう
で戦術機やその武装、衛士が装着しているパイロットスーツの現物も
しくはその技術を求めてきた。流石はアメリカというべきなのか。
よく情報を仕入れている。

俺としてはどれを渡したとしても問題はない。何しろこれらがい
くらあったところでBETAにとっては脅威になりえないという事
は立証済みだからだ。俺が気にするのは門の技術を得るまでに門が
閉じてしまう事。せつかく繋がったのに何もせずに切るのは勿体な
い。だからファルマート大陸を制圧後、それも門を自由に使えるよう
になったら一斉に侵攻する。アメリカ、ロシア、中国、日本。他にも
大国と呼べる国々を強襲して団結した反撃を難しくさせる。可能
ならその前に人間級を送り込んで不和を与えたい。そうすれば俺が
やってきたことの焼き回しとなり二つ目の地球を征服できる。

「パイロットスーツは先に資料を渡しませよう。現物についてはまた
今度に……」

「我々は門を閉じさせず、日本国に好き勝手させないようにすればい
いわけですな」

改めて確認するが端から見れば俺のメリツトがないように感じる
だろう。だが、BETAを知っていれば話は別だ。ディレル大統領は
俺という個体が指揮をしているから安心と考えたのかそれとも吸い
取れるだけ吸い取って門を閉じる気なのかは知らないがどちらにし
ろこうして会談に応じた時点でお前らの命運は決まってしまった。

「これからも長い付き合いが出来るといいですな」

「そうですな。お互いの繁栄を願いましよう」

後は中国とロシア、EUあたりとも取引が出来れば完璧だな。技術
を餌に関係を継続させる。その間に俺は目的をさっさと達成させる。

きっとそろそろあちからから交渉したいと言ってくるはずだ。でな
いと本当にヤバいと理解しているだろうからな。ほら、早くしないと
ファルマート大陸はフルフラット大陸に改名したくなるほど平坦な
大陸になってしまうぞ？

第十二話 「ダウンフォール・1」

伊丹耀司は今の状況を見て最悪という言葉以外に相応しい言葉はないと感じている。

自分が留守にしている間に止められない程事態は進んでおり、4月前には日本政府は事実上門を破壊する事が出来なくなっていた。もし破壊した場合、世界各国から非難を受けて国際的に孤立する可能性が高かった。

その一方でBETAの動きは順調すぎた。BETAは約束を守るつもりらしくクーデターが成功したゾルザル派を帝都ごと踏みつぶすとデュマ山脈を避けて北上。ベルナーゴ以北に侵攻を開始した。偵察によりBETAは大陸西部にまで進出しており今年中にはこの世界の大半が制圧されると予測されていた。

「どうすんだよこれ……。もうどうしようもないじゃん」

BETAは亜神をさらに三体程確保しており、本格的に侵攻に関する遠慮がなくなり始めていた。ロウリイの話で伊丹はこの世界の神々が焦りを見せ、元凶と言えるハーデイに何とかするように詰め寄っていると聞いていた。

「ハーデイが門の技術を持っている以上それを渡せば満足してくれるでしょうけどそうなればこの世界に対する興味は本格的になくなるんじゃないかしら？」

ロウリイはそう言った懸念を示しており、ハーデイの交渉次第では行く末が大きく変わると思っていた。それは伊丹とて同じだが問題は自分達である。門をこのまま繋げておくわけにはいかない。なんとしても閉じなければBETAが日本にまで到達してしまう。

BETAがこのまま約束を守るとは思えなかった。むしろ彼にとっては門の技術を得るまでの時間稼ぎとさえ思えてくる。何しろあ号標的がアメリカを始めとした各国に提供した戦術機やパイロットスーツの情報だがマブラヴではBETA相手に簡単に破壊される代物だったのだ。今更脅威になるとは思えなかった。

「狭間陸将もいなくなっちゃったし……」

自衛隊が独断で門を閉じる事を防ぐためだろう。特遣部隊のトップであった狭間陸将はその任を解かれ日本に戻ってしまった。他に代わりとして立川陸将がトップについていた。他にも幹部はほぼ全員が交代され、特遣部隊を詳しく知っていると判断された柳田のみが留まる事に成功していた。

そして今回やってきた者たちは政府の息がかかった者たちであり所謂撤退に反対的な意見を持っていた。これで特遣部隊は組織的に行動して門を破壊し、撤退するという動きが出来なくなった。それどころか場合によっては撤退すらできなくなり、BETAが目の前によつてくるまで留まざるを得ない状況になるかもしれない。

「……何とかしてレイたちを助けられないだろうか……」

BETAが大地を平坦にして草木一本生えていない死の大地にしている以上いずれこの世界の気は薄くなり人間が生きていくには過酷な世界となるだろう。それにBETAに侵攻されればアルヌス周辺は真つ先に蹂躪される。伊丹は三人娘がBETAに蹂躪される光景を想像して身震いする。その光景は近い将来必ず起こるものと確信しておりそれを避ける事はもう出来ない。ならばその状況になった際に少しでもいい方向に進めるようにするべきだと。

「はあ……。俺は遊んで寝てその間に人生を過ごしたいだけなんだからなあ……」

このままではそれすら出来なくなると伊丹はため息を吐きながら早速準備に取り掛かるのだった。

ベルナーゴ。それはハーデイのおひぎ元であり、この世界においては聖地と呼べる場所だ。ハーデイを祀る神殿を中心に都市が形成されており、冥府の神という事もあり鉱物資源のお土産を売っている店が多い。

だが、BETAによる侵攻後は各地から逃げてきた難民たちが押し寄せておりかつてのような明るい賑やかさはない。あるのは絶望と

それでも生に縋りつく醜い人間の姿だけだ。

そんな負の感情を背負った難民たちを無視して俺は進んでいる。俺の周りはモーゼのように道が作られているがこれは俺の後ろに控える戦車級と闘士級が原因だろう。発狂して逃げだす者もいるがそれは少数。残りは逃げる気力さえ残っていないと言った状況だろう。「全く。俺たちの世界の人間は最後の最後まで抗っていたぞ。まあ、そんな抵抗すらまともに出来ないように手を回したかな」

俺はそう言って吐き捨てる。ベルナーゴ北部の郊外には無数のBETAが半円形上にとり囲んでおり交渉次第で攻撃するという脅しを行っている最中だ。

……そう。そうだ。ようやくハーディは俺と交渉する気が起きたようだ。神としてのプライドを捨てて他の神の亜神経由で「どうか交渉させてください」と言われてしまったてはやらないわけにはいかないだろう。準備を整え、どんな罠が来てもいいように警戒は怠らない。たとえ周囲の難民が襲い掛かってきたとしても対応できる手立てはある。

「あ号標的殿ですね。ハーディ様が中でお待ちです」

白ゴスの女性の案内の元神殿内に足を踏み入れる。俺は戦車級一体と闘士級二匹のみを連れて中に入る。今回はアイリスディーナ達は連れてきていない。彼女たちにはアルヌスの門の先の世界との交流を行ってもらっている。見目麗しい彼女たちにはうってつけと言えるだろう。たとえ肉体が汚れても新しい肉体は何百と用意している。好きだけ乱れるのも良しとしている。

「……あれがそうか……」

地下に通ずる階段を降りていくとそこにはすでに降臨したらしい半透明の女性がいた。本来はハーディが降臨する前に到着し、自分達なりの最上の礼で迎えるのが普通だがそれをしていない様子からも今どちらが有利な立場にいるのか明白と言える。まあ、ハーディの顔が不満げな表情をしているから納得はしていないのだろうな。

「始めましてというべきだな。俺に名前はないからあ号標的とも呼んでくれ」

【……】

事前に調べた情報通りハーデイの声は聞こえてこない。神の声を聴けるのは同じ神になる亜神たちだけだ。夕呼先生が門の解析の休憩時に翻訳機を作成してくれたが完成には程遠くこの場には持ってきていない。だからこそ別の方法で交渉しようじゃないか。

「ハーデイ。残念な事にここには亜神がいない。そうなる俺はお前の言葉を聞くことは出来ない。だからこそお前はこの体に入ってくれ」

そう言つて戦車級に乗せていた女性の体を差し出す。ハーデイは凜々しい成人女性と聞いていたのでアイリスディーナの2Pキャラをイメージして作った肉人形だ。ハーデイは人間の体に憑依する事で言葉を聞けるようになると言つていたからな。神が憑依しても問題なくらいの頑丈さは備えている。

……だから安心して憑依してくださいよ。今、俺の心を読んでい
んでしよう？

【っ!?!】

俺らの世界にも心を読み取る能力は存在しているんですよ。まあ、調べた情報の中に遭っただけですけどね。どうですか？ お得意の心を読んで相手の本音を読み取ろうとする何時もの手が使えないのは。あんたは俺の心を読んでこれがすべて真実だと信じるしかない。出ないと交渉は出来ませんからね。

【……】

そこまで言つてようやく肉人形に憑依する気になったか。ゆつくりと肉体に入つていき、小さな光を生み出したのちに肉人形はゆつくりと上半身を起きあげた。ああ、ここまですべて予定通りだ。何一つ不測の事態は起きていない。

「では改めて自己紹介を。俺はあ号標的。お前たちの世界を侵略するBETAを率いる者だ」

「冥府の神ハーデイよ。悪いけどあなたには門の向こうに帰ってもら
うわ」

お互いに用意された椅子に座りテーブルをはさんで向かい合う。

こうして理解できる言語を話すことが出来るようになって初めて交渉が始まる。そして、それに気を取られている間にハーデイは体に起こる変化に気付くことが出来るのだろうか……。気づけなかつたとき、それは冥府の神の死を意味する事になるだろう。

ああ、交渉もその後の動きもすべてが楽しみだ。精々面白い顔を見せてくれよハーデイ？

第十三話 「ダウンフォール・2」

「さて、まずはお互いに求める事を出し合おうじゃないか。どうせすべての要求を呑ませあうのは無理なんだ。お互いに妥協点を見つけていく事こそがより良い交渉となる」

「あら？ 私は全て飲ませるつもりでいたけどね。まあいいわ。私が要求するのはこれらよ

一つ、全ての化け物の門の向こう側の世界への撤退

一つ、全亜神の解放

本当は奪い取っていった大地とか生物とかを元通りにしろと言いたいけどとりあえず私が望むのはこれよ」

なるほど。一つ目はともかく二つ目は無理だ。せつかく亜神というG元素を無限に生み出す夢の素材が手に入ったんだ。最低でもその代用品がないと解放なんてする気はない。

「ならばこっちの要求を伝えよう。俺はお前らと違って要求が多いからよおく聞けよ？」

1. 門の技術の公開及び作成方法の伝授
2. 12人いる亜神のうち最低でも半数を引き渡す事
3. すべての魔法の公開及び伝授
4. 我々がここまで侵攻した土地を我々の物として認める事
5. ベルナーゴにいる者たちの半数を引き渡す事。そのうち半数は難民以外とする

6. 我々BETAへの今後の直接的・間接的介入・妨害の禁止
まあ、こんなところだな」

「……ほんとうにそんな無茶苦茶な要求を呑むとと思っているの？」

ハーデイはいら立ちを感じながらも務めて冷静に聞き返す。まあ、仕方がないだろう。俺が伝えた6つの内容はどれも衝撃的なものばかりだろうからな。どれか一つだけでも大きな影響を与えてしまう事は明白でありハーデイの様子からは絶対的に？みたくないという意思が感じ取れた。

「では本格的な交渉に入ろうか。まず、門の技術さえ手に入れば俺は

「この世界から手を引いても良いと思っっている」

「……………ここにこだわらなくてよくなるからね？」

「そうだ。態々ここに執着せずに好きなように侵攻できる。俺らにとっては夢のような話だ」

まあ、そんな技術も夕呼先生の奮闘で20年くらいで完成しそうだな。前聞いた時は30年だったが夕呼先生は物凄い勢いで形にし始めている。これなら本当に10年ほどで完成しそうだが俺はそこまで待つていられない。だから手っ取り早く技術を手に入れたいのだ。

「亜神たちも魅力的だが門の技術の前にはどうしても数段劣る。どうだ？ この世界の神としてどう感じた？」

「……………」

悩んでいるのだろう。自分たちの世界を救うために他の世界を犠牲にするのかと。ここで門の技術を渡せばBETAの脅威はなくなるがその代わりにこの世界の何倍もの人々が死んでいく事になるだろう。いくらこの世界の神とは言え少しは葛藤する気持ちがあるようだがここまで来た以上結果は決まっているだろう。

俺が肉人形を見ているとハーデイは結論を出したのか口を開いた。

「いいわ。その条件呑んであげる。その代わりにすぐにでも化け物を門の向こう側に戻しなさい。亜神もすぐによ」

「んー、まあ仕方ないな」

門の技術を手に入れるのが最優先事項だからな。亜神たちを手放すのは少し痛いかなんでかんでほしいわけではないからな。

「それじゃ早速門の技術をくれ」

「……………いいわよ」

ハーデイはそう言うのと俺に向かって光の玉を投げってくる。おそろしくこれが門の技術なんだろう。そして、光の玉が俺の中に入ってくると確信に至った。脳内に技術が映し出されてくるんだ。ふむ……。やはりかなりすさまじい技術だ。夕呼先生が模倣しようとしていた技術の資料を思い出しながら確認してみたが重要な場所が模倣すら出来ていない状況だった。というか重要で複雑な箇所以外は普通に

模倣で来ている。改めて夕呼先生のヤバさが伝わってくるな……。

「確かに受け取った。俺には作る能力はないが見ればわかるからな」

「そう。それじゃ約束は守ってもらおうよ」

「ああ、もちろん良いぜ」

俺は捕らえていた亜神たちを解放する。解放のタイミングに合わせて最後の採取を行っていた為に見ただけなら死肉をあさられた後の死体に見える。これを門を通らせた後は特殊な弾頭に詰め込み突撃砲で東に打ち込む。本当に再生できるのかさえ分からない程の損傷を受けるだろうが別に問題はない。この世界にもう要はないからな。

「それじゃさっさと帰って頂戴。中々具合の良い体だったけどこれも返すわ」

「いや。いいさ。気に入ってくれたようだし、これから君を構成する肉体になるんだから返すなんて出来ないよ」

「? それはどういう……!?!」

ああ、ようやく気付いたらしい。ハーデイは目を見開きながら立ち上がって体をペタペタと触っている。そして、触れば触るほどに驚愕や絶望を感じているようだ。

それも仕方ないだろう。ハーデイは今肉人形に魂を固定されたのだから。これは夕呼先生が門の模倣の過程で生み出したものでここにはない存在を固定する能力だ。事前の調査で神は肉体を持たず、五感すら持たないやつらだと分かっていたからな。俺としては神という面白い素体を見逃す手はない。だから門の技術を持っているハーデイで試す事にしたんだ。結果は大成功。

「どうだ? 確かお前らはもとは生命体だったんだろう? どれだけの年月ぶりかは知らないが自分の肉体を持った感想はどうだ?」

「っ! 貴方……!」

「ああ、ちなみにお代は君が我々の世界に来ることで支払えるようにしてやるよ」

ハーデイは怒りで顔を真っ赤にしており今にも殴りかかって来そうな様相を見せているが俺が指を鳴らせば肉人形の体は力を失った

ように椅子に座った。突然の事に何が起こったのか分からない様子のハーデイに俺は親切丁寧に教えてやる。

「俺が用意したその肉人形は俺の命令に忠実に従う名前の通りの存在だ。それに入ったハーデイはともかく肉体方面では俺の意思でどんなこともさせられる」

「下衆ね」

「神を肉体に閉じ込めようというんだ。このくらい保険はかけても足りないくらいだ」

本当ならいつものように脳の改造を行って精神面でも俺の駒にしたいと思っただがこいつの今の状態は出れなくなった状態の憑依だ。肉体をいくら弄つても駒にする事は難しい。だからやるべきなのは相手の心を折って反抗心をなくす事だ。そうすれば忠実な駒と言っても問題ない状況となる。神相手にそれが出来るかという不安はあるがだめならだめで使い道を変更するなり幽閉するなりして何も出来ない状態にして放置すればいいだけの話だ。

「安心しろよ。お前の亜神だったドラゴン娘も一緒にいるんだ。寂しくはないぜ?」

「っ!? 亜神は全て開放するという約束だったでしょ!」

「そうだな。だが、仕える主人がこの状況のあいつを果たして亜神と呼べるかな? 俺は呼べないと判断した。だから開放はしないさ」

「……そう。最初から……」

ハーデイはブツブツと何かをつぶやいているが無視して残りの用事を済ませよう。神がいなくなったことはすぐにでも伝わるはずだ。だからと言って俺を脅かすことが出来るとは思えないがさっさとこの世界からおさらばすればいいからな。日本の方はアイリスディーナ達を送り込んでいる。異世界の座標はきっちり把握、追跡が出来る。門が開ければすぐにでも向かう事が出来る。

アイリスディーナ達の体を使った情報収集で俺の世界の原作と思われる作品があるのを確認している。対BETAの動きが出来る前にさっさと繋げて必要なものを確保。最後に滅ぼせばいいだろう。

「さて、そろそろ帰るぞ。お前は口を閉じ俺の許可があるまで一切の

発言を禁ずる。そして来た時と同じように意思のない人形として運ばれろ」

俺の命令に返事は返ってこない。元々返事は返さないし口を閉じるといふ命令を受けているからたとえ喋れても返事は出来ないだろう。戦車級にハーデイを運ばせて神殿を出る。神官たちが何かを言いたそうにしているが無視をして帰路につく。BETAも東へ向けて動き出しており突撃級が地響きを生み出しながら走っている。俺は戦車級一体を捕まえるとその上に乗れ、門へと帰還に入った。

もうこの世界に用はない。滅ぼしてもいいが門という技術を手に入れるきつかけとなったんだ。本当に手を引いてやるよ。

とはいえ大陸を支配していた帝国は崩壊し、大陸東部は平坦な大地となって生態系は消滅した。生き残った者たちが奪い合う戦国時代に突入するだろうが精々頑張ってくれ。侵略する事か？ 栄していたお前たちにはふさわしい末路だろうかからな。

第十四話 「ダウンフォール・3」

それらを一言で表すのはまさに「災害」だったと呼ぶに相応しいだろう。特地を通じて繋がったそれら、BETAは大陸東部を完全に死の大地として中央部から西部にかけて人類を駆逐した後突如として門の向こう側に撤退し、門を閉じて姿を消した。

BETAの一匹でさえ確認できなくなったファルマート大陸に残されたのは皇帝と第一皇子を失い、国家として滅亡したも同然の帝国と大量の難民だった。難民は大陸西部に逃れた帝国貴族が作り上げている勢力圏に合流したり日本保護下のアルヌスや友好関係にある事でBETAの侵攻を免れたイタリカに向かう事となった。

一方で日本との講和交渉に精力的に動いていた帝国皇女ピニャ・コ・ラーダは日本の帝都からの撤退時に彼女の騎士団と共にアルヌスに避難したことで難を逃れ、合流した貴族の推薦により帝国の女帝に君臨。帝国の復興に尽力を注ぐこととなった。

「でもBETAはなんで急に門を閉じたのやら……」

耀司は日常を取り戻しつつあるアルヌスにてそうつぶやいた。日本国内では弱腰の森田内閣を倒そうと嘉納大臣を始めとする一部の議員が動き出しており、近々実行に移される予定となっていた。

アメリカでは手に入れた技術を用いて戦術機やパイロットスーツの開発に着手しており来年までには試作型が開発出来る予定となっていた。一方でロシアや中国などこれから得る予定だった国々ではアメリカに情報開示の圧力をかけておりそれなりの緊張が漂いつつあった。そのために日本の動きに構っている暇はなく、そっちに視線が行ったことで特地の方は余計な干渉もなくなりつつあった。

「でもまさか美女二人の処遇でここまでもめるなんて……」

事実上置いていかれたと言っても過言ではないアイリスディーナとカティアの処遇を巡り世界中で議論が巻き起こっていた。とは言え彼女たちを処分するべきだという意見はほとんどなくもっぱらどこの国が保護するかという話になっている。何しろ小説の世界の間である彼女たちは美しい容姿を持っている。能力も高く今最も注

目されている女性だ。そんな彼女たちを保護した国は注目が集まるだろうし優遇してみれば国際的な信用も得られやすい。

そう考えた国々が我先にと保護しようとしているのだ。中には金持ちが愛人枠でほしいと動き出している者もいる程だ。今のところは一応故国と言えるドイツが一步リードしており、次点でアメリカとロシア、何とか追隨しているのが中国といった具合となっている。

まさに傾国の美女と呼べる状況であり、耀司としてはそこまでやるかよと呆れの感情を持っていた。とは言え実際美人であり、軍人としての能力も高い。何よりマブラヴの世界の人間だったこともあつてそういったこの世界にはない技術を知っている可能性が高かった。

「特地も特地で荒れてきているし……」

フアルマート大陸は東部を中心にBETAの侵攻で荒らされた。これらの復興はすぐにはなされないだろうし帝国という強大な国家の崩壊で戦国時代に突入しかけており、特に西部では様々な貴族が独自の国家を作り上げて小競り合いを繰り返していた。それらは一つ一つが弱小であり、一番力をつけている第二皇子ディアボの勢力でさえエピニャの下で復興しつつある帝国の足元にも及んでいない状況だった。とは言えそれらを吸収していけるだけの器も今の帝国にはないために放置している状況だった。

そして帝国の束縛がなくなったことで従属していた国々では独立を宣言したり、好き勝手に動き出す国も現れており日本が恐れていた特地世界の秩序の崩壊が起ころうとしていた。

しかし、一番の問題は神々に関する事だろう。冥界の神だったハーデイはBETAとの会談後に行方不明となり、亜神のジゼルともどもBETAに連れ去られた可能性が高かった。実体を持たない神をどうやって連れ去ったのかは全くの謎であるが実際問題として行方不明になっているのだからかなりの混乱が起こっていた。更にはBETAによる蹂躪を止められなかったことで神々への信仰が薄れつつあり、ただでさえ人口が激減している状況の今は致命的と言えた。幸いなのは戦いには直接的に関係ない神々の信仰は失われなかったことであるがハーデイやエムロイなどの信仰は激減していた。

神関連で続けるのならBETAに捕まっていた亜神たちは全員が精神を壊されており、僅か数週間にも満たない期間だったにも関わらず自我をほぼ消失していたのだ。回復は絶望的であり手足を失った形に等しい神々は頭を抱える事態になっていた。

「はあ、BETAへの対策が必要なくなったのは良いけど荒すだけ荒らしていったからなあ……」

耀司は趣味のオタ活に勤しむ時間もないやとため息をつきながら事務仕事をこなしていると巨大な爆発とともに振動が襲い掛かってきた。

「な、なんだ!？」

いきなりの事に倒れこんだ耀司はすぐに立ち上がると状況の確認のために外に出る。そして、それを目にしてしまった。

「門が……!？」

自衛隊基地の中心地、日本と特地を繋ぐ門があった場所から大きな黒煙が噴き出しているのだ。最悪の事を予想しつつ門の付近まで向かえば異世界を繋いでいた門は跡形もなく消え去り焼けた大地だけが広がっていた。

「嘘だろ……!?!？」

耀司はあまりの出来事にそれ以上の言葉を言う事は出来ず、ただ茫然と門の跡地を眺める事しか出来なかった。

この日、自衛隊の特地派遣部隊は門の消失により日本に撤退する事が出来なくなった。彼らは大きな傷を抱え、今にも爆発しそうな特地に根付くことを強いられるのだった。

しかし、それは何も知らない者たちからすれば悪夢と言えるだろう。実際、特地に残された者たちはそうかんがえた。だが、その一方で地球で発生した出来事を知ればそう思う事はなくなるだろう。

「さあ！ 蹂躪せよ！」

銀座の門の爆発と同時に日本、アメリカ、中国、ロシアなどの大国

外伝2【BETA召喚】 第一話「ロデニウス大陸」

自衛隊たちに特地と呼ばれていた世界は俺たちに実りをもたらしたと言えるだろう。おかげで俺は燃え尽き症候群を脱し、門という異世界とを繋ぐ技術を手に入れたのだから。そしてこの技術は夕呼先生によって魔改造が施されている。ハーディがゲロった異世界同士をつなぐデメリットを最小限に抑える事に成功した門となっている。おかげでつなぎっぱなしにしても起きる影響は万単位の年月で違和感を感じるレベルだ。ほぼないに等しい。

さて、そんなわけで早速別の世界に門を開くわけだがここで問題が発生した。門を開くことは出来るがその先の世界に関しては行ってみないと分からないのだ。門を開くことは出来てもその世界の情報が見えるわけではない。完全なランダムという事だ。

その為の場合によってはこちらを一蹴出来る強力な世界と繋がってしまふ可能性もあるわけだ。慎重に行くべきなのかも入れないが……。

「どうせ失うのはBETAだ。いざとなれば門を閉じれば問題はないだろう」

俺はこのことを楽観視していた。どうせ危なくなったら閉じればいいだけの話だと思っていたからな。その結果として後にひどい目にあうのだがそんなことを今の俺が知るわけがなかった。

そんなわけで地球を全土手に入れた後に門を開く事にした。ちなみに地球は自然をある程度残した感じになっている。要は地表に人間級が住めるようにしたわけだ。更にそこでは戦術機の武装の工場や食料の生産工場を作っている。国のしがらみを気にする事無く大規模な工場を作る事が出来るから生産率に関しては俺が転生する前よりもはるかに高い物となっている。それを消費しきる事は人間級や牧場の家畜だけじゃ無理だから収穫した作物の大半はG元素に変換しているがな。一つ一つから得られるG元素は微々たるものだが

？殖場の家畜とは違い常に定量のG元素が得られるのが特徴的だ。ドラゴン娘のおかげでそれなりのG元素が供給されている状態だしな。

「門の接続を確認しました。この先を潜れば異なる世界になっています」

「よろしい。では早速蹂躪を開始しようか」

夕呼先生が勝手に集めた助手からの報告を聞いて俺はBETAを門に突進させた。前の門は要塞級が入らない程度の大きさだったが今度は要塞級も簡単に入れるサイズになっている。派兵されるBETAの戦力が大幅に上昇するだろう。

いつも通り突撃級を先頭に要撃級、戦車級が続き、レーザー級を守護するように要塞級が囲んだBETAの基本陣形で門を潜っていく。BETA達から見える景色は草原のようだが突撃級によってそれらが踏みつぶされて言っている。道らしきものや遠くに風車が見える事からすくなくとも人は住んでいるのは確認できた。この世界の技術がどれほどのものか、それはしばらく侵攻を続ければわかるだろう。いざとなれば戦術機級も投入したり門を閉じて別の場所につなげて奇襲するという手もありだな。地球ではその戦法で大国を翻弄して叩き潰したしな。

「さて、今度の指揮官は誰にしようかな……」

しばらくはBETAによる蹂躪が続くだろうからその間に今回の世界でBETAを指揮する人物を決めておく。伊隅次女、アイリス、ディーナ、唯依姫が前回は指揮したが他の面々にも経験を積ませるためにもさせてみようかな。

三人は能力が高いがゆえに頼りきりになっている面もあるし全体的に能力を上げておきたいからな。となると次に指揮経験があるのはグレーター、上総、ヴァルターに速瀬あたりか？ 後はほとんどないだろうし詳しくは把握していないがとりあえずローションを組んで指揮をさせてみるか。やはりこういういった失敗しても問題ない状況で経験を積んでいく事が出来るのは良いよな。失敗を恐れずに行えるからな。

さーてさて？ この異世界のレベルはどの程度なのかなー？

中央歴1639年1月中旬クワ・トイネ公国

この日、クワ・トイネ公国は建国至上最大の危機に陥っていた。何しろロデニウス大陸の中央部から大量の化け物があふれて来たのだから。それらはもともと兵数が少ない公国にとって抵抗すら出来ない性能と物量で以て侵攻をし続けていた。

「やつらは一体……」

クワ・トイネ公国首相カナタは突如として自国に訪れた悲劇に困惑していた。彼のいる公都クワ・トイネや経済都市マイハークは北部に位置していた為に今のところ無事であったがそれも時間の問題だった。化け物は数を減らす事無く増え続けており、すでに大陸中央部は完全に陥落していた。クワ・トイネが誇る要塞都市であるエジエイがあっけなく陥落した事からも化け物の強さは異常なほどだと理解でききる。

「首相……。クイラ王国も化け物の襲撃を受けているそうです。……残念ですが援軍は期待できません」

「大東洋諸国も距離の問題から援軍は間に合わないと思います……」
「ロウリア王国が変な動きを見せています。おそらくこちらへの侵攻準備かと」

弱ったところを見せれば近隣諸国に食い殺される。それがこの世界の風潮であり、実際にそれで滅ぼされた国は大量に存在している。そして、今クワ・トイネはロウリアという強国相手に大きな隙を見せた形となっていた。

人間至上主義を掲げるロウリア王国は秘密裏にとある大国の保護下に入る事でその技術を得て力を増大させていた。そして、自身と領地を接するクワ・トイネ公国を滅ぼす機会をうかがっていたがそれは予想外にも早く訪れていた。

「……長い歴史を持つ我が国はもう、生きる事が出来ないという事で

すか……」

あまりにもひどい惨状にカナタは絶望した声でそうつぶやく。そんなカナタに誰もが言葉をかける事は出来なかった。皆カナタと同じように現状に絶望を感じていたからだ。抵抗するために兵力はなく、防衛すら不可能。にも拘わらず隣国には攻められそうになっている。クワ・トイネ公国はまさに不運に見舞われたと言っている状態にあった。

「……皆さん。こうなつては仕方ありません。一人でも多くの国民を国外に逃がす準備をしてください。軍は少しでも防衛を行い化け物やロウリアの足止めをしてください」

「了解しました。すぐにも行きますー！」

クワ・トイネ公国は首相カナタの迅速な判断により国内からの国民の脱出を始める事となる。しかし、マイハークはともかく、クワ・トイネの民がマイハークの港に到着するころにはクワ・トイネ公国はほぼ滅亡したと言える状況にまで追い込まれていた。到着時にクワ・トイネは陥落。現地に残っていたカナタ以下数名の官僚が即死している。数時間後には化け物はマイハークにまで到着し、船ごと避難民を海に沈めてしまった。海上に逃げたクワ・トイネの民たちを化け物はそれ以上追う事はなく、ロデニウス大陸の制圧を進める事となった。

クイラ王国はもともとが穀物が育たない大地の国であったために国家としての地力は低く、クワ・トイネ公国の全土が占領された数日後に全滅している。ロウリア王国は諸侯軍による大群で対応しようとするもそれらはただ突撃級に踏みつぶされる結果に終わった。虎の子のワイバーンもレーザー級の攻撃で一匹残らず撃ち落されていき攻撃する事さえ出来ずに全滅してしまった。それ以降はクワ・トイネ公国と同様の末路をたどり、中央歴1639年2月ごろにはロデニウス大陸を化け物、BETAは占領下に置くのだった。

そして、ハイヴを建設しながらあ号標的は次なる目標を定めつつ何時もの手となっている情報収集や攪乱、妨害工作のための人間級を送り出していく。その数は1000体を超えておりファイルアデス大陸を中心に様々な土地に潜伏してBETAに情報を送り続ける事とな

る。

まさにロデニウス大陸陥落はBETAによる侵攻の最初の一手となつたのだつた。

第二話 「パーパルディア王国」

ロデニウスという名の大陸を完全制圧した。およそ二週間というそれなりに早い速度で制圧できたがそもそも大きさがオーストラリア大陸の半分くらいしかないうえに現地の文明力もそこまで高い物ではなかったという点もある。これがオーストラリアのような国力を持つていればここまで早く制圧は出来なかっただろうなあ。

「次はこのフィリアデス大陸だな」

まだこの世界の地図は分からないが大陸制圧時に手に入れた家畜達に話を聞いて北に大きな大陸が存在するのが判明した。現在はロデニウス大陸の東西に一つずつハイヴの建設を行うなどの開拓をしつつ人間級を用いての情報収集を行っている。まだまだ始めたばかりだから情報は入ってきていないが次に侵攻するフィリアデス大陸の情報は優先的に欲しいものだ。

ロデニウス大陸の家畜から聞いた話だと文明圏と呼ばれる地域が存在するようで自分達では想像も出来ないほど高度な技術を有しているらしい。そして自分達が属するのは文明圏外と呼ばれる所謂田舎や最果てのような場所らしい。つまり、ロデニウス大陸の文明力がこの世界の文明力というわけではないようだ。最悪の場合、文明圏の国々はBETAを一掃できる戦力や力を持っているかもしれない。充分に気を付ける必要があるだろう。

「とりあえず一度門を閉じて座標を少し変更してフィリアデス大陸に接続する。場所としては大陸南端にしようか。ここからBETAを出して大陸横断レースのごとく北上させて潰す。掃き掃除のようなもんだよ。全てを一か所にまとめて潰す」

とはいえ今回はいつもと違う点が存在する。

「今回、これらBETAの指揮を担当するのはグレーテル、上総、ヴァルターにファムだ。君たちの他にそれぞれ何名かを副官として付けた。侵攻はまだまだ先だがフィリアデス大陸はロデニウス大陸の様子から見てそこまで発展している国ではないのだろう。それゆえに多少の失敗があっても問題ないと判断している。まあ、今回の目

的は指揮能力の向上だと思って気楽にやってくれ。たとえ北方から海上に逃げられたとしても今度は対抗策を用意しているからな。安心するといい」

そもそも、この世界をいずれは全て開拓するんだ。多少逃がしてしまつたとしても問題はない。まあ例え返り討ちにあつたとしてもそれはそれで構わないと思つている。何しろフィルアデス大陸にはBETAの大群を叩き潰せるだけの戦力を備えていると発覚するのだから。

「それじゃ全員フィルアデス大陸侵攻の準備を始めしてくれ。具体的な日時は情報が集まり、実行可能と判断してからになる。おおよそ一月以上はかかると思つていてくれて構わないからなあ」

ロデニウス大陸が謎の化け物に制圧されたという情報は第三文明圏や文明圏外国家に迅速に広まつた。当初こそ魔物か？と思われただがそれにしては敵の数や大きさが違う。実際に漁師や海軍の人間が浜辺に佇む要撃級や突撃級を目にしている。ロデニウス大陸が化け物に制圧された話は真実だと、すでにあそこは人間の土地ではなくなつていて誰も理解出来てしまつた。

「化け物の土地になつたか……。であれば我らパールディア皇国が開拓して再び人類の土地にしようではないか！」

しかし、だからと言って化け物、BETAの脅威をはつきりと理解できているか？と問われれば否定しかできない状態にある。何しろBETAと戦つた人間の大半は死体すらこの世に残っていない者が多いのだから。もしくは家畜としてこの世界とは別の世界に連れ去られている。

とはいえ例えBETAの実力を正確に把握していたとしてもこの国、パールディア皇国はロデニウス大陸に侵攻しようとしただろう。この国は対外拡張政策によつてフィルアデス大陸南部をたつた10年で統一するに至つた大国であり、この世界で5国存在する列強

の第4位に数えられる実力を持っていた。

「フェン王国やアルタラス王国に侵攻する予定であったが先にロデニウス大陸に行くぞ。両国に向かわせるはずだったすべての戦力をロデニウス大陸に向けて出発させるのだ！」

一番最初にロデニウス大陸に上陸し、開放するべく皇帝ルディアスは軍を急かしてロデニウス大陸遠征軍を組織。大小さまざまな戦列艦を向かわせることとなった。

「……化け物の正体も分からないのにも関わらず侵攻するとは、皇帝陛下も少し焦り過ぎだ……」

ロデニウス大陸遠征軍の旗艦である超フィシャヌス級戦列艦パールに搭乗するシウスは遠征を急がせた皇帝が焦り過ぎたため息をついた。ただでさえフェン王国やアルタラス王国への侵攻計画を一度白紙に戻して行われている遠征なのだ。各方面において大小さまざまな混乱が発生しており、最低でも浜辺の確保と言った橋頭堡を作らないとわりに合わなかった。しかし、それを成功させるためにも化け物の情報が必要なのだが化け物と戦闘した者たちは発見出来ていなかった。そもそもロデニウス大陸から逃げてきた者の大半が文明圏外国に逃げている為でもあるのだが。

「シウス提督。そう苦言を申されるな。化け物がどれだけの實力があるのかは分からないが皇国が誇る魔導砲によるアウトレンジ攻撃を受ければ討伐が容易でしょう」

「ベルトラン陸将……」

不安というよりも不満と言った様子のシウスを察してかベルトラン陸将がなだめるように声をかける。シウスは遠征軍の海軍における総司令官であり、一方のベルトラン陸将は陸軍の総司令官に任命されている人物であった。

「まずは浜辺にいる敵に砲撃を行い、敵の強さを測りましょう。魔導砲の砲撃で倒せると思いますが万が一の場合は追加砲撃をするかわイバーンロードによる空からの攻撃や歩兵を繰り出して止めを刺しましょう」

「それでも死なないようなら？」

「残念ですがその場合は少しでも情報を集めて撤退をするべきです。弱点や習性などが分かれば殺すことも出来るでしょうからね」

「……そうですね。確かにそれなら化け物相手に迅速に対応が可能か……」

ベルトラン陸将の言葉にシウスも賛同する。急遽決まったこの遠征において綿密な作戦計画はない。陸海総司令が臨機応変に計画を立てるように言われており、実際に二人は皇帝並みの権力を遠征軍相手に得ていた。

「とはいえ我ら栄えあるパーパルディア皇国軍が化け物ごときに負けるとは思えません。何ならリンドヴルムと同じように飼いならしてしまえば面白いかもしれないですな」

「果たして化け物が飼いならす事が出来る生物なのか。それ次第でしようが最初は安全のために殲滅します。ではそろそろ準備を行いましょう」

シウスはうつすらと見えてきたロデニウス大陸を見て気を引き締める。ロデニウス大陸は化け物の巣窟となつてから二月近くが経過しているがその間に海岸付近に草木は全く確認できない死の大地と化していた。

シウスは化け物はイナゴのように食い尽くすのか？ と考えつつマイハークが存在した廃墟にたどり着くと戦列艦を横並びにして砲撃準備を整えていった。

超ファイシャヌス級すら含まれる1000門を超える砲門が旧マイハークに向けられている。これほどの砲が放たれば格上のムーヤ神聖ミリシアル帝国でさえただでは済まないだろう。

「撃てえええっ!!! ……え?」

しかし、それも相手がBETAではないのならである。シウスは砲撃開始の命令をしようとした時、マイハークから光の線が伸びている事に気付いたがそれが何なのかを理解する間もなく彼の乗っていたパールはレーザー級のレーザー照射を受けて爆沈。マイハークに砲を向けていた戦列艦はたった一度の攻撃ですべて撃沈されたのだ。た。

そして、これがパーパルディア皇国の遠征軍を地獄に叩き落す最初の一撃だった。

第三話 「フィルアデス大陸」

中央歴1639年4月上旬 パールディア王国

2か月前に大規模な遠征軍を失ったパールディア王国だが流石に二度目の遠征軍を送り込むことはせずに情報収集に徹する事を選択した。ベルトラン陸将やシウス提督など主要な遠征軍の司令官が上陸すら出来ずに死んだ事でロデニウス大陸の化け物の恐ろしさが発覚した事で無策に送り込むのは危険と判断したのだ。

「とはいえ情報収集も容易ではない」

パールディア皇国国家戦略局・文明圏外国担当部南方担当課長のイノスは難しすぎる難題を前にどうすればいいのか分からずに頭を抱えた。ロデニウス大陸は遠目から監視する程度で上陸どころか接近はされていないがそれでも旧クワ・トイネ公国のマイハークが日にその姿をなくしている事から化け物が更地に行っていることが判明しているが現状ではそれ以外に判明したことがあまりにも少なかった。

精々が化け物にも種類がある事、戦列艦を一撃で破壊できる魔法らしきものが使える個体が存在する事、全速で飛ぶワイバーンロードですら一発で命中出来るといふ事くらいである。これらはほぼすべてが遠征軍が壊滅した際に知ったことであり事実上イノスが調査を始めてから知れた事はほぼなかった。

「ロデニウス大陸の事は神聖ミリシアル帝国を始めとする第一文明圏も知るところとなった。あまりもたもたしてられないが……」

ロデニウス大陸は化け物さえいなければ宝島と言える程魅力的な大地だ。クワ・トイネ公国があった土地は豊穡が約束された土地でありクイラ王国の土地も科学技術を持つ第二文明圏のムーにとっては大切な資源の宝庫だ。そして何より国家が存在しない以上好きなように開拓・入植出来る大陸なのだ。

神聖ミリシアル帝国は拡大政策を既に行っていないがそれでもただで入植出来る土地があるのなら欲しいと思って当然であった。とは言えイノスは急がないといけないと思いつつあれらの化け物は神

聖ミリアル帝国でもどうしようもないのではないかと感じていた。調査を開始するにあたって実際に自分の目で確認したイノスはリンドブルムですら奴らの前では脅威になりえないと思っていた。

「こうなってしまうとロデニウス大陸の距離がもどかしい。もっと近くにあるかそれとも離れていてくれれば……！」

近ければ遠征軍を大量に送り込むことも出来、遠ければここまで神経質になる事もなかった。遠いなら対岸の火事で放置する事も出来たのだから。絶妙に近いせいで化け物の動向を把握しておかないといけないのだから。

「さて、そろそろ監視を担当する戦列艦からの提示報告だが……ん？
なんだ？」

イノスは何時まで経つても魔信が反応しないことに眉を潜める。何度繋げても戦列艦からの返答はなかった。

「魔信の故障か？ それとも通信障害か？ ……まさか」

イノスはふと、戦列艦が化け物にやられたのではないかと考えるが戦列艦は沖合からかなり離れた場所にいる。いくら化け物でもその距離を充てる事は無理だろうと頭の中で否定して魔信の故障か通信障害と考えて一度飲み物を飲もうと部屋を後にした。

そして、イノスがここに戻ってくるまでにパールディア皇国の滅亡へのカウントダウンは動き出していたのだった。

「攻撃開始！」

私の言葉に従いフィルアデス大陸のパールディア皇国に一齐にBETAが上陸していく。突如襲われた形となるパールディア皇国が混乱していくのが遠目からでもよく確認できる。

「次に行こうか。全艦砲撃開始！」

その指示を出して数秒後、私がいる戦艦の艦橋を震わす砲撃が行われた。砲撃はパールディア皇国の沿岸部に次々と着弾していつて

破壊の嵐となっている。中々にすさまじい光景だ。戦艦の艦砲射撃なんて転生する前も見たことはなかった。それも艦橋からなんてなんだか不思議な気分だ。

「いい感じに当たってるようだな。急ごしらえだったけど軍艦はきちんと運用で来ているな」

「ですがさすがに完璧にはいきませんね。もつと訓練を積ませるべきでしょう」

私の横にいるアイリスデイナーが軍艦の運用で生じたミスを指摘している。確かに動かすだけでも手間取ったのは事実であり、今も砲撃がきちんとできているとは思えない。数発に一発が海に落ちていくるし。

ちなみに、私たちが乗るこの軍艦だがほぼすべてがソビエト連邦と東ドイツの艦隊だ。地球が干上がった後は地下に移動させていたが半ば放置していたが門を手に入れた関係で必要になるかもしれないと改修を行い、今回のフィルアデス大陸の侵攻に間に合わせる事が出来ていた。まあ、ソ連と東ドイツの戦艦だ。数は大してないけどね。そこは戦艦級とも呼ぶべきBETAとして一から建造するのもありかもしれない。

後はそうだな、航空戦力が必要かもしれない。特地の炎龍にこちらではワイバーンと呼ばれるドラゴンが出てきた。今はレーザー級で十分だけどいずれレーザー級では対応できない凶悪なドラゴンが出るかもしれない。そのうち制空可能なBETAでも作ってみようかな。

「門の接続を確認。フィルアデス大陸南部に5か所開きました」

「よしよし。それじゃ沿岸部の船を沈めて行こうか」

ロデニウス大陸に侵攻したときはかなりの数の人間を船で逃がしてしまった。今回はそうならないように侵攻と同時に船を沈めて行くか。

「フィルアデス大陸はこれで問題ないな。多少手間取ってもこの調子なら一月ほどで制圧できるかな？」

「ロデニウス大陸の勢力よりもこの大陸の国家は強いでしょうからそ

ここまで早くは無理でしょう。精々半年前後を想定しておくべきだと思います」

「ふうん。ま、確かに元の世界と比べれば十分に早いもんな」

オーストラリアだって数年を要したんだ。ロデニウス大陸が二週間で落とせたのは十分すぎる程早かったんだ。

「それにしてもこうしてみるとこの戦艦は恐ろしいですね」

「そりゃ人間が生み出した巨大な海上要塞にBETAを合わせたキメラ戦艦だからね。それでも今考えているものよりは全然弱いさ」

今は乗せているだけだがいずれはBETAを埋め込んだ最強の戦艦を作りたい。その時はコンピューター代わりに頭脳級を搭載して海上を移動可能なハイヴにしてしまうのも面白いかもしれない。ただ、戦艦だからいいけどBETAを生み出す際は海中に放り出す形にしないと重くて沈んじゃうだろうなあ。その辺は今後の調整次第と言ったところかな。

「あ、そうそう。このままフィルアデス大陸を制圧出来たらグラメウス大陸にいかうか。フィルアデス大陸と陸続きみたいだしこの世界での魔物のG元素変換効率を確認しておきたいからな」

「それでしたらその大陸をふさぐ世界の扉という物を破壊する必要がありますね。なんでも大昔に作られつつも現代の技術では再現できないものらしいですよ」

「世界の扉、ねえ……。そもそもこの技術が微妙過ぎるし再現できないから強固って考えるのは時期早々だろう。それにそんな大昔の骨とう品を欲しいとも思えないし突撃級をぶつけて破壊。失敗したらレーザー級で溶かしてしまえばいい」

「了解しました」

大昔には魔王が住みかとしていたらしいグラメウス大陸。どうせなら魔物を従えていた魔王の力や変換効率を確認しておきたかったがそれは追々確認していけばいいだろう。なんでも封印されているだけで今も存在しているみたいだしグラメウス大陸を侵攻していけばエンカウト出来るだろうからな。今は沿岸部からかなり離れた場所まで侵攻しているBETAの動きを観戦するのでしょうか。

第四話 「グラメウス大陸」

中央歴1639年6月上旬 トーパ王国世界の扉

かつて魔王により人類が滅亡の危機に瀕したときに太陽神より遣わされた使者たちが築き上げた世界の扉。それは魔物であふれるグラメウス大陸と人類の生存圏を分断し、人類を守る壁となっていた。本来、それが破壊されるときはグラメウス大陸の脅威がなくなるときかグラメウス大陸からあふれた魔物に破壊されるくらいであり、人類側から破壊されることはないはずだった。

しかし、この日世界の扉は破壊されることとなった。魔物すら弱い存在に見える化け物によって。

「これが世界の扉、ね。魔物というのはこんなんで防げる程度ってことか」

「わかりませんよ。かつて魔王と呼ばれるものにより統治されていたとのことです。烏合の衆になりさがっただけで本来は強いのかもありません」

「そうだといいいけどな」

突撃級を先頭にグラメウス大陸へと進出したがどうも魔物への期待度がどんどん低くなってきてしまっている。魔王が封印されているらしいしそいつがいないと魔物とは烏合の衆になっている。つまり強敵とは言えないということだろう。これなら未だにわずかに生き残っているパーパルディアの残党のほうがマシだ。

「戦術機の出番もないだろうしさっさと次に行くか」

俺の関心はグラメウス大陸ではなくこの世界においてもっとも最強と思われる神聖ミリシアル帝国が存在する中央世界に移っている。ただそいつらもそれほど強くはなさそう。実はひと月くらいまえに神聖ミリシアル帝国の艦隊が向かってきた事がある。見た目はかなり近未来的だったから全力で挑まないとまずいと思って全艦隊を向かわせたんだが結果はこっちの圧勝だった。

なんだよミリシアルって。あれで世界最強なの？ レシプロ機に性能で負けてそんなジェット機に見た目以外で褒められる場所がな

い空母。そして海中からの攻撃に無力すぎる戦艦。見かけ倒しだったしもう世界最強(笑)でいいんじゃないかなとさえ思えてしまう弱さだ。これが海軍が貧弱で陸軍はそうでもないとかならいいが少なくとも航空戦力もカスだし期待はできそうにないな。

これが世界最強である以上劣るであろうムーやグラ・バルカス帝国という国々も期待はしないほうがよさそうだな。さっさとつぶして次の世界にいくべきか？ ああ、だめだ考えれば考えるほど神聖ミリシアル帝国どころかこの世界への興味が薄れてきた。得る物は得たしハイヴ作りまくって次の世界にいくか。どうせここにはG元素に変換する為の物資としてしか関心がないからな。この世界特有の何か面白い技術でもあればと思っていたがこの調子なら期待しないほうがいいな。

「……あ？ 先頭の突撃級がやられ始めたぞ」

「どうやら魔王の封印が解けていない、というのは誤報だったようですね」

一瞬にして突撃級が炎に包まれて灰となった。あくまで5重6重にも存在する突撃級の一層目が少しやられた程度だがこの世界、いや異世界にきて初めての損害らしい損害だ。それも突撃級が正面からやられるなんてな。

「おいおい……。魔王っていうのは何でもありか？」

「どうされましたか？」

隣のアイリスディーナが不思議そうに見てくるが正直にいつて構っている暇はない。魔王は何やら巨大な土の巨人を作り突撃級を踏みつぶし始めたんだ。むろん突撃級もやられてはおらず足を吹き飛ばすなどしているがそのたびに回復していつているから意味があるとは思えなかった。しかも魔王はそこから不死鳥のような炎の鳥を生み出して空爆のごとく攻撃を仕掛けてきている。

……なるほど。かなりめんどくさい相手だな。単騎でこれとか大抵のやつでは相手にすらならないぞ。

「レーザー級攻撃」

まあ、それもレーザー級が出るまでの間だがな。魔王は一瞬にして

気づいたようだが展開したバリアごと魔王の肉体を10を超えるレーザーが貫通する。BETAにおいて最大火力であるレーザー級の攻撃だ。これすら防ぐようならちよつと撤退するしかなかったかもしれないな。

「うーん、やはりレーザー級がいないと厳しい場面もあるか……」

「一定の火力さえええろえば要撃級どころか突撃級すら撃破可能ですからね」

「そうなんだよなあ。ま、こいつらの最大の強みは数だ。津波のごときあらがえない物量こそがこいつらの強み。それが通じる相手である限り問題はないだろう」

そして、物量を通じない相手だと厳しいが……。ぶっちゃけそんな奴は中々いない。核すらまともに通じず、数百数千ではなく数万、数十万で攻め込むんだ。負けるはずがない。可能性があるとするれば宇宙戦艦ヤマトのような宇宙で戦闘するものがメインの世界だがそんなのは逃げ一択だから戦う必要はない。別に無理なら攻め込まなければいいだけの話だし、地上戦力において俺たちに勝てる奴がいるはずがない。局地的、戦術的な敗北がどれだけあろうと俺たちBETAが最終的に勝利する。

「さて、それじゃ残りの大陸も一気に奪うとするか」

「………ついに行きますか？」

「ああ、この世界、文明レベルが低すぎて資源以上の価値が見いだせない。ならばさっさと大規模な抵抗勢力を叩き潰してゆつくりと資源回収させてもらおうじゃないか」

本当は大陸を一つ一つ潰していく予定だったがこの世界のレベルがこの程度ならさっさととれるものを取ってしまった方がいいな。

「せっかくだ。全ての敵を相手出来るように全戦力で行くか？」

「それは過剰すぎる戦力でしょう。何より門の狭さのせいで移動させるだけで時間がかかります。現状の戦力の二倍ほど用意すれば問題ないでしょう」

「ふむ、そのくらいが妥当な範囲か。よし！ じゃあ早速用意してこの世界を手に入れるか！」

中央歴1639年8月中旬 神聖ミリシアル帝国帝都ルーンポリ
ス

「眠らない魔都」の異名を持つ世界最大の都市、ルーンポリス。そこにある皇帝の居城であるアルビオン城では緊急の会議が開かれていた。その会議のメンバーは神聖ミリシアル帝国における主要メンバーがほぼ全て集まっていたが参加する者の表情はあまりよくはなかった。

「……やはり、フィルアデス大陸は落ちたか」

「はい。敵の攻撃をかくぐり、大陸を確認できたものが撃墜寸前で報告してくれたおかげで判明しました。……第三文明圏及びその周囲の文明圏外国が軒並み滅びたとみて間違いないでしょう」

神聖ミリシアル帝国皇帝ミリシアル8世の問いに情報局局长のアルネウスは答えた。しかし、それは決して神聖ミリシアル帝国に、人類にとって吉報ではない。むしろ凶報と言えるだろう。

神聖ミリシアル帝国がそのことに気づいたのはフィルアデス大陸にそれ、BETAが上陸してからの事であった。最初は古の魔王の復活か？とも疑ったが魔王はグラメウス大陸にいるためにやってくるなら北からだとは否定したが結局正体は分からず、次に報告が届いたときにはパーパルディア皇国は飲み込まれ、第三文明圏は消滅した後だった。

ここでようやくフィルアデス大陸を襲う未知の生物を敵と判断して海軍を送る事となったがそんな彼らの前に現れたのは異形の化け物と融合した鉄の軍艦だった。神聖ミリシアル帝国の主力戦闘機エルペシオ3を難なく撃ち落とす敵のレーザー照射。極太になれば艦船すら一方的に破壊する凶悪なものであり、敵の砲撃の射程もミリシアル側よりはるかに上であったために結局艦隊は一切近づくことができずに壊滅。唯一接近できた戦闘機も発艦した機体全てを撃墜さ

れる形となっていた。これらの艦隊にはミリシアル側にとって主力艦も混じっており、決して弱い艦隊ではなかった。それにも関わらず勝てないという事実は神聖ミリシアル帝国を震撼させるには十分すぎた。

「フィルアデス大陸、ロデニウス大陸、そしてグラメウス大陸……。次々と大陸が陥落している事実から見ても次は我ら中央世界であろう。果たして防ぎきれぬのか……」

「……残念ですが海軍ではこれを防ぐことができません。そもそも、敵がどのようなにして大陸を移動するのかさえ判明していません。水面を泳ぐのであればまだいいですがもし海中や海底を通るのであれば我々に攻撃手段は存在しません」

「そして何よりこちらの戦闘機は全く使い物になりません。あげればあげるだけ撃ち落とされてしまいます。現在のところ艦船以外の情報が少なく、上陸する敵の情報が分からないので判断はできませんが陸上戦力にも戦闘機を無効化できる兵器があると考えています」

「陸地で迎撃するという方法もありますがそうなればわが国土で戦争をすることになります。……そして何より神聖ミリシアル帝国は中央世界の南半分を領土としており、その分海岸線も広大です。敵の戦力次第では全力を出す必要もあるでしょうが敵が素直に東側から上陸してくるとは限りません」

「南や西、あるいは四方八方より攻めてくる可能性もある、か……。それにほかの国々を通ってくることも考えられる」

話せば話すほどどうしようもない現実には会議の参加者は飲み込まれそうになっていた。どうにかしないといけないのにどうにかする手段がなく、自分たちの兵器が一切通用しないという事実には押しつぶされそうだった。

「……こうなったら仕方あるまい。パル・キマイラを全力稼働させる」「っ！ 確かにあれなら問題ないでしょうが……！」

「今は躊躇している場合ではない。パル・キマイラだけではなく搭載されたジビルも全て使って構わない。何としてでも敵の勢いをそぐのだ！」

ミリシアル8世の覚悟を決めた言葉に参加者たちがざわつく中、突如として部屋の扉が開かれ、顔を真っ青にさせた兵士が入ってきた。

「なんだ？ 会議中だぞ」

「も、申し訳ありません！ ですが緊急の報告があります！」

「……まさか!？」

兵士の慌てようは異常だった。それが意味する事で最悪なもの一つに思い至ったミリシアル8世は目を見開いた。

「ファイルアデス大陸を壊滅させた魔物らしき群れが海底より上陸しました！ 少なくとも全海岸線に数万単位の群れです！」

そしてそれは最悪の中でも最も最悪な、絶望的な予想が当たってしまった。

外伝3【86―エイティシックス―編】 第一話「遭遇」

さて、次の世界に向かうわけだがここに来るまで楽に進めてしまったこともあつて少しマンネリを感じてしまっている。よつて、次の世界は何か面白いことでもあればと思うのだが……。

「転移先は……、これは草原か？」

「そのようですね。周囲に人工物は見当たりませんね」

今度の世界はそれほど発展した世界ではないのか？ いや、この前の世界だって人里離れた場所だけで文明はそれなりに栄えていた。今回もその可能性はなくはないだろう。

「とりあえず戦車級^{タンク}を出して索敵を行え。今回は侵攻ではなく楽しむための狩りをメインでやっていこうと思う」

「狩り、ですか？」

「そうだ。最近、ハイヴの増加や人間のストックも増えてきた。多少遊ぶ余裕はあるからな」

「了解しました。ではそのような狩りの対象となれるものを優先的に索敵させましょう」

「任せた。何かあれば連絡してくれ。俺はほかのところでも見てくるわ」

索敵はアイリスディーナに任せておけばいいだろう。彼女は何かと便利だ。見た目だけではなく指揮官として優秀で柔軟な対応をしてくれる。戦術機に關しても申し分ない腕前だ。天が二物も三物も与えたような存在だ。

「さてはて。それじゃ プロジェクト・機龍”を完成させてくるとしようかな。それと地球で作らせている娯楽用のゲームの方も確認しておくか」

地球を手に入れてからというものの暇を持て余す事がないように娯楽としていろいろなゲームやアニメ、漫画を作らせている。何時まで続くかわからない俺の寿命をもつてしても全てを読み、やりきれない

量にする予定だ。そろそろ完成しているころだろうしアイリス
デイナーが報告をするまで遊ぶとするか。

……正直に言っつて、俺は相も変わらず慢心していた。それで幾度も
危険な目にあつたというのに、だ。その結果として、戦車級に加えて
アイリスデイナーの死亡というとてもない出来事で俺に帰つてく
ることになった。そしてその結果がもたらした答えは、この世界の危
険度を物語つてもいたのだ。

「……」

油断していた。慢心していた。馬鹿だった。それだけだ。

幸い、アイリスデイナーの肉体の予備はある。というよりも重要人
物に設定した奴らにはすべて予備がある。だから、死んでも問題はな
い。

しかし、実際に使うことになるのは初めてだ。これ以降、アイリス
デイナーは

予備の肉体で過ごすことになる。スペック上、問題はない。むしろ
肉体能力は高まっている。だが、本物の体ではない。それがとてつも
ない苛立ちを俺に与えてくる。

「それでは早速始めよう」

故に、俺は今回の世界に関しての情報を共有するべく会議を開い
た。出席者は俺が集めた重要人物のほぼすべて。ほかにも一部の人
間級がいるがそれはおまけだ。

「アイリスデイナー。お前が見た情報を報告しろ」

「はっ！ まず、私は戦車級を走らせた結果、廃墟と化した街にたどり
着きました。ですがそこに入った途端に銃撃を受け戦車級は瞬く間
に全滅。私も逃げることも回避運動もままならず、四肢に銃弾を受け
動けなくなりました。」

それを見計らつたかのように青い機体がいくつも現れました。機

体は多脚戦闘車とでも呼ぶべき姿をしており、大きささまざまな形をしています。それらは全機が重武装であり、戦車級程度では一瞬で返り討ちにしてしまう威力を持っていました。

青い機体は私に近づき、脳に足を向けたところで私の記憶は途切れています。おそらくこの後すぐに死んだと思われれます」

「ふむ……」

アイリスディーナの話聞く限りやばい世界に来たとしか言いようがない。それが少数精鋭的存在であればいいがそうではない場合、BETAのように量産型だった場合は最悪だ。単純にBETAの上位互換とでもいうべき相手になってしまう。有人機ならいいが無人機なら脅威度はA1次第で変わってくる。

とにかく、言える事はこれまでの物量作戦で倒せる相手ではないという事だ。確実にこちらと同じ火力が求められる。

「聞いての通りだ。今回の世界にはかなり強い奴がいる。そして、警告もなしにアイリスディーナを殺したことを考えれば相手は敵味方を判別できているか人間を簡単に殺せるくらいに敵対している可能性があるというわけだ」

「確かにそのとおりね。とはいえ今の段階では判別するには情報が不足しているわ。その敵を一つでも回収できれば分解して調べることも出来るけど……」

「分かっている。なのでまずは数をそろえて廃墟に行き、敵の情報を集めつつ機体の回収を行おうと思っている。突撃級を先頭兼盾に、戦車級、要撃級を出し、戦術機を出す。光線級は万が一に備えつつ今回は待機だ。敵の防御能力も知りたいからな」

光線級を用いれば確実に敵を破壊できるだろう。戦艦並みの硬さでない限りな。そのためにはまず銃撃でどれだけダメージを与えられるのかを知っておきたい。そうすれば出撃時に必要な武器も変わってくるだろうからな。

「そういうわけで戦術機パイロットは出撃の準備をしてくれ。今回はここにいるパイロット全員に出してもらおう」

「全員ですか？ それは少し過剰ではないのですか？」

唯依のいう事も理解は出来る。何しろここにいるのは10人を超えているのだ。しかも全員戦術機パイロットとしては超一流の腕前だ。俺がやろうとしているのは威力偵察でいきなり切り札を切るようなものだからな。

「だが、それだけ今回は慎重に行きたい。アイリスディーナだけではなくお前たちにも予備の体があり、死んでも問題はないとはいえ俺が嫌なんだ。それだけ敵に良いようにやられているという事になるからな」

だからたとえ過剰であつても戦力を大幅に投入する。そして、これらを持ってしても全滅なり手痛い損害を受けるようであればこの世界は諦めて別の世界に行けばいいだけの話だしな。

「それに今回はあくまで威力偵察。敵の情報収集と機体の回収が最優先任務だ。敵の壊滅でも廃墟の占領でもない。これだけ精鋭を揃えればすぐに終わらせることが出来ると予想もしているしな」

何度も言うがアイリスディーナたちは俺が持つ戦術機パイロットの中で超一流の腕前を持った精鋭だ。そんな彼女たちが失敗・敗北するようならこの世界は危険すぎる。最悪、つ門を通じてこちらの世界に侵攻する可能性だつてあるしな。それだけは避けたいからな。

「それでは諸君、さっそく出撃の準備をしてくれ。あまり時間をかけてもよろしくはないだろう。敵に見つかり侵攻してくる可能性だつてあるわけだしな」

「「了解!!」「」」

俺の言葉に全員が返事をする。元軍人の彼女たちはこういう時の行動はとても早くて助かる。まあ、そうじゃなかったとしてもこの面々は10年は在籍している。気づけば体にしみこんでいたという事もあるだろうしな。

戦術機を用いた全力出撃を命じ、威力偵察が行われた。廃墟には敵がまだ存在しており、戦術機による攻撃によって敵の半数を破壊し、

その残骸を回収することに成功した。しかし、こちらもBETAを中心に無視できない損害を受けており、出した半分は確実に消され、要撃級、戦車級は一撃で吹き飛ばされ、突撃級も正面は防げても側面に回り込まれるなどして大きな損害を受けた。こんな中で戦術機の損害が軽微なのが幸いだろう。

そして、この威力偵察の成功により、俺は敵の情報を入手することに成功したのであった。

第二話「全滅」

「ふむ、敵は強大だがこの程度ならまだ何とかなるな」

アイリスデイナーは自らの戦術機に乗りながら周囲に散らばるこの世界で遭遇した機械の残骸を見回す。アイリスデイナー達はまだ知らないことだが、“レギオン”と呼ばれる青い外装を持った多脚戦闘機械であり、この世界の人間を脅かす無人殺りく兵器であった。

このレギオンを開発した国家は運用直後に革命で滅びてしまっており、主人をなくしたレギオンたちは独自でリーダーを作り、人間の抹殺に動き出していた。

アイリスデイナー達がいる位置はそんなレギオンによって侵攻された国家の領土におり、無人と化した都市にいた。

「この調子であれば問題はないでしょうがやはりBETAの損耗が気になりますね」

たった一度の戦闘でBETAは半数がやられてしまっていた。そもそも、レギオンはBETAの上位互換ともいうべき存在である。同じように大量に存在し、動きが俊敏で人間を襲う。そして彼らはそれぞれ人間を殺すには十分すぎる武装をしている。遠距離武器を何も持っていないBETAはむしろこれだけよく生き残ったというべき数であった。

「ベルンハルト大尉。各戦術機の点検が終わりました。全機出撃可能です」

「分かった。ではこれより我々はさらに前進し、敵の情報をさらに集めるぞ。今回の襲撃で敵にも我らの事はおおよそ伝わっているはずだ。全機気を抜かずに進むように」

「了解！」

現状においてBETAの中でナンバー2の位置にいるといっても過言ではないアイリスデイナーの命令に従いBETAはさらに進み始める。最終的には門周辺の地域を完全に確保し、補給を円滑に進められるようにしたいと考えていた。

「（この死と隣り合わせの感覚。BETAと戦っていた時を思い出す

な。あれから数十年。随分と遙か昔の記憶になつてしまつたものだ……)」

兄を売つてまで助かつた結果がこれか、とアイリスデイーナは自分の人生をふと振り返つた。東ドイツ陥落とともにBETAにつかまり、改造されて以来BETAの手先として人間を滅ぼす手伝いを行つてきた。時には自らBETAを指揮して人類と戦つたこともある。兄が見れば嘆くような現状もアイリスデイーナは自嘲こそすれ後悔や反抗心を抱くことはない。そういう風に改造されたのだから。

アイリスデイーナはBETAに仕える現状に不満も不安もない。ただただ満足してしまつてゐるのだ。たとえ、改造される前に崇高な意思を持つていたとしてもそれをかつての記憶としてとらえてもそれを今の自分とは別の存在として考えてしまうのだ。アイリスデイーナ達あ号標的によつて改造された者たちは皆そのような状態にあつたのだ。

「(どちらにせよ今の私がしなくてはいけないことは人類を滅ぼすことだ。あいつが飽きないように次の獲物を見つけないと……)っ！レーダーに反応があるぞ！ 総員警戒を厳となせ！」

アイリスデイーナは突如としてレーダーに映りこんだ影に気づき全員に警戒するように伝える。レーダーに映る影は次第に大きくなつていき、それが目視で確認できるようになるがそれを見たアイリスデイーナは怪訝そうに眉を顰める。

「鳥？ いや蝶か？ 機械で出来てゐるといふ事はこれも奴らの仲間なのか？」

飛来したのはこれまでに戦つた敵よりも小さい蝶のような姿をした機械だつた。しかし、一体一体は小さいそれらだが太陽の光を通さないほどの大群でもつて近づいてきていたのだ。そしてその蝶の飛来とともにレーダーは反応が悪くなり、瞬く間に使い物にならなくなつていった。幸いな事に短距離での通信は辛うじて行っているがあ号標的との通信は不可能となり、状況を知らせることは出来なくなつていた。

「敵が接近している可能性がある！ 総員警戒を怠るな！」

『大尉！ 前方に敵の大群が見えます！ 総数は不明ながら100は超えています！』

通信とリーダーを封じたうえで物量攻撃。アイリスディーナは少し深く入りすぎたか、それとも敵を侮りすぎたと後悔するがその考えを脳の隅に追いやり命令を出す。

「仕方ない。ここは撤退する。アネットとイングヒルト、それと唯依達京都組が殿を務めろ」

『『『了解！』』』』

京都組と呼ばれる京都防衛線時に改造された篁唯依達と近接戦のスペシャリストにして継戦能力が高いアネットと同じく継戦能力が高いイングヒルトが殿として残りは撤退をなるべく動き出した、……が。

「っ!? 何だ!?!」

突如として戦術機はエラーを大量に発生。跳躍ユニットから火を吹き地面へと落下したのだ。それはアイリスディーナだけではなく、全ての戦術機が同じであり、中には爆破し、完全に壊れてしまっている機体も存在していた。

『跳躍ユニットが損傷！ 先ほどの蝶の機械が入り込んだようです！』

「バードストライクのようなものか！ くそ！ 動ける機体は歩いて後退せよ!」

『大尉！ 前方より長距離砲撃が来ます！ 数は100!』

「何!?! 衝撃に備え……!」

アイリスディーナは最後まで言葉を発する事は出来なかった。敵が放った長距離砲撃による砲撃が直撃したのだ。戦術機の装甲を楽々と貫き、アイリスディーナを肉片へと変えたうえで爆発し、肉の欠片を一つたりとも残さずに消滅した。

『っ！ 大尉が消滅した！ 次の指揮を……!』

そして、生き残った面々は指揮系統を構築する間もなく様々な距離からの砲撃を受けてあっけなく壊滅した。BETAに至っては最初の長距離砲撃で大半を持っていかれた為に戦術機以上になんの抵抗

も出来ずに全滅したのだった。

その後、ストックの肉体で復活したアイリスディーナ達より報告を受け敵の強大さを知ることとなる。戦術機を含む多数の損害は油断と慢心こそあれど最初の地球でも見たことがない初めての大きな大損害であり、BETAに後退をさせる初めての出来事となるのだった。

そしてこれが、あ号標的の心に苛立ちを生み出す原因となった。

第三話 「激怒」

正直に言つて、我々がここまで敗北するとは思つていなかった。地球においては横浜ハイヴなどの一件があつたが終始我々の思惑通りに進んでいた。計画の見直しをする必要もなく考えた通りにな。

そしてそれは門が開き、その先の世界を蹂躪してからも変わりはない。門の技術を手に入れ、資源の大幅補給を達成することも出来、我々が飽きないような玩具を手に入れることも出来たわけだ。

そこからは色々な世界を蹂躪し、弄んできた。いくら強い奴、武器があつたとしてもBETAの本領は絶え間ない圧倒的物量にある。それをもつて我々は所謂ごり押しでここまで進んできたわけだ。

その結果、我々はごり押しが通用しない敵にはもろすぎた。敵も我々と同じように物量を持ち、武装をして同じように航空戦力を無効化できる術を有していた。完全にBETAの上位互換と言える存在だ。ある意味ではうらやましいやつらだ。BETAに武装するとう案もあつたにはあつたが基本BETAは使い捨てが前提のやつらだ。そんな奴らを生成するたびに武装を取り付けるのは効率が悪いし使い捨て前提だから武装がもつたいたない。やるなら長距離砲撃用だろう。

「……つまり、今回の一件は我々の慢心が招いた結果だ」

「はい」

「敵はこちらの戦術機を無力化できる性能を有している。バードストライクを引き起こすことが出来る以上戦術機は使えない。かと言ってBETAだけでは敵に対して制圧力がなさすぎる」

「はい」

「本来であれば完全に撤退し、門を閉じるのが最良の判断だろう。我々も最初はそう考えていたからな」

「……はい」

目の前に立つアイリスディーナに対して我々はそう言葉を発する。しかし、こうして話している間にも心の底からあふれてくるあるものに支配されそうになっていた。

「だがな！　ここまでの被害は初めてだ！　そしてそれを見て撤退？　ふざけるな！　徹底抗戦だ！　やつらを一匹残らず駆逐し、敵の総大将を様々な苦しみでもって拷問してから殺さないと気が済まない！　ああ、いい！　あの世界の全てが気に入らない！　すべてを壊し！　殺す！」

それは怒り。重頭脳級になり始めて感じた感情かも知れない。抑えきれない。溢れてくる。身を任せてしまいたいそうになる。

「アイリスデイナーア！　今香月夕呼を中心に戦術機の改装を行っている。敵のバードストライクは強烈だが跳躍ユニットさえなければ何とかなるからな」

つまり戦術機はスピードを失うことになるわけでそれに代わる足が必要なのわけだ。普通に歩くのでは遅い。ならばどうすればいいか？　簡単だ。車輪を付ければいい。跳躍ユニットがダメな以上空中での戦闘は不可能だ。そうなれば地上戦がメインとなる。幸いな事に敵も地上兵器が主だ。

敵のように多脚にする案もあるがそれでは動作が複雑になり時間がかかる。その点車輪を付けるほうは設計が楽だからな。多少の高低差も問題ないように普通の足も必要だし足では無理な高さはアンカーで行けるようにすればいい。

「改装には1月あれば試作機が完成するらしい。それまではBETAを大量に吐き出して敵の侵攻を防ぐ。敵の火力的にただの時間稼ぎにしかならないだろうが1月時間が稼げれば良いからな。アイリスデイナーは他のパイロットとともに新たな戦術機に慣れるようにシミュレーターによる訓練を行うように」

「了解しました」

「敵はこれまでの中で最も強大だ。だがな。我々が最終的に勝利する」

名前も知らない機械の敵よ。序盤における勝敗はお前らに譲ってやる。敗北も受け入れ、認めよう。だからこそ、我々はもう慢心しない。全ての力をもってお前らを叩き潰す。たった一つの世界のお前らに、複数の世界を手にし、膨大な物資と資源、技術力を持つ我々が

本気でつぶしてやる。その時が来るのを首を長くして待っているがいい。

夢を見ている。

BETAが侵攻してくる前の、兄やベアトリスが生きていた頃の楽しかった記憶だ。

BETAの脅威もなく、ベアトリスが私にしてくる過剰なスキンシップに兄が顔を赤くしているのを見て恥ずかしいと思っていた頃の懐かしい記憶。

― “ノウ・フェイス” より “シュヴァルツエスマーケン”。貴官らはこれより連邦に向かい試験運転を開始せよ

― … “シュヴァルツエ01” より “ノウ・フェイス”。了解した。これより試運転を開始する

ふと聞こえてきた声。それが我らの新しき主人の声だ。

なんとも皮肉な話である。祖国を守らんと行動していたはずなのに気づけばBETAに改造され人類を裏切る行動をするようになってたかと思えばこうして脳に残った記録をコピーされてこのレギオンにさせられており、この世界の人類を駆逐するために使われる結果となっている。

― “シュヴァルツエ01” より総員に通達する。我らの目的は敵の前線を突破し、砲撃陣地の破壊である。乗り慣れた戦術機ではなくレギオンの肉体での光線級^{レーザーヤークト}呐喊だ。BETAの時とは違い我らに替える体はない。まずは体に慣れることを優先し、目的が達成できないと判断した場合は速やかに離脱せよ。その許可は得ている

― “シュヴァルツエ02” 了解

― “シュヴァルツエ03” 了解

― “シュヴァルツエ04” 了解

― “シュヴァルツエ05” 了解

― “シュヴァルツエ06” 了解

― “シユヴァルツエ07” 了解

― “シユヴァルツエ09” 了解

― “シユヴァルツエ” 了解

― “A―01” 了解

……

その後も続々と私と同じようにレギオンとされた元仲間たちから承の報告が入る。ノウ・フェイスは特異な私たちを一つにまとめて遊撃部隊として活用したいのだろう。全員がBETAに改造されていた者たちなことで察する事が出来る。

―それでは我らの初陣と行こうか。見事試運転を終え敵に黒シユヴァルツエスマーケンの宣告を喰らわしてやれ！

そう言つて私は新たな肉体となつた特殊仕様の戦車型レーヴェを動かす。かつての愛機ほどの速度は出ないのが難点だが慣れていくしかないな。

さて、レギオンと敵対しているらしい連邦と呼ばれる国のお手並みを拝見させてもらおうか。そして、願わくば……。

この永遠にも等しい悪夢に終止符を。

私を、解放してくれ……。

第四話「改造」

指定した一月が経過した。この間、敵の攻撃は過激なものになっていた。

まず、BETAに対して長距離砲撃による面制圧で叩き潰されるのが基本となった。それを掻い潜っても敵の戦車砲の如き砲撃が飛んできて生き残りを殲滅していく。突撃級でさえ敵の砲撃を正面で受け切る事は出来なかった。更に敵は門の位置を知っているのか時折門付近に砲撃が着弾することもある。敵の長距離砲撃が門のあたりまで届く以上戦線を引き上げないと危険ではあった。

正直に言って状況は最悪だ。敵はまるでこちらを熟知しているかのように最適な行動をとり、無駄を省いている。おかげでBETAは一定のラインを超えることが出来ずにつぶされている。

数で圧倒しようにも門から出せる数には限りがあるし地球制圧後は生産を緩やかなものにしてきたからかつてのような圧倒的な生産数になるにはまだまだ時間がかかってしまう。

「それで？　夕呼先生。完成はしたんですね？」

「ええ、最高の出来に仕上げているわ」

そして、本日ようやく戦術機の改装機が完成したと報告を受けて夕呼先生が待つ格納庫に来ていた。そこには従来の戦術機とは微妙に違っている機体が複数並んでいた。

まず、飛行を可能としていた跳躍ユニットが外されている。これは今後の戦闘において必須の項目だったな。出撃するたびにバードストライクを受けて撃墜されてはかなわないからな。次に跳躍ユニットに代わるように脚部にホイールが取り付けられている。収納可能なローラースケートというのがしつくりくるこれでスピードを維持しようというわけだろう。

「ふむ、見た感じ地上で這って戦うようになったという感じか？」

「もちろん飛べない分補強としてアンカーを両肩に二つ付けたわ。跳躍ユニットの代わりにはなれないけど不便はあまり感じないように気を付けたわ」

武装に関してはあまり変わった様子はない。しいて言うのなら長距離砲撃用の砲台を背負った長距離型や近接戦闘型が存在するくらいだな。

「改めて確認するがこれらは全て完成しているんだな？」

「ええ。今すぐ出撃することも可能よ。……まさかもう出すのかしら？」

「ああ、ちょっとした試運転をしてみよう。どうせそれでだめなら何をしてもダメだろうしな。

それよりも夕呼先生は戦術機級の改装も行ってくれ。戦術機だけでは敵の物量に飲み込まれてしまうからな。戦術機級も使って数の差を補いたい」

そうして門周辺を制圧したらハイヴを作り本格的に侵略していくのもありだ。この世界がどれだけ大きいのかはわからないが戦術機たちだけでは手が回らないだろうからな。ハイヴが作れるくらいになればBETAで世界を埋めつくす戦法もとれる。そうすれば後は消化試合、いつもの光景だ。

ああ、それとこれを機にパイロット達の階級を正式に変更した。何時までも改造前の物を使うのはなんとも言えないからな。それと同時に部隊編成も行い、きちんとした軍隊として編成を行った。とはいえ部隊編成に関しては地球の者たちのやつをそのまま使用したから特に変更点はないがな。

BETA型戦術機部隊

総司令：俺

副司令：香月夕呼

副司令：アイリス・ディーナ・ベルンハルト（第666戦術機中隊長と兼任）

副司令：アルフレート・ヴァルテ

管制官：涼宮遙

総司令直轄起動遊撃部隊 『ジークフリード』

隊長：アルフレート・ヴァルテ

隊員：アネット・ホーゼンフェルト

第666戦術機中隊 // シュヴァルツエスマーケン //

隊長：アイリス・テイナ・ベルンハルト (シュヴァルツ01)

副隊長：ファム・テイ・ラン (シュヴァルツ02)

副隊長：グレーテル・イエツケルン (シュヴァルツ03)

隊員：ヴァルター・クリューガー (シュヴァルツ04)

隊員：シルヴィア・クシャシンスカ (シュヴァルツ05)

隊員：イングヒルト・ブロニコフスキー (シュヴァルツ06)

隊員：テオドール・エーベルバッハ (シュヴァルツ07)

隊員：カティア・ヴァルトハイム (シュヴァルツ08)

隊員：リイズ・ホーエンシュタイン (シュヴァルツ09)

隊員：人間級モデルドイツ (シュヴァルツエ10)

隊員：人間級モデルドイツ (シュヴァルツエ11)

隊員：人間級モデルドイツ (シュヴァルツエ12)

第1戦術機中隊 // 伊隅ヴァルキリース //

隊長：伊隅みちる

副隊長：速瀬水月

副隊長：宗像美冴

隊員：風間禱子

隊員：涼宮茜

隊員：柏木晴子

隊員：白杵咲良

隊員：御剣冥夜

隊員：榊千鶴

隊員：彩峰慧

隊員：珠瀬壬姫

隊員：鎧衣美琴

第2戦術機中隊 // ホワイトフアング //

隊長：篁唯依

副隊長：山城上総

副隊長：能登和泉

隊員：甲斐志摩子

隊員：岩見安芸
隊員：伊隅あきら
隊員：伊隅まりか
隊員：人間級モデル日本
隊員：人間級モデル日本
隊員：人間級モデル日本
隊員：人間級モデル日本
隊員：人間級モデル日本

ほかにも人間級のみで構成される第3戦術機中隊もありこれが現在BETAが保有する全戦術機となっている。因みに階級は以下の通りに統一した。

將軍：俺

大佐：アイリスデイナー、アルフレート、夕呼先生

中佐：伊隅みちる、唯依姫、

少佐：各部隊の副隊長

大尉：アネット、佐渡島子、リイズ

中尉：その他一部のパイロット

少尉：大半のパイロット

軍曹：なし

一等兵：なし

二等兵：なし

雑に振り分けたが今後はこれで統一する。何の意味があるかはわからないがな。どうせ階級なんてあつてないようなものだ。俺を頂点として補佐や副官を配置。その下にいろいろと振り分ければそれだけでいいからな。あとはその辺が得意なアイリスデイナーや夕呼先生がやってくれるだろう。二人にはその辺の人事権を与えているからな。報告さえしてくれれば好きにいじくつていいようにしている。

「さて、まずはシュヴァルツェスマーケンに出撃させるか。数十年間

戦ってきた猛者たちだ。臨機応変に対応出来るだろうからな」

「それじゃ残りの面々は新しい機体にゆつくりと慣れてもらう方向で良いわね？」

「あまりゆつくりとされても困るがそうだな。シユヴァルツエスマーケンの半分と行ったところだな」

とりあえず今はシユヴァルツエスマーケンだけで十分だ。だが半月以内に全機出して周辺地域を掃討したいとは考えているがな。

「ではアイリスディーナに連絡して出撃をするように言ってくれ。残りはこちらで試運転だ」

「ええ、わかったわ」

「俺は自分の機体の調整を行うからな」

「あら？。今回は貴方も出るの？。危険ではなくて？」

夕呼先生の懸念はもつともだ。正直に言つて俺にパイロットとしての実力はない。何しろ動かしたことがないからな。シユミレーターで模擬戦をしても基本的に全戦全敗だ。相手の方が罪悪感を覚えてしまうくらいに弱いらしい。

原因は分かっている。俺は複数の処理を一度にこなすことが苦手だからだ。これは転生前から感じていた俺の欠点で一度集中すると他が見えなくなってしまうのだ。

故にこの弱点を補えるように機体には補助AIを複数搭載している。これで俺の欠点を補えるはずだ。それに俺が運用する機体、機龍のスペック的によほどのことがない限り問題はないだろう。

全長60m。姿勢がよくなったティラノサウルスのような見た目をしており、方にはミサイルやロケット弾が搭載されているバックパックを装備し、両腕には収納可能な高周波ブレードと36mm機関砲が搭載された兵装を装備している。本体の武装としては胸部に三連式重レーザー級レーザー照射膜を設置。口内に二連式レーザー級レーザー照射膜があるが本体の武装はそれだけだ。更に武装ではないが腰と背中に使用しないときは収容している跳躍ユニットを搭載しており自力で空を飛ぶことも可能だ。この世界で使用する事はないだろうがな。

一時は燃え尽き症候群でちまちまと作っていた機龍も門を手に入れたからあつという間に完成させた。完全に大物狙いの兵器と化した。これを使って敵を蹂躪するのもありだが問題は門の大きさだよね。これをあちらで使うとなるといったんバラして向こうで組み立てなおさないといけない。そうなるのと当然ながら安全区域が必須となるし直ぐにでも作る事は出来ないわけだ。

「そうなるのと夕呼先生に門の改良を頼むべきか？」

最近では戦術機の改装を優先的に行ってもらっていたから門の改良に関してはほとんど進んでいないだろう。これさえ完了していれば機龍だけではなく要塞級のような大型BETAも送り出すことが出来るんだがな……。

ま、それは今言ったところでどうしようもない。後は改装した戦術機がどこまで戦えるかを見てから今後の事は考えるところでしょう。それまではこの機龍の改造やメンテナンスを行おうとするか。

第五話 「初陣」

「中隊、出撃！」

再編された第666戦術機中隊「シユヴァルツエスマーケン」がアイリスディーナの命令に従い発進する。彼女たちが乗る戦術機はかつてのように空を駆けることはなく、代わりに飛行時並みの速度で地面を滑っていく。

「総員、機体の調子はどうだ？ 何か異変があればすぐに知らせるよ
うに」

『こちらシユヴァルツ04。今のところ機体に異常はありません。振動が飛行時に比べてかなり感じるくらいです』

『車酔いが酷い人には難しいかと』

「ふむ、確かにこの揺れは初めてだな」

地面と触れている以上振動しないという事はあり得ない。そのために飛行時には感じない揺れが隊員たちを襲っており、多少の気持ち悪さを感じさせていた。

ふと、アイリスディーナは改造される直前に母艦級キャリアーで輸送させられた時のことを思い出す。あの時はリーズがまき散らしたことで全員が一度は吐くこととなった。改造当初はアイリスディーナにとつて忘れられない憎悪を感じさせていたものだったが人類に対する思いが完全に消え失せた現在では懐かしい思い出の一つとなっていた。

「こればかりは慣れるしかないな。だが諸君らも経験しただろう？

母艦級の時に比べればマシだ」

アイリスディーナのその言葉に隊員達は軽く苦笑する。

『確かにあれは中々きつかったからですね』

『アネットなんてヴァルテ大佐にしがみつきながら吐いてましたからね』

『一番酷い状態だった二人がいなのが残念ですな』

事の発端となったリーズと一番吐き出していたアネットはここにはいない。アネットは思い人のアルフレート・ヴァルテの直属の部下となりあ号標的直下の遊撃部隊として独立している。今頃はアルフ

レートとイチャコラしながら機体に慣れている頃だろう。リーズに
関してはテオドルとともにハイヴの一部に作られた愛の巣で愛を
育みあっているだろう。アイリスディーナも改造してから彼女に
会ったことはないがあ号標的を通して現在も兄のテオドルとお楽
しみであることは聞いていた。中隊には在籍しているがあ号標的が
呼び出さない限り二人が中隊に姿を見せることはないだろう。

「本来であれば中隊にいるはずの二人がいないために10人と定員割
れを起こしているがこれはかつての戦場では当たり前のことだった。
今更どうとはいえない」

「その分我らが補充として入っています。前任者程とはいきませんが
存分にこき使ってください」

「ああ、期待している」

そして、編成に伴いシュバルツエスマーケンには3人の人間級が配
属となっていた。在籍するのがほぼドイツ人であることからドイツ
人をモデルとして作られた人間級であるため表面上は違和感を感じ
させないようになっていた。パイロットとしての腕も及第点を与え
られる程度には能力が高く、シュバルツエスマーケンがよく行う
光線級^{レーザーヤークト}吶喊にもついてこれるだろう。

「さて、この辺から敵の長距離砲撃が降ってくるエリアとなる。総員
周辺の警戒を怠るな」

砲撃がよく降り注ぐ位置なのだろう。これまで進んでいた場所は
森林と呼ぶにふさわしい場所だったが突如として周囲が開け、あたり
一面にクレーターが広がる場所となった。そこにはBETAの死骸
が複数転がっており、何度も砲撃を受けたのか、原形をとどめている
のはほとんど存在していなかった。

「敵の長距離砲撃は固まっていれば全滅しかねない威力と爆破範囲を
持っているを確認されている。決して一塊にならずに不規則な動き
を取り続ける！」

アイリスディーナのその指示に従いシュヴァルツエスマーケンの
面々はジグザグ走行を開始する。幸いにも敵の砲撃はなく、間もなく
敵と初めて遭遇した廃墟にたどり着こうという時だった。

「っ!? 総員回避行動!」

遠くから聞こえる砲撃音。それが意味するのを理解した隊員達は即座に機体を動かしてその場を離れる。数秒後、彼女たちがいた場所には敵、レギオンの長距離砲撃が着弾し、巨大な爆発を生み出した。それも一つではなく合計5発。面制圧による駆逐を行ったのだ。

レギオンがBETAと戦闘をするうえでずつと行われている攻撃方法であり、BETAの足を止めさせている原因でもあった。更にまるでBETA側の計画を知っているかのようにレギオンは即座に対応し、BETAの死骸を増やしていった。

そんなBETAにとって最大級の障害が今シュバルツエスマーケに牙を向けているのだ。副指令となったアイリスディーナもその情報は知っており、出来れば早めにたたいておきたいと考えていたが相手は知覚出来ない距離から砲撃を行っており接近は容易ではなかった。加えて、レギオンとの戦闘が本格的に開始されてからというもの上空は常に蝶のような電子妨害機が飛んでおり、レーダーと通信をダメにしていた為に具体的な敵位置を知ることが出来なかった。

「レーザーヤークト光線級呐喊を行ってきた私たちでもこの状況は厳しすぎる。今回はあくまで試運転。あまり無茶はせずに近場の敵と戦闘するのが吉か……) 敵の長距離砲は厄介だが困も兼ねてBETA群が呐喊する。そのすきに近場の敵機械を攻撃し、戦闘データを収集するぞ」

『『『『了解!』』』』』

そうこうしている間にシュヴァルツエスマーケンの横をBETAが通り過ぎていく。突撃級を先頭に要撃級、戦車級が続くBETAの基本陣形だ。

しかし、それらは敵が放つ長距離砲撃によって次々と吹き飛んでいく。一射目で前半分が、二射目で生き残りが1割となり、三射目で完全に吹き飛ばされた。

『敵の砲撃はすさまじいですね。最初は光線級レーザーで砲弾を迎撃していたらしいですが次の砲撃が数倍になって結局消耗を避ける為に出さなくなりましたからね』

『その結果がこの苦戦だろう。いつも通りコストを気にせずに攻撃す

ればいいものを』

『馬鹿言うな。敵の攻撃で光線級の損耗率は地球侵攻時の半分近くまで上っているんだ。下手に出すわけにはいかないだろう』

続く第二群も長距離砲撃によって全滅。第三群目にして敵の長距離砲撃以外の砲撃が飛んでくる。よく見れば敵の中型機レィサエが近づいてきており、BETAを積極的に殲滅していた。

「諸君。獲物が決まったぞ。あれは敵の中でも長距離砲撃に匹敵する火力を持っている。突撃級の正面以外ならBETAを貫通できる。総員、初陣だからと言って撃墜されるなよ！ 続け！」

『『『『了解！』』』』』

一気に加速し、中型機レィサエに突撃を開始する。それに気づいた中型機レィサエが迎撃の為に砲を向けるが標準を定めるよりシュヴァルツェスマーケンが射程に入る方が早かった。

「射撃、開始！」

アイリスデイナーの命令により一斉に36mm弾が中型機レィサエに叩き込まれる。しかし、そのほとんどが有効打になることはなく、中には弾かれて表面に傷やへこみを作るだけに終わっているものもあった。

「怯むな！ 今はまだ有効射程ギリギリのところだ。効かないのであれば敵にさらに接近して撃て！」

ジグザグ走行しているとはいえあつという間に中型機レィサエには接近してきた。故に、あつという間に接近できたシュヴァルツェスマーケンの面々は敵の副武装である12.7mm機銃をよけながら中型機レィサエに対して有効打を打ち込んでいく。中には上に上り、下に潜り込むなどの芸当をして破壊していった。

結果、わずか数分で突出した中型機レィサエは全滅することとなり、戦術機の改良機の有効性が証明されたのだった。

『ベルンハルト大佐、囷のBETA群が全滅しました。データも取れた事ですし撤退しませんか？』

「そうだな……。こいつが倒せれば敵の大半に通じるだろう。よし、我らの任務はここまでだ！ 総員撤退するぞ！」

アイリスデイナーは撤退を決め、門の方へと戻っていく。そしてそ

の十数秒後、シユヴアルツエスマーケンが先ほどまでいた場所を敵の長距離砲撃が襲い、中型機レィヴエの残骸は吹き飛ばされていった。

半月後には戦術機級の改造も完了し、前線にはBETAや戦術機だけではなく戦術機級も出撃できるようになり、BETAは少しづつ敵との火力差を埋めることに成功し、前線を押し上げることに成功していくのだった。

そして、同じころ、BETAがいる場所より遙か西で一人の少女がその国で無人機として扱われるとある有人機部隊の指揮官となった。そして、そこから物語は大きく加速していくことになるのだった。

第六話 「彼等彼女等」

あ号標的が開いた門の付近には東西南北4つの国が存在している。北はロアールグレキア連合王国、南にはヴァルト盟約同盟、西にはサンマグノリア共和国、東にはレギオンの生みの親であるギアーデ帝国が存在していた。しかし、ギアーデ帝国は無人機レギオンを開発すると周辺諸国に侵攻を開始。その圧倒的戦力で滅ぼそうとしたがギアーデ帝国内で革命が発生。連邦へと変わったことでレギオンの侵攻は止まると思われた。

しかし、レギオンは自分たちで考え行動するようにより、ギアーデ連邦にさえ攻撃するようになった。各国はそんなレギオンに対して協調しながら戦闘を繰り広げていたが一国だけ、レギオンの支配領域に囲まれたために独自に動き出した国があった。

それがサンマグノリア共和国である。この国は様々な人種が住む国であったが開戦後は白系種アルバと呼ばれる白髪が特徴的なサンマグノリア共和国に古くから住む人種を残しそれ以外の全ての有色人種を最前線に追いやった。そして彼らを共和国85区エイティシックスの外の存在、エイティシックス86として蔑み、自分たちの暮らしを支えさせる肉壁として扱いはじめたのである。

そんな彼らエイティシックスはレギオンとの戦争に駆り出され、着実にその数を減らしながら終わりの見えない戦争を続けていた。共和国への愛着も忠誠心もなく、ただ敵を倒すために。

「最近、レギオンの数がだいぶ減ってきているよな」

そんな中にあつてエイティシックス最強と謳われる部隊がある。東部戦線第一戦区第一防衛部隊「スピアヘッド」である。彼らは様々な戦線を生き残りレギオンを狩ってきた英雄に等しい人物達であり、共和国が誇る精鋭であった。とはいえそんな彼らは一度隊員が補充されると全滅するまで補充されることはない。その理由は残酷であるが今は関係のない話であり割愛する。

「敵の戦術かな？」

「諦めた。と考えたいところだけど……」

「相手はレギオンだしそんなわけないだろうなあ」

「スピアヘッド」の面々が考えるのは最近のレギオンの不可思議な動きである。これまででは毎日のように攻撃が繰り返されてきたが目に見えてその襲撃、数が減ってきているのである。時には戦車型が存在しないときや斥候型しか存在しないときもある。長距離砲兵型に至っては一切姿を見せなくなり、戦闘がやりやすくなっていった。

しかし、明らかにわかるレギオンの不可解な動きは疑問と不安をおよぼす結果となっており、隊員たちの中には中々眠れない者まで出始めている。

「シン。最近は何も聞こえないのか？」

「ああ。羊飼いだころか黒羊さえ全く見えなくなってるな」

シン、と呼ばれたスピアヘッドの隊長は簡潔にそう返した。彼には特殊な力としてレギオンの声を聴くことが出来る。それはとある機体のみ限られるのだがスピアヘッドはこのシンの能力のおかげで敵の接近を察知する事が出来ており、戦闘しない日は気楽に過ごすことが出来ていた。

「大規模侵攻の前触れか？ それとも他国が戦線を押し上げているからそちらに兵を回しているとか？」

「それが可能かはわからないけどな。少なくともサンマグノリア共和国よりも優先するべき対象が出来たのは確実だろう」

「俺らより優先するべき対象……。そいつらには悪いがそのままレギオンの目を引きつけていくとありがたいんだけどなあ」

第二小隊の小隊長を務めるライデン・シユガは希望的観測ながらもそのような願いを口にするが同時に不可能だろうと感じていた。サンマグノリア共和国にいるレギオンの総数が半分以下になっている時点でそれだけ膨大なレギオンに狙われていることを意味しており、とてもではないがそれだけの数のレギオンを相手にできる存在がいるとは思えなかったのだ。

「他国の事は知らないが大なり小なりレギオンとの戦争で疲弊しているはずだ。今起こっていることがあり得ない話だ」

「つまり、これはレギオンによる大規模侵攻の前兆の可能性が高いな」

「声の数からしてサンマグノリア共和国じゃないのは確かだ」

シンやライデンはそう結論付け、いずれ訪れるであろうどうしようもない状況の前に今の平和なひと時を享受するのだった。レギオンの大規模侵攻を受ければどのような国でも一溜りもないだろう。そうなれば戦線が減った分レギオンが有利となり、ほかの戦線が圧迫される。そして耐え切れなくなったところから崩壊し、人類はなし崩し的に敗北するだろう。

しかし、流石のシンもレギオンが全ての戦線から引き抜いて対応するほどの勢力が突如として発生した、という事実気づくことはなかった。その結果、サンマグノリア共和国がその存在に気付くのは当分先のことになるのだった。

「ノウ・フェイス」より「シユヴァルツ01」に告ぐ。貴官はこれより隊を率いてサンマグノリア共和国戦線に迎え

「シユヴァルツ01」より「ノウ・フェイス」。我々は現在ギアーデ連邦軍の後方基地を襲撃中である。即時対応は難しい

「ノウ・フェイス」より「シユヴァルツ01」。それは理解している。後方基地襲撃は中止し、新たな命令を最優先で実行せよ

「シユヴァルツ01」より「ノウ・フェイス」。了解した。これより移動する

あれから、どれほどの時間が経過したのだろうか？ 私を殺してくれる存在は現れなかった。共にレギオンとなった同志たちも全員健在だ。

何故だ？ あれほど苛烈に攻めているのに何故誰も殺してくれないんだ。そのせいでギアーデ連邦の防衛線はガタガタになってしまっているのだぞ。今回の後方基地襲撃がうまくいけばギアーデ連邦は本土を守るために盾にしていた戦闘属領全てを陥落する結果となっていただろう。

しかしサンマグノリア共和国、か……。そこには私を殺してくれる人間がいるのだろうか……。いや、どうせいないだろう。ギアーデ連

人に向けているのだ。正気ではない。まあ、私たちに正気を保っている物などいない。大半がそんなことさえ出来ないほど感情をあらわにすることはないのだから。せめてアネットが破壊されるときは思い人であるアルフレートの手で壊されることを祈ろう。いずれ、BE TAと戦うことになるのだろうか。